

下
田
遺
跡
(2)

下 田 遺 跡 (2)

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第52集

埋蔵文化財発掘調査報告書
八ッ場ダム建設工事に伴う

二〇一七

国土交通省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



2017

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

下田遺跡(2)

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第52集

2017

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



下田遺跡遠景（北東より）

下田遺跡後背の段丘面から遺跡を見下ろす。画面手前が下田遺跡、画面中央の谷が吾妻川。対岸の段丘面を挟み、画面上部中央に丸岩。

序

八ッ場ダムは、治水・利水を行う多目的ダムとして計画され、吾妻郡長野原町を中心に関連工事が進められています。八ッ場ダムの建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、当事業団が平成6年度から実施し、本年度で23年目を迎えました。

今回報告する下田遺跡は、吾妻川左岸の中位段丘面にあります。平成25・26年度に行われた発掘調査により、平安時代から近世に至る遺構が確認されました。確認された遺構は、平安時代の竪穴住居や中世の掘立柱建物、近世の畑とこれに隣接する建物などです。平安時代から近世にかけて、連綿と営まれた地域の様相をたどる資料が得られています。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、国土交通省八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会、および長野原町教育委員会をはじめとする関係機関や地元関係者のみなさまには、多大なるご尽力を賜りました。本報告書を上梓するにあたり、衷心より感謝申し上げます。

また本書が長野原町、吾妻郡内、ひいては群馬県の歴史を紐解く新たな資料として活用されることを願い序といたします。

平成29年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 中野三智男

例 言

1. 本書は、平成25年度および平成26年度に八ッ場ダム建設工事に伴う発掘調査を行い、平成28年度八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財の整理事業として整理作業を行った下田遺跡の発掘調査報告書である。下田遺跡は、平成14年に遺跡の一部についての発掘調査報告書が刊行されているため、本書では書名に(2)を付した。
2. 下田遺跡は、吾妻郡長野原町大字林字下原701-2、701-9、701-10、706-1、708、709-2、712-2、713、714-1、715-1、716-1、753、754、755、756、757、758、759、760、761、763、765、766、767-2、768、769、770-1、770-2、788、789、791-1、791-2、甲712に所在する。
3. 事業主体 国土交通省関東地方整備局
4. 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 発掘調査の期間と体制
調査期間
平成25年度 平成25年7月1日～12月27日
平成26年度 平成26年4月14日～6月31日
調査担当
平成25年度 7月～10月 小野和之、麻生敏隆、関俊明
10月～12月 小野和之、関俊明
平成26年度 関俊明、小林茂夫
遺跡掘削工事請負
平成25年度 株式会社 測研
平成26年度 スナガ環境測設 株式会社
地上測量委託 株式会社 測研
6. 調査面積 平成25年度 7358㎡
平成26年度 3000㎡
7. 整理作業履行期間 平成28年6月1日～平成29年3月31日
整理期間 平成28年6月1日～平成29年3月31日
8. 本書の作成分担
編集 佐藤元彦、デジタル編集 齋田智彦
遺物観察 石製品:津島秀章、古墳～平安時代遺物:神谷佳明、縄文～弥生時代遺物:石坂茂、金属製品・製鉄遺物:関邦一
遺物写真撮影 石製品:津島秀章、縄文・弥生土器:石坂茂、金属製品・製鉄遺物:関邦一、その他:佐藤元彦
9. 発掘調査及び報告書作成には、国土交通省関東地方整備局八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会、長野原町教育委員会をはじめ、関係機関ならびに関係各位に多くのご協力、ご指導を賜った。
10. 出土遺物及び写真・図面等記録類の保管場所は、群馬県埋蔵文化財調査センターである。

凡 例





1. 本報告書(以下本書)に用いた遺構名称は、混乱を避けるため一部を除き発掘調査時の名称を踏襲した。
2. 本書に用いた座標・方位はすべて日本測地系、平面直角座標系第IX系による。座標北と真北との偏差は+0度41分13.55秒(東経36度32分16.38秒、北緯138度40分45.62秒)である。

なお、世界測地系による当所の所在は、北緯36度32分27.58秒、東経138度40分34.23秒であり、座標北と真北との偏差は+0度41分20.51秒、当所における磁北線はN-7.19°-Wである。

また、遺構図中の十字記号は「八ッ場ダム関連埋蔵文化財発掘調査方法」に基づく小グリッドの基準点を示す。区名および小グリッド名を付記した。
3. 遺構の主軸方位は座標北を基準とした。住居にあってはカマドのある壁と直交する軸を主軸とし、その傾きを度で示した。また住居以外の遺構で形状の確認できる遺構においては長軸を主軸とし、その傾きを度で示し、形状の不明なものについては計測不能のため不明とした。
4. 遺構の標高は、原則として遺構断面図中に「L=○.○m」と表記した。計測値は主軸方向を縦とし、縦:横:面積の順に記した。主軸方向の不明な遺構については長:短:面積の順での記載を原則とした。
5. 全容が確認できない遺構については、検出部分の計測値を()付きで表記した。
6. 遺構面積の算出に際しては、縮尺1:40の平面図を用いプランメーターで計測を行った。
7. 本書の遺構図版縮尺は以下を基本とする。

竪穴住居・竪穴状遺構、1:60。カマド、1:30。土坑・ピット・焼土遺構・炉、1:40。
掘立柱建物・礎石建物・ピット列・畑、1:80。
8. 本書の遺物図版縮尺は以下を原則とする。

土器、1:3。石製品、1:2。金属製品、1:2。
9. 本書で使用したトーンは以下のとおりである。

焼土  灰  炭  攪乱 
10. 本書における遺構略称は以下のとおりである。

竪穴住居、住。掘立柱建物・礎石建物、建物。土坑、土。焼土遺構、焼。
11. 本書における土層注記及び遺物観察表記載に用いた色彩表現は、農林水産省水産技術事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修1996「新版標準土色帳」に基づく。
12. 本書で使用した地形図・地勢図は以下のとおりである。

国土地理院地形図1:25,000「長野原」平成21年4月1日発行
国土地理院地形図1:50,000「草津」平成11年11月1日発行
長野原町「長野原都市計画図22 1:2500」平成13年9月作成
13. 同一遺跡の発掘調査報告書として、下記の報告書が刊行されている。

群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第303集
「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集、八ッ場ダム発掘調査集成(1)」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(2002年12月25日発行)

目次

口絵

序

例言

凡例

目次

挿図目次

表目次

写真目次

第1章 調査経過と調査の方法

第1節 八ッ場ダム発掘調査の経緯	1
第2節 調査に至る経緯と経過	1
第3節 調査の方法	3

第2章 周辺の環境

第1節 遺跡の位置と地形	5
第2節 周辺の遺跡	6
第3節 林地区の遺跡	12

第3章 確認された遺構と遺物

第1節 遺跡の基本土層と概要	14
1 基本土層	14
2 遺跡の概要	15
第2節 遺構と遺物	24
1 1面(天明3年)	24
2 2面(中近世)	61
3 3面(古代以前)	96
4 未掲載遺物	128

第4章 まとめ

1 土地利用について	130
2 畑について	133
3 桶の復元	135
4 掘立柱建物について	136

報告書抄録

写真図版

奥付

付図

挿図目次

第1図	遺跡位置図（国土地理院5万分の1地形図「草津」使用）	1	第63図	遺構外出土遺物	60
第2図	調査区の設定（「長野原都市計画図22」長野原町平成13年9月作成を使用）	2	第64図	2面西辺建物群	62
第3図	調査グリッドの設定	4	第65図	9号掘立柱建物	63
第4図	長野原町段丘面の分布（『長野原町の自然』長野原町1993）	5	第66図	12号掘立柱建物	65
第5図	周辺遺跡（国土地理院5万分の1地形図「草津」に加筆）	7	第67図	13号掘立柱建物1	65
第6図	林地地区遺跡分布（『林中原Ⅱ遺跡（1）』第5図を引用）	8	第68図	13号掘立柱建物2。9号掘立柱建物出土遺物	66
第7図	下田遺跡基本土層	14	第69図	1号掘立柱建物	68
第8図	As-A堆積状態（5号畑）	15	第70図	2号掘立柱建物1	69
第9図	倒壊した掘立柱の痕跡	15	第71図	2号掘立柱建物2	70
第10図	大石の陰に残されたピットの痕跡	15	第72図	11号掘立柱建物	72
第11図	下田遺跡1面全体図	16	第73図	11号掘立柱建物出土遺物	73
第12図	As-A堆積状況（1号道）	17	第74図	1号集石土坑	74
第13図	泥流に運ばれた礫	17	第75図	2号土坑、4号土坑、5号土坑	75
第14図	浅間石	17	第76図	6号土坑	76
第15図	2面全体図（1）	18	第77図	10号土坑、12号土坑	77
第16図	2面全体図（2）	19	第78図	13～15号土坑	78
第17図	復旧溝	20	第79図	16～18号土坑	79
第18図	平安時代末と天明3年の地表	21	第80図	19～21号土坑	80
第19図	3面全体図（1）	22	第81図	22号土坑、23号土坑	81
第20図	3面全体図（2）	23	第82図	24号土坑、25号土坑	82
第21図	北西端建物群	25	第83図	26号土坑、27号土坑、31号土坑	83
第22図	5号礎石建物1	26	第84図	35号土坑	84
第23図	5号礎石建物出土遺物	27	第85図	36号土坑、42号土坑	85
第24図	5号礎石建物2	28	第86図	土坑出土遺物	86
第25図	6号掘立柱建物1	30	第87図	2号焼土遺構、3号焼土遺構	87
第26図	2号ピット群	30	第88図	4～6号焼土遺構	88
第27図	6号掘立柱建物2	31	第89図	7～9号焼土遺構	89
第28図	西辺建物群	33	第90図	12号焼土遺構	90
第29図	7号掘立柱建物1面出土遺物	34	第91図	焼土遺構出土遺物	90
第30図	7号掘立柱建物1面1	35	第92図	1号ピット列、2号ピット列	92
第31図	7号掘立柱建物1面2	36	第93図	3～5号ピット列	93
第32図	7号掘立柱建物2面	37	第94図	5号ピット	94
第33図	7号掘立柱建物2面出土遺物1	38	第95図	9号ピット、54号ピット	95
第34図	7号掘立柱建物2面出土遺物2	39	第96図	遺構外出土遺物	95
第35図	8号掘立柱建物1面1	40	第97図	1号竪穴住居出土遺物	96
第36図	8号掘立柱建物1面2	41	第98図	1号竪穴住居1	97
第37図	8号掘立柱建物2面1	42	第99図	1号竪穴住居2	98
第38図	8号掘立柱建物2面2	43	第100図	2号竪穴住居	99
第39図	8号掘立柱建物2面出土遺物	45	第101図	2号竪穴住居出土遺物	100
第40図	29号土坑	46	第102図	3・4号竪穴住居1	101
第41図	1号道	48	第103図	3・4号竪穴住居2	102
第42図	1号畑、2号畑	49	第104図	3・4号竪穴住居出土遺物1（3号竪穴住居部分）	103
第43図	3号畑、4号畑	50	第105図	3・4号竪穴住居出土遺物2（3号竪穴住居部分）	104
第44図	5号畑、6号畑	51	第106図	3・4号竪穴住居出土遺物3（3号竪穴住居部分）	105
第45図	7号畑、9号畑	52	第107図	3・4号竪穴住居出土遺物4（4号竪穴住居部分）	105
第46図	10～13号畑	53	第108図	3号掘立柱建物1	107
第47図	14～16号畑	55	第109図	3号掘立柱建物2	108
第48図	3-1号平坦面	56	第110図	3号掘立柱建物3	109
第49図	1号平坦面	56	第111図	3号掘立柱建物4	110
第50図	2号平坦面	56	第112図	3号掘立柱建物出土遺物	111
第51図	3号平坦面	56	第113図	1号竪穴状遺構	112
第52図	4号平坦面	56	第114図	1号土坑、3号土坑、7号土坑	113
第53図	5号平坦面	57	第115図	8号土坑、9号土坑	114
第54図	6号平坦面	57	第116図	11号土坑、28号土坑。土坑出土遺物	115
第55図	7号平坦面	57	第117図	37号土坑、38号土坑	116
第56図	8号平坦面	57	第118図	39号土坑	117
第57図	9号平坦面	57	第119図	40号土坑	118
第58図	10号平坦面	57	第120図	41号土坑、43～45号土坑	119
第59図	11号平坦面	58	第121図	10号焼土遺構	120
第60図	12号平坦面	58	第122図	遺構外出土遺物1	120
第61図	13号平坦面	58	第123図	遺構外出土遺物2	121
第62図	畑出土遺物	59	第124図	遺構外出土遺物3	122
			第125図	遺構外出土遺物4	123

第126図	遺構外出土遺物 5	126
第127図	トレンチ設定図	127
第128図	調査区各所の土層 1	130
第129図	調査区各所の土層 2	131
第130図	調査区各所の土層 3	132
第131図	畝ピッチの分布	133
第132図	単位面積計測位置	133

第133図	畝ピッチ計測位置	134
第134図	34号土坑	135
第135図	基準点に基づく断面形状補正	135
第136図	三か所の断面比較	135
第137図	34号土坑桶推定復元	135
第138図	下田遺跡建物のクラスター分析	136
第139図	順序数によるクラスター分析	136

表目次

第1表	ハツ場ダム建設工事に伴う調査遺跡一覧	3
第2表	周辺の主な遺跡	9
第3表	林地区の遺跡	13
第4表	5号礎石建物柱間計測表	27
第5表	5号礎石建物出土遺物観察表	29
第6表	6号掘立柱建物柱間計測表	30
第7表	6号掘立柱建物ピット計測表	30
第8表	2号ピット群計測表	30
第9表	7号掘立柱建物1面柱間計測表	32
第10表	7号掘立柱建物1面ピット計測表	32
第11表	7号掘立柱建物1面出土遺物観察表	34
第12表	7号掘立柱建物2面柱間計測表	36
第13表	7号掘立柱建物2面ピット計測表1	36
第14表	7号掘立柱建物2面ピット計測表2	38
第15表	7号建物2面出土遺物観察表	39
第16表	8号掘立柱建物1面柱間計測表	41
第17表	8号掘立柱建物1面ピット計測表1	41
第18表	8号掘立柱建物1面ピット計測表2	41
第19表	8号掘立柱建物2面柱間計測表	44
第20表	8号掘立柱建物2面ピット計測表1	44
第21表	8号掘立柱建物2面ピット計測表2	44
第22表	8号掘立柱建物2面ピット計測表3	44
第23表	8号掘立柱建物2面出土遺物観察表	45
第24表	畑出土遺物観察表	58
第25表	遺構外出土遺物観察表	59
第26表	9号掘立柱建物柱間計測表	61
第27表	9号掘立柱建物ピット計測表	61
第28表	12号掘立柱建物柱間計測表	64
第29表	12号掘立柱建物ピット計測表	64
第30表	13号掘立柱建物柱間計測表	64
第31表	13号掘立柱建物ピット計測表	64
第32表	9号掘立柱建物出土遺物観察表	66
第33表	1号掘立柱建物ピット計測表1	67
第34表	1号掘立柱建物ピット計測表2	67
第35表	1号掘立柱建物柱間計測表	67
第36表	2号掘立柱建物柱間計測表	68
第37表	2号掘立柱建物ピット計測表1	70
第38表	2号掘立柱建物ピット計測表2	70
第39表	2号掘立柱建物ピット計測表3	70

第40表	2号掘立柱建物ピット計測表4	70
第41表	11号掘立柱建物柱間計測表	71
第42表	11号掘立柱建物ピット計測表1	71
第43表	11号掘立柱建物ピット計測表2	73
第44表	11号掘立柱建物ピット計測表3	73
第45表	11号掘立柱建物出土遺物観察表	73
第46表	土坑出土遺物観察表	86
第47表	焼土遺構出土遺物観察表	90
第48表	1号ピット列計測表	91
第49表	2号ピット列計測表	91
第50表	3号ピット列計測表	94
第51表	4号ピット列計測表	94
第52表	5号ピット列計測表	94
第53表	遺構外出土遺物観察表	95
第54表	1号竪穴住居出土遺物観察表	96
第55表	2号竪穴住居出土遺物観察表	100
第56表	3・4号竪穴住居出土遺物観察表1(3号竪穴住居部分)	105
第57表	3・4号竪穴住居出土遺物観察表2(4号竪穴住居部分)	106
第58表	3号掘立柱建物柱間計測表	107
第59表	3号掘立柱建物ピット計測表	107
第60表	3号掘立柱建物出土遺物観察表	111
第61表	土坑出土遺物観察表	116
第62表	遺構外出土遺物観察表1	124
第63表	遺構外出土遺物観察表2	124
第64表	遺構外出土遺物観察表3	125
第65表	遺構外出土遺物観察表4	126
第66表	未掲載遺物(近世)	128
第67表	未掲載遺物(中世)	128
第68表	未掲載遺物(古代)	128
第69表	未掲載遺物(弥生時代)	129
第70表	未掲載遺物(縄文時代)	129
第71表	未掲載遺物(剥片)	129
第72表	土層比較	131
第73表	畝計測表	133
第74表	平坦面計測表	133
第75表	平坦面間の面積	133
第76表	下田遺跡建物の分析対象項目(順位)	136
第77表	下田遺跡建物の分析対象項目(計測値)	136

写真目次

P L 1	1. 下田遺跡遠景(北西から)
	2. 下田遺跡遠景(西から)
P L 2	1. 下田遺跡周辺(西から)
	2. B区全景(北西から)
P L 3	1. C区全景(東から)
	2. C区全景(北西から)
P L 4	1. 浅間石大(北東から)
	2. 浅間石中(西から)
	3. 浅間石小(西から)
	4. 泥流に運ばれた礫(西から)

5. 泥流に運ばれた礫(東から)	
6. 泥流による攪乱の残る畑(東から)	
7. 復旧溝全景(北東から)	
8. 復旧溝全景(西から)	
P L 5	1. 北西端建物群全景(北東から)
	2. 北西端建物群(東から)
	3. 5号礎石建物(北から)
	4. 5号礎石建物遺構外遺物出土状態(南東から)
P L 6	1. 5号礎石建物1号カマド(北東から)
	2. 5号礎石建物1号カマド(北から)
	3. 5号礎石建物1号カマド(東から)
	4. 5号礎石建物1号炉、礎石12(北から)

5. 5号礎石建物1号炉(北から)	
6. 5号礎石建物2号炉土層断面(東から)	
7. 5号礎石建物2号炉、1号カマド(南から)	
8. 5号礎石建物2号炉(東から)	
P L 7	1. 11号焼土遺構(南から)
	2. 11号焼土遺構掘り方(南から)
	3. 11号焼土遺構土層断面(南から)
	4. 6号掘立柱建物(北東から)
	5. 6号掘立柱建物P1(南から)
	6. 6号掘立柱建物P1(東から)
	7. 6号掘立柱建物P2~3(南から)
P L 8	1. 6号掘立柱建物P2(南から)

2. 6号掘立柱建物P 2(北東から)
3. 6号掘立柱建物P 2土層断面(北西から)
4. 6号掘立柱建物P 3(南から)
5. 6号掘立柱建物P 3(北東から)
6. 6号掘立柱建物P 3土層断面(北西から)
7. 6号掘立柱建物P 4～6(南から)
P L 9
1. 6号掘立柱建物P 4(南から)
2. 6号掘立柱建物P 4(北東から)
3. 6号掘立柱建物P 4(南から)
4. 6号掘立柱建物P 4掘り方(北から)
5. 6号掘立柱建物P 5柱材出土状態(南から)
6. 6号掘立柱建物P 5(北東から)
7. 6号掘立柱建物P 5土層断面(北西から)
8. 6号掘立柱建物P 5出土遺物近接(北西から)
P L 10
1. 6号掘立柱建物P 6(東から)
2. 2号ピット群P 1～3土層断面(西から)
3. 2号ピット群P 4土層断面(西から)
4. 2号ピット群P 5土層断面(西から)
5. 西辺建物群1面全景(南東から)
P L 11
1. 7号掘立柱建物1面(南から)
2. 7号掘立柱建物1面遺物(1)出土状態(北から)
3. 7号掘立柱建物1面遺物出土状態(南から)
4. 7号掘立柱建物1面古銭(3)出土状態(南から)
5. 7号掘立柱建物1面古銭(4)出土状態(南から)
P L 12
1. 7号掘立柱建物1面カマド(南から)
2. 7号掘立柱建物1面カマド土層断面(南から)
3. 7号掘立柱建物1面カマド掘り方(南から)
4. 7号掘立柱建物1面窪地(西から)
5. 7号掘立柱建物2面(東から)
P L 13
1. 7号掘立柱建物2面遺物(1)出土状態(北から)
2. 7号掘立柱建物2面遺物(4～6)出土状態(北から)
3. 7号掘立柱建物2面1号炉(南から)
4. 7号掘立柱建物2面1号炉土層断面(南から)
5. 8号掘立柱建物1面(南西から)
P L 14
1. 8号掘立柱建物1面P 3(西から)
2. 8号掘立柱建物1面P 5(南西から)
3. 8号掘立柱建物1面1号炉(北西から)
4. 8号掘立柱建物1面1号炉土層断面(東から)
5. 8号掘立柱建物2面(東から)
P L 15
1. 8号掘立柱建物2面(南から)
2. 8号掘立柱建物2面土層断面(東から)
3. 8号掘立柱建物2面P 1(西から)
4. 8号掘立柱建物2面P 16(西から)
5. 8号掘立柱建物2面P 21遺物出土状態(西から)
6. 8号掘立柱建物2面P 21土層断面(東から)
7. 8号掘立柱建物2面1号炉(東から)
8. 8号掘立柱建物2面1号炉土層断面(東から)
P L 16
1. 8号掘立柱建物2面2号炉(東から)
2. 8号掘立柱建物2面2号炉土層断面(東から)
3. 8号掘立柱建物2面土坑(北東から)
4. 8号掘立柱建物2面土坑(南西から)
5. 29号土坑土層断面(北から)
6. 29号土坑(東から)
7. 1号道南部(北東から)
8. 1号道土層断面(南から)
P L 17
1. 1号道西部(東から)
2. 1号道東部(西から)
3. 1号道中央から西部(東から)
4. 1号道西部(西から)
5. 1号畑(南西から)
6. 1～2号畑西部(南から)
7. 2号畑西部(西から)
P L 18
1. 2号畑東部(東から)
2. 2号畑土層断面(南西から)
3. 2号畑土層断面(東から)
4. 2号畑土層断面近接(東から)
5. 3号畑(南西から)
6. 3-1号平坦面(北西から)
7. 4号畑、浅間石大(北東から)
8. 4号畑(北から)
P L 19
1. 5号畑中央(北から)
2. 5号畑西部(東から)
3. 6号畑(北から)
4. 6号畑、浅間石中(北西から)
5. 7号畑南部(北東から)
6. 7号畑、1号道(南西から)
7. 9号畑(南東から)
8. 13号平坦面(南西から)
P L 20
1. 10号畑北部、1号平坦面(南東から)
2. 10号畑中央部、2号平坦面(北東から)
3. 10号畑(南西から)
4. 10～11号畑、4号平坦面(北東から)
5. 11号畑と12号畑の境い(北西から)
6. 12～16号畑(西から)
7. 12号畑、5号平坦面(北西から)
P L 21
1. 12号畑と13号畑の境い(北から)
2. 13号畑、8号平坦面(北西から)
3. 13～16号畑北部(西から)
4. 15～16号畑北部(西から)
5. 境木近接(東から)
6. 境木全景(東から)
P L 22
1. 9号掘立柱建物(南西から)
2. 9号掘立柱建物P 10(南から)
3. 9号掘立柱建物P 10近接(南から)
4. 9号掘立柱建物P 1(南から)
P L 23
1. 12～13号掘立柱建物(北西から)
2. 12号掘立柱建物(北西から)
3. 32号土坑土層断面、遺物出土状況(西から)
4. 32号土坑土層断面(北西から)
5. 13号掘立柱建物(西から)
P L 24
1. 30号土坑桶埋設状況(南西から)
2. 30号土坑土層断面、桶近接(南西から)
3. 30号土坑桶底板出土状態(南西から)
4. 30号土坑桶底板近接(南西から)
5. 30号土坑(西から)
6. 33号土坑土層断面(西から)
7. 34号土坑土層断面(西から)
8. 34号土坑(西から)
P L 25
1. 1～2号掘立柱建物、1～2号ピット列全景(北西から)
2. 1～2号掘立柱建物(東から)
P L 26
1. 1号掘立柱建物(西から)
2. 1～2号掘立柱建物(南から)
3. 1号掘立柱建物P 10～11土層断面(南西から)
4. 2号掘立柱建物(西から)
5. 2号掘立柱建物西半(南西から)
6. 2号掘立柱建物(南西から)
7. 2号掘立柱建物(北東から)
P L 27
1. 11号掘立柱建物(北西から)
2. 11号掘立柱建物南半(南東から)
3. 11号掘立柱建物P 8～9(南から)
4. 11号掘立柱建物P 8(南から)
5. 11号掘立柱建物P 8遺物出土状態(東から)
P L 28
1. 11号掘立柱建物P 16(南から)
2. 11号掘立柱建物P 17(東から)
3. 11号掘立柱建物P 18(東から)
4. 11号掘立柱建物P 19(東から)
5. 11号掘立柱建物P 20(東から)
6. 11号掘立柱建物P 21(南東から)
7. 1号集石土坑(北から)
8. 1号集石土坑土層断面(東から)
P L 29
1. 1号集石土坑(東から)
2. 1号集石土坑掘り方(東から)
3. 2号土坑土層断面(南西から)
4. 2号土坑炭化物出土状態(南から)
5. 2号土坑(南西から)
6. 4～6号土坑(南から)
7. 4号土坑土層断面(東から)
8. 4号土坑(南から)
P L 30
1. 5号土坑遺物出土状態(北東から)
2. 5号土坑土層断面(南から)
3. 5号土坑(南から)
4. 6号土坑土層断面(南から)
5. 6号土坑(南西から)
6. 10号土坑人骨出土状態(南西から)
7. 10号土坑古銭(8)出土状態(西から)
8. 10号土坑古銭(8)近接(南西から)
P L 31
1. 10号土坑遠景(南から)
2. 12号土坑土層断面(南から)
3. 12号土坑(南から)
4. 13号土坑、9号ピット土層断面(西から)
5. 13号土坑、9号ピット(南から)
6. 14号土坑(南から)
7. 15号土坑土層断面(西から)
8. 15号土坑(南から)
P L 32
1. 16号土坑土層断面(西から)
2. 16号土坑(南から)
3. 17号土坑土層断面(東から)
4. 17号土坑(南から)
5. 18号土坑土層断面(北西から)
6. 18号土坑(南から)
7. 19号土坑土層断面(北から)
8. 19号土坑(南東から)
P L 33
1. 20号土坑土層断面(南から)
2. 20号土坑(南から)
3. 21号土坑土層断面(南から)
4. 21号土坑(南から)
5. 22号土坑土層断面(西から)
6. 22号土坑(南から)
7. 23号土坑土層断面(北西から)
8. 23号土坑(南西から)

- P L 34
- 24号土坑土層断面(南から)
 - 24号土坑(南から)
 - 25号土坑、5号ピット土層断面(南から)
 - 25号土坑土層断面(南から)
 - 25号土坑遺物(3)出土状態(南から)
 - 25号土坑(南から)
 - 26号土坑(西から)
 - 27号土坑土層断面(西から)
- P L 35
- 27号土坑礫出土状態(西から)
 - 27号土坑(西から)
 - 31号土坑礫出土状態(東から)
 - 31号土坑礫(東から)
 - 31号土坑人骨検出状態(東から)
 - 31号土坑人骨埋葬状況(東から)
 - 31号土坑(東から)
 - 35号土坑馬骨出土状態(西から)
- P L 36
- 35号土坑馬歯出土状態(北から)
 - 35号土坑馬歯近接(東から)
 - 36号土坑土層断面(南から)
 - 36号土坑(南から)
 - 42号土坑土層断面(北から)
 - 42号土坑人骨検出状態(東から)
 - 42号土坑人骨出土状態(北から)
 - 42号土坑(北から)
- P L 37
- 2号焼土遺構(南から)
 - 2号焼土遺構焼土部(東から)
 - 2号焼土遺構焼土部掘り方(東から)
 - 3号焼土遺構(南から)
 - 3号焼土遺構炭化物出土状態(東から)
 - 3号焼土遺構土層断面(北から)
 - 3号焼土遺構掘り方(東から)
 - 4号焼土遺構(南から)
- P L 38
- 4号焼土遺構土層断面(西から)
 - 4号焼土遺構掘り方(西から)
 - 5号焼土遺構土層断面(西から)
 - 5号焼土遺構遺物出土状態(西から)
 - 5号焼土遺構掘り方(南から)
 - 6号焼土遺構(南から)
 - 6号焼土遺構近接(南から)
 - 6号焼土遺構土層断面(北から)
- P L 39
- 6号焼土遺構掘り方(南から)
 - 7号焼土遺構(南から)
 - 7号焼土遺構近接(南から)
 - 7号焼土遺構土層断面(北から)
 - 7号焼土遺構掘り方(北から)
 - 8号焼土遺構(南から)
 - 8号焼土遺構土層断面(南から)
 - 8号焼土遺構掘り方(南から)
- P L 40
- 9号焼土遺構・7号トレンチ(南から)
 - 9号焼土遺構近接(南から)
 - 9号焼土遺構(南から)
 - 9号焼土遺構土層断面(東から)
 - 12号焼土遺構(東から)
 - 12号焼土遺構土層断面(東から)
 - 12号焼土遺構掘り方(東から)
 - 1～2号ピット列(北から)
- P L 41
- 3～5号ピット列(西から)
 - 3号ピット列(北東から)
- 3号ピット列P 5、39号土坑土層断面(南東から)
 - 3号ピット列P 5土層断面(南から)
 - 3号ピット列P 5(南から)
- P L 42
- 3号ピット列P 10土層断面(西から)
 - 5号ピット列P 58土層断面(東から)
 - 54号ピット土層断面(南から)
 - 54号ピット(南東から)
 - 1号竪穴住居(西から)
- P L 43
- 1号竪穴住居遺物(1)出土状態(南から)
 - 1号竪穴住居遺物(2)出土状態(北から)
 - 1号竪穴住居カマド(西から)
 - 1号竪穴住居カマド土層断面(北から)
 - 1号竪穴住居カマド遺物出土状態(西から)
 - 1号竪穴住居焼土(北から)
 - 1号竪穴住居掘り込み土層断面(西から)
 - 1号竪穴住居掘り込み土層断面(北から)
- P L 44
- 1号竪穴住居掘り込み(北から)
 - 1号竪穴住居カマド(西から)
 - 1号竪穴住居カマド掘り方(西から)
 - 1号竪穴住居カマド土層断面(西から)
 - 2号竪穴住居遺物出土状態(南から)
- P L 45
- 2号竪穴住居(南東から)
 - 2号竪穴住居掘り方(南から)
 - 3号竪穴住居遺物出土状態(東から)
 - 3号竪穴住居(東から)
 - 3号竪穴住居土層断面(北東から)
- P L 46
- 3号竪穴住居カマド(南から)
 - 3号竪穴住居カマド土層断面(南西から)
 - 3号竪穴住居土層断面近接(南西から)
 - 3号竪穴住居カマド掘り方(南から)
 - 3号竪穴住居北東部掘り込み土層断面(南から)
 - 3号竪穴住居北東部掘り込み(南から)
 - 4号竪穴住居(東から)
 - 4号竪穴住居(西から)
- P L 47
- 3・4号竪穴住居掘り方(南から)
 - 3・4号竪穴住居掘り方(東から)
 - 3号掘立柱建物(南から)
 - 3号掘立柱建物P 1土層断面(西から)
 - 3号掘立柱建物P 1(南から)
- P L 48
- 3号掘立柱建物P 2土層断面(西から)
 - 3号掘立柱建物P 2(南から)
 - 3号掘立柱建物P 3土層断面(西から)
 - 3号掘立柱建物P 3(南から)
 - 3号掘立柱建物P 4土層断面(西から)
 - 3号掘立柱建物P 4(南西から)
 - 3号掘立柱建物P 5土層断面(東から)
 - 3号掘立柱建物P 5(南から)
- P L 49
- 3号掘立柱建物P 6土層断面(北から)
 - 3号掘立柱建物P 6土層断面(北西から)
 - 3号掘立柱建物P 6(西から)
 - 3号掘立柱建物P 7土層断面(東から)
 - 3号掘立柱建物P 7(南から)
 - 3号掘立柱建物P 8土層断面(南東から)
 - 3号掘立柱建物P 8(南東から)
 - 3号掘立柱建物P 9礫出土状態(西から)
- P L 50
- 3号掘立柱建物P 9土層断面(西から)
 - 3号掘立柱建物P 9(南から)
- 3号掘立柱建物P 10土層断面(西から)
 - 3号掘立柱建物P 10(南から)
 - 1号焼土遺構(南から)
 - 1号焼土遺構土層断面(南西から)
 - 1号焼土遺構掘り方土層断面(南西から)
- P L 51
- 1号竪穴遺構(東から)
 - 1号竪穴遺構焼土遺構(東から)
 - 1号竪穴遺構焼土遺構近接(東から)
 - 1号竪穴遺構焼土遺構土層断面(東から)
 - 1号竪穴遺構焼土遺構掘り方(東から)
- P L 52
- 1号竪穴遺構ピット1土層断面(南から)
 - 1号竪穴遺構ピット2土層断面(南から)
 - 1号竪穴遺構礫出土状態(南東から)
 - 1号竪穴遺構掘り方(東から)
 - 1号土坑土層断面(西から)
 - 1号土坑(南から)
 - 3号土坑土層断面(南から)
 - 3号土坑(南から)
- P L 53
- 7号土坑土層断面(南から)
 - 7号土坑(南東から)
 - 8号土坑土層断面(南西から)
 - 8号土坑(北東から)
 - 9号土坑土層断面(南から)
 - 9号土坑(南から)
 - 11号土坑土層断面(南から)
 - 11号土坑(南から)
- P L 54
- 28号土坑遺物出土状態(南から)
 - 28号土坑土層断面(南から)
 - 28号土坑(南から)
 - 37号土坑土層断面(西から)
 - 37号土坑(西から)
 - 38号土坑土層断面(西から)
 - 38号土坑(西から)
 - 39号土坑土層断面(北西から)
- P L 55
- 39号土坑、3号ピット列P 5(南西から)
 - 39号土坑(北東から)
 - 40号土坑土層断面(北から)
 - 40号土坑(東から)
 - 41号土坑土層断面(北西から)
 - 41号土坑(北西から)
 - 43号土坑土層断面(南から)
 - 43号土坑(南から)
- P L 56
- 44号土坑土層断面(南から)
 - 44号土坑(南から)
 - 45号土坑土層断面(西から)
 - 45号土坑(南から)
 - 10号焼土遺構土層断面(東から)
 - 10号焼土遺構(東から)
- P L 57
- 1面出土遺物 1
- P L 58
- 1面出土遺物 2、2面出土遺物 1
- P L 59
- 2面出土遺物 2、3面出土遺物 1
- P L 60
- 3面出土遺物 2
- P L 61
- 3面出土遺物 3

第1章 調査経過と調査の方法

第1節 ハッ場ダム発掘調査の経緯

ハッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、建設省関東地方建設局(現国土交通省関東地方整備局)と群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、吾妻町教育委員会(現東吾妻町教育委員会)が協議し、平成6年3月18日「ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定書」を建設省関東地方建設局と群馬県教育委員会の両者で締結し、発掘調査事業の実施計画が決定された。同年4月1日、関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長との間で発掘調査受託契約を締結し、同日同教育長と群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の両者で発掘調査委託契約が締結され、調査が開始された。

調査当初は、工事用進入路建設に先立つ小規模調査が先行したが、平成10年度以降、工事用進入路が徐々に整い、住民の生活再建の施設としての学校建設や住宅地造成、国道・県道建設工事に伴う発掘調査が増加し、広大な面積が対象となった。発掘調査される遺跡も久々戸遺跡や尾坂遺跡などのように、江戸時代の天明泥流下の畑が一面に広がり、また、長野原一本松遺跡や横壁中村遺

跡にみる縄文時代中・後期の大型集落遺跡が発掘調査されてきた。

第2節 調査に至る経緯と経過

下田遺跡は、ハッ場ダム建設工事に伴う水没地域に所在する遺跡である。

本遺跡では平成7年度に、工事用進入路建設工事(中原進入路)に伴い発掘調査が実施され、天明泥流により埋没した近世の建物や畑が検出されている。

平成19年11月に群馬県教育委員会文化課(以下：文化課)により試掘調査が実施され、天明泥流直下で畑面を確認し、畑面の下には中世～古代の面があることが確認でき、本調査実施となった。

ハッ場ダム工事事務所と文化課と当事業団とで調整を行い、平成25年度から発掘調査を実施することとなった。

下田遺跡の発掘調査にあたっては、表土掘削には掘削機を用い、下位の遺構面に対してはジョレンを用いた人手による遺構確認を基本とした。

基本土層第1層の表土および現代の耕作土および第2層の天明3年泥流堆積物の2層の削除は重機を用いて実



第1図 遺跡位置図 (国土地理院5万分の1地形図「草津」使用)

第1章 調査経過と調査の方法

施した。As-Aが検出される泥流下遺構面にたいしては、人手を用いて遺構確認を行い、確認された遺構に対し精査を行った。

2面の調査では泥流下遺構面にトレンチを設定し、確認された遺構周辺を拡張しつつ調査をすすめた。通常の調査と異なり、調査区内に身長を超える高さを有する巨石が存在したため、調査に着手する前に、これらの巨石を個々に割り砕き排除する手間を要した。

検出した遺構の平面および土層断面等の測量は測量業者への業務委託で実施した。測量縮尺は1/20・1/40を基準とし、全体図等においては1/100を用いた。

記録写真撮影には1010万画素の一眼レフ・デジタルカメラと6×7判の一眼レフ・フィルムカメラを用い、調査担当者が撮影に当たった。

調査概要

平成25年度の調査概要 天明泥流で埋没した畑とその耕作土下の遺構群が確認された。耕作土下からは、竪穴住居、掘立柱建物、土壇墓などが検出された。

平成26年度の調査概要 天明泥流により埋没した畑と建物、畑の耕作土下の遺構群が確認された。竪穴住居、礎石建物、掘立柱建物、土壇墓などが検出された。

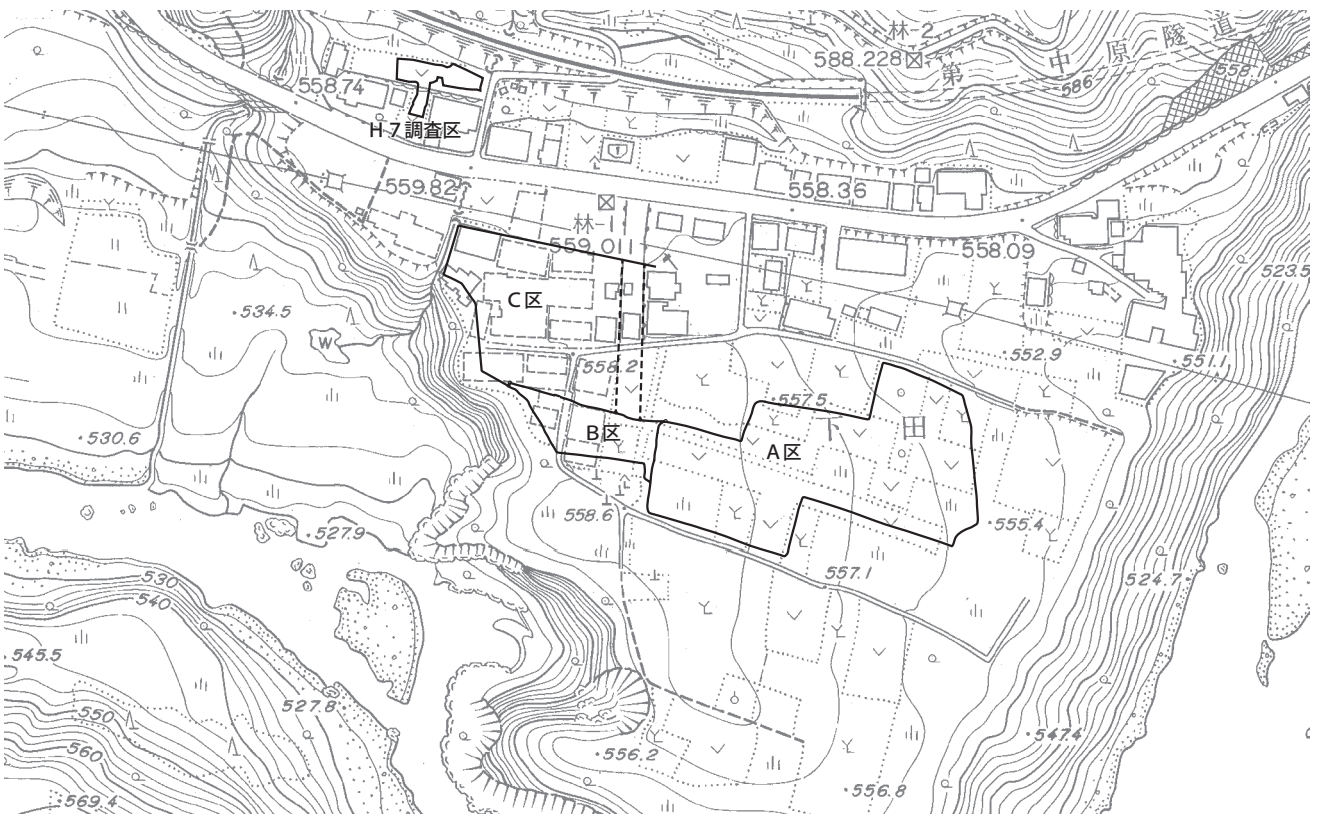
調査経過（調査日誌抄録）

平成25年

- 7月4日 下田遺跡発掘調査事務所設置準備。
- 7月11日 A区表土掘削の準備を始める。
- 7月23日 重機を用いた表土掘削に着手。
- 7月25日 遺構確認作業開始。
- 7月31日 泥流下遺構面を検出。
- 8月5日 As-A下畑精査開始。
- 8月21日 泥流下面の精査と並行して、畑の測量に着手。
- 9月10日 A区2面の調査に着手。
- 9月20日 遺構確認。
- 9月24日 2面個別遺構の測量を開始。
- 10月18日 東側精査と並行して、残土埋め戻しに着手。
- 10月31日 A区調査終了、引き渡し。
- 11月5日 B区表土掘削の準備を始める。
- 11月7日 As-A下遺構検出。
- 11月12日 個別遺構の測量を開始。
- 11月15日 2面遺構確認作業に着手。
- 11月25日 2面個別遺構の測量を開始。
- 11月28日 2面精査に平行して、撤収準備開始。
- 12月3日 現場作業終了。
- 12月6日 B区引き渡し準備着手。

平成26年

- 4月4日 下田遺跡調査事務所設置準備。
- 4月9日 重機によるC区表土掘削作業開始。
- 4月14日 遺構確認開始。As-A下遺構検出。
- 4月21日 個別遺構の測量を開始。
- 5月1日 As-A下遺構精査に平行して、2面遺構確認作業開始。
- 5月2日 2面個別遺構の測量を開始。
- 5月22日 3面個別遺構掘削開始。
- 5月30日 C区調査終了。
- 5月31日 C区引き渡し準備着手。



第2図 調査区の設定(「長野原都市計画図22」長野原町平成13年9月作成を使用)

第3節 調査の方法

平成6年から始まった八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査においては、遺跡名称の略号やグリッドの設定などについて「八ッ場ダム関連埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき進められている。

1 遺跡名称の略号(遺跡番号)

八ッ場ダムの略称はYD、次に長野原町の大字毎を1地区とし、1：川原畑地区、2：川原湯地区、3：横壁地区、4：林地区、5：長野原地区の5地区に区分し、さらに各地区に所在する遺跡の調査順に番号を付すこととなっている。したがって、本遺跡は林地区での調査であり、YD4-01となる。

2 グリッドの設定

グリッドの設定は、平面直角座標系第IX系を使用し、東吾妻町大字大柏木付近を基点(座標値：X=58000.0、Y=-97000.0)として、北西方向に60区画の1km方眼を設定し大グリッド(地区)としている。本遺跡は27地区とした大グリッドに位置する。

大グリッド(地区)内を100m方眼の中グリッド(区)に100分割し、分割された中グリッドは、大グリッドの南東隅を基点とし番号を付与している。本遺跡の調査区は、23・24区と33・34・35区に跨ることとなる。さらに、この中グリッド(区)内を4m方眼に625分割し、中グリッドの南東隅を基点として、Y軸となる東から西へA～Y、X軸となる南から北へ1～25を付し、最小グリッドとした。また、大グリッドの境界が本調査区を通らないため、大グリッドの番号を省略し、中グリッドと小グリッドをあわせ「6区H-20」のように表記した(第3図)。

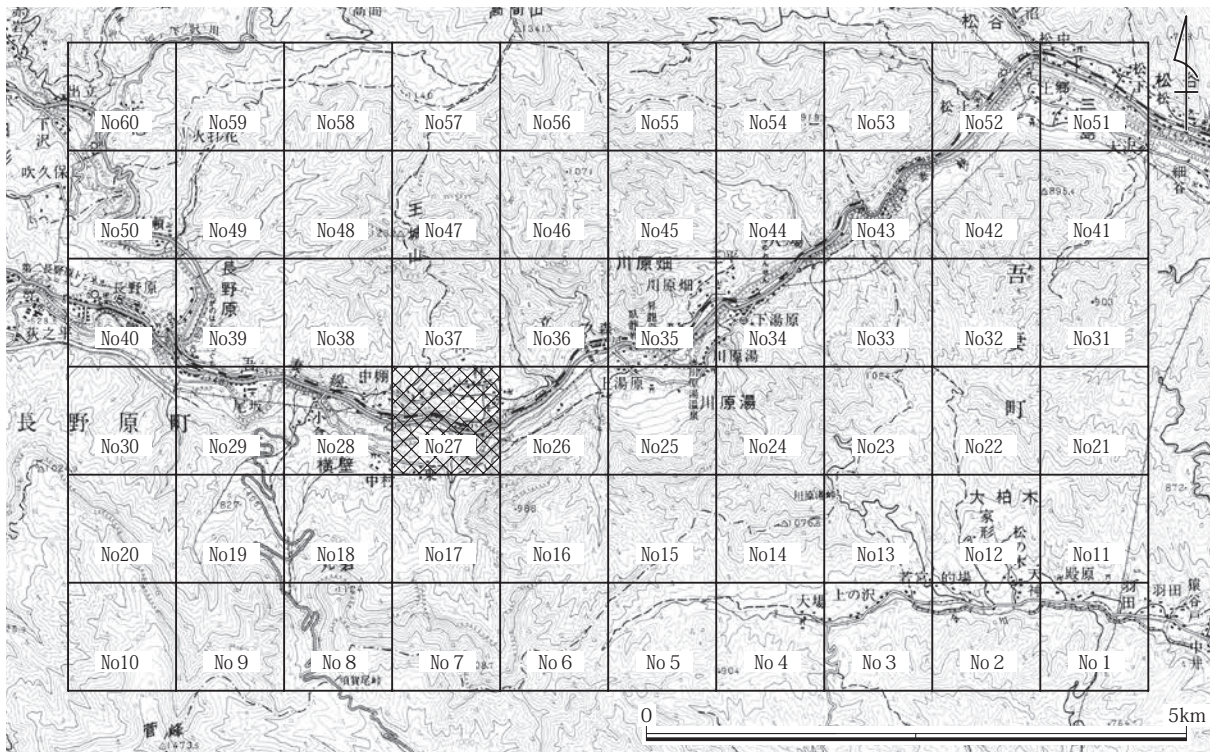
遺構名称については、中グリッド毎の遺構名称となっている。

なお、調査区の設定方法については、「第2章 第2節 発掘調査の方法」『長野原一本松遺跡(1)』(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2002)に詳しい。

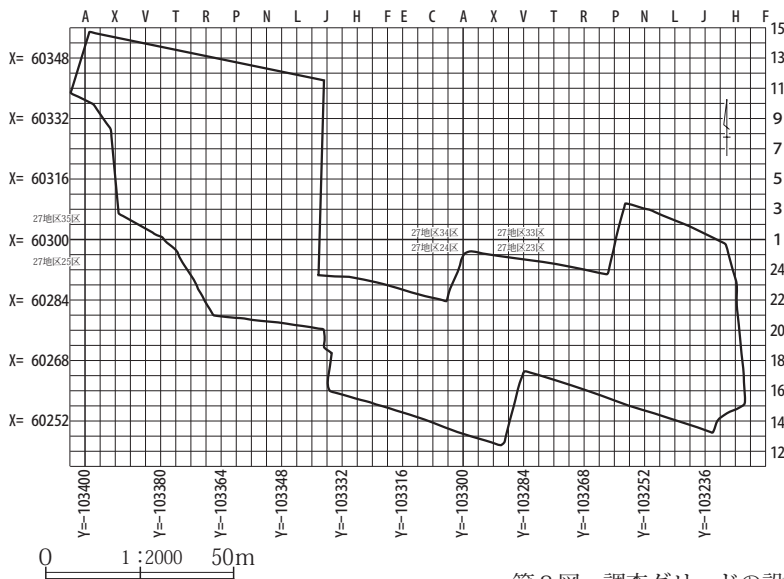
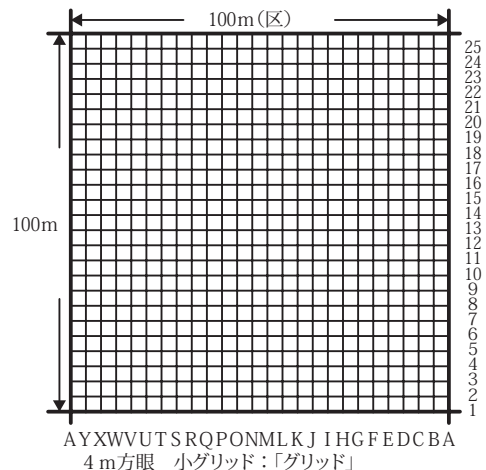
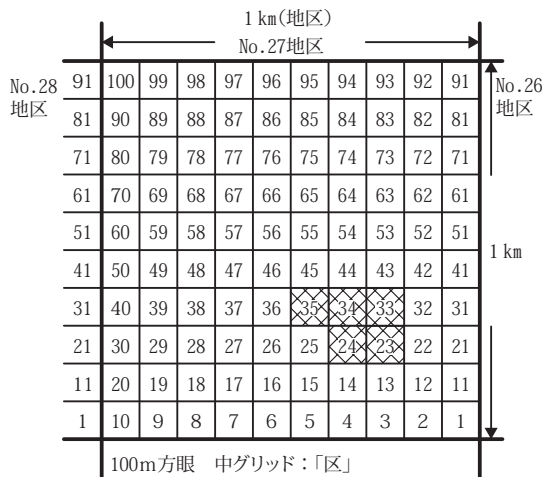
第1表 八ッ場ダム建設工事に伴う調査遺跡一覧

所在大字	YD番号	遺跡名	調査年度(平成)
川原畑	YD 1 01	—	
	YD 1 02	東宮	9、19、20、21、26、27、28
	YD 1 03	石畑	10
	YD 1 04	三平 I	16、17、24、25
	YD 1 05	二社平	10、28
	YD 1 06	三平 II	16
	YD 1 07	上ノ平 I	18、19、28
	YD 1 08	西宮	20、26、27、28
	YD 1 09	西宮岩陰	26
川原湯	YD 2 01	川原湯勝沼	9、15、16、28
	YD 2 02	西ノ上	14、27
	YD 2 03	石川原	20、26、27、28
	YD 2 04	下湯原	27、28
横壁	YD 3 01	横壁勝沼	
	YD 3 02	西久保 I	10、12
	YD 3 03	横壁中村	8～18
	YD 3 04	山根Ⅲ	13、18
	YD 3 05	西久保Ⅳ	21、23
林	YD 4 01	下田	7、25、26、28
	YD 4 02	—	
	YD 4 03	上原 I	24
	YD 4 04	—	
	YD 4 05	花畑	10、11、12
	YD 4 06	楡木Ⅲ	10
	YD 4 07	中棚Ⅱ	11、12、13、16、17、28
	YD 4 08	下原	12、13、15、16
	YD 4 09	楡木Ⅱ	11、12、13、16、17
	YD 4 10	二反沢	12
	YD 4 11	立馬 I	13、14、17
	YD 4 12	立馬Ⅱ	14
	YD 4 13	上原Ⅳ	15、21
	YD 4 14	林中原 I	16、19、20、21
	YD 4 15	林中原Ⅱ	16、20、21
	YD 4 16	上原Ⅱ	16
	YD 4 17	林の御塚	
	YD 4 18	立馬Ⅲ	19
	YD 4 19	東原 I	20
	YD 4 20	東原Ⅱ	20
	YD 4 21	東原Ⅲ	20、21
	YD 4 22	楡木 I	21
	YD 4 23	林宮原	24、27
	YD 4 24	上原Ⅲ	25、27
長野原	YD 5 01	長野原一本松	6～10、12～17、19、20
	YD 5 02	尾坂	11、18～22、25、26、28
	YD 5 03	久々戸	7、9、10、15、27、28
	YD 5 04	幸神	8、9、14、17
	YD 5 05	長野原城跡	23
	YD 5 06	町遺跡	23、24、25
三島	YD 6 01	上郷 B	13、14
	YD 6 02	上郷岡原	13、14、15、17、18
	YD 6 03	上郷 A	15、19、20
	YD 6 04	上郷西	19
大柏木	YD 7 01	三島大沢	
	YD 7	廣石 A	13
松谷	YD 8	大柏木上ノ沢	
岩下	YD 9	松田前田	
		—	

第1章 調査経過と調査の方法



No.27地区 下田遺跡
 1 km方眼 大グリッド：「地区」設定



第3図 調査グリッドの設定

1 km方眼で区画された大グリッド(地区)の27地区に下田遺跡が位置している(上段の図)。27地区の23,24,33,34,35区が今回の調査対象地点となる(中段左の図)。中段左図の100m方眼で区切られた中グリッド(区)の区画中を、中段右図のように4 m方眼で区切ったものが小グリッドとなる。

下段に、下田遺跡における調査グリッド設定を示した。

第2章 周辺の環境

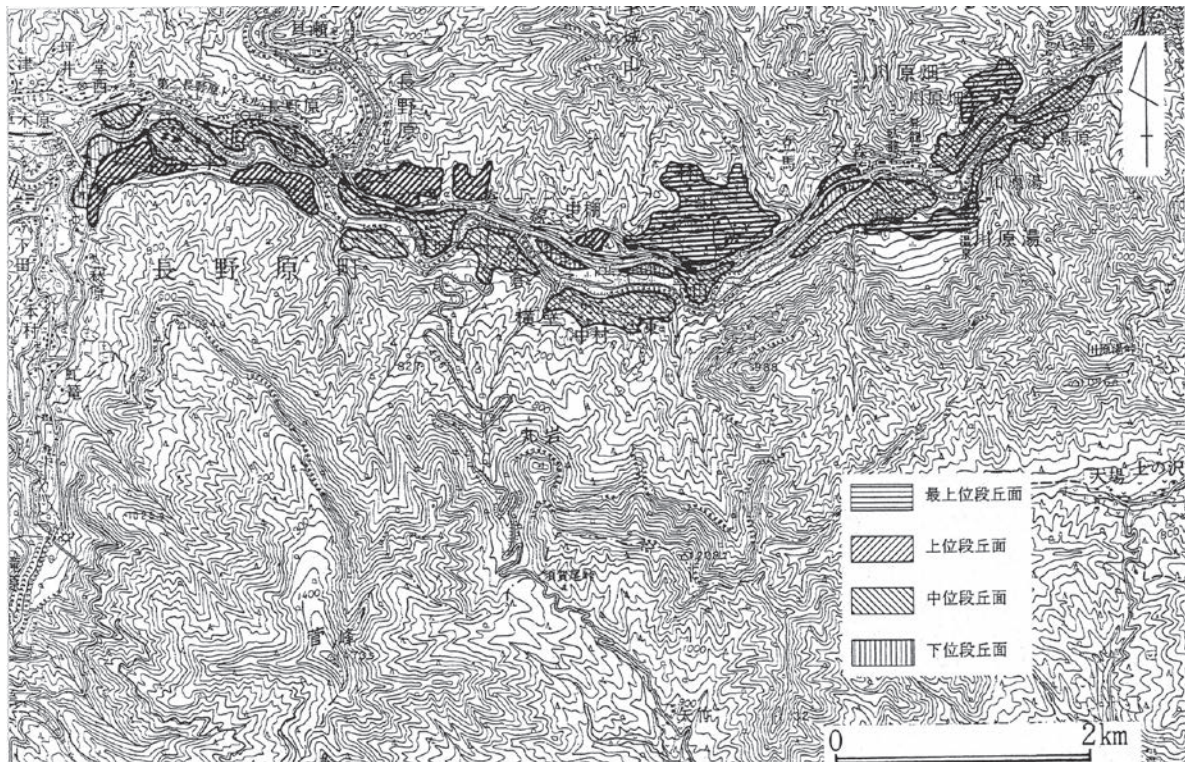
第1節 遺跡の位置と地形

本遺跡は、群馬県北西部の吾妻郡長野原町林に所在する。南西20kmに浅間山(2,568m)、北西15kmに草津白根山(2,171m)が聳え、両火山をつなぐ山脈の連なりが上信国境を構成している。この上信国境を構成する分水界の一つ、長野県との県境に位置する鳥居峠(1,362m)付近に源を発する吾妻川は、嬭恋村を経て長野原町、東吾妻町と東流し、渋川市白井で南下する利根川に合流する。

本遺跡が所在する長野原町林地区は長野原町の北部にあり、東流する吾妻川の左岸に位置する。周辺は吾妻川を挟み北に高間山(1,342m)、王城山(1,123m)、南に丸岩(1,124m)、管峰(1,473.5m)などが聳える峡谷地形が連続する。下流には国の名勝に指定されている吾妻溪がつづく。また、王城山と丸岩は当地域の陸標とされており、ふるくから地元に密着した山々である。このような、山々とそこを流れ下る河川とにより、当地域の地理的特徴・景観が形成されている。

吾妻川が形成した段丘面は、最上位段丘面、上位段丘面、中位段丘面、下位段丘面に区分される。発掘調査の対象となる埋蔵文化財包蔵地もこれらの段丘面に位置しており、その対象地は広く、各段丘面を包括した面的な発掘調査が必要とされる地域である。長野原町の遺跡の多くは、吾妻川が形成した河岸段丘上に存在しているが、近年の調査により丘陵、山麓斜面にもその分布域が広がることが判明した。発掘調査により、各段丘面とその周辺に立地する遺跡が複雑に絡み合う様相が明らかになるものと期待されている。なお、林地区は最上位段丘面下に上位段丘面を持たず、最上位段丘面南端の段丘崖下には中位段丘面と下位段丘面が広がっている。

当地域には、川原畑、川原湯、横壁、林、長野原という5か所の大字がある。各大字は河川・段丘・道路などにより区画され、それぞれが特徴ある遺跡を包蔵する固有の領域をなしている。段丘様相と、それぞれの大字が包括する小地域の様相とが相互に影響しあい、本地域の特性が形成されたといわれる。



第4図 長野原町段丘面の分布(『長野原町の自然』長野原町1993)

林地区の遺跡の多くは王城山を背とする最上位段丘面とその東西に位置する山地斜面に立地しているが、本遺跡は、東流する吾妻川が南に蛇行し、その北岸が南に突出する舌状の台地（中位段丘面）上に占地する集落遺跡である。長野原町林地区は吾妻川最上位段丘面を主体とし、王城山の南にひらける緩斜面地形に多くの包蔵地を展開しつつ、東西の山地斜面地形にも遺跡が点在する様相を示している。ハッ場ダム調査対象地域の中でも、遺跡が濃密に分布する地域とされる。

第2節 周辺の遺跡

本節では、ハッ場ダム建設に伴う調査対象地域周辺の主な遺跡分布図(第5図)と一覧表(第2表)を掲載し、当地域の遺跡を概観する。

旧石器時代

長野原町内では、いまだ旧石器時代の遺跡は確認されていない。柳沢城跡(22)から遺構外出土であるが、細石刃文化に伴うと考えられる珪質頁岩製のスクレイパーが出土するにとどまる。

縄文時代

長野原町内では吾妻川およびその支流の段丘面や丘陵部を中心に、多くの遺跡が存在している。

草創期の遺跡としては、石畑Ⅰ岩陰(57)が挙げられる。奥行4m以上、幅40mの大規模な岩陰遺跡であり、草創期の表裏縄文などの出土が知られる。また楡木Ⅱ遺跡(28)においても表裏縄文1点が出土している。

早期の遺跡は吾妻川左岸に多く、特に山間地の急傾斜地形の中にある、狭小な平坦地や緩傾斜地に占地する傾向が指摘されている。林地区では楡木Ⅱ遺跡、立馬Ⅰ遺跡(49)、立馬Ⅲ遺跡(51)、中棚Ⅰ遺跡(31)が知られる。また長野原地区では、長野原一本松遺跡(20)、幸神遺跡(21)、尾坂遺跡(3)で出土が報告されている。川原畑地区では三平Ⅰ遺跡(54)、三平Ⅱ遺跡(55)において当該期の資料が見られる。

前期の遺跡は数少ないものの、漸増の傾向にあるとされる。

林中原Ⅰ遺跡(43)や上原Ⅰ遺跡(39)で前期初頭の集落が調査された。

前期前葉～中葉段階では、大規模な集落は検出されて

いない。石畑遺跡(17)で関山Ⅱ式や黒浜式が出土している。また、林中原Ⅰ遺跡では黒浜式期の住居1軒が検出されている。

前期後葉段階も、平野部での傾向に反し、当地域の集落規模は小規模にとどまるとされる。諸磯式期の集落は、三平Ⅰ遺跡、楡木Ⅱ遺跡、川原湯勝沼遺跡(12)等で数軒単位の住居・土坑が調査されている。林中原Ⅱ遺跡(44)でも土坑が報告されている。また楡木Ⅲ遺跡(29)では、包含層出土ながら諸磯b式土器が出土している。

中期初頭段階の遺跡としては、上原Ⅱ遺跡(40)が挙げられ、五領ヶ台Ⅱ式の遺構・遺物の良好な出土が知られている。また同じ林地区の立馬Ⅱ遺跡(50)、楡木Ⅱ遺跡でも該期土器資料が出土している。

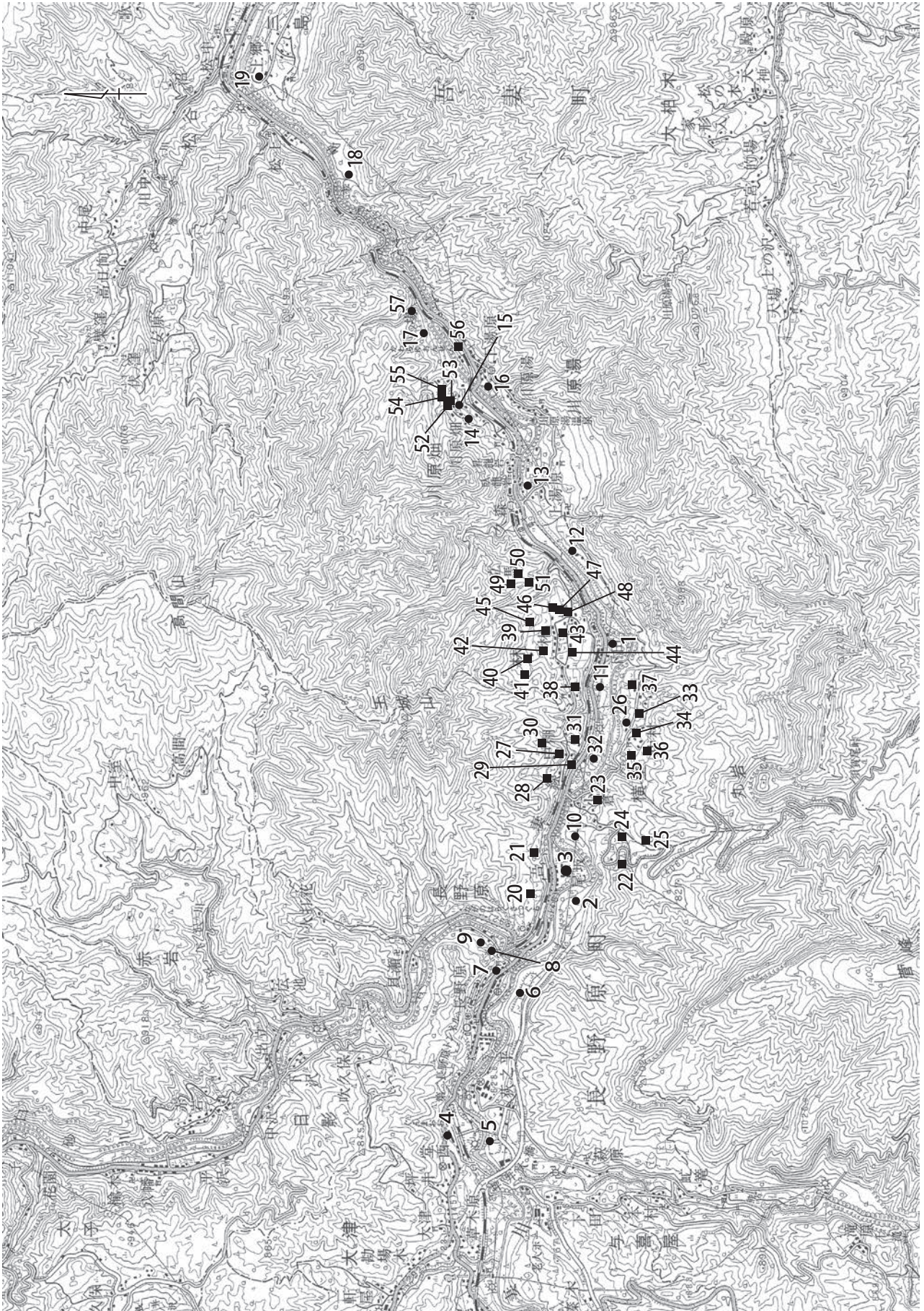
中期前葉段階のまとまった資料は少なく、前述した立馬Ⅱ遺跡、楡木Ⅱ遺跡などで良好な土器の出土が見られるが、遺構に伴ってはいない。楡木Ⅰ遺跡(27)では1個体ながらも土坑からの出土が報告され、林中原Ⅱ遺跡では土器2個体が共伴する土坑が調査されている。

中期中葉段階では、阿玉台Ⅰb式～Ⅱ式段階の遺構として、林中原Ⅰ遺跡で住居が、林中原Ⅱ遺跡で土坑が検出されている。幸神遺跡では「焼町類型」を炉体土器とする住居が報告されている。中葉後半段階の資料としては、上ノ平Ⅰ遺跡(52)が知られる。また横壁中村遺跡(10)でも、土坑から該期の土器が出土している。

中期後葉段階にいたり大型集落が点在する様相が現れる。長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡は環状集落の好例として知られ、この他に林中原Ⅱ遺跡および尾坂遺跡や石川原遺跡(13)も大型集落跡とされる。また、中期末葉段階の集落は敷石住居を伴い、前述の後葉段階の集落から継続する様相を示す。

後期も中期集落から継続する様相が見られるとされ、各段丘面に広がる傾向が予想されている。敷石住居は、長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡の他に林中原Ⅱ遺跡、林中原Ⅰ遺跡、久々戸遺跡(2)や向原遺跡(6)などでも調査されている。いずれも後期初頭から前葉段階の集落であり、称名寺式土器、堀之内式土器の他、「茂沢類型」や三十稲場式など、隣接する長野県や新潟県域を中心とする土器群も見られる。

後期中～後葉段階になると遺跡数は激減する。上原Ⅳ遺跡(42)、横壁中村遺跡で加曾利B式期の住居や掘立柱



第5図 周辺遺跡(国土地理院5万分の1地形図「草津」に加筆)

建物、後葉段階では横壁中村遺跡で住居が検出されているが、他の遺跡では遺構は見られず、集落分布域が狭まる様相が指摘されている。

晩期前半段階の遺構としては、横壁中村遺跡で土坑が検出されたのみである。晩期末葉の資料はやや増え、立馬Ⅰ遺跡、横壁中村遺跡で住居が、川原湯勝沼遺跡では再葬墓の要素を持つ土坑が検出されている。なおこの時期は、長野県の氷式や東北地方の大洞式などといった土器の出土もみられる。

弥生時代

遺跡数は希薄であるが、前期～中期の住居は横壁中村遺跡、立馬Ⅰ遺跡、林中原Ⅱ遺跡で検出されている。また立馬Ⅰ遺跡では中期に比定される甕棺墓も検出されている。上原Ⅰ遺跡では土坑から前期とされる短頸壺が、上原Ⅲ遺跡(41)では中期初頭の壺が出土している。

弥生時代後期になると、さらに遺跡数は減少する。石畑遺跡で土坑が検出されている。

古墳時代

上原Ⅰ遺跡で前期と考えられる住居が検出され、S字

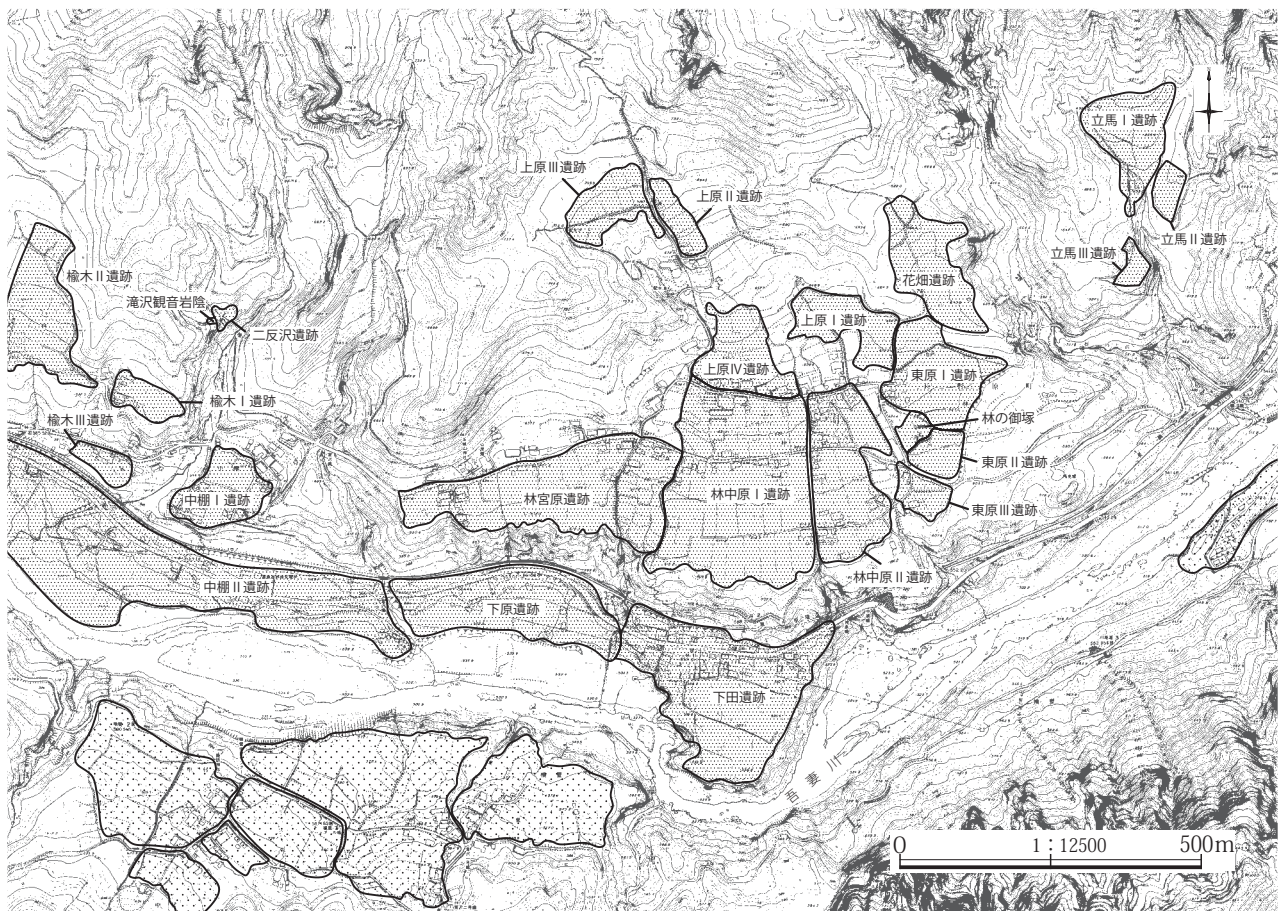
状口縁台甕や埴形土器が出土している。また、上原Ⅳ遺跡、林宮原遺跡(38)、下原遺跡(11)では後期の住居が検出されている。

奈良・平安時代

奈良時代に比定される遺跡は希薄で羽根尾Ⅱ遺跡が知られるのみである。

平安時代、特に9世紀後半代に至ると遺跡数が増加する。長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡、尾坂遺跡、中棚Ⅰ遺跡、上原Ⅰ遺跡、上原Ⅲ遺跡、上原Ⅳ遺跡、上ノ平Ⅰ遺跡、林宮原遺跡、楡木Ⅰ遺跡、楡木Ⅱ遺跡、下湯原遺跡(56)など、各地区で集落が調査されている。本遺跡でも住居が検出されている。なお横壁中村遺跡以外は、吾妻川左岸に偏る傾向が指摘されている。これらの集落遺跡からは、羽口、鉄滓、鎌、刀子、砥石など鍛冶関連遺物や鉄製品が出土しており、生産遺構としての鍛冶関連施設が各地区に点在しているとされる。

当地域の特徴的な該期遺構として、「陥穴状土坑」が挙げられる。イノシシ・シカなどを捕獲する罟猟遺構であるが、平安時代～中世に比定されるものが確認されてい



第6図 林地区遺跡分布(『林中原Ⅱ遺跡(1)』第5図を引用)

る。この陥穴状土坑も該期集落遺跡と同様に、吾妻川左岸側に設けられる傾向が指摘されている。

中世

吾妻川流域には中世城館跡が点在する。金花山砦跡、柳沢城跡、長野原城跡(8)、丸岩城跡、羽根尾城跡や林城跡が挙げられる。これらは、当時の交通網との関連が指摘され、交通の要衝に設けられたと考えられている。城館跡以外には、三平Ⅰ遺跡、三平Ⅱ遺跡、東原Ⅰ遺跡(46)、東原Ⅱ遺跡(47)、東原Ⅲ遺跡(48)、林中原Ⅰ遺跡、林宮原遺跡、下原遺跡、二反沢遺跡(30)、楡木Ⅱ遺跡、尾坂遺跡などで掘立柱建物や土坑、畑が調査されている。

近世

当地域の近世遺跡の多くは、天明三年(1783)の浅間山噴火に伴う泥流堆積物下の遺跡群である。民家の検出例としては東宮遺跡(15)、西宮遺跡(14)、石川原遺跡、下田遺跡、楡木Ⅰ遺跡、尾坂遺跡、町遺跡(7)などが挙げられる。また、小林家屋敷跡(4)も長野原町教育委員会

が調査した良好な遺構で、東宮遺跡と並び、民家の規模のみならず生業や性格までを窺わせる資料が出土している。さらに石川原遺跡では、民家以外に当時の寺の調査も行われている。

この他に当地域の天明泥流下の遺構としては、畑が各遺跡で調査されている。主に中位段丘面と下位段丘面に集中しており、近世農業の研究には欠かせない遺跡群となっている。

墓墳も多く、林中原Ⅰ遺跡と林中原Ⅱ遺跡以外にも、上ノ平Ⅰ遺跡や横壁中村遺跡でまとまった墓墳群が調査されている。当時の埋葬事例がうかがえる資料群である。

当地域の近世史研究にとり重要な資料となる天明三年以前の遺構・遺物も増加している。中棚Ⅱ遺跡(32)では安永期とされる畑、町遺跡では泥流下畑耕作土下位層から製鉄関連遺構が調査されている。また時期は確定できないが、横壁中村遺跡における一字一石経の出土も近世社会における宗教様相の一端を知る資料となっている。

第2表 周辺の主な遺跡

No.	遺跡名	所在地	主な時代	概要	備考	報告書等
1	下田遺跡	長野原町林	平安・近世	天明三年泥流下の畑。江戸・中世の建物。平安時代の住居、陥し穴。	平25・26年度事業団調査	55
2	久々戸遺跡	長野原町長野原	近世	天明三年泥流下の畑、建物、縄文時代晩期の土器片。	平7・9・10・11・15・26年度事業団調査	50、53、54
3	尾坂遺跡	長野原町長野原	縄文・弥生・平安・中・近世	天明三年泥流下の畑・建物。中世の掘立柱建物。縄文時代の住居、土坑。弥生時代の再葬墓、土坑。平安時代の住居、土坑等。	平6・7・11・18・19・20・21～23・25・26年度事業団調査。平23・26に長野原草津口駅舎整備に伴う調査として一部調査。	19、46、52
4	小林家屋敷跡	長野原町長野原	近世	天明三年泥流に埋没した屋敷、礎石建物2、土蔵1、石垣等。分限者小林助左右衛門屋敷の一部。	平成14年度町教委調査	48
5	旧新井村跡	長野原町与喜屋	近世	昭和55年、自衛隊による町民グラウンド造成中に泥流で埋没した屋敷が発見された。日待供養塔、石臼、農具などが出土。	「長野原町誌」上巻	47
6	向原遺跡	長野原町長野原	縄文・弥生・平安	縄文時代中期後半～後期の住居3軒・敷石住居2軒、土坑群。弥生時代中期の土坑、平安時代の住居10軒を検出。	平5年度町教委調査	27
7	町遺跡	長野原町長野原	近世	天明三年泥流下の畑。	平23～25年度事業団調査	59
8	長野原城跡	長野原町長野原	中世	土塁や堀切・物見台などが残る。長野原合戦の舞台となる。	平23年度事業団調査	12
9	嶋木Ⅰ遺跡	長野原町長野原	近世	天明泥流下の畑跡、中・近世の陶磁器片。	平16年度町教委調査	51
10	横壁中村遺跡	長野原町横壁	縄文・弥生・平安・中世	縄文時代中期後半から後期後半を中心とする集落跡、縄文時代晩期、弥生時代の土器片、平安・中世の遺構・遺物。	平8～17年度事業団調査	15、39、53
11	下原遺跡	長野原町林	古墳・近世	天明三年泥流下の畑、中世の畑、古墳時代の住居、弥生時代の土器片等。	平12・15・16年度事業団調査	30、53
12	川原湯勝沼遺跡	長野原町川原畑	縄文・平安・近世	縄文時代晩期の埋設土器、古墳時代の遺物、平安時代の住居、天明三年泥流下の畑。	平15・16年度事業団調査	23、57
13	石川原遺跡	長野原町川原湯	縄文・平安・近世	天明三年泥流下の畑。縄文時代中期の住居、列石、配石。平安時代の住居、陥し穴。近世の畑。	平20・25・26年度事業団調査	
14	西宮遺跡	長野原町川原畑	平安・近世	天明三年泥流下の建物複数、酒蔵、道、石垣、井戸、畑等。	平20・26年度事業団調査	
15	東宮遺跡	長野原町川原畑	近世	天明三年泥流下の屋敷。大形の建物が良好な状態で検出、土台、大引、床板等多くの建築材が残る。また、下駄や団扇、石臼等の当時の道具類も多く出土。	平7・9・19～21・26年度事業団調査	56

第2章 周辺の環境

No.	遺跡名	所在地	主な時代	概要	備考	報告書等
16	西ノ上遺跡	長野原町川原湯	近世	天明三年泥流下の畑。平安時代の陥し穴、弥生時代の土坑等。	平14年度事業団調査	54
17	石畑遺跡	長野原町川原畑	縄文		平9・10年度事業団調査	28、60
18	上郷西遺跡	東吾妻町	平安・近世		平19年度事業団調査	58
19	上郷岡原遺跡	東吾妻町	縄文・近世	天明三年泥流下の畑、水田、礎石建物等。近世の墓坑。平安時代の住居、縄文時代の住居、土坑。	平14・15・17～19年度事業団調査	21、43
20	長野原一本松遺跡	長野原町長野原	縄文・平安	縄文時代中期～後期にかけての集落跡、大形の掘立柱建物、敷石住居などを検出、平安時代の住居、中世の掘立柱建物や多くの土坑等が検出されている。	平6～17・19・20年度事業団調査	18
21	幸神遺跡	長野原町長野原	縄文	縄文時代中期の住居・土坑。陥し穴。	平8・9・14・17・18年度事業団調査	16
22	柳沢城跡	長野原町横壁	中世	別城一郭付随と呼ばれる特殊な構造、曲輪、堀、土居などを検出、常滑、瀬戸、美濃、珠洲焼、さらには中国陶磁などが出土。	平5年度町教委調査	2
23	西久保Ⅰ遺跡	長野原町横壁	縄文	縄文時代後期の住居、水場を検出。中近世の礎石建物。	平6・10・12年度調査	31
24	西久保Ⅱ遺跡	長野原町横壁	平安	散布地。		
25	西久保Ⅲ遺跡	長野原町横壁	縄文	散布地。		
26	西久保Ⅳ遺跡	長野原町横壁	縄文・近世	天明泥流下の畑。縄文時代の土坑等。	平21・23年度事業団調査	40
27	楡木Ⅰ遺跡	長野原町林	縄文	縄文時代の土坑、散布地。	平10・21年度事業団調査	40
28	楡木Ⅱ遺跡	長野原町林	縄文	縄文時代早期の集落、前期、中期の住居、平安時代の住居。	平11～13・16・17年度事業団調査	4、41
29	楡木Ⅲ遺跡	長野原町林	縄文・弥生	縄文時代前期・後期、弥生時代の包含層。	平9年度事業団調査	35
30	二反沢遺跡	長野原町林	中世・近世	中世の石垣を伴う造成跡、近世水路、畑。(旧大乘院堂跡)	平12年度事業団調査	45
31	中棚Ⅰ遺跡	長野原町林	縄文・平安	縄文時代早期の遺物、平安時代の住居。		13
32	中棚Ⅱ遺跡	長野原町林	近世	天明三年泥流下の畑、および安永九年と考えられる埋没畑等。	平11～13・15年度事業団調査	53、54
33	山根Ⅰ遺跡	長野原町横壁	縄文・平安	散布地、磨製石斧、石鏃、石棒などの石器類出土。		
34	山根Ⅱ遺跡	長野原町横壁	平安・近世	平安時代の散布地。		36
35	山根Ⅲ遺跡	長野原町横壁	縄文・近世	縄文時代中期後半の住居、土坑等。	平10・13・18年度事業団調査	16、26
36	山根Ⅳ遺跡	長野原町横壁	縄文・近世	縄文～平安時代の散布地。		
37	横壁勝沼遺跡	長野原町横壁	縄文	縄文時代中期～後期の土器片、槍先形尖頭器出土。	平6・7年度事業団調査	37
38	林宮原遺跡	長野原町林	古墳・平安	古墳時代の住居1、平安時代の住居6、土坑6。	平15年度町教委、平24年度事業団調査	29
39	上原Ⅰ遺跡	長野原町林	縄文	縄文時代前期初頭の住居、中期の住居。平安時代の住居、陥し穴等。	平15年度町教委、平24年度事業団調査	8、13
40	上原Ⅱ遺跡	長野原町林	縄文	縄文時代中期の住居。	平16年度事業団調査	13
41	上原Ⅲ遺跡	長野原町林	縄文	平安時代の住居、鍛冶遺構、陥し穴群。	平25年度事業団調査	8、13
42	上原Ⅳ遺跡	長野原町林	縄文・近世	縄文時代後期の敷石住居、配石遺構。	平15・21年度事業団調査	13、16、40
43	林中原Ⅰ遺跡	長野原町林	縄文・弥生・中・近世	縄文時代前期～後期住居、配石等。中・近世の掘立柱建物。林城跡。	平19～21年度事業団調査	12、22
44	林中原Ⅱ遺跡	長野原町林	縄文・弥生・中・近世	縄文時代後期の集落跡。敷石住居、晩期の土器片。弥生時代中期の住居、土坑。中・近世の掘立柱建物。	平15・20・21年度町教委調査	9、13、25
45	花畑遺跡	長野原町林	縄文・平安	平安時代の住居、陥し穴群。	平9～12年度事業団調査	38
46	東原Ⅰ遺跡	長野原町林	縄文	縄文時代土器片、陥し穴。	平6・9・20・21年度事業団調査	33、44
47	東原Ⅱ遺跡	長野原町林	縄文	縄文時代後期土器片、石器出土。	平10・20・21年度事業団調査	44
48	東原Ⅲ遺跡	長野原町林	平安・近世	縄文時代早期～後期の包含層。中・近世の掘立柱建物。内耳鍋、古瀬戸等出土。江戸時代の礎石建物。	平20・21年度事業団調査	44
49	立馬Ⅰ遺跡	長野原町林	縄文	縄文時代早期～晩期の住居。弥生時代中期後半の土器棺墓。	平13・14・17年度事業団調査	5
50	立馬Ⅱ遺跡	長野原町林	縄文	縄文時代草創期・早期の土器・石器。中期初頭～前半の住居9軒、中期後半の住居1軒。平安時代前後の陥し穴等。	平14・15年度事業団調査	14
51	立馬Ⅲ遺跡	長野原町林	縄文・平安	縄文時代早期の集落、前期、中期の住居、平安時代の陥し穴。	平19年度事業団調査	6
52	上ノ平Ⅰ遺跡	長野原町川原畑	縄文・平安	縄文時代中期の集落、平安時代の住居、陥し穴。	平18・19年度事業団調査	17
53	上ノ平Ⅱ遺跡	長野原町川原畑	縄文・平安	縄文、平安時代の散布地。		
54	三平Ⅰ遺跡	長野原町川原畑	縄文・弥生・平安	縄文時代早期～前期の集落。弥生時代中期の土坑、平安時代の陥し穴。	平16・17・24・25年度事業団調査	42
55	三平Ⅱ遺跡	長野原町川原畑	縄文・平安	縄文時代早期～前期の包含層、掘立柱建物等。	平16年度事業団調査	42
56	下湯原遺跡	長野原町川原湯	縄文・平安・中・近世	縄文時代の土坑、平安時代の住居、中近世の墓地、近世の畠・道路。	平27年度事業団調査	
57	石畑Ⅰ岩陰	長野原町川原畑	縄文	縄文時代草創期の土器出土。	昭和53年度群馬県調査、平成10年事業団調査	60

文献リスト

- 1 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004『新田西沢遺跡・新田平林遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第334集
- 2 長野原町教育委員会 1995『柳沢城跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第4集
- 3 中隆之 1979『石畑遺跡概報』長野原町教育委員会・高崎鉄道管理局
- 4 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009『榎木Ⅱ遺跡(2)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第458集
- 5 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006『立馬Ⅰ遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第388集
- 6 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009『立馬Ⅲ遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第457集
- 7 長野原町教育委員会 2000『坪井遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第7集
- 8 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2015『上原Ⅰ遺跡・上原Ⅲ遺跡・林宮原遺跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第604集
- 9 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2016『林中原Ⅱ遺跡(1)』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第617集
- 10 長野原町教育委員会 2001『暮坪遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第8集
- 11 長野原町教育委員会 1992『長畝Ⅱ遺跡 坪井遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第3集
- 12 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2014『長野原城 林中原Ⅰ遺跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第586集
- 13 長野原町教育委員会 2015『林地区遺跡群』長野原町埋蔵文化財調査報告第30集
- 14 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006『立馬Ⅱ遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第375集
- 15 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005『横壁中村遺跡(2)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第355集
- 同 2006『横壁中村遺跡(3)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第368集
- 同 2006『横壁中村遺跡(4)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第381集
- 同 2007『横壁中村遺跡(5)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第406集
- 同 2008『横壁中村遺跡(6)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第436集
- 同 2007『横壁中村遺跡(7)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第439集
- 同 2009『横壁中村遺跡(8)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第462集
- 同 2009『横壁中村遺跡(9)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第466集
- 同 2010『横壁中村遺跡(11)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第492集
- 同 2012『横壁中村遺跡(12)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第526集
- 同 2013『横壁中村遺跡(13)』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第559集
- 同 2014『横壁中村遺跡(14)』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第587集
- 16 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『山根Ⅲ遺跡(2) 上原Ⅳ遺跡 幸神遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第429集
- 17 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『上ノ平Ⅰ遺跡(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第440集
- 18 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『長野原一本松遺跡(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第278集
- 同 2007『長野原一本松遺跡(2)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第408集
- 同 2008『長野原一本松遺跡(3)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第433集
- 同 2008『長野原一本松遺跡(4)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第441集
- 同 2009『長野原一本松遺跡(5)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第461集
- 同 2013『長野原一本松遺跡(6)』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第554集
- 同 2014『長野原一本松遺跡(7)』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第578集
- 19 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2016『尾坂遺跡(2)』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第618集
- 20 長野原町教育委員会 2002『第2章2.坪井遺跡Ⅳ』『町内遺跡Ⅰ』長野原町埋蔵文化財調査報告第9集
- 同 2003『第2章1.坪井遺跡Ⅴ』『町内遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第10集
- 21 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009『上郷岡原遺跡(3)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第471集
- 22 長野原町教育委員会 2010『林中原Ⅰ遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第20集
- 23 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005『川原湯勝沼遺跡(2)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第356集
- 24 長野原町教育委員会 2013『坪井遺跡Ⅷ』『町内遺跡ⅡⅡ』長野原町埋蔵文化財調査報告第25集
- 25 長野原町教育委員会 2011『林中原Ⅱ遺跡ⅡⅡ』『町内遺跡ⅡⅡ』長野原町埋蔵文化財調査報告第21集
- 26 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『第6章 山根Ⅲ遺跡』『八ッ場ダム発掘調査集成(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第303集
- 27 長野原町教育委員会 1996『向原遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第5集
- 28 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『第2章 石畑遺跡』『八ッ場ダム発掘調査集成(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第303集
- 29 長野原町教育委員会 2004『林宮原遺跡Ⅱ』『町内遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第13集
- 30 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007『下原遺跡Ⅱ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第389集
- 31 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『第5章 西久保Ⅰ遺跡』『八ッ場ダム発掘調査集成(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第303集
- 32 長野原町教育委員会 2004『h.長畝Ⅰ遺跡Ⅱ』『町内遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第13集
- 33 長野原町教育委員会 2006『3.東原Ⅰ遺跡』『町内遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第13集
- 34 長野原町教育委員会 2011『2.田通Ⅱ遺跡』『町内遺跡ⅡⅡ』長野原町埋蔵文化財調査報告第13集
- 35 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『第9章 榎木Ⅲ遺跡』『八ッ場ダム発掘調査集成(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第303集
- 36 山岸Ⅱ遺跡は、平成24年度に長野原町教育委員会が調査し、現在、整理作業が進められている。
- 37 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『第4章 横壁勝沼遺跡』『八ッ場ダム発掘調査集成(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第303集
- 38 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『第8章 花畑遺跡』『八ッ場ダム発掘調査集成(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第303集
- 39 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010『横壁中村遺跡(10)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第488集
- 40 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2012『榎木Ⅰ・上原Ⅳ遺跡(2)・西久保Ⅰ遺跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第549集
- 41 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『榎木Ⅱ遺跡(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第432集
- 42 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007『三平Ⅰ・Ⅱ遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第401集
- 43 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007『上郷岡原遺跡(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第410集
- 同 2008『上郷岡原遺跡(2)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第438集
- 44 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010『東原Ⅰ遺跡・東原Ⅱ遺跡・東原Ⅲ遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第502集

第2章 周辺の環境

- 45 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006『上郷B遺跡・廣石A遺跡・二反沢遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第379集
- 46 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2012『尾坂遺跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第546集
- 47 長野原町教育委員会 1990『長野原町の遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第1集
- 48 長野原町教育委員会 2005『小林家屋敷跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第12集
- 49 長野原町教育委員会 2013「第3章a.小滝Ⅱ遺跡」『町内遺跡XⅡ』長野原町埋蔵文化財調査報告第25集
- 50 長野原町教育委員会 2009「第3章e.久々戸遺跡」『町内遺跡Ⅷ』長野原町埋蔵文化財調査報告第18集
- 51 長野原町教育委員会 2005「第2章1.嶋木Ⅰ遺跡」『町内遺跡Ⅴ』長野原町埋蔵文化財調査報告第15集
- 52 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002「第10章 尾坂遺跡」『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第303集
- 53 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第319集
- 54 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004『久々戸遺跡(2)・中棚Ⅱ遺跡(2)・西ノ上遺跡・上郷A遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第349集
- 55 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002「第7章 下田遺跡」『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第303集
- 56 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2011『東宮遺跡(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第514集
同 2012『東宮遺跡(2)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第536集
- 57 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002「第3章 川原湯勝沼遺跡」『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第303集
- 58 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『上郷西遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第448集
- 59 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2015『町遺跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第593集
- 60 長野原町教育委員会、高崎鉄道管理局 1996『石畑遺跡 略報』

第3節 林地区の遺跡

本節では、林地区の変遷について概要を記す。周辺遺跡を含め、詳細な歴史的環境については章末に掲示した文献を参照されたい。なお、本章1節2節ともに上記文献に依拠している。

林地区の縄文時代草創期・早期の遺跡は、地区の中央に位置する最上位段丘面を挟む東西の尾根に存在し、最上位段丘面からは検出されていない。最上位段丘面については、その中程に立地する林中原Ⅰ遺跡、上原Ⅰ遺跡、東原Ⅲ遺跡などから縄文時代早期の遺物が検出されるのみであり、集落の出現は縄文時代前期を待つこととなる。縄文時代前期に至り、林中原Ⅰ・Ⅱ遺跡、上原Ⅰ遺跡などに集落が出現する。縄文時代中期から後期にかけては、最上位段丘面とその東西の山地斜面をあわせ、ともに活

動の拠点とされていたことがうかがえる資料が出土している。

弥生時代の住居は、縄文時代早期の集落が検出された東側尾根の立馬Ⅰ遺跡と、縄文時代前期に集落が出現した最上位段丘面の中程に立地する林中原Ⅱ遺跡から検出されている。縄文時代の各期にわたり存在感を示していた西側尾根の楡木Ⅱ遺跡からは検出されていない。林地区の活動拠点が東側優勢にシフトしたと考えられる。

古墳時代に至り、活動拠点は山地斜面を離れ、最上位段丘面の山地よりの地域に移動し、下原遺跡、林宮原遺跡、上原Ⅰ・Ⅳ遺跡で集落が検出される。また下原遺跡の例が示すように、それまでは住居の検出されていない下位段丘面から住居が検出されるようになる。

平安時代の遺構・遺物は、山地斜面ないし山地よりの段丘面縁辺にあたる緩斜面地域および吾妻川沿いの段丘面から検出され、その中間地域には存在しない傾向がうかがえる。例外は上原Ⅱ遺跡と楡木Ⅲ遺跡である。事業団が実施した上原Ⅲ遺跡の調査に際し、上原Ⅱ・Ⅲ遺跡の境界となっている沢の上原Ⅱ遺跡側に、大規模な攪乱が存在することが確認されている。この攪乱による遺構認定の難しさも、上原Ⅱ遺跡が例外となる理由の一つと推測される。また楡木Ⅲ遺跡であるが、山地斜面とされるそのやや西に開けた領域の広さが立地にむかなかったのではなかろうか。なお、平安時代から中世にかけて特異的に出現するとされる「陥穴状土坑」は、集落を伴う事例と伴わない事例とがある。陥穴の設置意図もまた異なるのではなかろうか。この時期に至り、林地区の全域が居住域となることとの関連を考慮する必要が感じられる。

平安時代の住居が検出された遺跡のうちで、楡木Ⅱ遺跡、下原遺跡、林宮原遺跡、下田遺跡からは中世に至っても住居が検出されるが、そのほかの遺跡からは住居が検出されなくなる。林城構築との関連を考慮すべきなのか、あらたに二反沢遺跡、林中原Ⅰ遺跡、東原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡などで住居が検出されている

今回の調査で、下田遺跡からは天明期の建物が2群検出されている。江戸時代後期の絵図面によれば、調査区周辺は耕作地とされ、建物は作られていない地域とされる。天明3年を契機に、土地の利用形態が変化したと推測される。

2章参考文献

山口逸弘「第2章 周辺の環境」『公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第617集、林中原Ⅱ遺跡(1)』2016

谷藤保彦、小野和之「第1章第3節 林地区の歴史的環境」『公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第604集、上原Ⅰ遺跡、上原Ⅲ遺跡、林宮原遺跡』2015

第3表 林地区の遺跡

	遺跡名	立地	縄文					弥生			古墳	奈良	平安		中世	近世	
			草	早	前	中	後	晩	前	中			後	陥穴			
32	中棚Ⅱ遺跡	下位段丘面						○						○		○	○
31	中棚Ⅰ遺跡	上位段丘面		○										◎			
27	楡木Ⅰ遺跡	山地斜面(最上位段丘面)			○	○				○	○			◎	●	○	◎
28	楡木Ⅱ遺跡	山地斜面(最上位段丘面)	○	◎	◎	◎	○	○	○		○			◎	●	◎	○
29	楡木Ⅲ遺跡	山地斜面・上位段丘面			○	○	○			○	○						
30	二反沢遺跡	山地斜面					○	○				○				◎	○
11	下原遺跡	下位段丘面			○		○	○	or	○	○	◎		◎		◎	○
38	林宮原遺跡	最上位段丘面			○	○	○					◎		◎		◎	
1	下田遺跡	中位段丘面			○	○	○			○				◎	●	◎	◎
43	林中原Ⅰ遺跡	最上位段丘面		○	◎	◎	◎				○				●	城◎	◎
42	上原Ⅳ遺跡	最上位段丘面			○	○	◎	○	○	○		◎		◎		○	○
40	上原Ⅱ遺跡	最上位段丘面(山地斜面)				◎	○								●		
41	上原Ⅲ遺跡	最上位段丘面(山地斜面)			○	○	○			○				◎	●	○	○
44	林中原Ⅱ遺跡	最上位段丘面			◎	◎	◎	○墓		◎					●		◎
39	上原Ⅰ遺跡	最上位段丘面		○	◎	◎	○		○	○		◎		◎	●	○	
48	東原Ⅲ遺跡	最上位段丘面		○	○	○	○								●	◎	◎
47	東原Ⅱ遺跡	最上位段丘面			○	○									●	◎or	◎or
46	東原Ⅰ遺跡	最上位段丘面			○	○	○	○							●	◎or	◎or
45	花畑遺跡	最上位段丘面			○	○								◎	●		
51	立馬Ⅲ遺跡	山地斜面		◎	◎	◎	○	○		○					●	○	○
50	立馬Ⅱ遺跡	山地斜面	○	○	○	◎				○				◎	●		
49	立馬Ⅰ遺跡	山地斜面	○	◎	○	○	○	◎	◎	◎	○			◎	●		○

註

立地の欄の複数併記は、資料により評価の分かれることを示す。

遺物の検出された遺跡に○印を付し、竪穴住居や掘立柱建物などの遺構の検出された遺跡に◎を付した。

東原Ⅰ・Ⅱ遺跡は遺構の時代認定が「中近世」とあるため、or付とした。

第3章 確認された遺構と遺物

第1節 遺跡の基本土層と概要

1 基本土層

本遺跡の土層層序は、調査地点によりその様相が個々に相違する。第1層から第5層までは調査区内の各所で確認されているが、第6層から第11層は調査地点により相違する。調査区内での異同については後述することとし、本項では調査地区内を通観して認められる標準的な土層について記述する(第7図)。

第1層 表土および現代の耕作土。

第2層 天明3年泥流堆積物。締りを欠き、礫などの混入物が比較的少なく、他遺跡で見られる天明堆積物に比べて、均質な印象をうける。破碎岩片等が極めて少ない。

第3層 浅間A軽石(As-A)層。天明泥流直下の1号道、畑などにおいて、厚さ1～2cm程度の堆積が確認されている。

第4層 暗褐色土。泥流下耕作土。恒常的に耕耘が行われた耕作土である。色調はくすみ、黒味が強い。締まりは弱目ではあるが粘性の強い均質土である。白色軽石を少量含み、部分的に炭化粒を含む場合もある。

第5層 鉄分凝集層。層として完全に単体分離することは難しいが、第4層の下位部分あるいは第6層の上位部分としてその存在が認められる。

第6層 暗褐色土。第4層に比べ、径3mm前後の大きさの黄褐色軽石粒が少量含まれる。

第7層 浅間粕川テフラ(As-Kk)層。2号竪穴住居、3・4号竪穴住居などにおいて、部分的に層状の堆積が認められる。

第8層 暗褐色土。色調やや明るい漸移層であり、均質ではあるが全体に径2cm大の円形のパッチワーク状の斑模様を確認できる。3～5mm大の黄褐色・白色軽石粒を均等に少量含む。

第9層 暗灰褐色土。下位の第10層と基本的に構成物は変わらないが、緑色味がやや強く、色調は全体に暗い。水性堆積したものと考えられる。

第10層 暗黄褐色土。不均質なローム漸移層である。砂質味が強く、ボサボサであり、樹痕と思われる黒色ブロックを所々に含む。ややバサバサした斑なローム状の土質に黒色炭化物を含む場合もある。

第11層 暗灰褐色土。ローム層。上位の第9層、第10層に比べ締りやや強く、粘性も認められる、やや安定したローム層である。第9層、第10層よりも軽石の含まれる割合が少ない。

第12層 黄褐色土。10～50cm大の円礫を多く含む、均質な砂層である。締りは弱い。

上記の12層のうち、調査区全域で認められるものは1・2・4・12の4層のみであり、他の層は地点により存在が認められない場合がある(第4章1)。なお、本調査区の北西端から北北西に40m程離れた地点は、平成7年に調査された本遺跡の一部であるが、第7層および第9から第11層については記載されていない(松原2002)。

なお、本遺跡の西に隣接する下原遺跡の基本土層(麻生2007、第7図)と比較すると、下原遺跡As-Kk層の上位に存在する土砂崩れ堆積層(第V層、第VII層)が本遺跡では確認されていないことが一番の相違となる。また同書において、As-A層の直下に存在する暗褐色土の層が寛保二(1741)年八月の吾妻川の洪水に由来する可能性が指摘されている。

第1層	表土、現代耕作土。
第2層	天明泥流堆積物。
第3層	As-A軽石。
第4層	暗褐色土。泥流下耕作土。
第5層	鉄分凝集層。
第6層	暗褐色土。
第7層	As-Kkテフラ。
第8層	暗褐色土。
第9層	暗灰褐色土。
第10層	暗黄褐色土。
第11層	暗灰褐色土。ローム層。
第12層	黄褐色土。

第7図 下田遺跡基本土層

参考文献

松原孝志2002「第7章第2節 基本層序」『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第303集、ハツ場ダム発掘調査集(1)』
麻生敏隆2007「第2章第4節 基本土層」『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第389集、下田遺跡II』

2 遺跡の概要

(1) 1面の概要(付図、第11図)

1面は天明3(1783)年の「浅間焼け」がもたらした泥流堆積物(基本土層第2層)直下の面である。建物群2ユニット、土坑1基、畑15単位、道1本が確認された。

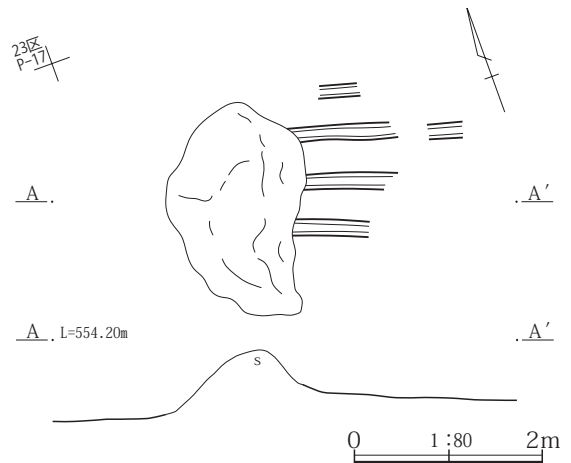
1面の各所で浅間山から噴出した軽石(As-A)が確認されている。調査区の中央部から東部にかけて顕著であるが、旧地表面に露出した石を起点に、わずかに畑の痕跡が残されており、そうした場所でAs-Aが確認されている(第8図)。

1面の各所に天明泥流の影響が残されているが、その最たるものは泥流に運ばれた巨石であろう。本調査区内にも、天明3年の泥流に伴う「浅間石」と呼ばれる大石が存在する(第14図)。大きなものは差し渡し7m、厚さ3mにおよぶ。調査区内で最も大きなこの浅間石の下流(東)側から、北に隣接する畑の畝の走向に沿って並ぶ、径2cmから径5cm程度の、境木とも考えられるピット群(1号ピット群)が確認されている。そのなかには、泥流に押し倒されたままの痕跡をとどめるものもある(第10図)。また、調査区内のいたるところに存在する帯状の攪乱は、泥流により畑がえぐられた跡と考えられる。その走向は調査区内で一定ではないが、概ね西北西から西微北を軸として泥流が西から東に流れたことをうかがわせる。

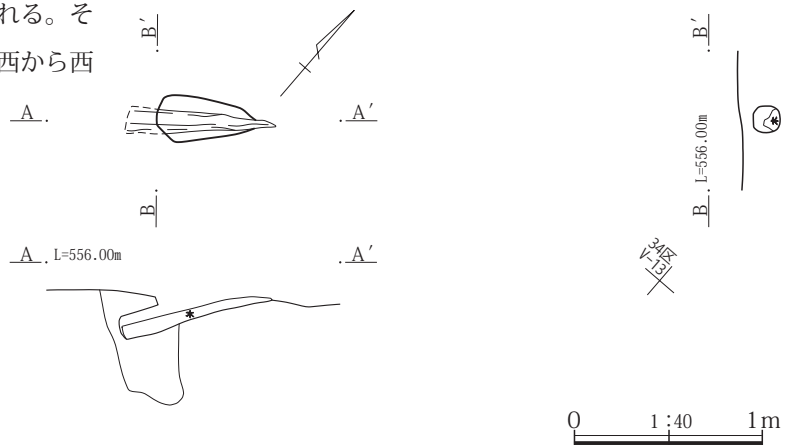
本調査区は東流する吾妻川の北岸が舌状に突き出した台地の縁辺に位置する。そのため、調査区の南側は泥流による削平が著しく、所々に畑の痕跡が確認されるにとどまる。これに反し、舌状に突き出した台地の根方にも近く、調査区内では標高が高い場所である北西部は削平の影響も少なく、道と思われる遺構と畑のほかに2ユニットの建物群が確認できた。調査区北西端の建物群(以下、北西端建物群)に含まれる掘立柱建物の柱穴には、泥流に押し流された際の痕跡が残されている(第9

図)。なお、6本の柱のうち5本は東北方向に押し倒されているが、北西隅の1本のみは他と傾斜方向が異なっており、北西隅の柱を軸に建物全体が逆時計回りに回り込むように押し倒され、持ち上げられ、流されたことをうかがわせる痕跡となっている(第25・27図)。

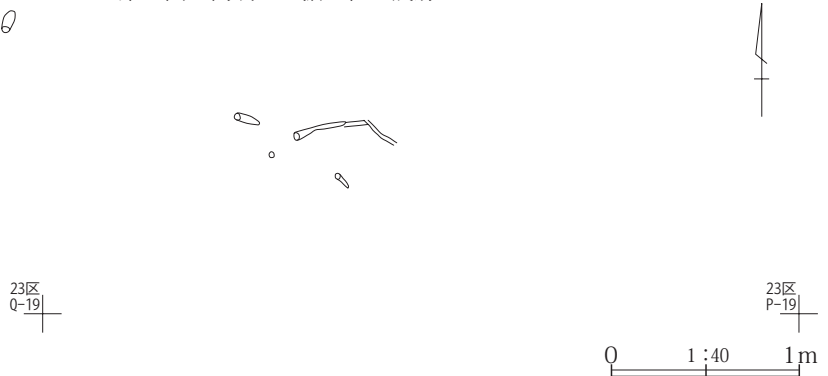
1面で確認された建物群は、調査区の西辺、吾妻川の溪谷に対してその北岸が舌状に突き出した台地の崖近くに存在している。台地は建物群のある西辺側が高く、南西方向に向けて緩やかに傾斜している。地形に基づいて居住域と畑の区分けが行われたと考えられる。



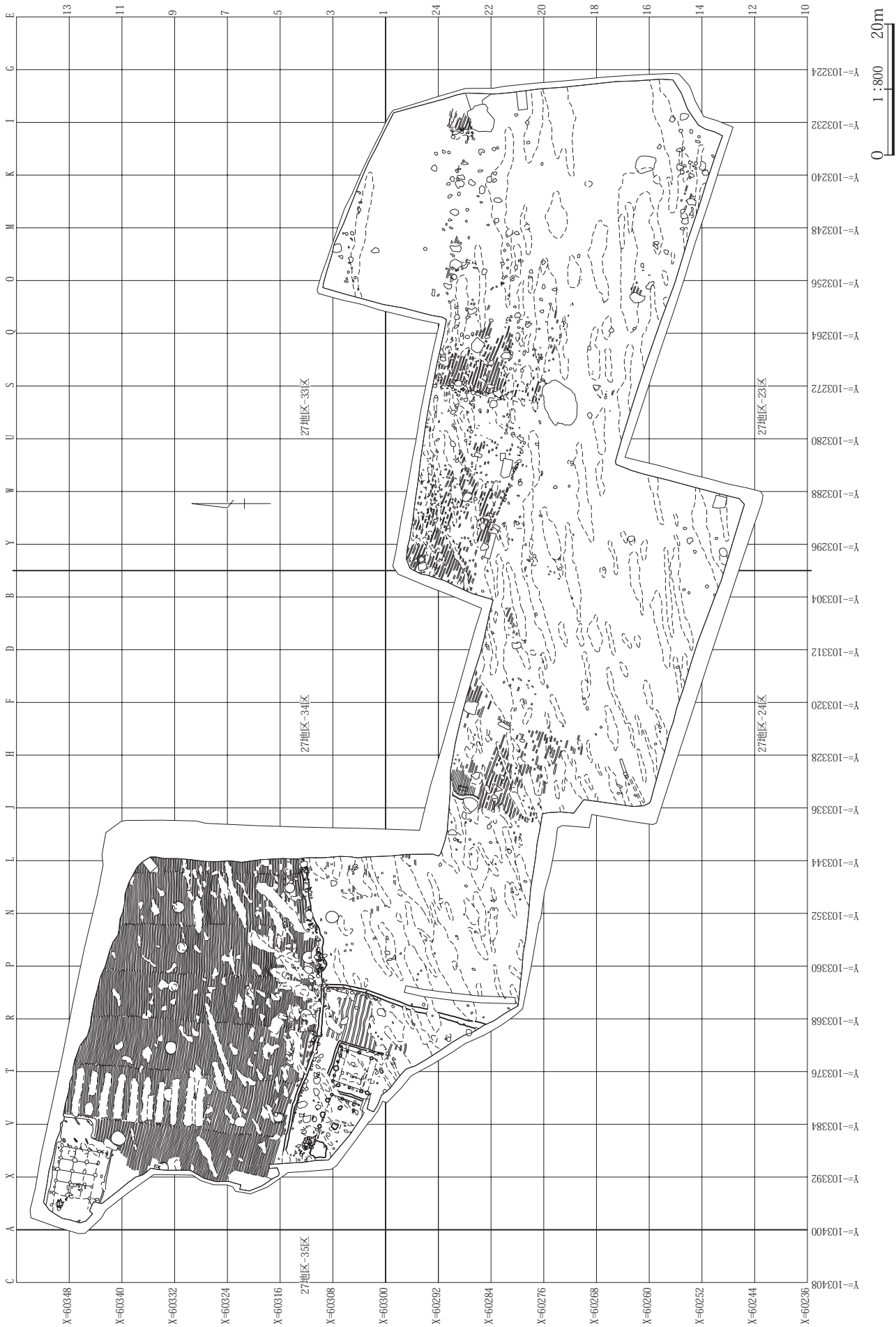
第8図 As-A堆積状態(5号畑)



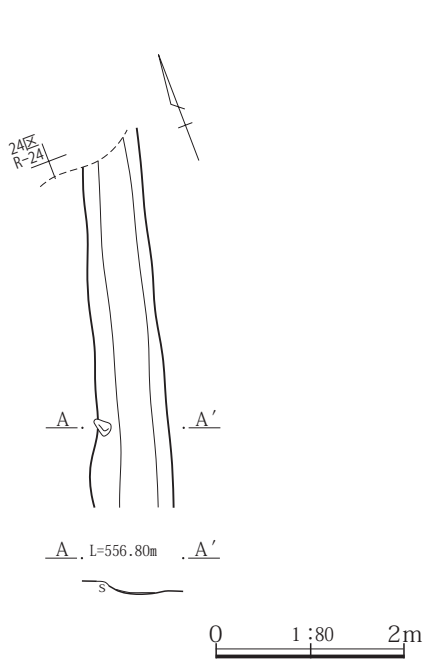
第9図 倒壊した掘立柱の痕跡



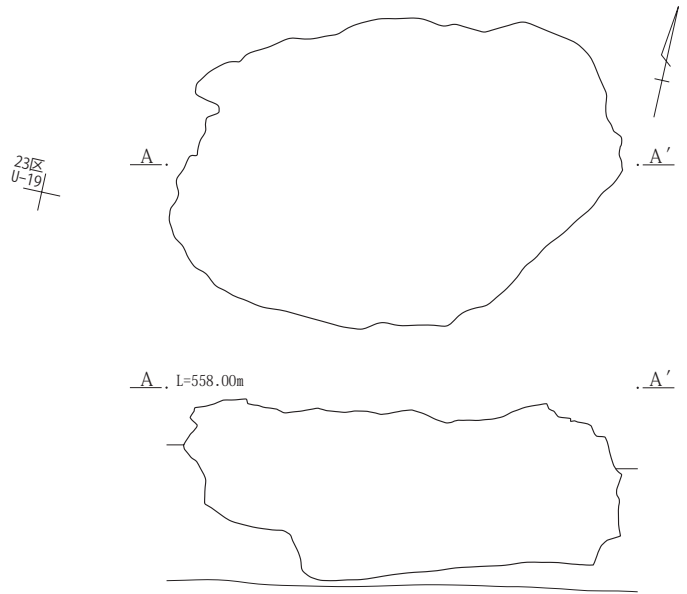
第10図 大石の陰に残されたピットの痕跡



第11図 下田遺跡1 面全体図



第12図 As-A堆積状況(1号道)

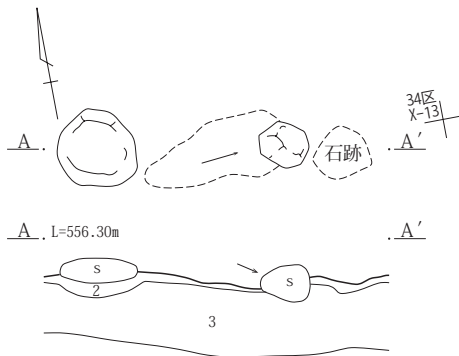


23区
U-19

A . . . A'

A . L=558.00m . . . A'

A . L=557.20m . . . A'

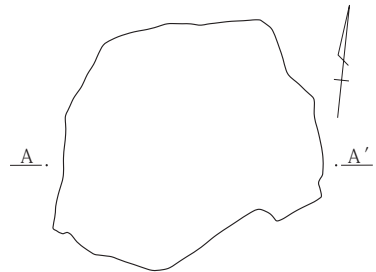


5号礎石建物

- 2 黒褐色土 1層に比べ均質。縮り弱く、一部にロームブロックを含み、土層乱れる。
- 3 黒褐色土 均質で縮り弱く、均質。1cm大の白色および黄色の軽石粒をわずかに含む。層中に鉄分凝集層を挿む。

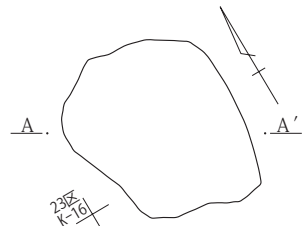
0 1:60 1m

第13図 泥流に運ばれた礫

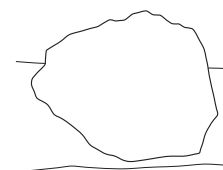


A . . . A'

A . L=557.20m . . . A'



A . L=557.00m . . . A'



0 1:120 2.5m

第14図 浅間石

第3章 確認された遺構と遺物

ふたつの建物群のうちの南側の一群、調査区西辺に位置する建物群(以下、西辺建物群)は、掘立柱建物2棟とこれを取り囲む道、および道と建物に挟まれた畑などで構成され、一つのユニットを構成している。なお、2棟のうち東側の建物ではその三方に雨落ち跡と推測される浅い溝が確認されており、As-A軽石の堆積が見られた。また、西側の建物内には深さ5cmから10cmと底面が傾斜した2.5m四方程度の浅い、馬の寝床様の窪地が存在している。

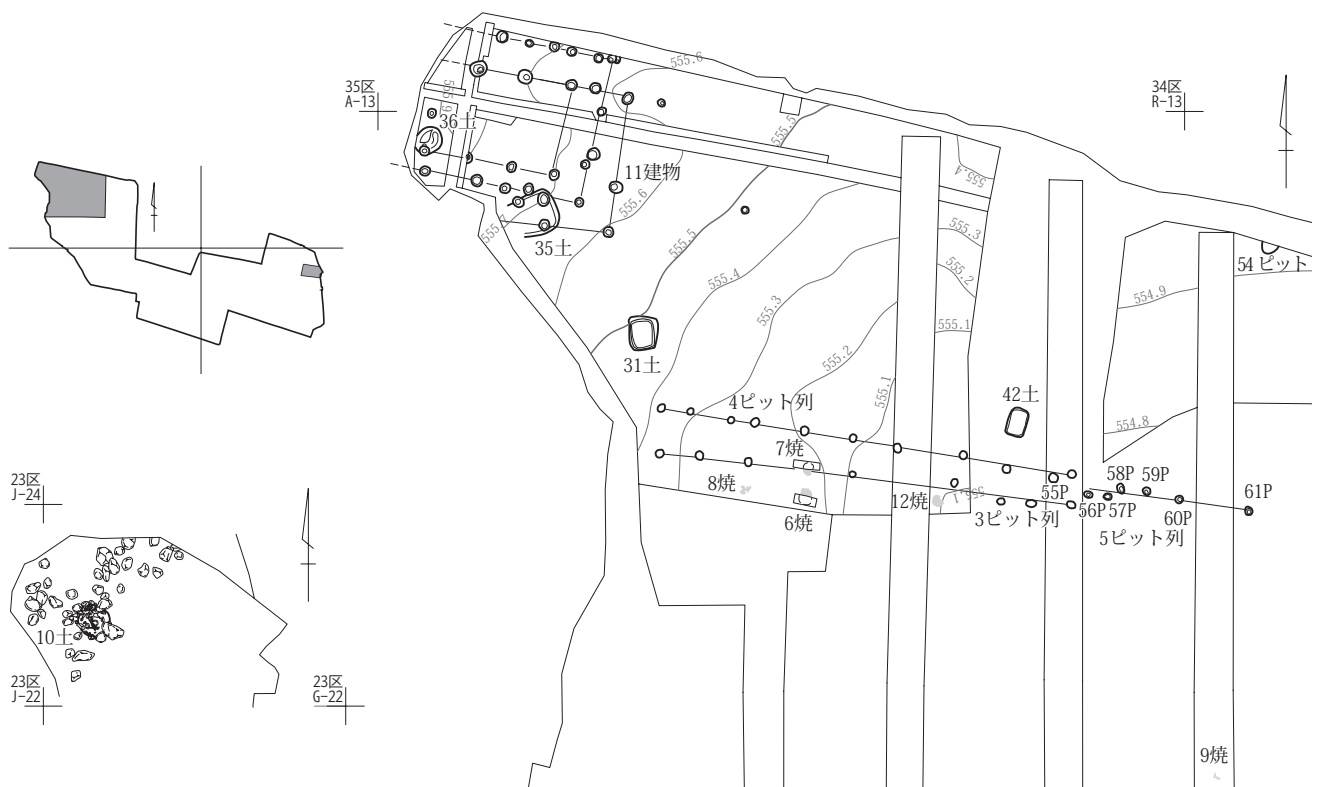
この建物群を鉤の手に取り囲む道の北辺部は、北に隣接する畑との境界ともなっている。この道の面にも、As-A軽石が堆積していた(第12図)。また鉤の手の角である、道の北東隅からは、北に隣接する畑沿いに東へと道が伸びていた痕跡も残されており、道自体は丁字状となっていたと考えられる。なお偶然の産物とも考えられるが、数mのズレは認められるものの、調査前の現地のはぼ同位置には同様に丁字路が存在している。

道を挟み北側に位置する畑の畝のピッチは狭く、西辺建物群脇の畑の畝のピッチは広めとなっており、栽培対象あるいは用途が異なると考えられる。丁字路の南北に延びる道の東側に位置する畑については泥流による削平

の影響が強く、生憎と畝のピッチが計測できない。道の南北で栽培用途が分かれるのか、西辺建物群脇の畑の用途のみが異なるのか判然としない。なお2棟の建物はいずれも建て替えの痕跡が認められるので、数十年にわたりこの区画が維持されたと考えられる。

ふたつの建物群のうちの北側の一群、北西端建物群では、主となる建物と考えられる礎石建物と、これに隣接する附属屋と考えられる掘立柱建物の2棟が確認されている。礎石建物北辺と調査区境界との間には、建物に沿って一段低い面があり、建物の北側に道が存在した可能性も否定できない。また礎石建物の南辺に沿って、雨落ち跡と推測される浅い溝が確認されている。なお、附属屋の柱穴については前述した。このほか礎石建物の床面には、泥流に運ばれた礫が建物の床面をえぐり、めりこんだ跡が残されていた(第13図)。

調査区の北西部を除き、泥流の削平の影響が強いため畑の残り具合は良好とはいえないが、概ね旧地表の傾斜方向に沿う形で畝が起こされている。また調査区中央部北辺よりの地点から、円形の平坦面が見つかっており、調査区北西部以外の畑にも平坦面が点在していたものと推測される。なお北西部の道の北辺を境として、その北



第15図 2面全体図(1)



第16図 2面全体図(2)

第3章 確認された遺構と遺物

側の畝のピッチは狭く、南側の畝のピッチはやや広い傾向が認められる。また、西辺建物群脇の畑のピッチは他よりもかなり広めとなっている。

なお、調査区北西部の畑区画の西端から、規則的に並ぶ溝(攪乱)が確認された(第17図)。東西1.3m南北7m前後の溝が1mに満たない間隔で、調査区北辺から南北に10か所連なり、その深さは旧地表下10cm程度まで及び、復旧溝の様相をていしている。しかし、泥流堆積物の厚さは1.5～2mにおよぶので、溝一つにつき14m²以上の掘削がなされたと考えられる。いわゆる耕地復旧のための掘削とは異なり、なんらかの探索意図での掘削の可能性もあろうか。

(2) 2面の概要(第15図、第16図)

2面は基本土層の第7層(As-Kk)を分層基準とする、中近世に帰属すると考えられる遺構群である。遺構分布には偏りがあり、調査区北西端、調査区西辺から調査区中央部にかけておよび調査区東端の3地点から、建物群1ユニット、掘立柱建物3棟、土坑26基、焼土遺構9か所、ピット列5条が確認された。2面の遺構のうち、近世の遺構は、調査区北西部に土坑2基、調査区西辺部に土坑9基、調査区東端部に土坑1基である。また中世の遺構は、調査区中央部に掘立柱建物1基、土坑2基である。中世、近世のいずれに属するか分別しえない遺構が多く、中世と近世を併せてひとくくりとした。

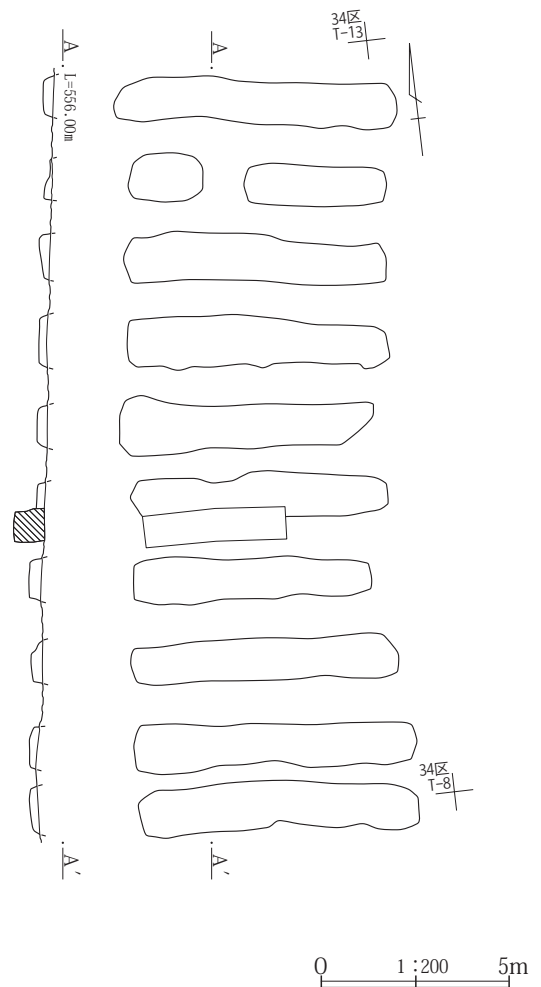
調査区北西部からは掘立柱建物1棟とピット列および土坑が確認されている。掘立柱建物は1面の北西端建物群に先行するものであるが、1面の建物と比べると4mほど西寄りに位置している。調査区の建物とピット列の関係は帰属時代を特定できず判然としない。なお、土坑の一つは1体の人骨を伴っており、土壙墓と考えられる。また一つは1体の馬骨を伴っており、馬を葬ったものと考えられる。

調査区西辺からは主たる建物と考えられる掘立柱建物1棟と、これに近接する附属屋と考えられる掘立柱建物2棟からなる建物群(以下、2面西辺建物群)および土坑が確認されている。なお、附属屋内の土坑には桶が設置されていた痕跡が認められ、後架と考えられる。1棟の附属屋には3基の土坑が残されているが、すべてが同時

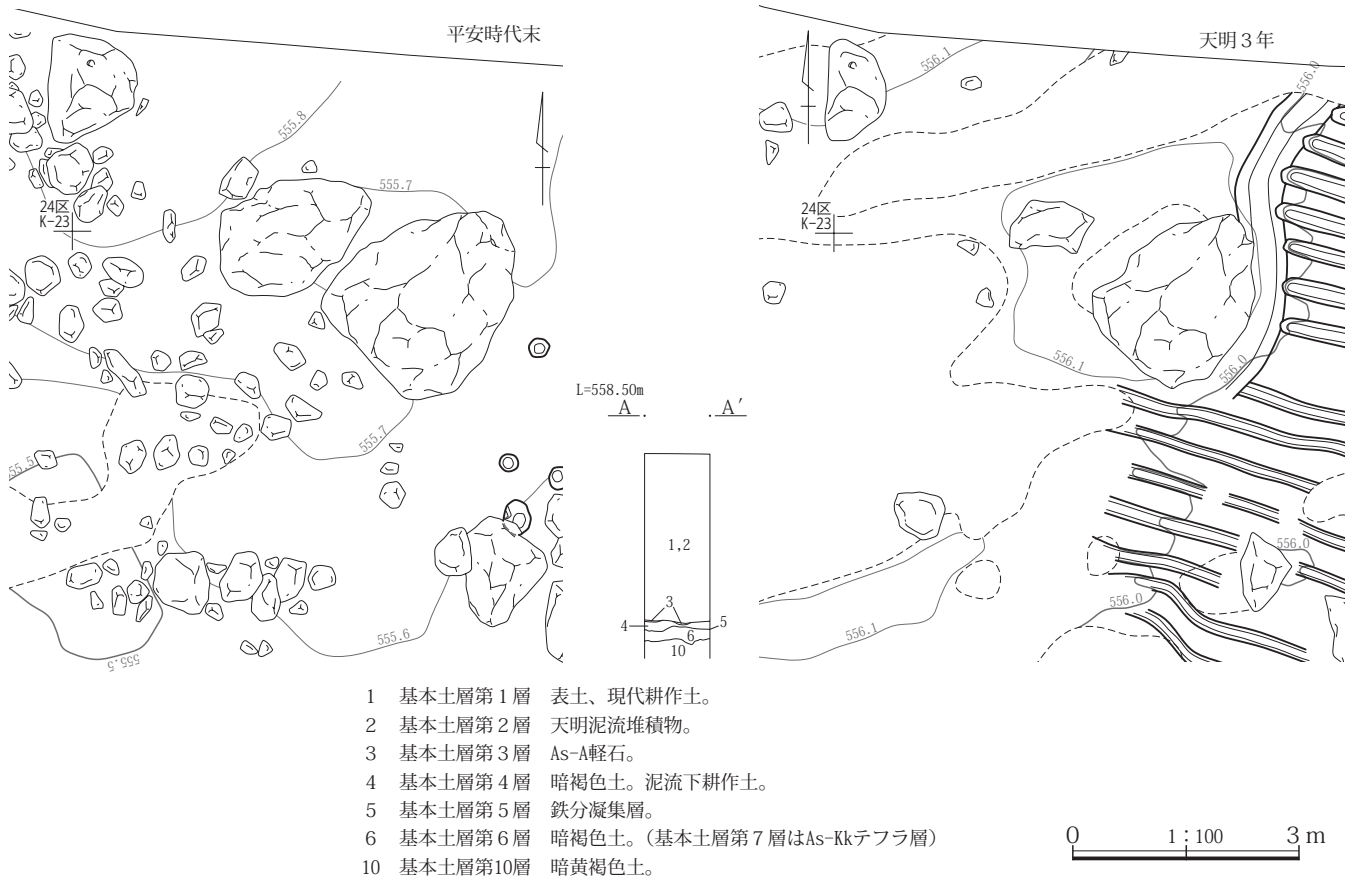
存在したものではない。なお、2面西辺建物群は1面の西辺建物群に先行するものであり、1面の建物群のうち東側の建物とほぼ重複する。

調査区中央部からは掘立柱建物2棟とピット列2条および土坑が確認されているが、帰属時期を特定する根拠にかけるため、相互の関係は判然としない。なおこの付近は、差し渡し2m近い大石が密集する場所であり、平安時代末期頃の地表は、大きな石が密集した、乾いた砂質味の強いローム質の土壌であったと考えられる。その上に必要量の土砂が堆積するに至り、ようやく耕作地として利用しうるに至ったと考えられる(第18図)。調査区東端で確認された土坑は、人骨を伴っており、土壙墓と考えられる。

焼土遺構の多さが目立つ2面ではあるが、他遺構との関係が特定できない。先行する遺構との関係や、後に続く遺構との関係については判然としないものがある。



第17図 復旧溝



第18図 平安時代末と天明3年の地表

(3) 3面の概要(第19図、第20図)

基本土層の第7層(As-Kk)の下位に位置する、古代およびそれ以前の時期に属する遺構を3面とした。竪穴住居4棟、掘立柱建物1棟、竪穴状遺構1基、土坑15基、焼土遺構1か所が確認された。古墳時代以前の土坑2基を除き、他は平安時代の遺構である。遺構は調査区北西部、調査区西辺から中央部にかけておよび調査区東部の3か所に点在している。

調査区北西部からは竪穴住居3棟と陥穴と思われる土坑などが確認されている。調査を行っている現在においてすら、調査事務所周辺に野生動物が出没する環境である。竪穴住居の東方に点在する陥穴群は、イノシシなど野生動物の居住区への侵入防御を兼ねたものと推測される。

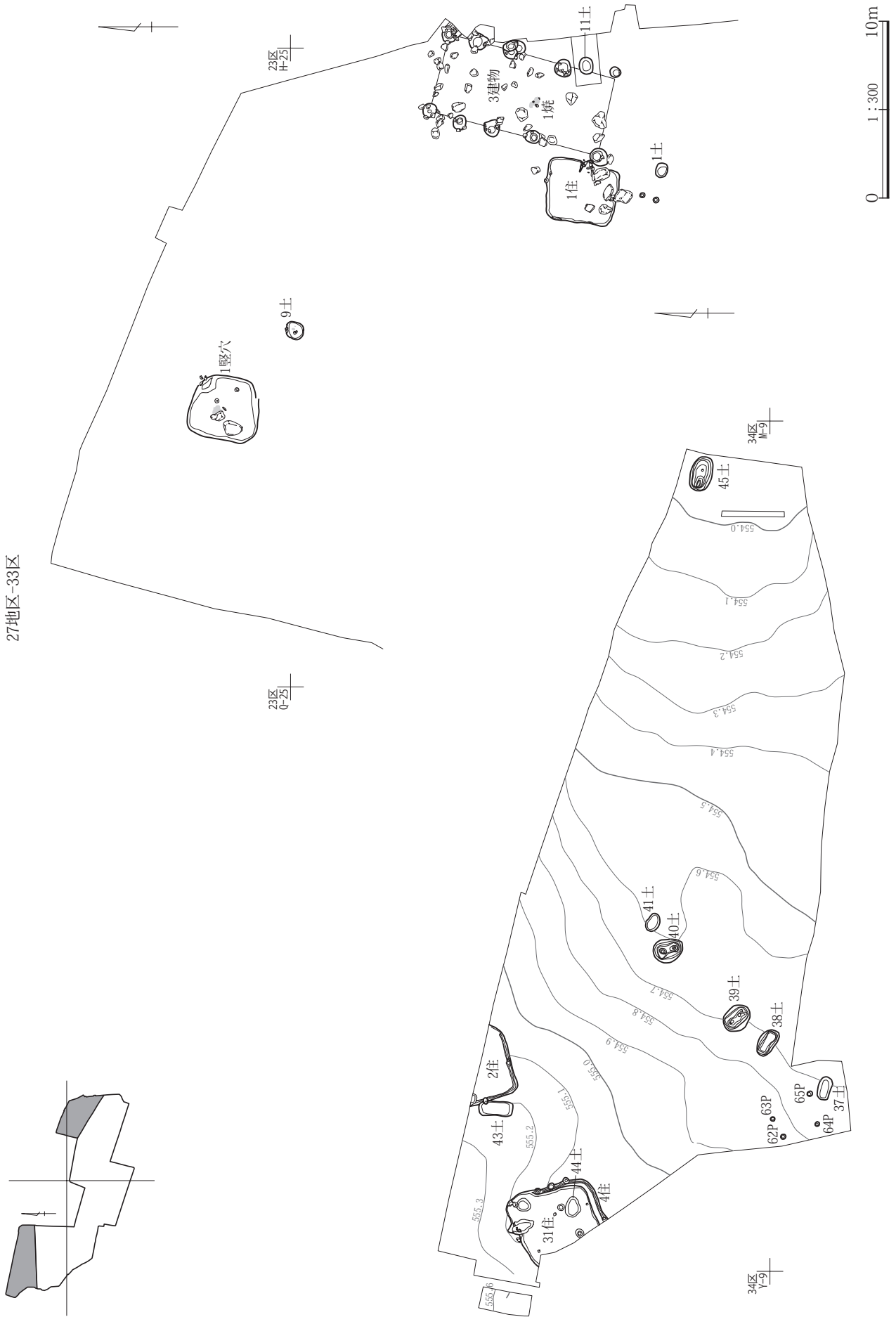
調査区西部からは焼土遺構と土坑、調査区中央部からは土坑が確認されている。なお、調査区西部の土坑は古墳時代以前のものであり、縄文時代中期に帰属すると推測される。

調査区東部からは竪穴住居1棟、掘立柱建物1棟、竪穴状遺構1基および土坑が確認されている。なお、1基

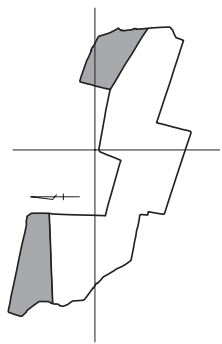
の土坑は古墳時代以前のものであり、縄文時代に帰属すると推測される。また、調査区東部の竪穴住居の床面に残されていた平石は、縄文時代の石皿の転用品と考えられる。

弥生時代の遺構は確認されていない。弥生時代中期の土器片が確認されたにとどまる。調査区中央部から2点の破片が出土しているが、残りの遺物はすべて調査区東部から出土している。なかでも23区K-25グリッド周辺と23区N-19グリッド周辺に集中している(第123図)。23区K-25グリッドからは72片、23区N-19グリッドからは34片の土器片が出土しており、この2グリッドのみで弥生土器片出土総数の2/3を占める。なお、23区K-25グリッド至近の遺構である1号竪穴状遺構と9号土坑からは弥生土器は出土していない。また、23区N-19グリッド周辺から遺構は確認されていない。

縄文時代の遺構として確認されたものは調査区西部の28号土坑にとどまる。出土した縄文土器片の多くは遺構を伴っていない。あらかたの土器片は調査区の南側から出土したものであり、調査区北西部からの出土は見られなかった(第124図、第125図)。出土分布の傾向は概ね弥



第19図 3面全体図(1)



生土器の分布に近いが、より分散傾向が強い。また弥生土器と異なり、中央部から西部にかけての領域も分布範囲となっている。出土分布の中心は33区K-1グリッド、23区N-18グリッド、24区P-24グリッド(28号土坑)の3か所となっている。なお、グリッド出土の土器片に限れば調査区東部のみで出土数の2/3を占めるが、出土位置を限定できなかった土器片をあわせれば、東半優勢なもの、調査区の東半と西半(含む中央部)との間に著しい差異は認められない。なお、出土遺物の8割は縄文時代中期に属する破片であり、2割が縄文時代前期に属する破片とされる。縄文時代後期に属する土器片は2片のみである。なお、縄文時代中期遺物の3/4(出土縄文時代土器片の過半)は縄文時代中期後半の土器片である。

本調査区で見つかった剥片石器の多くは、おおむね調査区東部で確認されたものであり、縄文土器や弥生土器が集中する23区K-25グリッド周辺から出土している。なお、縄文土器や弥生土器の出土分布と異なり、石器は調査区北西端周辺からも出土している。



第20図 3面全体図(2)

第2節 遺構と遺物

1 1面(天明3年)

1面は天明3年の浅間山噴火に伴う泥流直下の面であり、天明期の景観を伝える面である。建物群2ユニット、土坑1基、畑15単位、道1本が確認された。

(1)建物群

a 北西端建物群(第21図、PL. 5)

北西端建物群は調査区の北西端、34区U～Y-11～13グリッドに位置する。

北西端建物群からは、主となる建物と考えられる礎石建物1棟(5号礎石建物)と、その東に隣接する附属屋と考えられる掘立柱建物1棟(6号掘立柱建物)が確認されている。建物群の北辺沿いには一段低くなった、道とも考えられる面が残されている。建物群の西には畑地が広がる。建物群の南側にも畑地が展開していたとすれば、建物群の二辺が畑地に隣接することになる。調査区内の西端の単位畑(10号畑)を境として、その西には作業用の空間が存在していたと考えたい。

礎石建物の南辺側には雨落ち跡と推測される浅い溝が残る。礎石建物の西半は調査区境界にかかるため未調査ではあるが、建物の西半が調査区外に続いているものと推測される。また、礎石建物の東に隣接する掘立柱建物の柱穴は天明泥流に押し流された痕跡をとどめている。なお用途は特定できないが、掘立柱建物の南、畑地との境に沿うように、径数cm程度の小ピットが複数確認されている(2号ピット群)。

a. 1 5号礎石建物(第22～24図、PL. 5～7・57)

位置 34区V～Y-11～13グリッド。調査区北西端に位置する。

形状 礎石17個、礎石があったと推測される石跡6か所が残されており、4間×5間の東西棟を確認。

規模 桁行(9.14)m、梁間6.91m。

桁行方向 N-79°-W。

本体構造 梁行方向4間のうち、南側1間は他より間隔が狭く、カマドが西端の礎石に近接しているため、確認範囲は3間×6間の本体に1間の張り出しをつけた4間

×6間と推測される。なお、北側の礎石1および石跡は本体構造には含まれないものとした。床面は地表の凹凸を均すように、ロームブロックを含む締まりの弱い黒褐色土により整地されている。さらに、建物西半は、炭を不均質に含む、締まり強く粘性の強い黒褐色土により覆われている。

付属施設 カマド1基、炉2基、焼土遺構1基。付属施設については後述する。なお焼土遺構1基は整地される前の床面より低い位置で確認されており、5号建物に先行する可能性が高いが、これに関連すると推測される遺構は確認されていない。

重複 なし。

遺物 床面より瀬戸陶器すり鉢片(4)、瀬戸・美濃陶器小碗(1)、石製品(6)が、掘り方より瀬戸・美濃陶器天目碗(2)が出土している。このほか、掘り方に須恵器片2片(9g)、施釉陶器片1片(13g)が混入していた。

所見 建物西半が調査区外にかかるため未確認であるが、4間×8間の東西棟と推測される。建物西半はカマド1基を含む土間構造が想定される。

備考 調査時の名称は5号建物。

a. 1. 1 1号カマド(第23・24図、PL. 6・57)

位置 34区X～Y-13グリッド。建物中央部北辺寄りの床面に位置する。

形状等 石組み、方形。焼土灰、締りの不良な橙色焼土層を互層に含む焼土が確認されている。カマド南辺に位置する断面方形の礫は、煤の付着が北面側のみであり、カマド基部を構成する石材と考えられる。

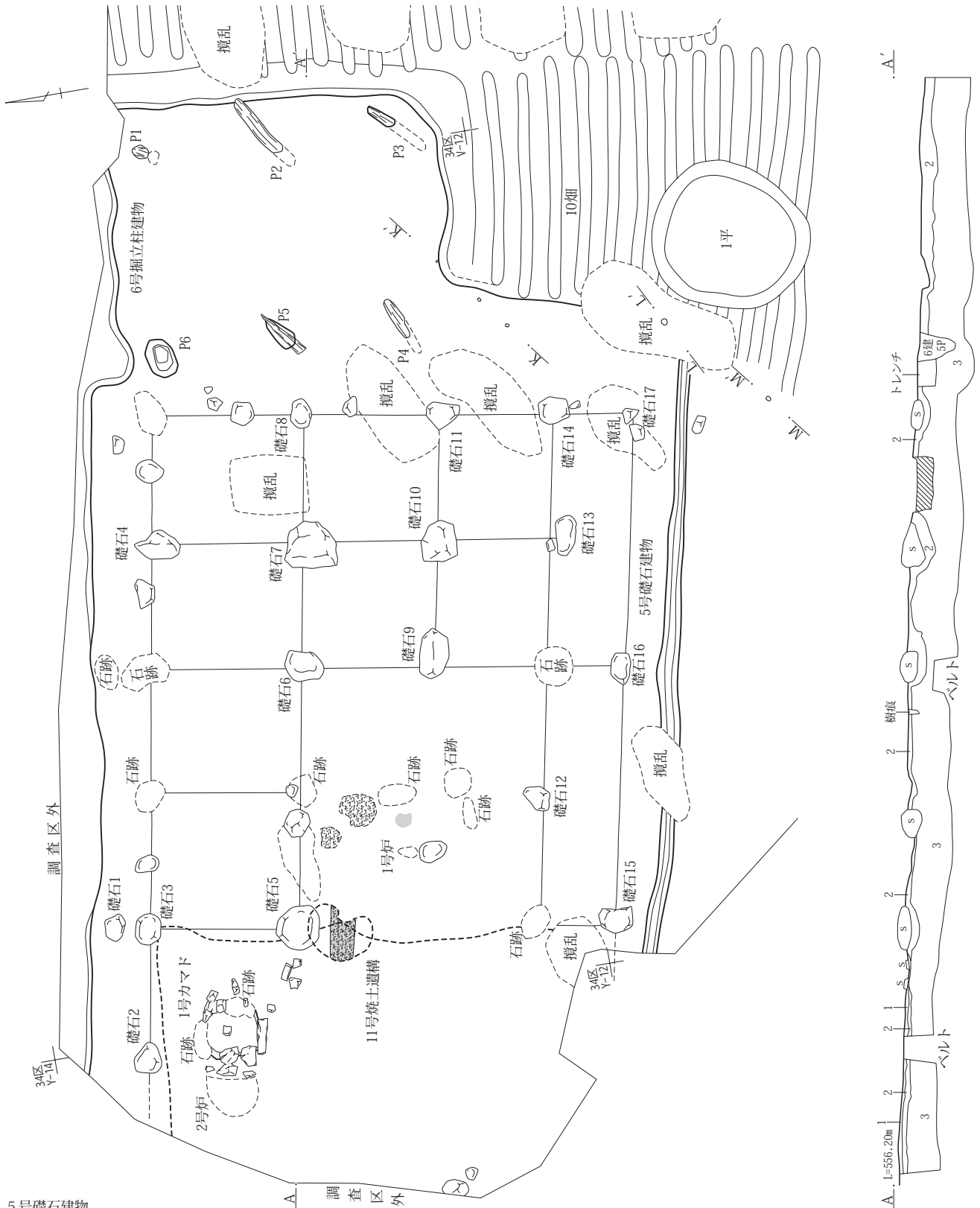
規模 97cm×105cm。

重複 5号礎石建物2号炉。

遺物 底部より瀬戸陶器すり鉢片(4)、掘り方より瀬戸陶器すり鉢片(3)が出土している。

所見 2号炉より新しい。焚口は西側に設けられていたと推測される。

備考 調査時の名称は、5号建物1号囲炉裏。



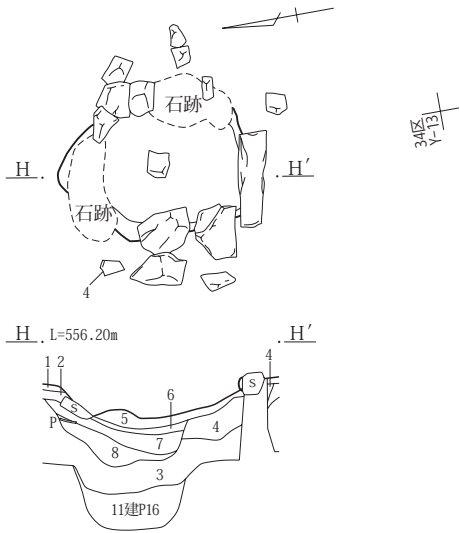
5号礎石建物

- 1 黒褐色土 締り、粘性強。全体に色調暗く、炭を不均質に含む。
- 2 黒褐色土 1層に比べ均質。締り弱く、一部にロームブロックを含み、土層は乱れる。
- 2' 暗褐色土 一部にロームブロックを含み、土層乱れる。締りやや弱く風化した岩片を多く含む。
- 3 黒褐色土 均質で締り弱い。1cm大の白色および黄色の軽石粒をわずかに含む。層中に鉄分凝集層を挿む。(5号建物地山)
- 4 黒褐色土 地山と同質。
- 5 灰黄褐色土 カマド焼土灰。焼土灰、締りの不良な橙色焼土層を互層に含む。
- 6 黄褐色土 ロームブロックと黒褐色土が不均質に混じる。
- 7 黄褐色土 ロームブロックを中心とする均質土。
- 8 黒褐色土 4層に同じ。

第21図 北西端建物群

第3章 確認された遺構と遺物

1号カマド

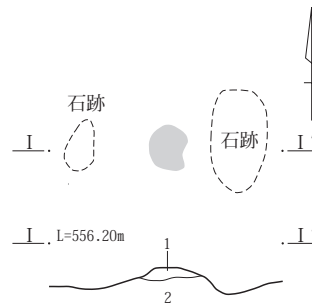
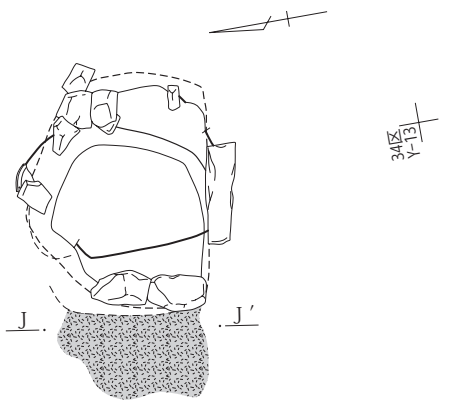


- 1 黒褐色土 締り強く粘性強い。全体に色調暗く、炭を不均質に含む。
- 2 黒褐色土 1層に比べ均質。締り弱く、一部にロームブロックを含み、土層は乱れるため搬入した土砂と考えられる。
- 2' 暗褐色土 一部にロームブロックを含み、土層は乱れる盛土。締りやや弱く風化した岩片を多く含む。
- 3 黒褐色土 均質で締り弱い。1cm大の白色および黄色の軽石粒をわずかに含む。層中に鉄分凝集層を挿む。(5建地山)
- 4 黒褐色土 地山と同質。
- 5 灰黄褐色土 カマド焼土灰。焼土灰、締りの不良な橙色焼土層を互層に含む。
- 6 黄褐色土 ロームブロックと黒褐色土が不均質に交る。
- 7 黄褐色土 ロームブロックを中心とする均質土。
- 8 黒褐色土 4層に同じ。

1号炉

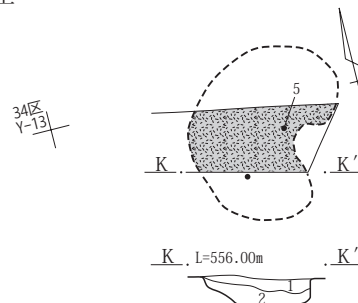
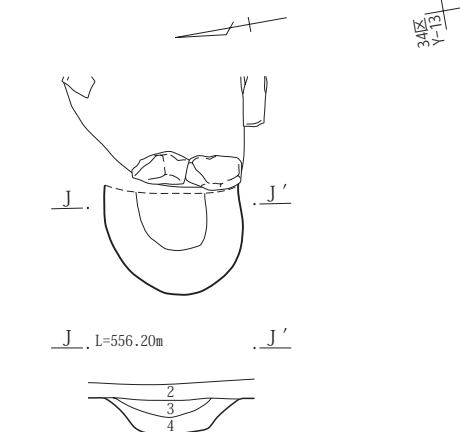
34区
X-13

2号炉



- 1 黒褐色土 締まり弱く、炭化物、焼土、灰を不規則に含む。
- 2 黒褐色土 白色および黄色軽石粒をわずかに含む。締まりは弱い。

11号焼土



- 2 5建SPA、SPBの2層相当。
- 3 暗褐色土 炭化物、焼土、灰を不規則に含み、締り弱い。
- 4 灰白色土 締り弱く均質な焼土灰。わずかな焼土層を互層で含む。

- 1 灰褐色土 不均質に焼土、炭(1~2cm大)・灰・焼土を含む。締り弱い。
- 2 暗褐色土 下位に灰白色の薄い均質層を含む。均質土。

0 1:40 1m

第24図 5号礎石建物2

a.1.2 1号炉(第24図、PL. 6)

位置 34区X-12グリッド。建物中央部やや南西よりの床面に位置する。

形状等 炭化物、焼土、灰を不規則に含む締まりの弱い焼土が確認されている。焼土を挟むように石および石跡が存在するが、焼土の周囲を石列が囲む痕跡は確認されていない。焼土の傍に炭および灰の集積が確認されている。

規模 2.62m×1.09m

重複 なし。

遺物 覆土より、混入と思われる須恵器片1片(13g)が出土している。

備考 調査時の名称は、5号建物2号囲炉裏。

a.1.3 2号炉(第24図、PL. 6)

位置 34区Y-13グリッド。建物中央部北辺寄りに位置する。

形状等 長軸を東西にとる長円形と考えられるが、東半は1号カマド構築時に破壊され確認できない。炭化物、焼土、灰を不規則に含む締まりの弱い暗褐色土層と、わずかな焼土層とを互層に含む、締まりの弱い均質な焼土灰層が確認されている。

規模 (0.6)m×0.7m。

重複 5号礎石建物1号カマド。

遺物 なし。

所見 1号カマドより古い。5号礎石建物の整地された床面の下に位置する。先行する2号炉を廃棄して、やや東寄りに1号カマドを構築したと考えられる。

備考 調査時の名称は、5号建物3号囲炉裏。

a.1.4 11号焼土遺構(第23・24図、PL.7・57)

位置 34区X-12～13グリッド。建物中央部に位置する。

形状等 不均質に焼土、炭、灰を含む締まりの弱い灰褐色土が長軸を南北にとる長円形の掘り方から確認された。

規模 (0.98)m×(0.75)m。

重複 5号礎石建物礎石5。

遺物 覆土中に志戸呂陶器灯火皿(5)が含まれていた。このほか、精査時のトレンチから、地山への混入と思われる土師器片2片(47g)、須恵器片3片(46g)が出土している。

所見 5号礎石建物の整地された床面の下に位置する。礎石5より古い。焼土面は残されておらず、また遺構範囲も5号礎石建物の礎石下にまで広がるため、1号炉に先立ち使用されていた炉とすることは難しい。2号炉に伴う遺構、あるいは5号礎石建物自体に先行する別遺構とも考えられるが判定根拠にかける。

第5表 5号礎石建物出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	厚			
第23図	1	瀬戸・美濃 陶器 小碗か仏飯 器	床面 口縁部～体部 1/4	口底 -	高 (7.0)	-	夾雑物含まない。 /灰黄	腰部内湾。外面腰部以下回転篋削り。残存部内外面灰釉。貫入入る。	17世紀後葉～ 18世紀中葉。
第23図	2	瀬戸・美濃 陶器 天目碗	掘り方 口縁部片	口底 -	高 -	-	白色鈹物微量含 む。/灰白	口縁部屈曲して立ち上がる。端部は外反しない。内外面鉄釉。	古瀬戸か。
第23図 PL.57	3	瀬戸陶器 すり鉢	1号カマド掘り方 口縁部片	口底 -	高 -	-	白色鈹物微量含 む。/淡黄	口縁部に直径5mmの焼成後円孔2カ所残存。内外面錆釉。	17世紀後葉～ 18世紀前葉。
第23図 PL.57	4	瀬戸陶器 すり鉢	床面、1号カマ ド底部 底部～体部下位 1/2	口底 12.0	高 -	-	白色鈹物微量含 む。/淡黄	内面に17本一単位のすり目。底部右回転糸切無調整。内外面錆釉。	江戸時代。
第23図 PL.57	5	志戸呂陶器 灯火皿	11号焼土 口縁部1/5 底部1/2	口底 (11.0) 5.0	高 -	2.3	白色鈹物含む。/ 灰～にぶい橙	体部外面下位以下回転篋削り。内面から口縁部外面錆釉。口縁部から口縁部外面油や油煙付着。	18世紀。
第23図 PL.57	6	石製品 石製品	床面 完形	長幅 6.6 5.1	厚 1.9 29.3	-	粗粒輝石安山岩	表面と両側面はほぼ平坦であり全体的に非常に滑らかである。砥面の可能性がある。裏面から下面にかけては自然面の可能性がある。	

a. 2 6号掘立柱建物(第25・27図, PL. 7~10)

位置 34区U~V-12~13グリッド。調査区北西部に位置する。

形状等 1間×2間の南北棟。

規模 桁行3.78m、梁間2.89m。

桁行方向 N-8°-E。

重複 なし。

遺物 混入と思われる土師器片1片(5g)、須恵器片2片(12g)が採集されている。

備考 調査時の名称は6号建物。P6を除き、地表に柱材の木肌の圧痕が残されていた。またP5には、腐りかけた柱材が残されていた。土層の乱れなどから、確認された柱穴の原状を図示した。

第6表 6号掘立柱建物柱間計測表

	桁行柱間		桁行柱間		桁行
	P1	P2	P2	P3	
梁行柱間	1.92	1.86	2.85	2.89	3.78
	2.85	2.66	2.66	2.89	
	P6	P5	P5	P4	3.70
梁間	1.97	1.73	2.85	2.89	

第7表 6号掘立柱建物ピット計測表

ピット	P1	P2	P3	P4	P5	P6
位置	34区U-13	34区U-V-12	34区U-V-12	34区V-12	34区V-12	34区V-13
規模	長	0.47	0.45	0.42	0.52	0.47
	短	0.38	0.44	0.40	0.50	0.45
	深	0.15	0.65	0.59	0.26	0.56
形状	不整形	円形	円形	円形	円形	長円形
長軸方向	N-60°-E	N-60°-E	N-45°-E	N-63°-E	N-45°-E	N-53°-E
傾斜方位	N-38°-E	N-58°-E	N-45°-E	N-68°-E	N-49°-E	N-103°-W
傾斜角	25°	74°	61°	58°	74°	70°
重複						

注 倒れた柱が地上となす角度を傾斜角とした。

a. 3 2号ピット群(第26図, PL.10)

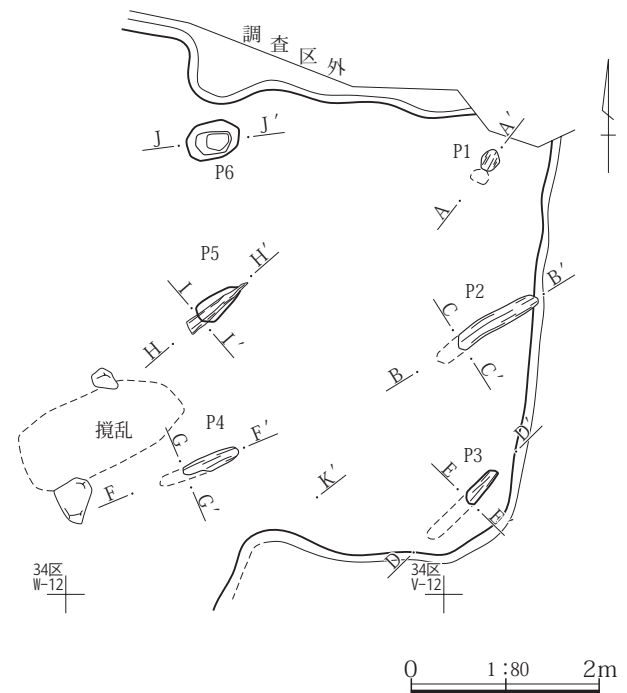
2号ピット群は6号掘立柱建物の南、5号礎石建物の南東に位置する。近接した3本からなる一群とやや離れた個別の2本から構成される。北の一群の径に比べると、南の2本はやや径が太い。用途等は不明である。

位置 34区V~W-11~12グリッド。北西端建物群と10号畑の境界付近に位置する。

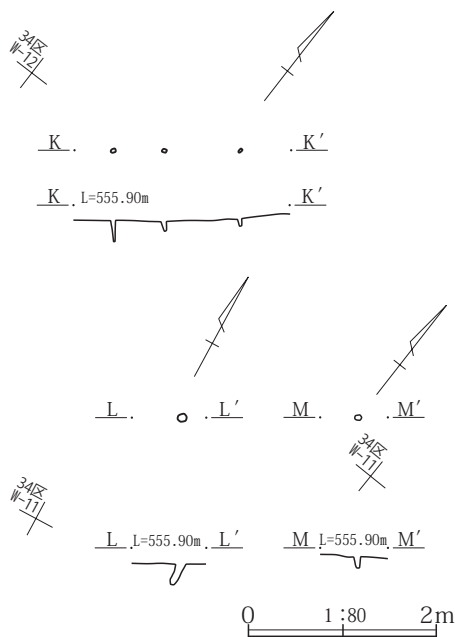
重複 なし。

遺物 なし。

備考 調査時の名称は6号建物付近杭跡1~5。



第25図 6号掘立柱建物1



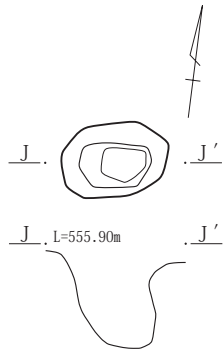
第26図 2号ピット群

第8表 2号ピット群計測表

ピット	P1	P2	P3	P4	P5
位置	34区V-12	34区U-V-12	34区V-11	34区V-11	34区W-1
規模	長	0.06	0.05	0.06	0.10
	短	0.03	0.04	0.04	0.08
	深	0.08	0.10	0.23	0.22
形状	長円形	隅丸方形	長円形	長円形	長円形
長軸方向	N-6°-E	N-7°-E	N-37°-E	N-47°-E	N-50°-E

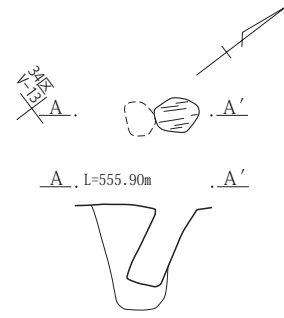
6号ピット

34区
W-13



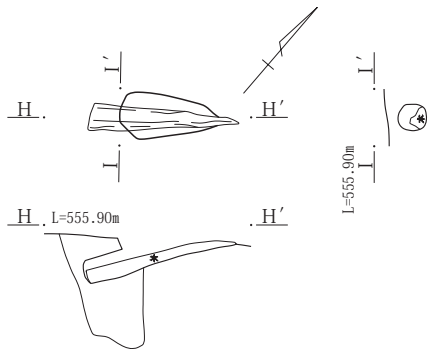
1号ピット

34区
V-13



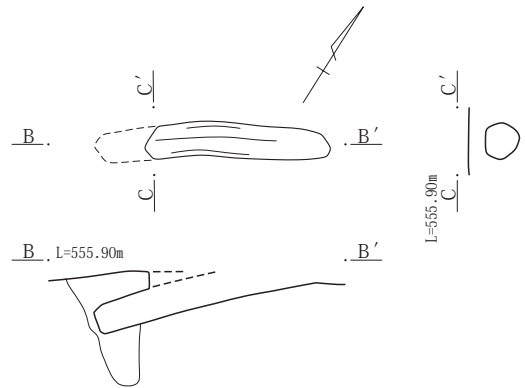
5号ピット

34区
V-13



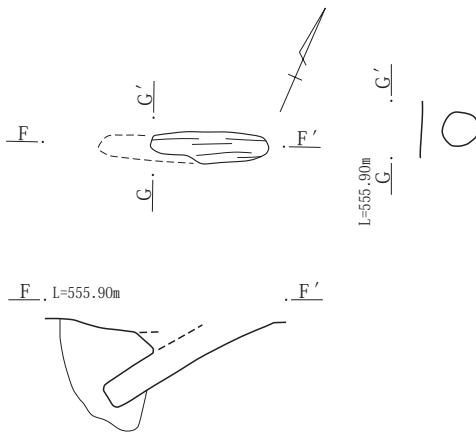
2号ピット

34区
V-13



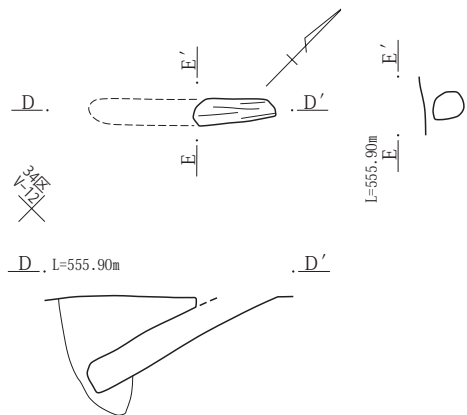
4号ピット

34区
W-12



3号ピット

34区
V-12



0 1:40 1m

第27図 6号掘立柱建物2

b 西辺建物群(第28図、PL.10)

西辺建物群は調査区の西端、34区R～W-1～4グリッドに位置する。

西辺建物群からは、掘立柱建物2棟と土坑1基および建物に隣接する畑が確認されている。また、建物群を囲むようにAs-A軽石の残る道(1号道)が確認された。道については項を分け、後述する。

畑と隣接する、東側の掘立柱建物(8号掘立柱建物)の三方からは、As-A軽石が堆積した、雨落ち跡と考えられる浅い溝が確認されているが、南辺からは確認されていない。二棟のうち、西側の建物(7号掘立柱建物)は残り具合が良好とは言えない。ピット列1条とこれに交差する2列のピット群、および焼土遺構の存在から掘立柱建物を想定した。なおこの建物の西端、調査区境界近くに、馬屋でよくみられる寝床様の窪地が存在している。この窪地も建物の付帯施設と考えられるので、確認された柱間よりも1間は多い桁行と考えられる。

東側の掘立柱建物は、粘性やや強く、締めりのある黒褐色土により床面が整地されていた。その整地層の下から、天明3年泥流直下の建物群とほぼ同位置、同範囲のピット群が確認された。また西側の建物では、炉の周辺から整地層と思われる層が確認されている。しかし建物全体としては特に整地層は認められなかったが、床面標高よりもやや低い位置に存在するピット群が確認され

た。これら天明3年泥流直下の面より標高が1段低い位置に存在するピット群を建て替え前の遺構と判断し、天明3年泥流直下の遺構を1面建物、その下に存在する遺構を2面建物とした。

なお、道に囲われた一画に存在する畑(7号畑)は、西辺建物群を構成する一要素と考えられるが、畑については別途畑の項にまとめた。

b.1 7号掘立柱建物

b.1.1 7号掘立柱建物1面(第29～31図、PL.11・12・57)

位置 34区T～W-1～4グリッド。調査区西辺に位置する。

形状 柱穴10基が確認された。2間×5間の東西棟が確認される。

規模 桁行(8.58)m、梁間(4.13)m。

桁行方向 N-69°-W。

本体構造 桁行方向5間のうち、東端の柱間は他より狭く、庇等を支える柱と考えられる。

付属施設 カマド1基、窪地1基。付属施設については後述する。

重複 7号掘立柱建物2面。

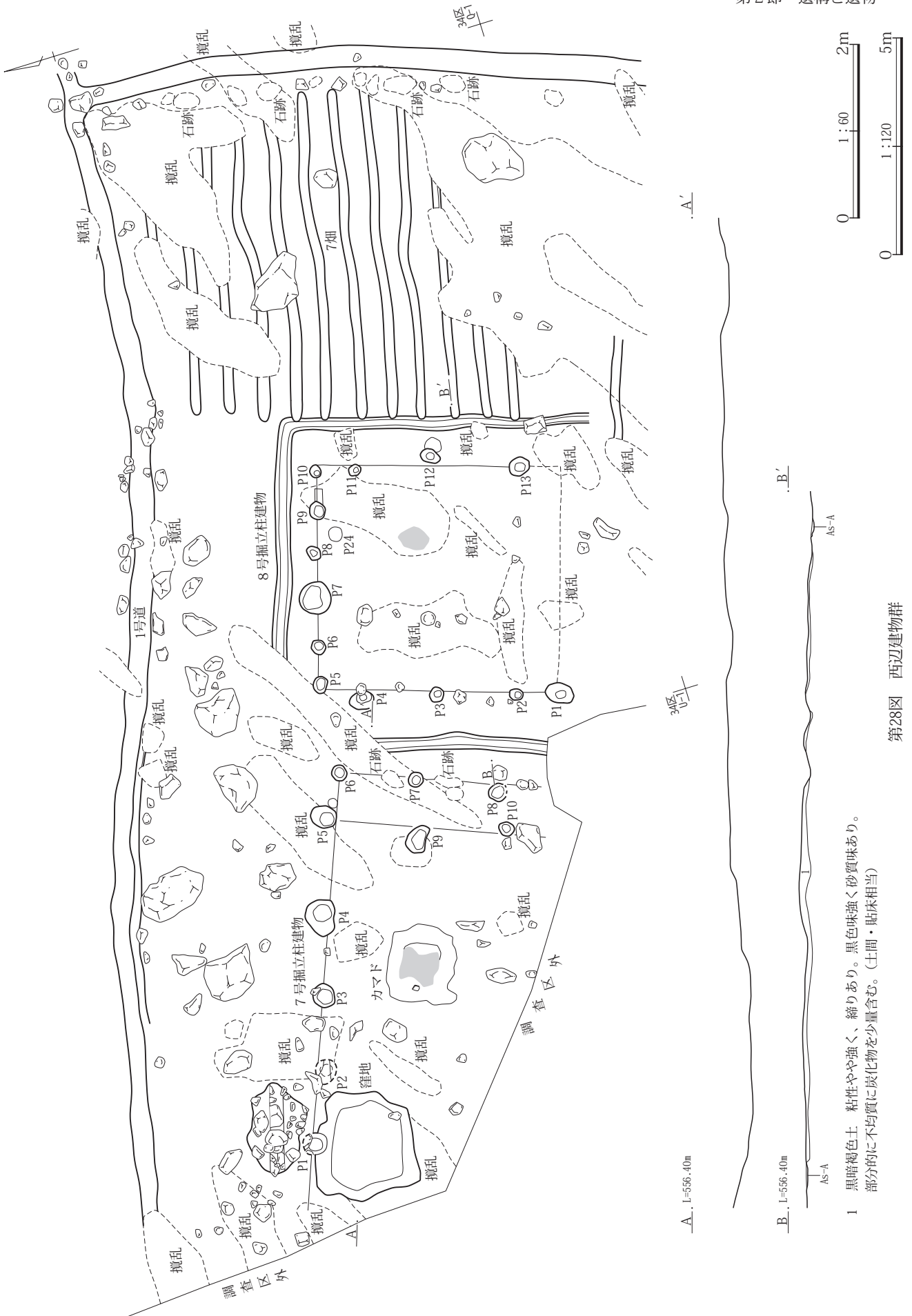
遺物 床面より肥前陶器陶胎染付碗(1)および古銭(寛永通寶)(3,4)が、P4から瀬戸・美濃陶器腰鏝碗(2)

第9表 7号掘立柱建物1面柱間計測表

	桁行柱間		桁行柱間		桁行柱間		桁行柱間		桁行柱間		内周桁行	外周桁行
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	7.47	8.58
梁行柱間	1.71	1.69	1.93	2.14	1.11	2.15	1.78					
梁行柱間					1.38	2.05	1.89					
内周梁間					0.83	4.13						
外周梁間											3.67	

第10表 7号掘立柱建物1面ピット計測表

ピット	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
位置	34区V-3	34区V-3	34区V-3	34区U-3	34区U-3	34区T-3	34区U-2	34区U-2	34区U-2	34区U-2
規模	長	0.56	0.58	0.55	0.82	0.59	0.38	0.37	(0.45)	0.68
	短	0.50	0.48	0.52	0.73	0.52	0.33	0.34	0.41	0.48
	深	0.58	0.53	0.59	0.39	0.37	0.48	0.59	0.31	0.46
形状	円形	卵形	円形	不整形	長円形	円形	円形	円形	円形	不整形
長軸方向	N-5°-E	N-59°-W	N-74°-E	N-81°-E	N-35°-E	N-76°-E	N-13°-W	N-19°-W	N-41°-W	N-36°-E
重複										
旧名称						7号建物P7	7号建物P8	7号建物P9	7号建物P10	7号建物P11



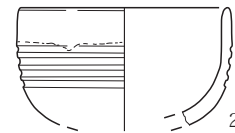
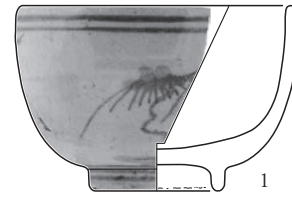
1 黒暗褐色土 粘性やや強く、締りあり。黒色味強く砂質味あり。部分的に不均質に炭化物を少量含む。(土間・貼床相当)

第28図 西辺建物群

が出土している。

所見 2面建物より新しい。東端1間は庇用と考えられるが、残存する西端の柱穴の外側に、少なくとも1間はあったと推測されるので、建物本体は東西棟の2間×5間と推察される。柱間の間隔にばらつきがあるが、河原に類して石の多い現地の特殊性に由来すると考えられる。

備考 調査時の名称は7号建物。



b.1.1.1 カマド(第30図、PL.12)

位置 34区U～V- 2～3グリッド。建物中央部やや東寄りに位置する。

形状等 焼土を囲むように、石跡と考えられる方形の窪みが存在している。

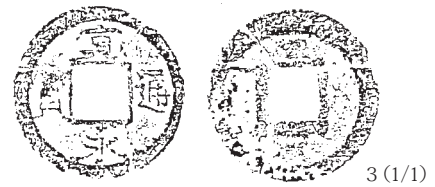
規模 1.81m×1.64m。

重複 なし。

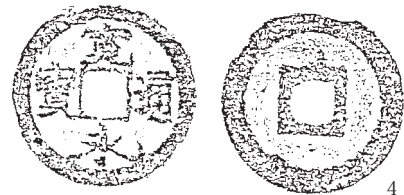
遺物 なし。

所見 焼土は石組痕と考えられる方形領域の西よりに存在しており、焚口は西側にあった可能性が高い。

備考 調査時の名称は1号囲炉裏。



3 (1/1)



4 (1/1)

b.1.1.2 窪地(第31図、PL.12)

位置 34区V～W- 3グリッド。建物北辺西端近くに位置する。

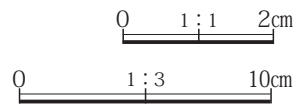
形状等 不定形。西辺および南辺は攪乱のため旧状をとどめていないが、中央部に比べ四辺、特に南北がやや低い底面形状となっている。

規模 2.66m×2.41m。

重複 P 1。

遺物 なし。

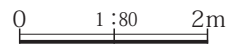
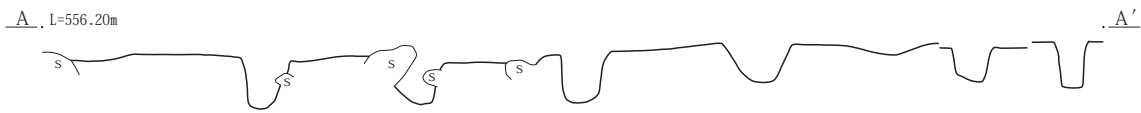
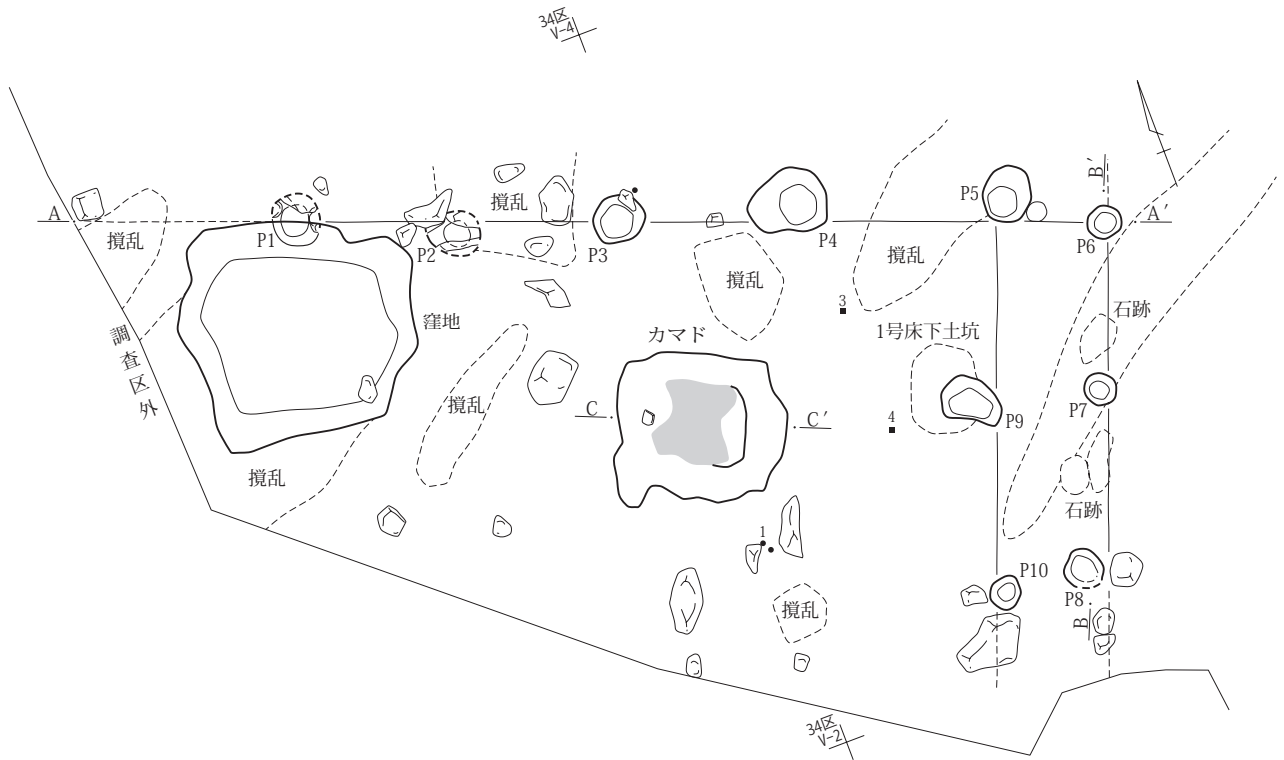
所見 掘削時期はP 1のほうが古いと推測される。



第29図 7号掘立柱建物1面出土遺物

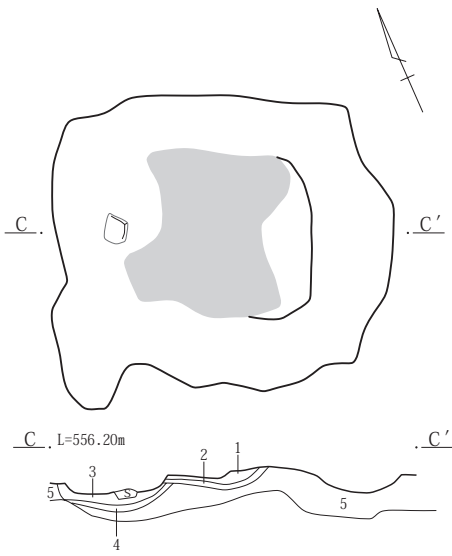
第11表 7号掘立柱建物1面出土遺物観察表

No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
			口底	高	厚			
第29図 PL.57	1 肥前陶器 陶胎染付碗	床面 口縁部1/4 底部1/2	口底 (10.7) 5.0	高 7.4	厚 7.4	夾雑物含まない。 /灰	口縁部外面2重圏線、体部外面東屋山水文か。高台脇から高台外面3重圏線。高台端部を除き透明釉。貫入入る。	18世紀前半。
第29図 PL.57	2 瀬戸・美濃 陶器 腰鏝碗	P4 口縁部～体部 1/4	口底 (8.2) -	高 -	厚 -	白色鈳物微量含む。 /灰白	外面口縁部下4条の螺旋状凹線。内面から口縁部外面灰釉、体部外面鉄釉。灰釉に貫入入る。	18世紀中葉～ 後葉。
第29図 PL.57	3 古銭 寛永通寶	床面	縦 2.291 横 2.253	厚 0.150 重 1.79				
第29図 PL.57	4 古銭 寛永通寶	床面	縦 2.431 横 2.487	厚 0.152 重 3.39				

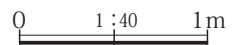


34区
V-24

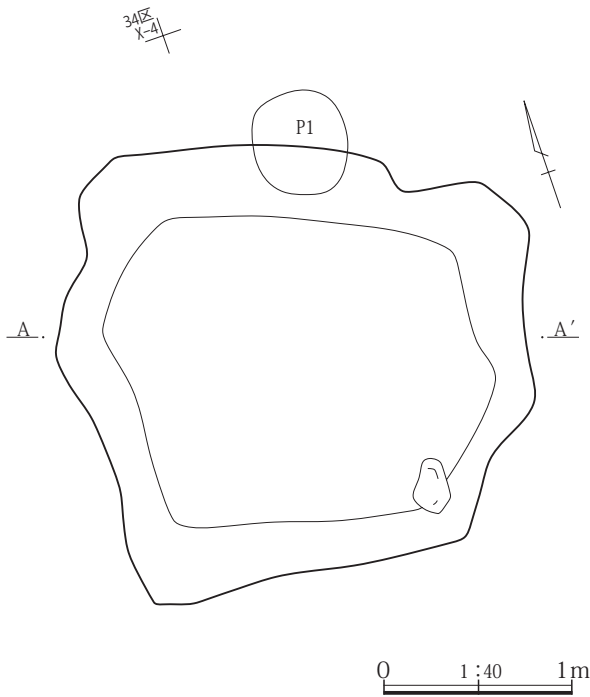
カマド



- 1 明褐色土 よく焼締まった焼土。均質で灰ブロックを含む。
- 2 暗褐色土 粘性ややあり、炭化物をやや多く含み色調暗い土層。
- 3 暗褐色土 2層と比べ、締りやや強い。
- 4 灰褐色土 締りやや弱く、不均質に炭層を含む不均質な焼土と灰層。
- 5 地山(黄色砂質)



第30図 7号掘立柱建物1面1



第31図 7号掘立柱建物 1面2

b.1.2 7号掘立柱建物2面(第32～34図、PL.12・13・57)

位置 34区U～W- 2～3グリッド。調査区西辺に位置する。

形状等 柱穴13基が確認された。2間×5間の東西棟。規模 桁行(8.68)m、梁間4.42m。

桁行方向 N-73° -W。

本体構造 基本構造は、南北のピット列に挟まれた中央列の西端に1間加えた、2間×4間の東西棟と考えられる。

付属施設 炉1基。付属施設については後述する。

重複 7号掘立柱建物1面。

遺物 床面から火打石(5)、石臼(4)、灯火具と思われる石製品(6)、P4から瀬戸・美濃陶器皿(2)、P5から硯(7)、P6から肥前陶器陶胎染付碗(1)が出土しているほか、火打石片1点が出土している。また、覆土より肥前磁器仏飯器(3)が出土している。

所見 本遺構の年代は、出土遺物から18世紀後半に比定される。1面建物に先行する。いたって変則的な柱配置となるが、南北に3列並ぶピット列のうち、中央列がより基本プランを残していると考えられる。南列および北列は地表および地表下の石を避けるため、その間隔が一定しなくなったものと推察される。また北列の東から2基目のP5に対応するものとして、南列の東から1基目と2基目のピットの間にある石を礎石用途と見るべきかもしれない。

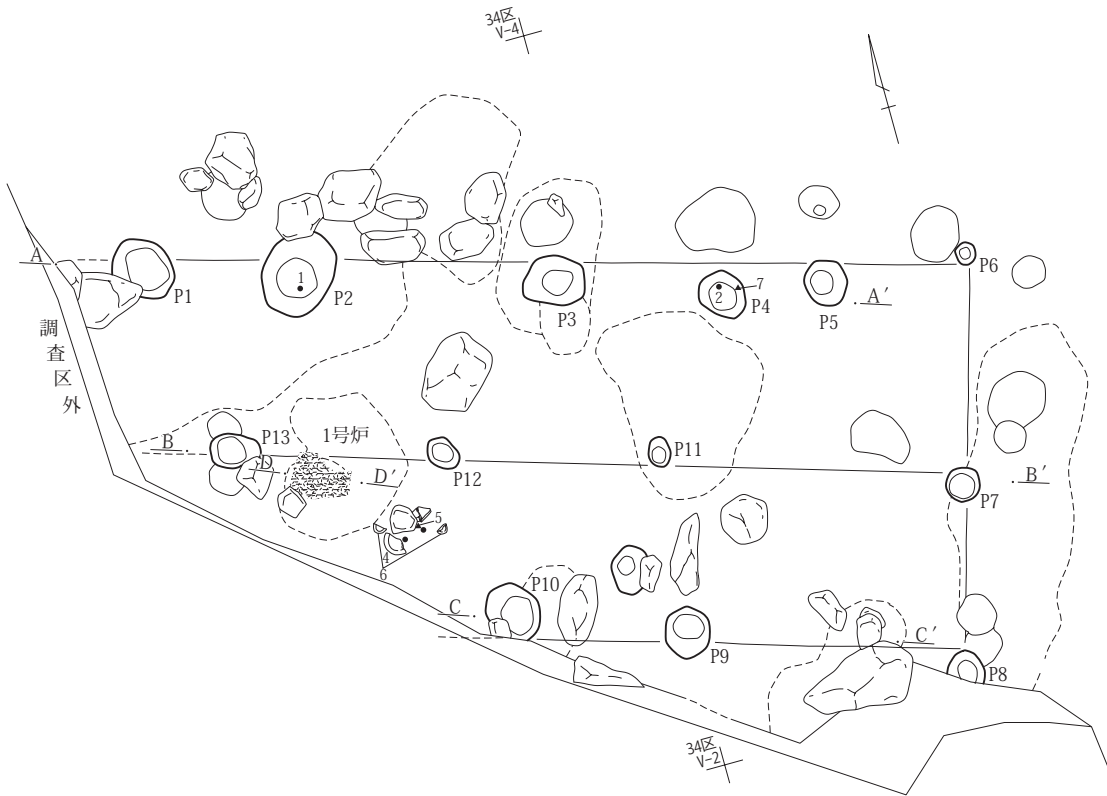
備考 調査時の名称は10号建物。

第12表 7号掘立柱建物2面柱間計測表

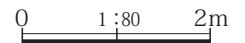
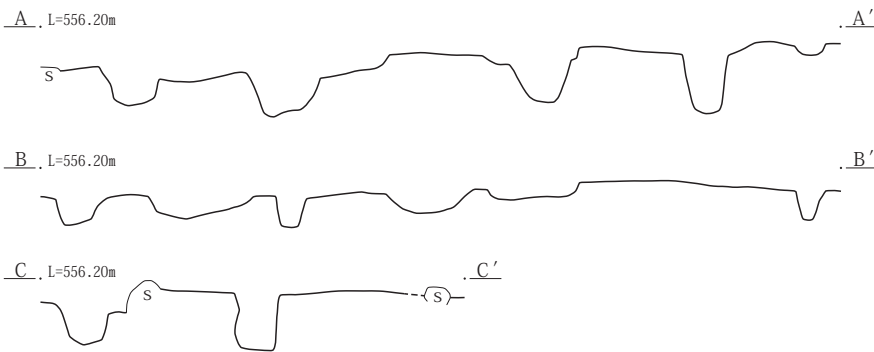
	桁行柱間		桁行柱間		桁行柱間		桁行柱間		桁行柱間		桁行
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	
梁行柱間	1.60	2.77	1.73	1.05	1.54	8.68					
梁行柱間		2.25	2.29	3.22							
梁間			1.82	2.98							
			3.56	3.52							4.42

第13表 7号掘立柱建物2面ピット計測表1

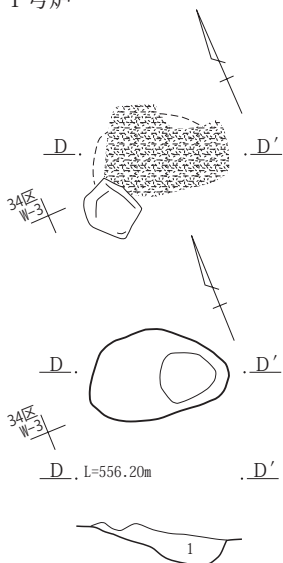
ピット	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
位置	34区W-3	34区V-3	34区V-3	34区U-3	34区U-3	34区U-3	34区U-2	34区U-2	34区U-V-2	34区V-2
規模										
長	0.72	0.92	0.69	0.54	0.51	0.24	0.46	0.42	0.55	0.64
短	0.57	0.74	0.59	0.43	0.43	0.20	0.46	0.36	0.46	0.52
深	0.37	0.39	0.43	0.71	0.25	0.40	0.31	0.26	0.60	0.46
形状	長円形	長円形	隅丸長方形	長円形	長円形	円形	円形	長円形	長円形	長円形
長軸方向	N-19° -W	N-36° -E	N-76° -E	N-35° -W	N-12° -W	N-5° -E	—	N-33° -W	N-15° -E	N-16° -W
重複										
旧名称	10号建物P7	10号建物P6	10号建物P5	10号建物P4	7号建物P21	7号建物P6	10号建物P10		10号建物P21	10号建物P22



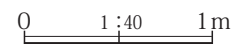
破線内は攪乱



1号炉



1 暗黒褐色土 締り弱く、やや粘性ある不均質土。炭化物を不均質に含み、黒色味強い。焼土灰を互層に含む。



第32図 7号掘立柱建物2面

b.1.2.1 1号炉(第32図、PL.13)

位置 34区V-2～3グリッド。建物西半に位置する。
 形状等 方形。掘り方は卵形。掘り方から炭化物を不均質に含み、焼土灰を互層に含む暗黒褐色の覆土が確認されている。

規模 0.73×0.47m。

重複 なし。

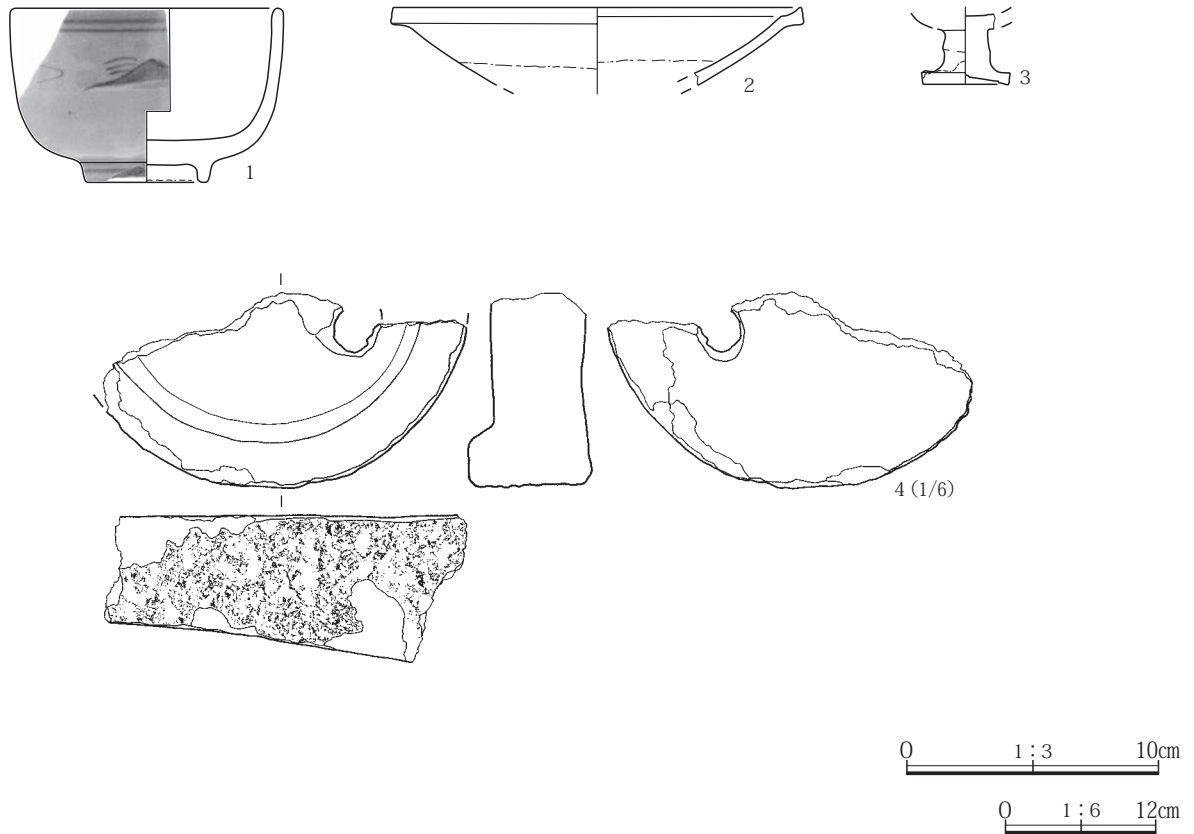
遺物 なし。

所見 焼土灰と炭化物を含む覆土の様相から炉と判断されたが、遺構周辺の攪乱のために遺構全体の形状は復元しがたい。炉本体とするよりは、灰の掻き出し場所である可能性も否定しがたい。なお火打石、灯火具等の石製品はこの遺構脇から出土している。この遺構をカマドの火床ととらえた場合、覆土の堆積具合からは、焚口は東側と考えられる。

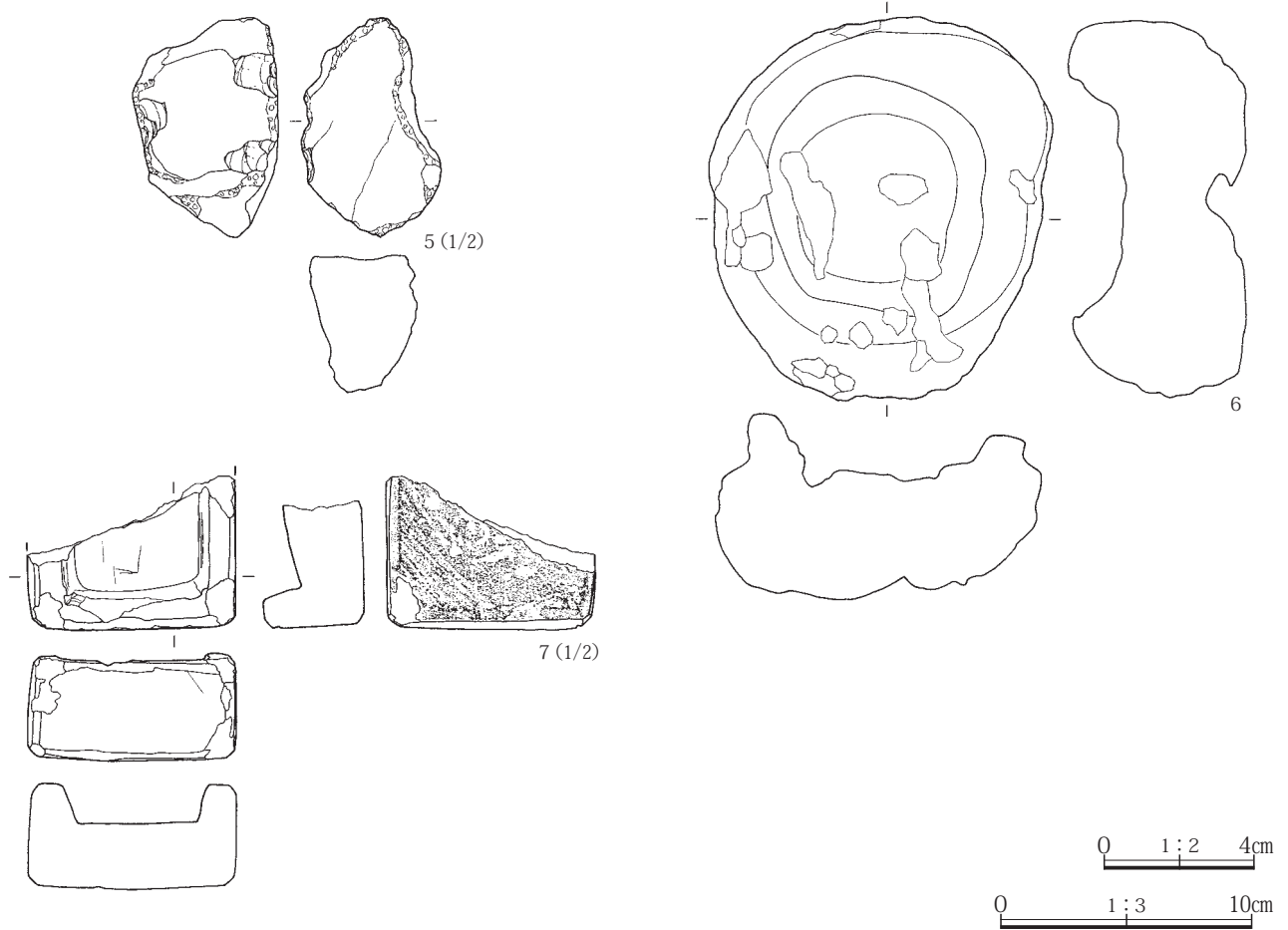
備考 調査時の名称は10号建物2号囲炉裏。

第14表 7号掘立柱建物2面ピット計測表2

ピット	P11	P12	P13
位置	34区U-2	34区V-2～3	34区V～W-3
規模	長	0.32	0.39
	短	0.23	0.29
	深	0.27	0.35
形状	長円形	長円形	長円形
長軸方向	N-1°-W	N-38°-W	N-71°-W
重複			
旧名称		10号建物P11	10号建物P12



第33図 7号掘立柱建物2面出土遺物1



第34図 7号掘立柱建物2面出土遺物2

第15表 7号掘立柱建物2面出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	径高	厚重			
第33図 PL.57	1	肥前陶器 陶胎染付碗	P6 口縁部1/8 底部1/2	口底 (10.4) 4.8	高	6.9	夾雑物含まない。 /灰	口縁部外面2重圏線、体部外面東屋山水文。高台脇から高台外面3重圏線。高台端部を除き透明釉。貫入入る。	18世紀前半。
第33図	2	瀬戸・美濃 陶器 皿	P4 口縁部1/5	口底 (16.2) -	高	-	白色鈹物微量含 む。/灰	口縁部から体部内外面灰釉。貫入入る。	17世紀後葉～ 18世紀中葉。
第33図	3	肥前磁器 仏飯器	覆土 脚部	口底 -	高	-	夾雑物含まない。 /灰白	内面から脚部外面透明釉。	江戸時代。
第33図 PL.57	4	石製品 石臼	床面 1/3	径高 32.0 11.7	厚重	- 3925.7	粗粒輝石安山岩	底面は摩滅し片減りする。挽目の痕跡は認められない。供給孔の直径約35mm。	
第34図 PL.57	5	石製品 火打石	床面 完形	長幅 5.8 3.7	厚重	3.9 84.4	流紋岩凝灰岩	いくつもの剥離痕で構成される。この剥離痕は火打石として整形するための剥離調整の可能性がある。各面との境界である稜上に微細剥離痕とつぶれが集中する。	
第34図 PL.57	6	石製品 石製品	床面 完形	長幅 15.2 13.6	厚重	7.2 1168.6	粗粒輝石安山岩	多孔質の石材である。外面には部分的に非常に滑らかな部分が認められ、全体的に加工整形されている。表面に隅丸方形の凹みが認められその底面はほぼ平坦である。凹みの内部と周辺部はわずかに黒色変化しており、灯明等の灯火具として利用された可能性がある。	
第34図 PL.57	7	石製品 硯	P5 1/4	長幅 (4.1) (5.5)	厚重	2.9 67.0	変質デイサイト	各面は平滑であり丁寧に整形されている。各面との境界にはすべて面取り加工が施されている。底面には浅い断面U字形の痕跡がわずかに認められ加工痕の可能性がある。	

b. 2 8号掘立柱建物

b.2.1 8号掘立柱建物1面(第35・36図、PL.13・14)

位置 34区R～U- 1～3グリッド。調査区西辺に位置する。

形状等 柱穴13基が確認された。4間×5間の東西棟と推測される。

規模 桁行4.83m、梁間5.54m。

桁行方向 N-73°-W。

本体構造 南辺側の残り具合が良好ではないが、北辺の柱間からは、2間×3間の東西棟の南北両辺に張り出しがついた構造が想定される。なお、床は一面に粘性やや強く、締りのある、不均質に炭化物を含む黒暗褐色土で覆われている。

付属施設 炉1基。付属施設については後述する。

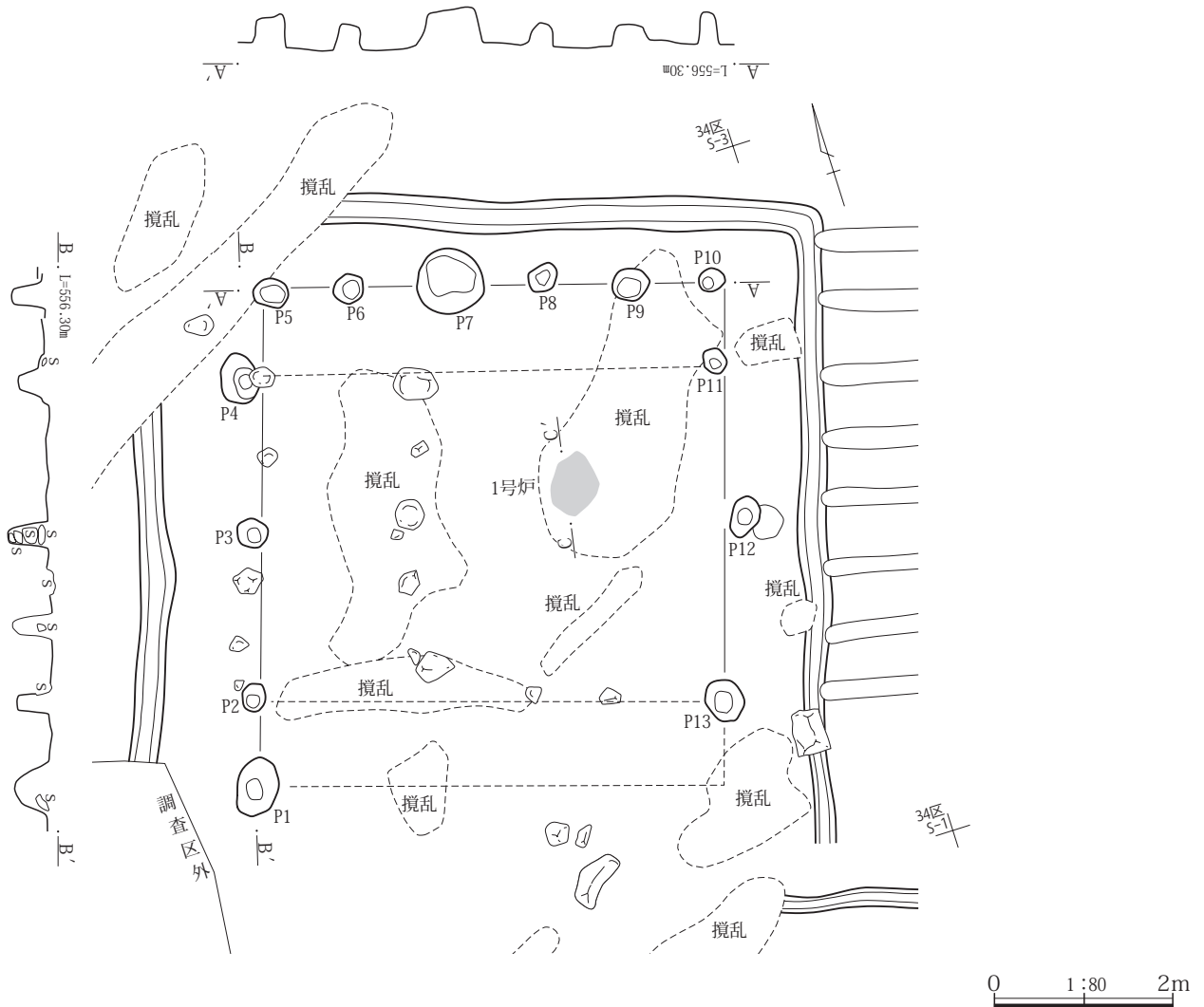
重複 8号掘立柱建物2面。

遺物 なし。

所見 2面建物より新しい。外観としての平面プランは南北方向がやや長目の方形であるが、北辺の柱穴間隔は東辺や西辺の半分程度しかない。また東西両辺の柱間は、その南北両端ともに、中央部の柱間の半分程度しかない。2間×3間の東西棟の南北両辺に張り出しがついた、4間×3間構造と考えられる。2間×3間の北辺および南辺については、要所要所に攪乱があるため、柱の有無は確認されていない。

なお三方を囲み残る雨落ち跡と推測される浅い溝の存在から、東西の両辺には底状の小屋組みが行われていたものと考えられる。

備考 調査時の名称は8号建物。



第35図 8号掘立柱建物1面1

第16表 8号掘立柱建物1面柱間計測表

	雨落跡距離	桁行柱間	雨落跡	桁行柱間	雨落跡	桁行柱間	雨落跡	桁行柱間	雨落跡	桁行柱間	雨落跡距離	内周桁行	外周桁行
雨落跡距離			0.88		0.70		0.68		0.86		0.75		
梁行柱間		P5 — 0.88 —	P6 — 1.13 —	P7 — 1.03 —	P8 — 0.95 —	P9 — 0.87 —	P10 — 1.10 —	雨落跡				4.83	
梁行柱間		1.03						0.90					
梁行柱間		P4 — 1.85		— 石				P11 — 1.06 —	雨落跡			5.24	
梁行柱間		1.71		1.49				1.74					
梁行柱間	雨落跡 — 1.10 —	P3 — 1.75		— 石				P12 — 0.74 —	雨落跡			5.48	
梁行柱間		1.85						2.08					
梁行柱間	雨落跡 — 1.14 —	P2						P13 — 1.00 —	雨落跡			5.23	
梁行柱間		0.98											
梁行柱間		P1											
内周梁間		3.56						3.77					
外周梁間		5.54											

第17表 8号掘立柱建物1面ピット計測表1

ピット	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
位置	34区T-1	34区T-1	34区T-2	34区T-2	34区T-2-3	34区T-2	34区S-2	34区S-2	34区S-2	34区S-2
規模	長 0.67 短 0.47 深 0.41	長 0.31 短 0.26 深 0.37	長 0.34 短 0.31 深 0.46	長 0.57 短 0.40 深 0.36	長 0.38 短 0.30 深 0.36	長 0.34 短 0.31 深 0.30	長 0.77 短 0.73 深 0.38	長 0.37 短 0.31 深 0.24	長 0.42 短 0.37 深 0.24	長 0.29 短 0.27 深 0.34
形状	長円形	長円形	円形	長円形	長円形	円形	円形	長円形	円形	円形
長軸方向	N-26°-E	N-22°-E	N-41°-W	N-3°-E	N-56°-W	N-62°-E	N-53°-W	N-52°-E	N-78°-E	N-47°-E
重複										
旧名称	8号建物P11	8号建物P12	8号建物P14	8号建物P15	8号建物P16	8号建物P17	8号建物P18	8号建物P19	8号建物P20	8号建物P25

第18表 8号掘立柱建物1面ピット計測表2

ピット	P11	P12	P13
位置	34区S-2	34区S-1~2	34区S-1
規模	長 0.48 短 0.39 深 0.58	長 0.47 短 0.31 深 0.34	長 0.48 短 0.40 深 0.40
形状	長円形	長円形	長円形
長軸方向	N-84°-E	N-32°-E	N-24°-W
重複		8号建物P4	
旧名称	8号建物P27	8号建物P3	8号建物P29

b.2.1.1 1号炉(第36図、PL.14)

位置 34区S-2グリッド。建物中央部北東よりに位置する。

形状等 不整形。わずかに炭化物を含む焼土灰の層と焼締まった焼土が確認されている。

規模 0.72m×0.53m。

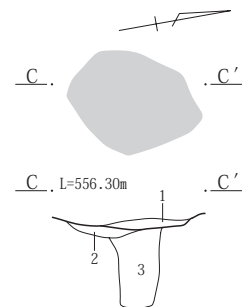
重複 なし。

遺物 なし。

所見 構築に際しては、9号掘立柱建物(中近世)の柱穴跡の窪みを利用したと推測される。

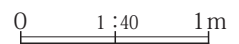
備考 調査時の名称は8号建物1号囲炉裏。

34区



1号炉

- 1 灰色土 焼土灰。縮り欠き、わずかに炭化物を含む。
- 2 明褐色土 焼締まった焼土。均質で色調明るい。均質。
- 3 黒暗褐色土 粘性やや強く、縮りあり。黒色味強く砂質味あり。



第36図 8号掘立柱建物1面2

b.2.2 8号掘立柱建物2面(第37～39図、PL.14～16・57)

位置 34区S～T-1～3、24区S-25グリッド。調査区西辺に位置する。

形状等 柱穴22基が確認された。3間×4間の南北棟を確認。

規模 桁行(6.41)m、梁間6.02m。

桁行方向 N-16°-E。

本体構造 南辺は残りが悪く確認できないが、2間×3間の南北棟の建物の四辺に張り出しを設けた4間×5間と推測される。

付属施設 炉2基、土坑1基。付属施設については後述する。

重複 8号掘立柱建物1面。

遺物 P21から瀬戸陶器すり鉢(2)、P33から肥前陶器陶胎染付碗(1)が出土している。またP5から椀形鍛冶滓(5)が出土している。なおP21からは在地系土器内耳鍋(3)が出土しているが、2面(中近世)の9号掘立柱建物に由来する混入品と考えられる。

所見 本遺構の年代は、出土遺物から18世紀後半に比定される。1面建物に先行する。二重の囲いをなす柱穴群の外周北辺からは3間しか確認されていないが、1面建物が2面建物の柱穴をそのまま再利用したと想定すれば、1面建物の北東隅の柱穴は2面建物の外周北辺柱穴の一つとなる。

内周柱穴群の南辺は、中央に位置する柱穴を挟み、西隣の柱穴と対になる位置に頭を出している石を礎石とみなした。しかし南側に張り出しが1間あるとすれば、いずれの柱も小屋組みを支えるための構造材として必要不可欠なものではない。また調査時点において、内周柱穴南辺は吾妻川の崖縁から数mしか離れていない位置にある。2間×3間の本体の南を除いた三方に張り出し部を設けた、4間×4間構造も否定しがたい。

内周柱穴の内側南寄りの位置に存在するピット2基は、柱穴とするには不都合な場所に存在する。建物内での作業を意図しての掘り込みなど、柱穴以外の用途が想定される。

備考 調査時の名称は10号建物。

b.2.2.1 1号炉(第38・39図、PL.15・57)

位置 34区S-1グリッド。建物中央部東よりに位置する。

形状等 円形。焼土灰の層と焼き締まった均質な焼土が確認されている。

規模 0.67m×0.63m。

重複 なし。

遺物 鉄製品刀子(4)が出土している。

所見 調査時の所見によれば、2号炉が1号炉に先行する。

備考 調査時の名称は8号建物1号床下土坑(2号囲炉裏)。

b.2.2.2 2号炉(第38図、PL.16)

位置 34区S～T-2グリッド。建物中央部東よりに位置する。

形状等 いびつな長円形。わずかに炭化物を含む焼土灰層が、焼きしまった焼土の上に堆積している。

規模 1.19m×0.85m。

重複 なし。

遺物 なし。

備考 調査時の名称は10号建物1号囲炉裏。

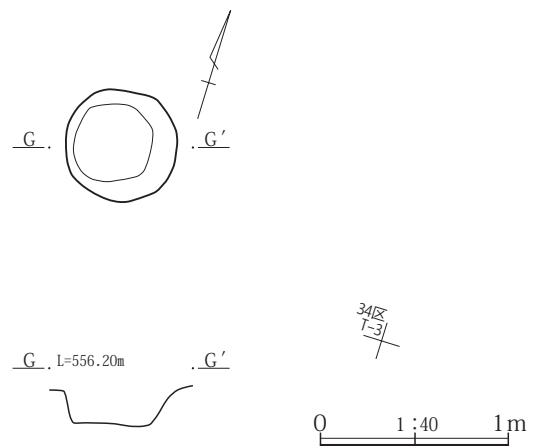
b.2.2.3 土坑(第37図、PL.16)

位置 34区T-3グリッド。建物の北西隅に隣接する。

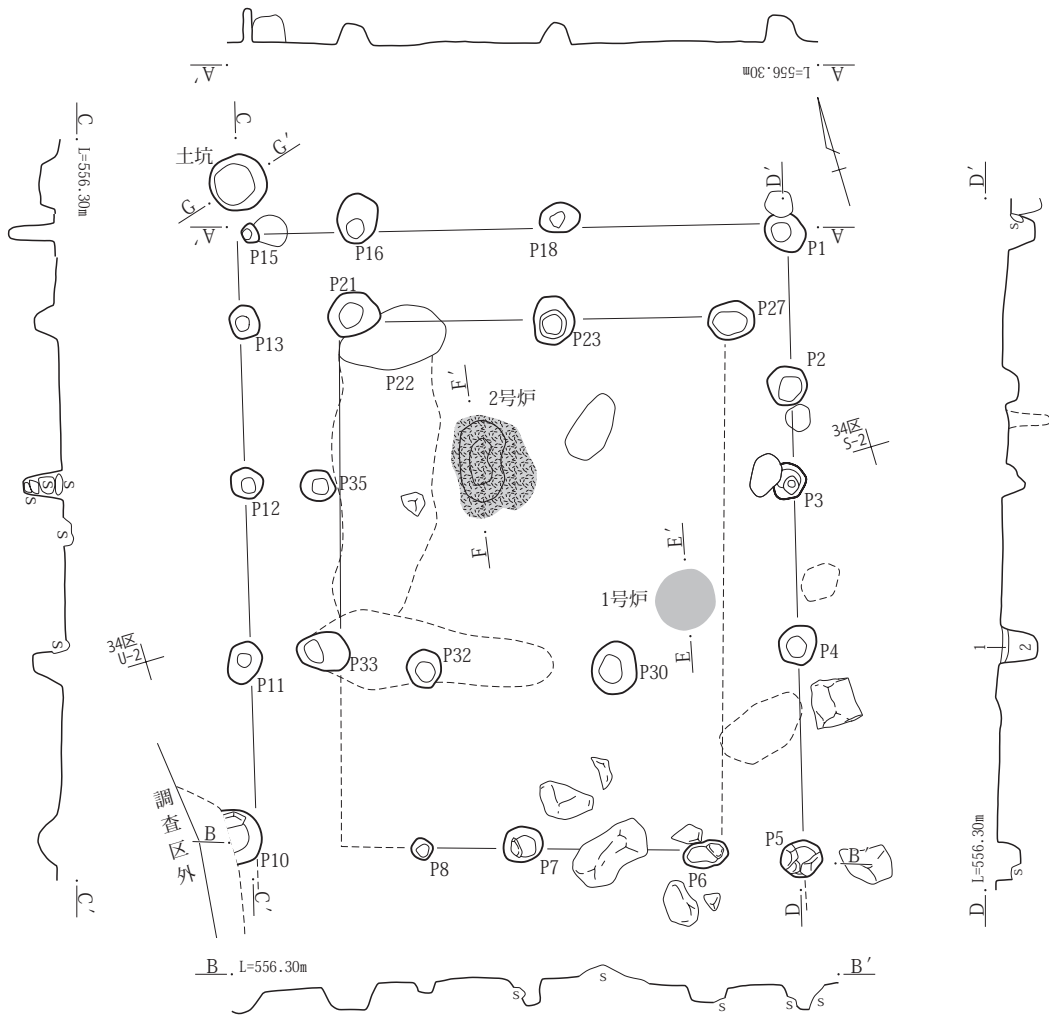
形状等 円形。土坑底面は鉄分凝集層に至っている。

規模 0.60m×0.60m、深さ0.17m。

埋没土 締りを極端に欠く天明泥流堆積物。

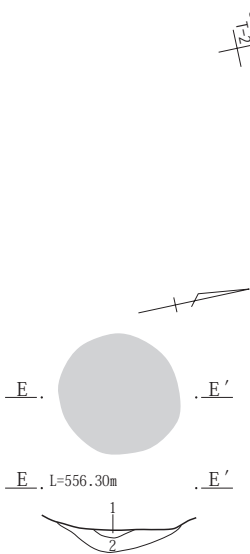


第37図 8号掘立柱建物2面1



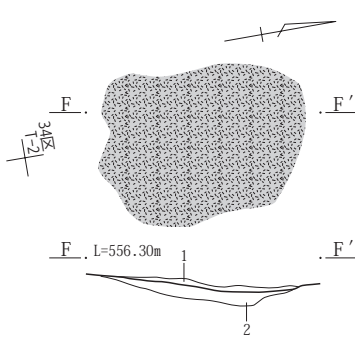
- 1 黒暗褐色土 粘性やや強く、締りあり。黒色味強く砂質味あり。
- 2 明褐色土 締り弱く不均質。地山砂質土を多く含み、色調明るい埋土。

1号炉



- 1 暗灰色土 ボサボサしてよく焼けた焼土灰。
- 2 明赤褐色土 砂質味やや強くよく焼き締まった均質な焼土。

2号炉



- 1 灰色土 焼土灰。締り欠き、わずかに炭化物を含む。
- 2 明褐色土 焼締まった焼土。均質で色調明るい。均質。

0 1:80 2m

0 1:40 1m

第38図 8号掘立柱建物2面2

第19表 8号掘立柱建物2面柱間計測表

	桁行柱間		桁行柱間		桁行柱間		桁行柱間		内周桁行	外周桁行
梁行柱間	P10	1.86	P11	1.85	P12	1.73	P13	0.97	P15	6.41
			0.75		0.76		1.14		1.14	
梁行柱間			P33	1.77	P35	1.84	P21	0.92	P16	
			1.19							
梁行柱間	(P8)	1.90	(P32)							
	1.09		1.96				2.14		2.15	
梁行柱間	P7						P23	1.13	P18	5.52
	0.88						1.84		2.37	6.65
梁行柱間	(石)	1.88	(P30)							
	0.98									
梁行柱間	P6						P27			5.63
	1.09									
内周梁間	P5	2.23	P4	1.81	P3	0.93	P2	1.68	P1	6.65
外周梁間	3.76						4.01			
	6.02		5.84		5.73		5.84		5.66	

第20表 8号掘立柱建物2面ピット計測表1

ピット	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P10	P11
位置	34区S-2	34区S-2	34区S-1-2	34区S-1	34区S-1-24 区S-25	34区S-1	34区T-1	34区T-1	34区T-1	34区T-1
規模	長 短 深	0.47 0.39 0.28	0.43 0.40 0.17	0.38 0.37 0.25	0.43 0.38 0.40	0.41 0.41 0.25	0.47 0.28 0.18	0.44 0.39 0.29	0.24 0.23 0.20	0.58 (0.34) 0.20
形状	長円形	円形	円形	円形	円形	長円形	円形	円形	不明	長円形
長軸方向	N-34°-W	N-18°-W	N-11°-W	N-44°-E	—	N-84°-E	N-69°-E	N-8°-W	N-10°-W	N-31°-E
重複			8号建物P3							
旧名称			8号建物P4	8号建物P5	8号建物P6	8号建物P7	8号建物P8	8号建物P9	8号建物P39	8号建物P12

第21表 8号掘立柱建物2面ピット計測表2

ピット	P12	P13	P15	P16	P18	P21	P23	P27	P30	P32
位置	34区T-2	34区T-2	34区T-2-3	34区T-2-3	34区S-2	34区T-2	34区S-2	34区S-2	34区S-1	34区T-1
規模	長 短 深	0.44 0.32 0.40	0.34 0.30 0.23	0.20 0.18 0.47	0.52 0.44 0.22	0.43 0.31 0.24	0.55 0.46 0.55	0.51 0.41 0.55	0.49 0.39 0.53	0.55 0.47 0.28
形状	長円形	円形	円形	長円形	長円形	長円形	長円形	長円形	長円形	円形
長軸方向	N-46°-W	N-3°-W	N-37°-W	N-14°-E	N-75°-W	N-72°-W	N-10°-E	N-73°-W	N-17°-E	N-3°-W
重複			8号建物P16			8号建物P22				
旧名称	8号建物P14	8号建物P15	8号建物P34	8号建物P17	8号建物P19					

第22表 8号掘立柱建物2面ピット計測表3

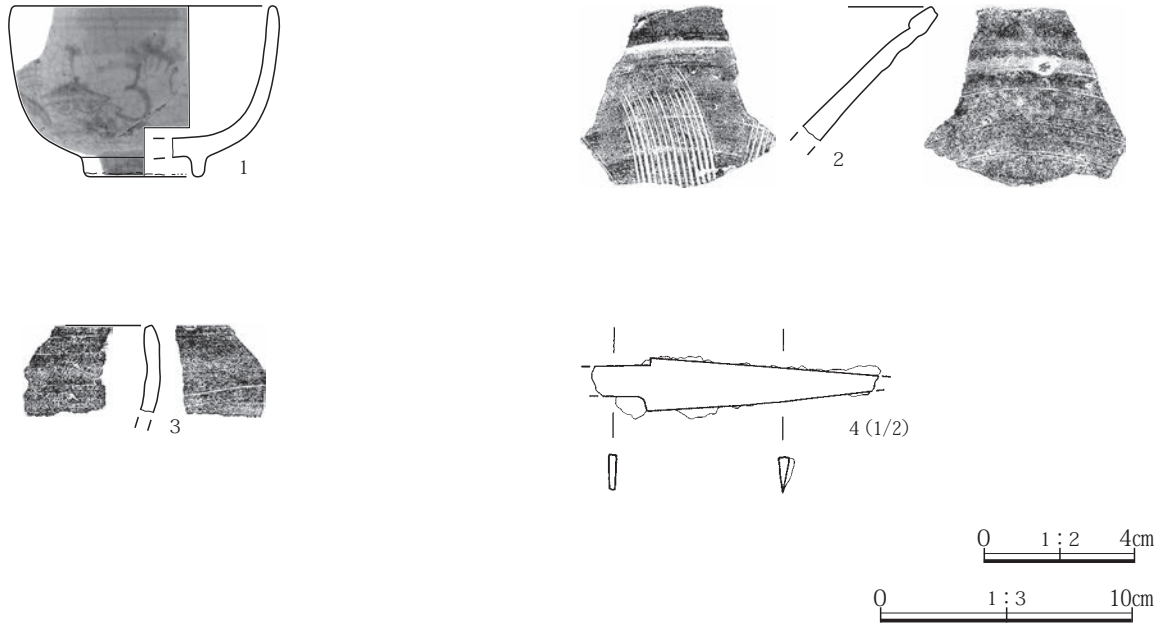
ピット	P33	P35
位置	34区T-1	34区T-2
規模	長 短 深	0.57 0.41 0.53
形状	長円形	円形
長軸方向	N-71°-W	N-69°-W
重複		
旧名称		

重複 なし。

遺物 なし。

所見 柱穴群の外側に位置するが、北西隅に隣接していることから付属施設とみなした。天明泥石流堆積物により埋没しているため、建て替え後も窪地として存在していたと推測される。

備考 調査時の名称は桶跡。



第39図 8号掘立柱建物2面出土遺物

第23表 8号掘立柱建物2面出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第39図 PL.57	1	肥前陶器 陶胎染付碗	P33 口縁部1/6 底部1/4	口 底	(10.3) (4.5)	高	6.8	夾雑物含まない。 /灰	口縁部外面2重圏線、体部外面簡略化した東屋山水文。 体部外面下位1重圏線、高台外面2重圏線。	18世紀前葉～ 中葉。
第39図 PL.57	2	瀬戸陶器 すり鉢	P21 口縁部片	口 底	- -	高	-	白色・黒色鈹物少 量含む。/灰黄	内面14条一単位のすり目。口縁部内側に折り返す。内 外面錆釉。	18世紀中葉。
第39図	3	在地系土器 内耳鍋	P21 口縁部片	口 底	- -	高	-	白色鈹物、赤色粒 含む。/褐	断面から内面器表褐色、外面器表黒褐色。内面轆轤目 状の浅い凹線2条。口縁端部平坦。9建床下土坑出土遺 物と同一個体か。	信濃型、中世。
第39図 PL.57	4	鉄製品 刀子	1号刃	長 幅	7.6 1.7	厚 重	0.9 8.44			
PL.57	5	鉄滓 椀形鍛冶滓	P5A下	長 幅	3.7 5.3	厚 重	1.5 39.00			

b. 3 土坑

b. 3.1 29号土坑(第40図、PL.16)

位置 34区V-3~4グリッド。調査区西辺に位置する。

形状 長円形。

規模 2.08m×1.41m、深さ0.53m。

長軸方向 N-74°-W。

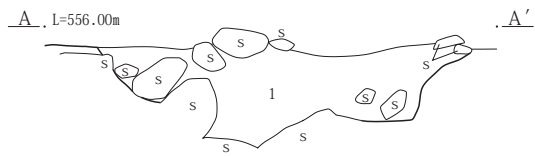
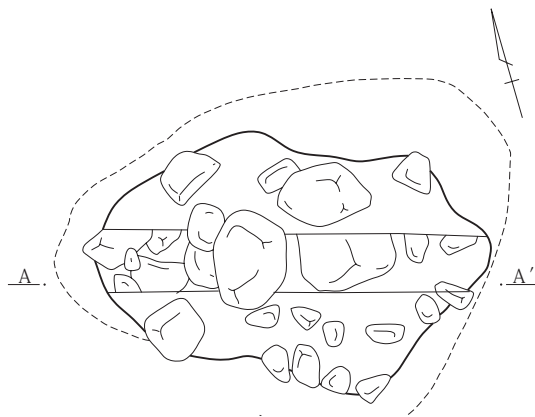
埋没土 最大30cm大の円礫を中心に、5cm位までの円礫を主体に構成されており、砂質味が強く、色調の暗い暗

褐色土が隙間を埋めている。

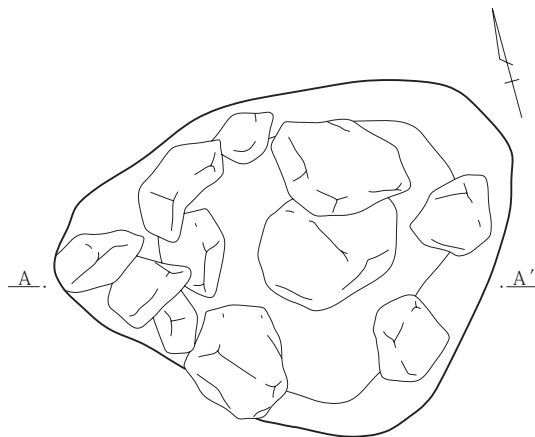
重複 なし。

遺物 なし。

所見 建物周辺の不要な石を一括して埋め込んだものと推測される。1面建物と同時期の存在とみなしたが、大元は2面建物建設時に不要石の集積所としたものが、その後も残され、使われ続けていた可能性も否定しえない。



1 暗褐色土 最大30cm大の円礫を中心に、5cm位までの円礫を主体に構成されている。砂質味が強く、色調暗い。



0 1:40 1m

第40図 29号土坑

(2)道

西辺建物群の北辺から東辺にかけて、建物群を囲む鉤の手状に道が確認されており、鉤の手の部分からはAs-A軽石の堆積も確認されている。また鉤の手の角に当たる北東隅には、南北の畑地の境界に沿い東に延びる道筋を想定させる痕跡が確認されている。辻から東の部分は、使用頻度の違いによるものか、また天明泥流による削平が著しい地点でもあり、明瞭な痕跡が残されているとはいいがたいが、丁字形の道が存在していたと推測される。

なお、24区I-22～23グリッドに位置する2号畑とこれに隣接する石との間に、石の東側を囲むようにAs-Aの堆積が認められる。調査区外から南下する道の一部とも考えられるが、石を回り込んだ南端で行き止まり、先に続く形跡が見受けられないため、道として取り上げなかった(第42図、PL.18)。

a 1号道(第41図、PL.16・17)

位置 34区K～W-1～4グリッド、24区Q～R-22～25グリッド。調査区西部に位置する。

形状 鉤の手状。

規模 東西部(25.9)m、走向N-77°-W。南北部(25.3)m、走向N-14°-E。道幅0.33m～0.75m。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 辻から東、畑地の境界(走向N-82°-E、16.9m)沿いに畔道ないし踏み分け道程度の通路が存在し、全体では丁字型をていすと推測される。なお調査時点の道路のありようを敷衍することが許されるなら、1号道の西端は建物の西北隅を過ぎてから吾妻川の崖沿いに北上し、5号礎石建物の西側を抜けて続くことが予想される。

(3)畑

調査区内は、建物群の存在する地点を除き、一面に畑地で覆われていたと考えられる。

調査区北西部を除き、泥流による削平のためか本来の畑地の姿をとどめる場所は少ない。地形の微小な隆起や大き目の石が堤防の役目を果たし、そうした陰に畑地がわずかに姿をとどめている。畑地に散在する平坦面も、調査区北西部ではその多くを確認できたが、その他の地点からは2か所が確認されたにとどまる。

調査区北西部で確認された畑に残る攪乱は、天明3年の泥流がもたらしたものと推測される。畑地の南部、1号道との境界付近に残された帯状の攪乱は、泥流の流れを示唆するものと推測される。

以下においては、畝1列と畝間の「サク」1条とを合わせた幅の平均値をピッチとして記載した。なお畑の単位長などに関しては後述する(第4章2)。

a 1号畑(第42図、PL.17)

位置 24区D～K-18～22グリッド。調査区中央部西よりに位置する。

形状等 ピッチ0.51m。畝の走向N-71°-W。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 比較的良好に形状をとどめるが、単位等の把握はできない。

b 2号畑(第42図、PL.17・18)

位置 24区D～I-22～23グリッド。調査区中央部西よりに位置する。

形状等 ピッチ0.49m。畝の走向N-74°-W。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 比較的良好に形状をとどめるが、単位等の把握はできない。

c 3号畑(第43図、PL.18)

位置 24区A～C-19～24グリッド、23区T～Y-19～25グリッド。

形状等 ピッチ0.47m。畝の走向N-71°-W。調査区中央部東よりに位置する。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 比較的良好に形状をとどめるが、単位等の把握はできない。

c. 1 3-1号平坦面(第48図、PL.18)

位置 23区Y-24グリッド。3号畑中央部北端に位置する。

規模 1.17m×1.12m。

長軸方向 N-52°-W。



第41図 1号道

d 4号畑(第43図、PL.18)

位置 23区M～S-19～24グリッド。調査区東部に位置する。

形状等 ピッチ0.47m。畝の走向N-71°-W。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 比較的良好に形状をとどめるが、単位等の把握はできない。

e 5号畑(第44図、PL.19)

位置 23区J～S-14～17グリッド。調査区東南部に位置する。

形状等 ピッチ0.48m。畝の走向N-73°-W。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 部分的な検出にとどまり、単位等の把握はできない。

f 6号畑(第44図、PL.19)

位置 23区H～J-22～23グリッド。調査区東端に位置す

る。

形状等 ピッチ0.42m。畝の走向N-71°-W。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 部分的な検出にとどまり、単位等の把握はできない。

g 7号畑(第45・62図、PL.19・57)

位置 24区R～S-25グリッド、34区Q～S-1～3グリッド。調査区西部に位置する。

形状等 ピッチ0.71m。畝の走向N-76°-W。

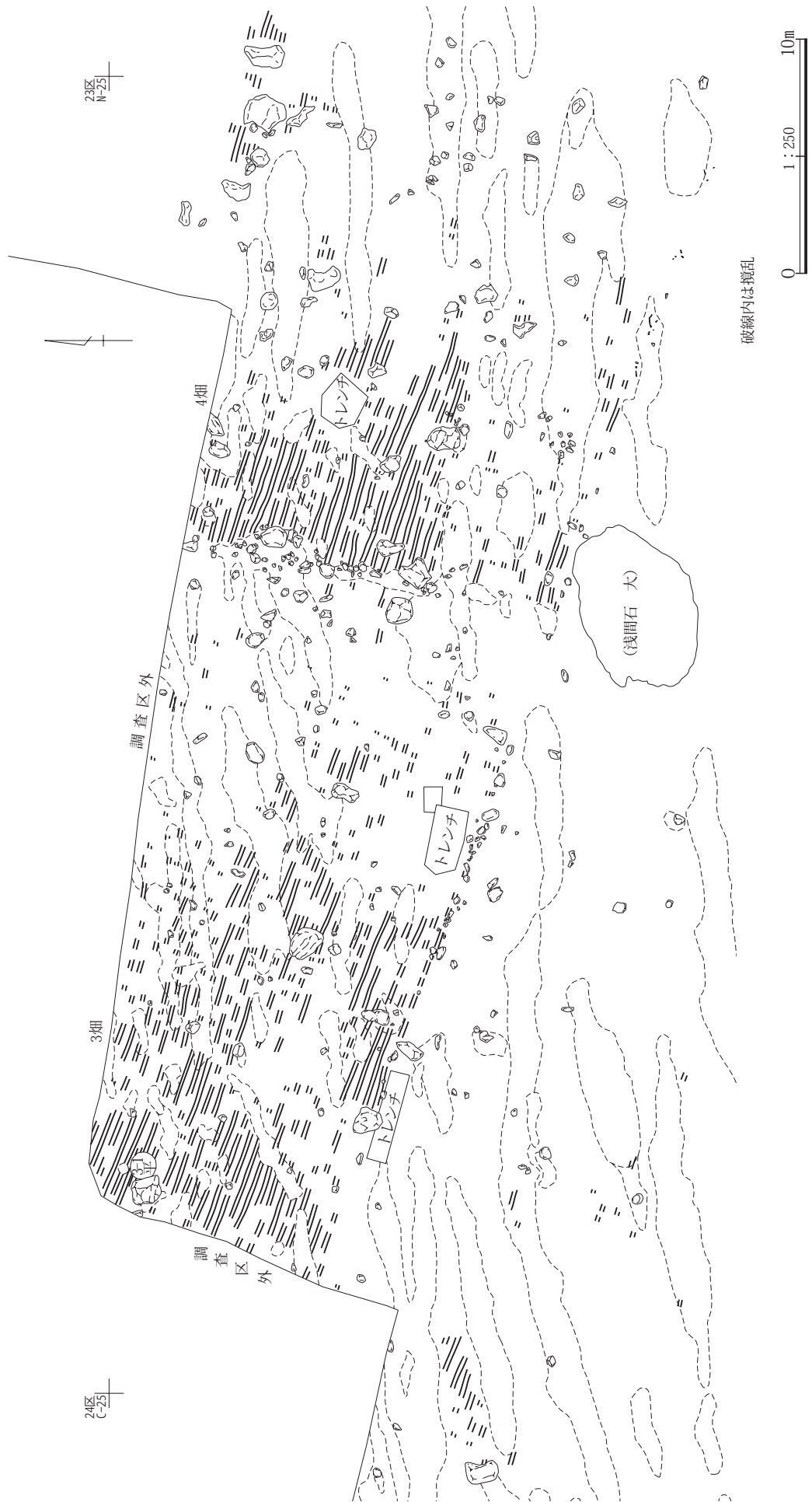
重複 なし。

遺物 耕作土中から瀬戸・美濃陶器碗(1)およびキセル(3)が出土している。

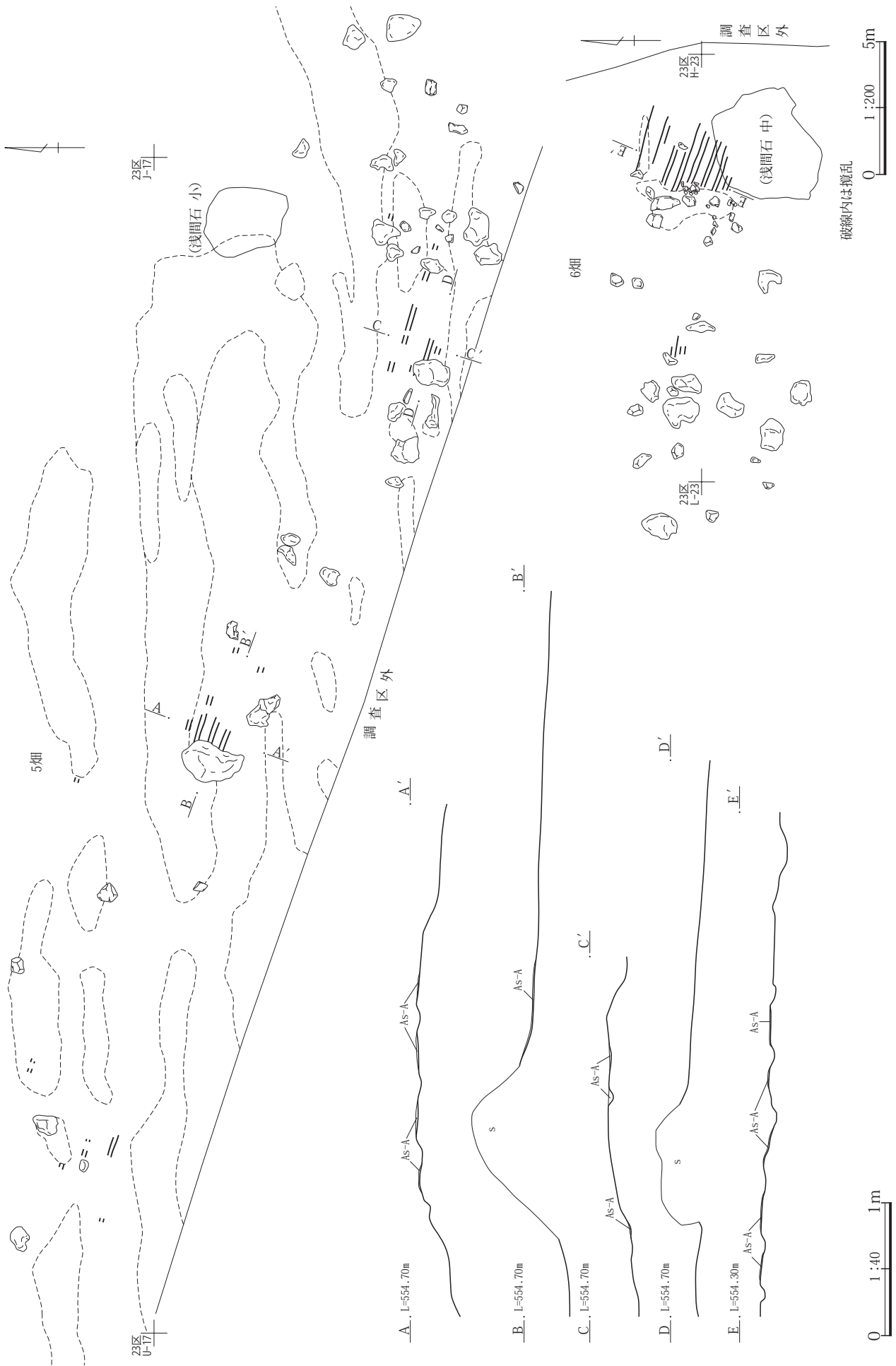
所見 比較的良好に形状をとどめるが、単位等の把握はできない。

備考 旧名称は7号畑、8号畑。





第43図 3号畑、4号畑



第44図 5号畑、6号畑

h 9号畑(第45図、PL.19)

位置 24区 K～L-24～25グリッド、34区 L～O-1～3グリッド。調査区西部に位置する。

形状等 不明。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 平坦面の直近からは畝が確認されていない。畝の一部がわずかに残るのみで、単位等の把握はできない。

h. 1 13号平坦面(第61図、PL.19)

位置 34区M～N- 2～3グリッド。9号畑北端中央よりに位置する。

規模 1.93m×1.73m。

長軸方向 N-3°-E。

i 10号畑(第46図、PL.20)

位置 34区U～X- 5～11グリッド。調査区北西部に位置する。

形状等 ピッチ0.39m。畝の走向N-77°-W。

重複 なし。

遺物 なし。

備考 平坦面2基を確認するが、他の畑と異なり平坦面の間隔が近接している。

i. 1 1号平坦面(第49図、PL.20)

位置 34区V-10～11グリッド。10号畑北部に位置する。

規模 2.24m×2.03m。

長軸方向 N-15°-E。

i. 2 2号平坦面(第50図、PL.20)

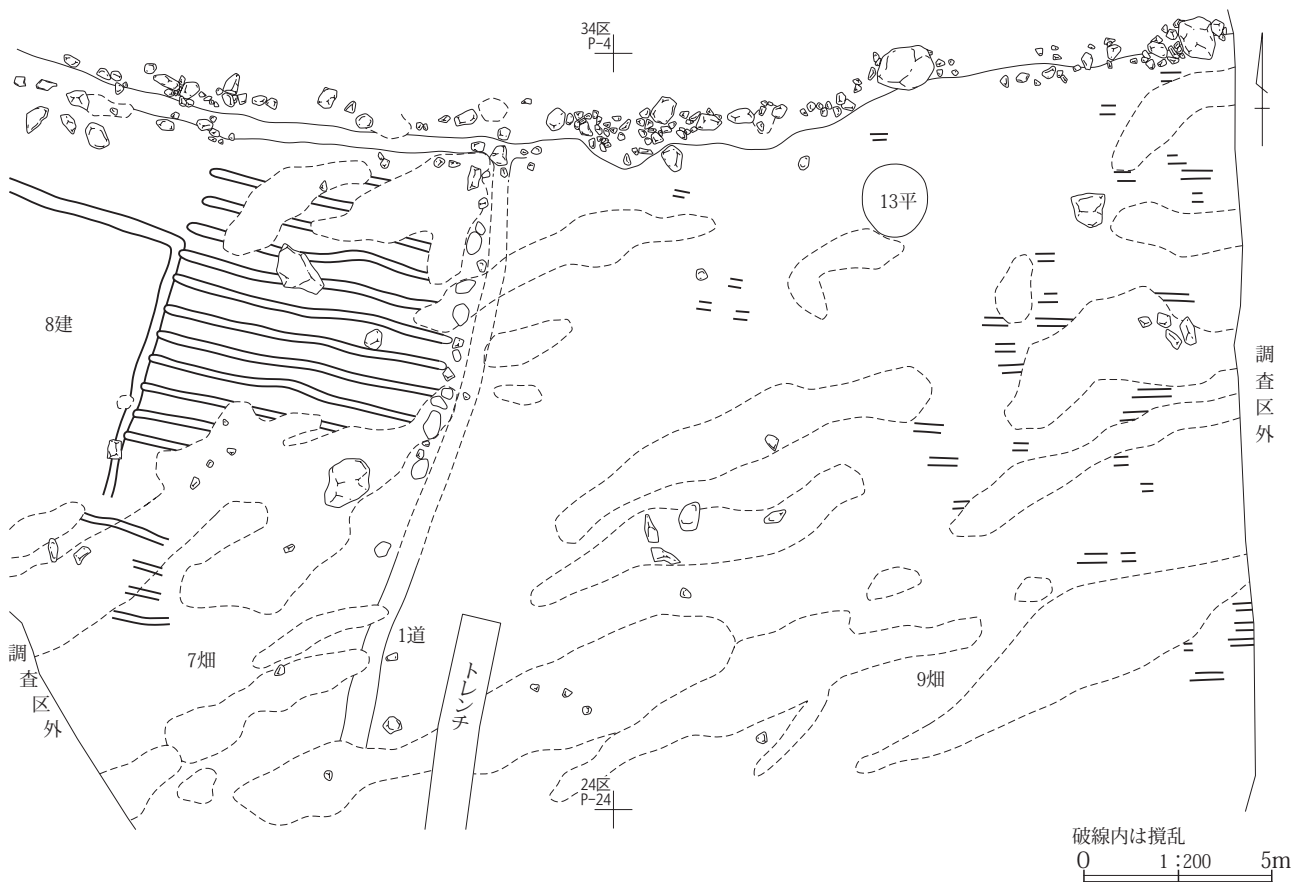
位置 34区W- 9グリッド。10号畑中央部西辺に位置する。

規模 1.46m×1.37m。

長軸方向 N-48°-E。

j 11号畑(第46図、PL.20)

位置 34区S～V- 4～13グリッド。調査区北西部に位置する。



第45図 7号畑、9号畑



第46図 10～13号畑

形状等 ピッチ0.40m。畝の走向N-82°-W。

重複 復旧溝群。

遺物 なし。

所見 復旧溝群より古い。

j. 1 3号平坦面(第51図)

位置 34区T~U- 9グリッド。11号畑中央部に位置する。

規模 2.04m×(1.35)m。

長軸方向 N-68°-E。

j. 2 4号平坦面(第52図、PL.20)

位置 34区U- 4~5グリッド。11号畑南辺に位置する。

規模 1.81m×1.79m。

長軸方向 N-40°-E。

k 12号畑(第46・62図、PL.20・21・57)

位置 34区Q~T- 3~12グリッド。調査区北西部に位置する。

形状等 ピッチ0.40m。畝の走向N-82°-W。

重複 なし。

遺物 畑耕作土中から石製品石臼(2)が出土している。

k. 1 5号平坦面(第53図、PL.20)

位置 34区R~S- 8~9グリッド。12号畑中央部北よりに位置する。

規模 1.93m×1.77m。

長軸方向 N-61°-E。

k. 2 6号平坦面(第54図)

位置 34区S- 4グリッド。12号畑南辺に位置する。

規模 1.84m×(1.33)m。

長軸方向 N-63°-W。

l 13号畑(第46・62図、PL.21・57)

位置 34区P~R- 3~12グリッド。調査区北西部に位置する。

形状等 ピッチ0.38m。畝の走向N-87°-W。

重複 なし。

遺物 耕作土中から寛永通寶(4)が出土している。

l. 1 7号平坦面(第55図)

位置 34区P- 8~9グリッド。13号畑中央部北よりに位置する。

規模 1.65m×1.65m。

l. 2 8号平坦面(第56図、PL.21)

位置 34区Q~R- 3~4グリッド。13号畑南辺に位置する。

規模 1.69m×1.64m。

長軸方向 N-80°-E。

m 14号畑(第47図、PL.21)

位置 34区N~P- 3~11グリッド。調査区北西部に位置する。

形状等 ピッチ0.38m。畝の走向N-88°-W。

重複 なし。

遺物 なし。

m. 1 9号平坦面(第57図)

位置 34区O- 8グリッド。14号畑中央部北よりに位置する。

規模 1.72m×1.72m。

m. 2 10号平坦面(第58図)

位置 34区O- 3~4グリッド。14号畑南辺に位置する。

規模 1.91m×1.83m。

長軸方向 N-45°-E。

n 15号畑(第47図、PL.21)

位置 34区L~N- 4~11グリッド。調査区北西部に位置する。

形状等 ピッチ0.39m。畝の走向N-89°-W。

重複 なし。

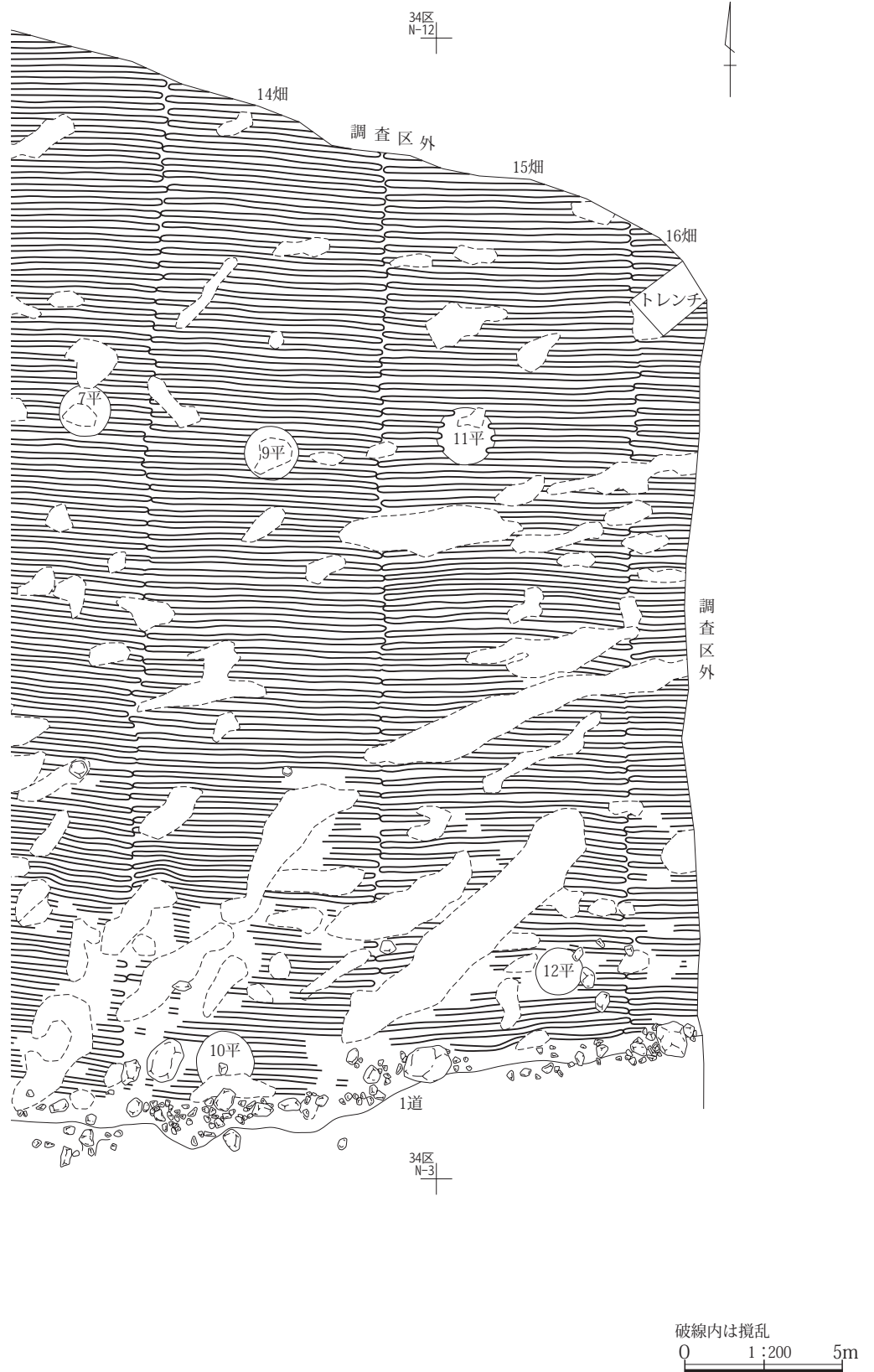
遺物 なし。

n. 1 11号平坦面(第59図)

位置 34区M- 8~9グリッド。15号畑中央部北よりに位置する。

規模 1.83m×1.81m。

長軸方向 N-77°-E。



第47図 14～16号畑

n. 2 12号平坦面(第60図)

位置 34区L~M-4グリッド。15号畑南辺に位置する。

規模 1.52m×1.44m。

長軸方向 N-31°-E。

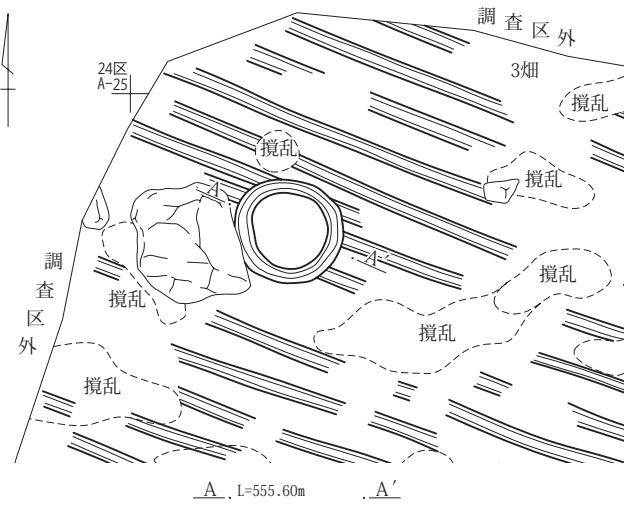
o 16号畑(第47図、PL.21)

位置 34区K~L-4~10グリッド。調査区北西部に位置する。

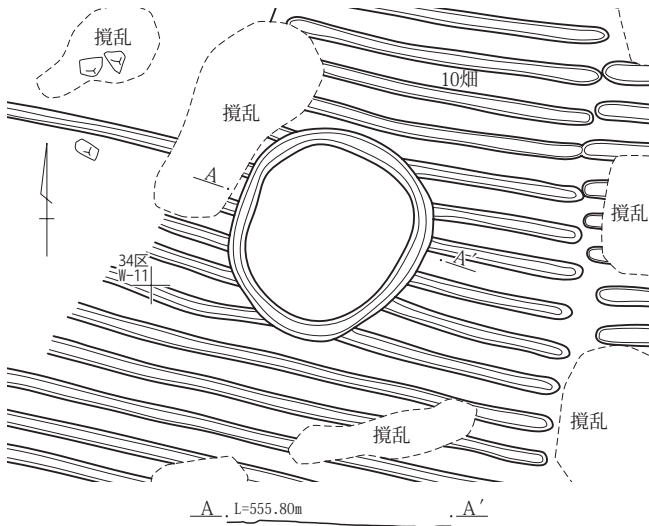
形状等 ピッチ0.39m。畝の走向N-88°-W。

重複 なし。

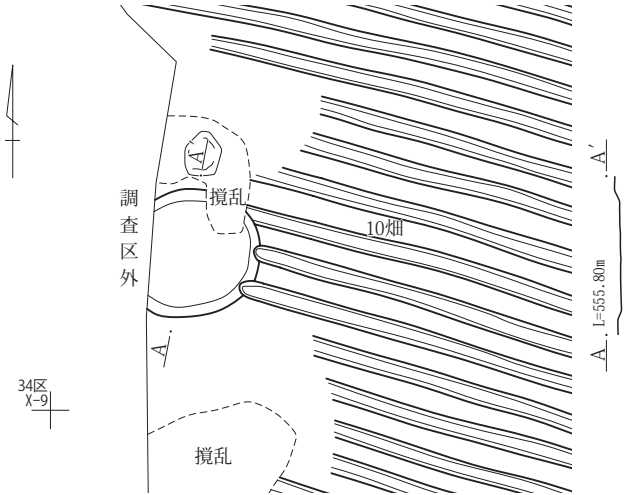
遺物 なし。



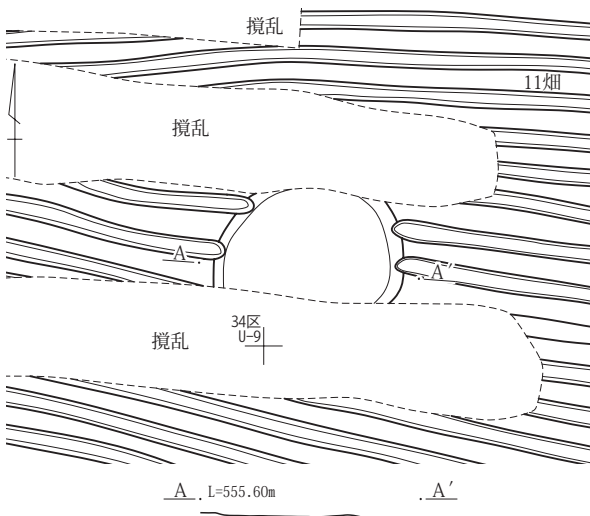
第48図 3-1号平坦面



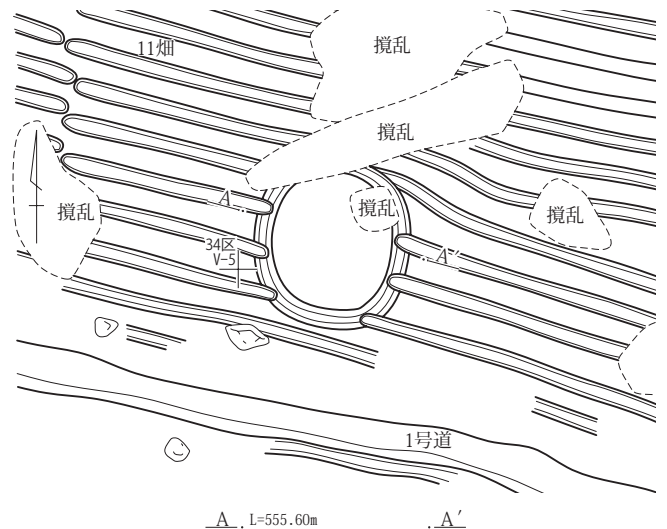
第49図 1号平坦面



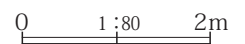
第50図 2号平坦面

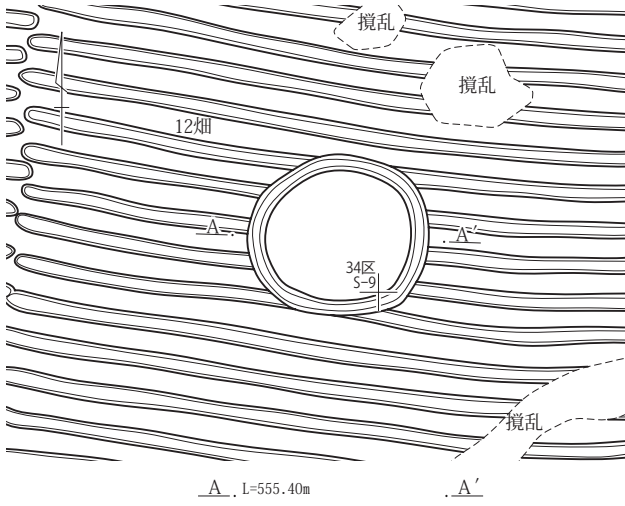


第51図 3号平坦面

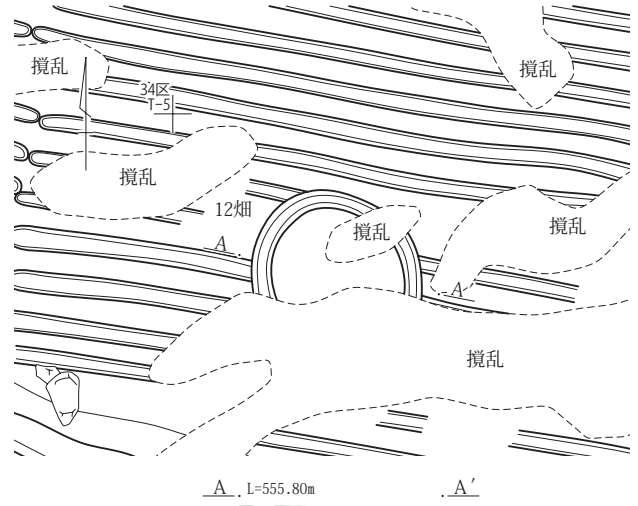


第52図 4号平坦面

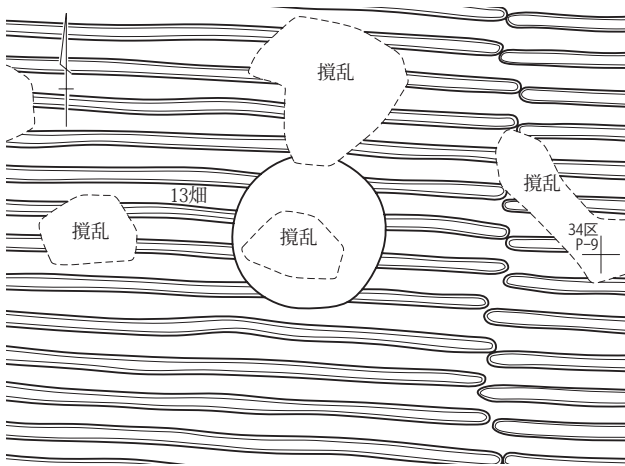




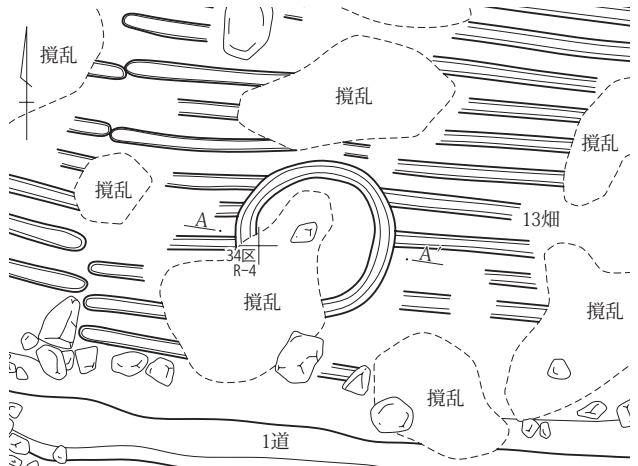
第53図 5号平坦面



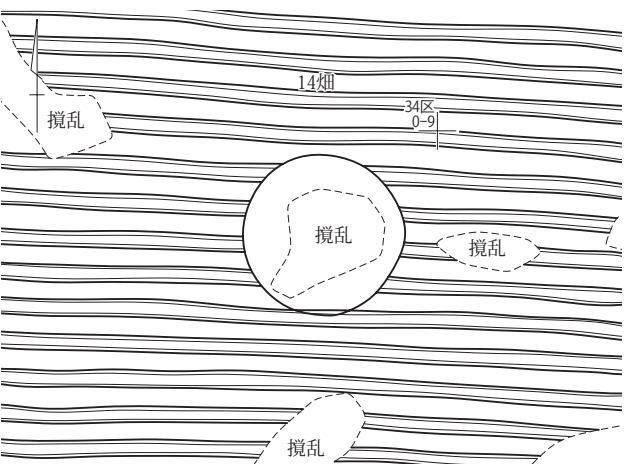
第54図 6号平坦面



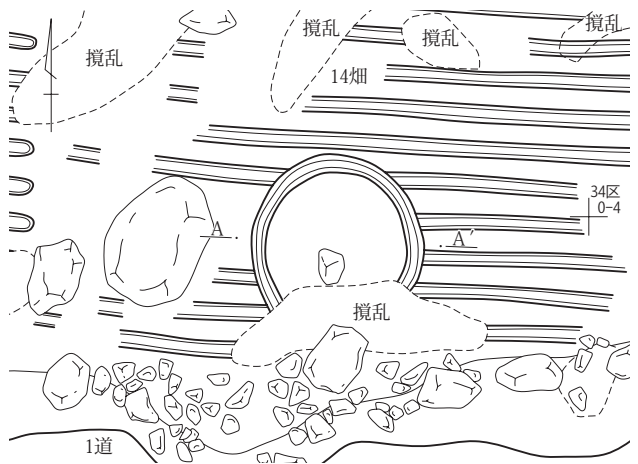
第55図 7号平坦面



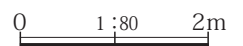
第56図 8号平坦面



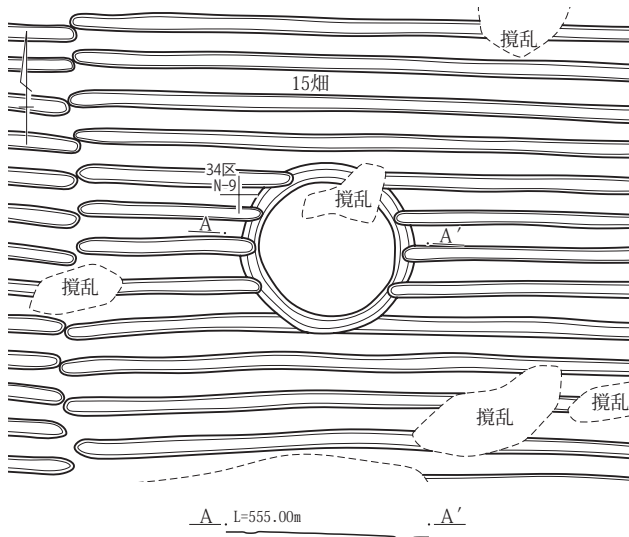
第57図 9号平坦面



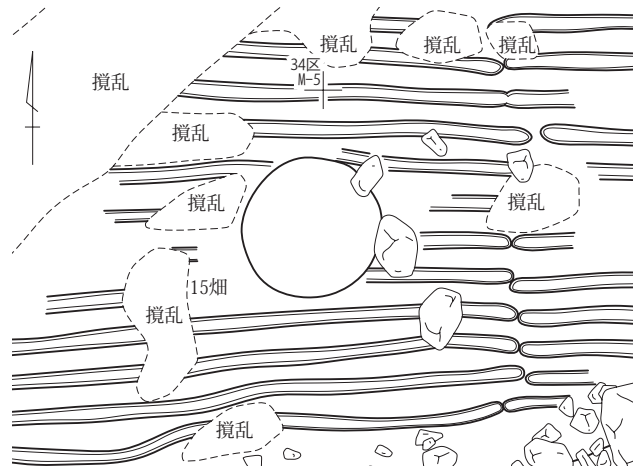
第58図 10号平坦面



第3章 確認された遺構と遺物

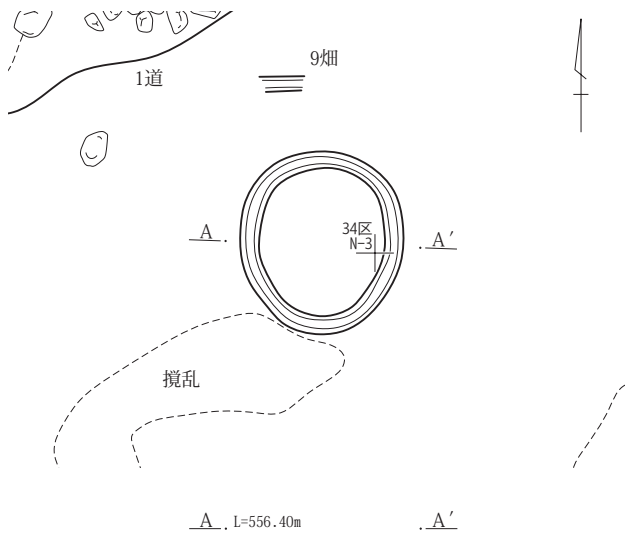


第59図 11号平坦面



第60図 12号平坦面

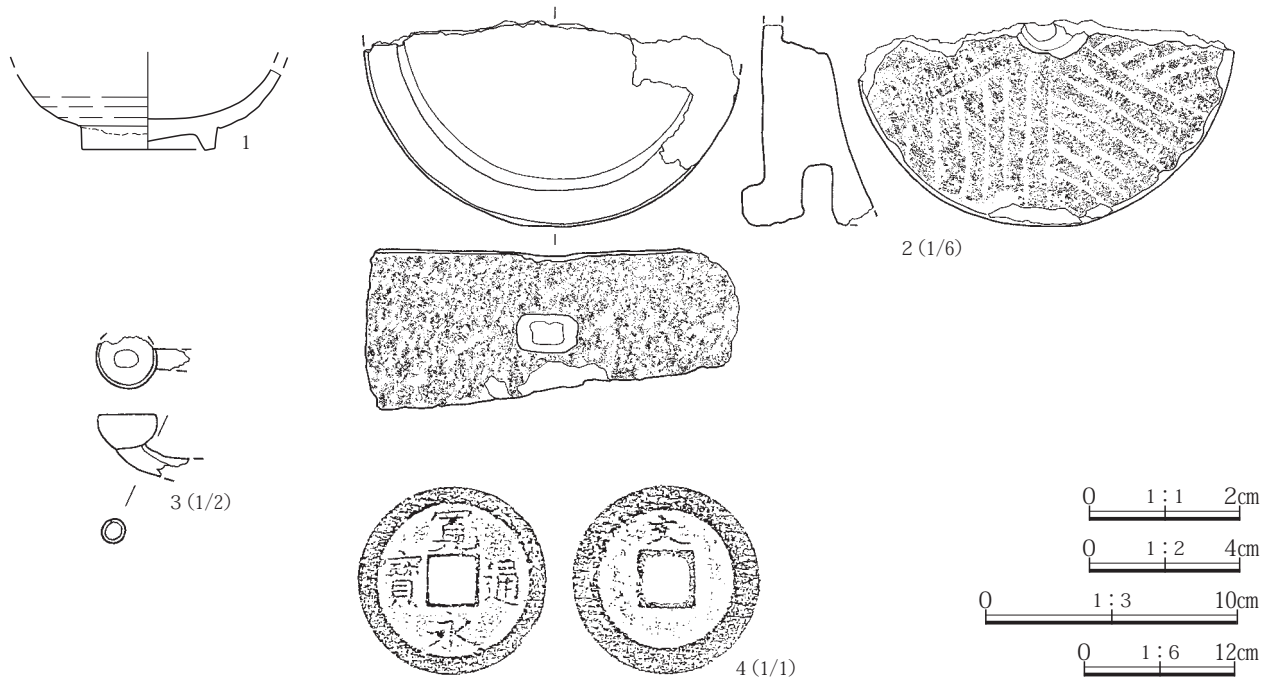
0 1:80 2m



第61図 13号平坦面

第24表 畑出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	厚			
第62図 PL.57	1	瀬戸・美濃 陶器 尾呂碗か	7号畑耕作土 体部下位～底部	口底 5.3	高 -	厚 -	白色鉍物少量含 む。/灰	高台内兜巾状をなす。内面から高台脇鉛釉。高台脇以下、 鉛釉を薄く化粧かけ。	17世紀後葉～ 18世紀前葉。
第62図 PL.57	2	石製品 石臼(上)	12号畑耕作土 1/2	径高 30.6 12.8	厚 5780.1	重 -	粗粒輝石安山岩	底面は摩滅し片減りする。挽目の痕跡が認められ摩滅 後に新たに挽目を入れている可能性がある。側面には 矩形の挽き手孔が認められる。底面中央に直径約30mm の軸受孔が認められる。	
第62図 PL.57	3	銅製品 キセル	7号畑耕作土	長幅 2.5 1.4	厚 1.7	重 1.73			
第62図 PL.57	4	古銭 寛永通寶	13号畑削土 完形	縦横 2.522 2.509	厚 0.120	重 2.91		背面に「丈」。	

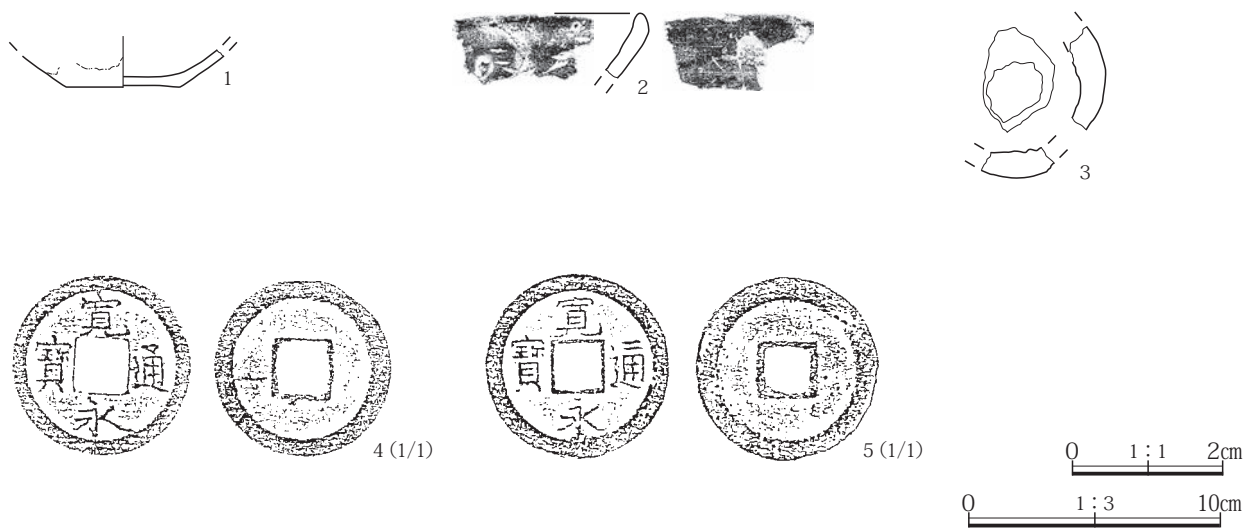


第62図 畑出土遺物

(4)遺構外出土の遺物

第25表 遺構外出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	厚			
第63図	1	瀬戸・美濃 陶器か 灯火皿か	34区 体部下位～底部 1/2	口底 4.6	高 -	厚 -	白色鈹物微量含 む。/灰白	口縁部外面以下回転篋削り。内面から口縁部外面やや厚めの鏝軸。	江戸時代。
第63図 PL.58	2	陶器か 取鍋か	33区H-0-1-3・ 23区G-Y-12-25 ・24区A-I- 13-24グリッド 破片	口底 -	高 -	厚 -	白色鈹物少量含 む。/灰白	陶器を取鍋に転用か。内面器表被熱により発泡したようにざらつく。外面器表被熱による荒れが認められ、暗赤色。	時期不詳。
第63図 PL.58	3	在地系土器 片口鉢	33区H-0-1-3・ 23区G-Y-12-25 ・24区A-I- 13-24グリッド 口縁部片	口底 -	高 -	厚 -	白色・黒色鈹物少 量含む。/灰	口縁部回転横撫。器壁はやや薄く、口縁端部付近で内湾して立ち上がる。	中世。
第63図 PL.58	4	古銭 寛永通寶	33区H-0-1-3・ 23区G-Y-12-25 ・24区A-I- 13-24グリッド 完形	縦 2.376 横 2.408	高 -	厚 0.123 重 1.95			
第63図 PL.58	5	古銭 寛永通寶	34区K-Y-1-13グ リッド 完形	縦 2.465 横 2.459	高 -	厚 0.164 重 3.41			
PL.58	6	銅製品	33区H-0-1-3・ 23区G-Y-12-25 ・24区A-I- 13-24グリッド	長 7.0 幅 5.1	高 -	厚 0.8 重 34.1			



第63図 遺構外出土遺物

2 2面(中近世)

2面は基本土層第7層のAs-Kk層の上位に位置する遺構により構成される。建物群1ユニット、掘立柱建物3棟、土坑26基、焼土遺構10か所、ピット列5条が確認された。遺構は一様に分布してはならず、特定の場所に偏る傾向が強い。

調査区北西部には、1面で確認された北西端建物群に先立つと考えられる掘立柱建物(11号掘立柱建物)が存在し、調査区西辺には、1面の西辺建物群に先立つと考えられる建物群(2面西辺建物群)が存在する。また調査区中央部からは2棟の掘立柱建物(1号掘立柱建物、2号掘立柱建物)が確認されている。調査区東部からは土壇墓と考えられる遺構(10号土坑)が1基確認されたにとどまる。また調査区北西部および調査区中央部からはピット列(1～5号ピット列)も確認されている。

(1)建物群

a 2面西辺建物群(第64図)

2面西辺建物群は調査区の西部、34区Q～T-1～3グリッドに位置する。

1間×1間の2棟(12号掘立柱建物、13号掘立柱建物)は桶が設置された土坑を伴っており、後架と推察される。この2棟を畑地等に設置された独立した後架の類と想定せず、近接する掘立柱建物の附属屋としての位置づけを想定し、2面西辺建物群は、主たる建物と考えられる掘

立柱建物1棟(9号掘立柱建物)と、これに隣接する附属屋と考えられる掘立柱建物2棟により構成されるものとした。

なお、9号掘立柱建物の南および東南の方向から土坑4基が確認されているが、これらの遺構と建物群との関係性を確立できなかったため、当該ユニットに含めていない。

a.1 9号掘立柱建物(第65・68図、PL.22・58)

位置 34区S～T-1～3グリッド。調査区西辺に位置する。

形状等 柱穴10基が確認される。1間×4間の南北棟。規模 桁行7.60m、梁間3.48m。

桁行方向 N-23°-E。

付属施設 床下土坑。付属施設については後述する。

重複 8号掘立柱建物2面P21(1面)。

遺物 P3から羽口が付着した椀形鍛冶滓(2)が出土している。

所見 本遺構の年代は、出土遺物と出土層位から中近世に比定される。8号掘立柱建物2面P21より古い。

備考 調査時の名称は9号建物。

a.1.1 床下土坑(第65・68図)

位置 34区T-2グリッド。建物中央部北よりに位置する。

形状 卵形。

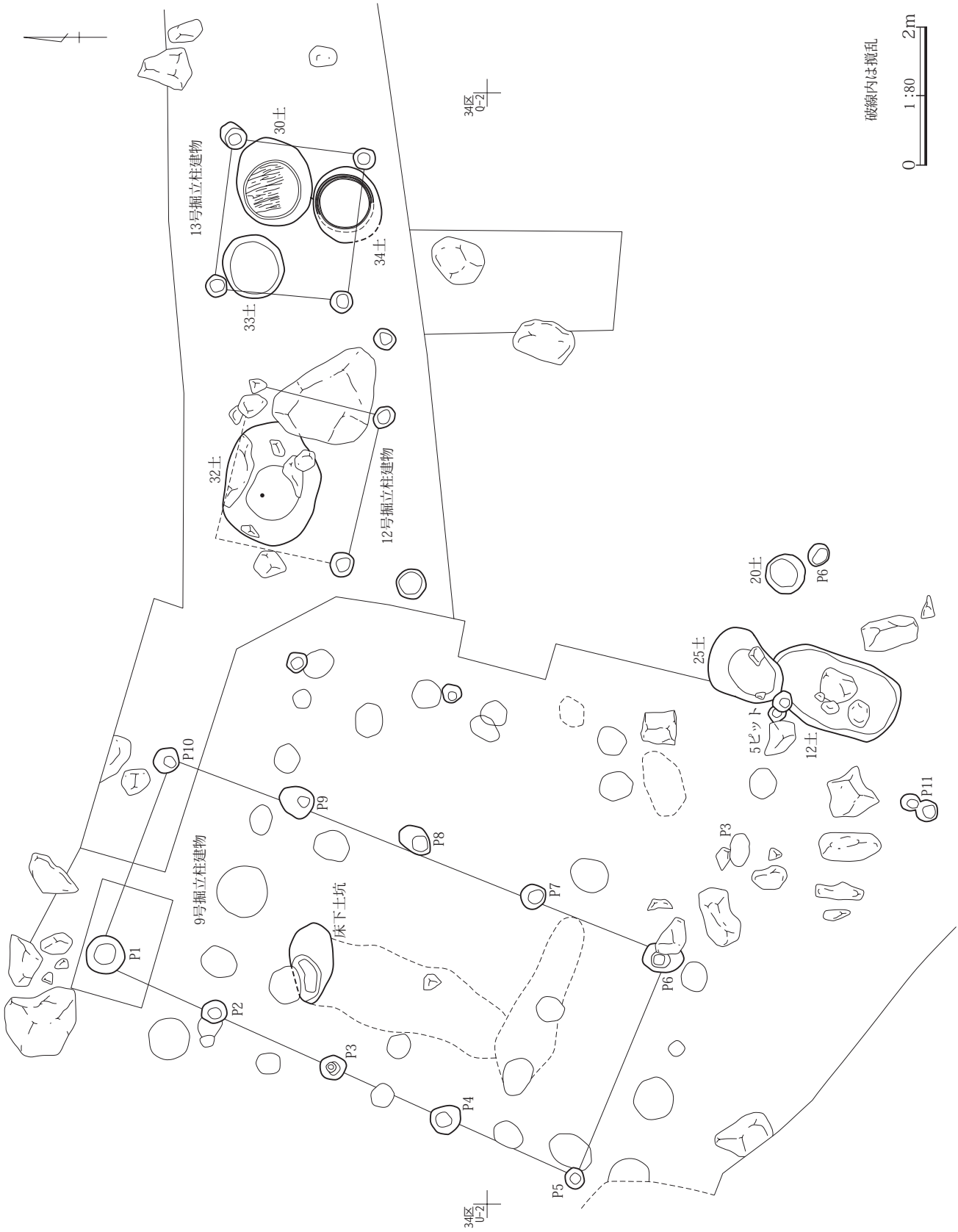
規模 1.14m×0.63m、深さ0.48m。

第26表 9号掘立柱建物柱間計測表

	桁行柱間		桁行柱間		桁行柱間		桁行柱間		桁行	
	P5	— 2.08 —	P4	— 1.79 —	P3	— 1.85 —	P2	— 1.79 —	P1	7.51
梁行柱間	3.39		3.48		3.46		3.30		2.94	
	P6	— 2.00 —	P7	— 1.83 —	P8	— 1.77 —	P9	— 2.00 —	P10	7.60
梁間	3.39		3.48		3.46		3.30		2.94	

第27表 9号掘立柱建物ピット計測表

ピット	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
位置	34区T-3	34区T-2-3	34区T-2	34区T-2	34区T-1	34区T-1	34区S-1	34区S-2	34区S-2	34区S-3
規模	長	0.56	0.37	0.38	0.46	0.29	0.60	0.38	0.53	0.50
	短	0.54	0.33	0.35	0.40	0.29	0.41	0.35	0.35	0.43
	深	0.51	0.61	0.51	0.53	0.62	0.36	0.38	0.41	0.53
形状	円形	円形	円形	卵形	円形	長円形	円形	長円形	卵形	円形
長軸方向	N-65°-E	N-23°-W	N-15°-W	N-35°-W	—	N-3°-W	N-40°-W	N-34°-E	N-25°-E	N-47°-W
重複										
旧名称	9号建物P10	9号建物P9	9号建物P8	9号建物P7	9号建物P6	9号建物P5	9号建物P4	9号建物P3	9号建物P2	9号建物P1



第64図 2面西辺建物群

長軸方向 N-93°-E。

埋没土 不明。

重複 8号掘立柱建物2面P21(1面)。

遺物 覆土から在地系土器内耳鍋(1)が出土している。

所見 本遺構の年代は出土層位から中近世に比定される。8号掘立柱建物2面P21より古い。8号掘立柱建物2面のP21から出土した内耳鍋は本遺構遺物の混入の可能性が高い。

備考 調査時の名称は、8号建物P22。

形状等 柱穴2基と礎石と思われる石1か所が確認される。1間×1間の東西棟。

規模 桁行2.19m、梁間1.89m。

桁行方向 N-13°-E。

埋没土 不明。

付属施設 土坑1基。付属施設については後述する。

重複 なし。

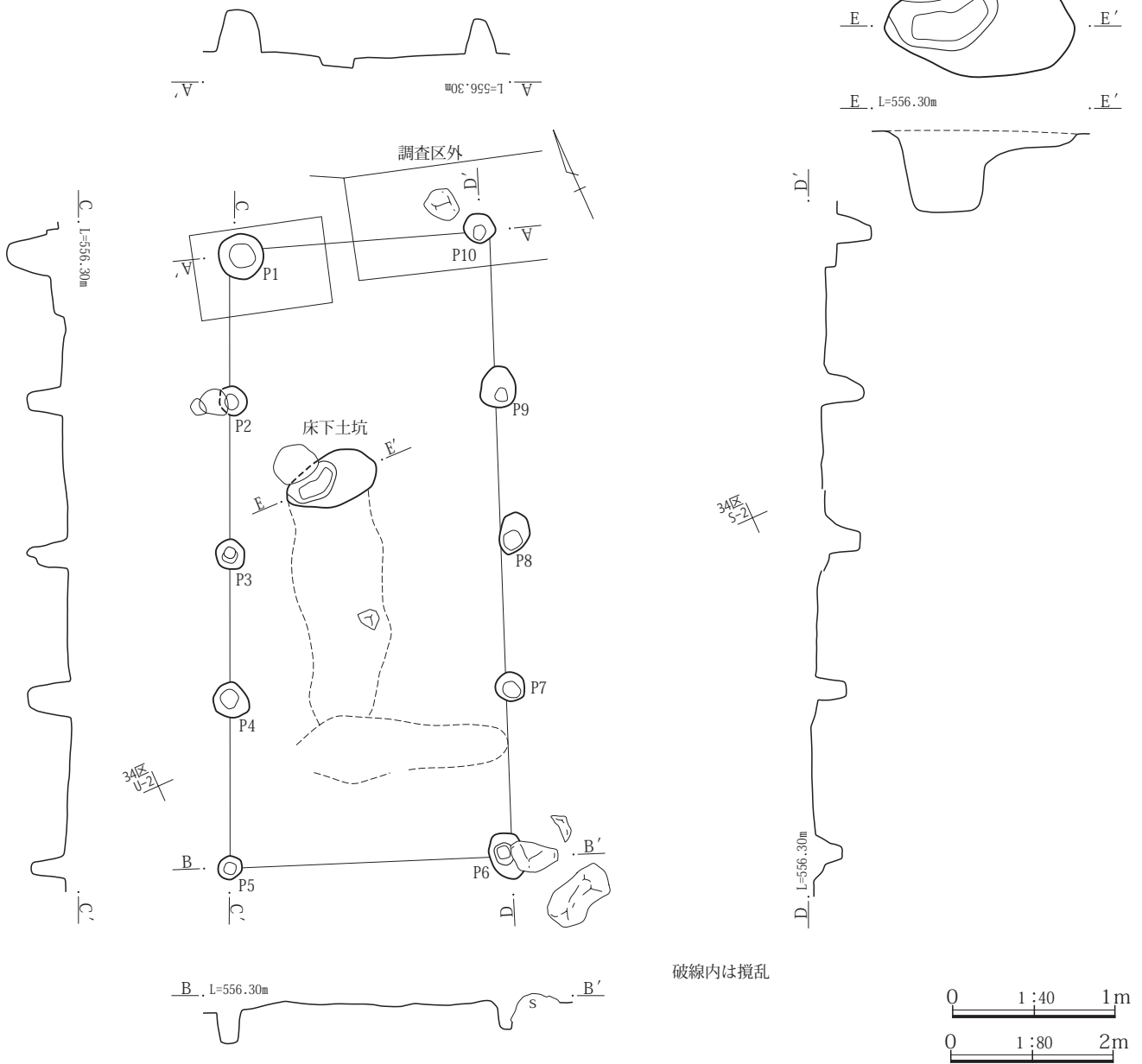
遺物 なし。

床下土坑

34区
T-3

a.2 12号掘立柱建物(第66図、PL.23)

位置 34区R-2グリッド。調査区西部に位置する。



第65図 9号掘立柱建物

所見 本遺構の年代は出土層位から中近世に比定される。

備考 調査時の名称は12号建物。

a.2.1 32号土坑(第66図、PL.23)

位置 34区R-2グリッド。建物北側に位置する。

形状 不整形。

規模 1.32m×1.14m、深さ0.40m。

長軸方向 N-77°-W。

埋没土 地山砂土と上位暗褐色土を不均質に含む、締りのやや強い暗褐色土。

重複 なし。

遺物 覆土上層から近世の国産磁器片1片(8g)が出土している。また土坑底部に、わずかな木材腐朽層が確認されている。

所見 本遺構の年代は、出土層位および覆土から中近世に比定される。桶を設置した遺構と推測される。

a.3 13号掘立柱建物(第67・68図、PL.23・24)

位置 34区Q-2～3グリッド。調査区西部に位置する。

形状等 柱穴4基が確認される。1間×1間の東西棟。

規模 桁行2.12m、梁間1.89m。

桁行方向 N-7°-E。

埋没土 不明。

付属施設 土坑3基。

重複 なし。

第28表 12号掘立柱建物柱間計測表

		桁行柱間				桁行
梁行柱間				石		
						1.89
	P1	—	2.19	—	P2	2.19
梁間						1.89

第30表 13号掘立柱建物柱間計測表

		桁行柱間				桁行	
梁行柱間		P4	—	2.12	—	P3	2.12
							1.89
		1.83				1.89	
	P1	—	2.09	—	P2	2.09	
梁間		1.83				1.89	

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。建物内に設置された34号土坑の南端は、建物南側柱穴2基の南端を結んだ線より南に位置している。建物南面は、床から屋根までをふさぐ壁面となっていなかったと推察される。

備考 調査時の名称は13号建物。

a.3.1 30号土坑(第67図、PL.24)

位置 34区Q-2グリッド。建物の北東隅に位置する。

形状 長円形。

規模 1.28m×1.08m、深さ0.32m。

長軸方向 N-58°-E。

埋没土 やや粘性ある不均質な暗褐色土に覆われ、底面からは暗褐色の灰層が確認されている。

重複 なし。

遺物 調査時に、底部から桶底板と思われる直径76cmの腐食した木材が確認されている。

所見 本遺構の年代は、出土層位および覆土から中近世に比定される。桶を設置した遺構と推測される。建物内の土坑3基のうちで最も新しいものと考えられる。

a.3.2 33号土坑(第68図、PL.24)

位置 34区Q-2グリッド。建物の北西隅に位置する。

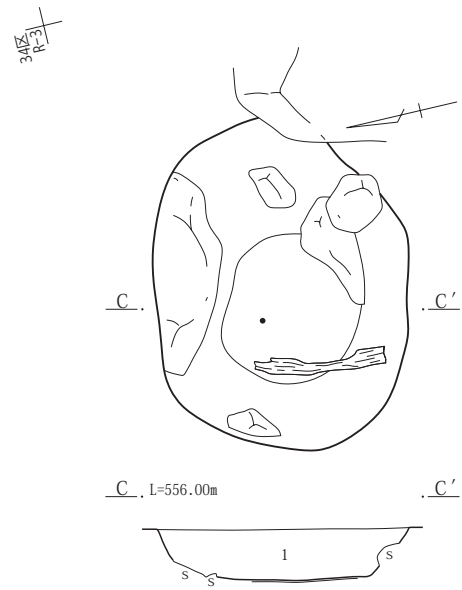
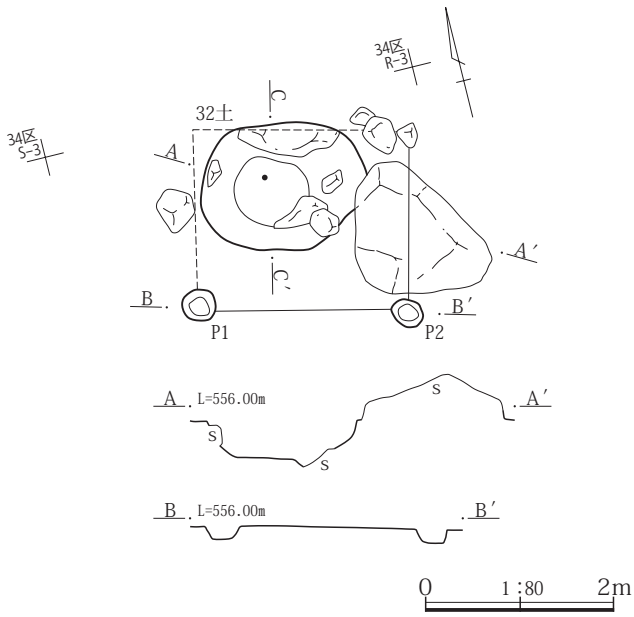
形状 円形。

第29表 12号掘立柱建物ピット計測表

ピット	P1	P2
位置	34区R-2	34区R-2
規模	長	0.34
	短	0.28
	深	0.14
形状	長円形	円形
長軸方向	N-37°-W	—
重複		
旧名称		

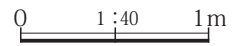
第31表 13号掘立柱建物ピット計測表

ピット	P1	P2	P3	P4
位置	34区Q-2	34区Q-2	34区Q-2	34区Q-2-3
規模	長	0.33	0.42	0.32
	短	0.32	0.33	0.30
	深	0.19	0.18	0.23
形状	円形	円形	長円形	円形
長軸方向	N-10°-W	N-18°-E	N-35°-E	N-80°-E
重複				
旧名称				

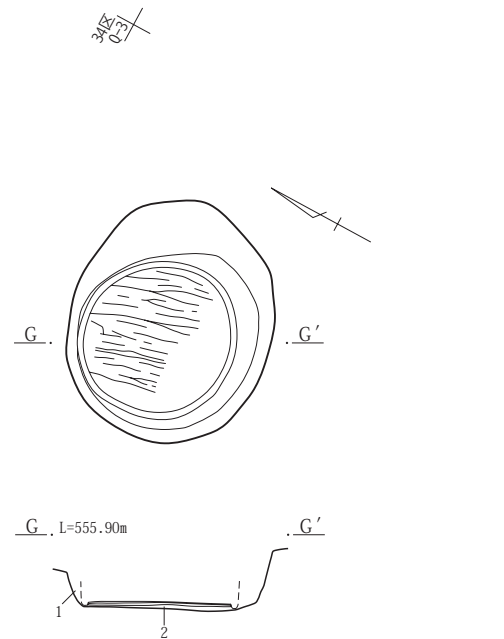
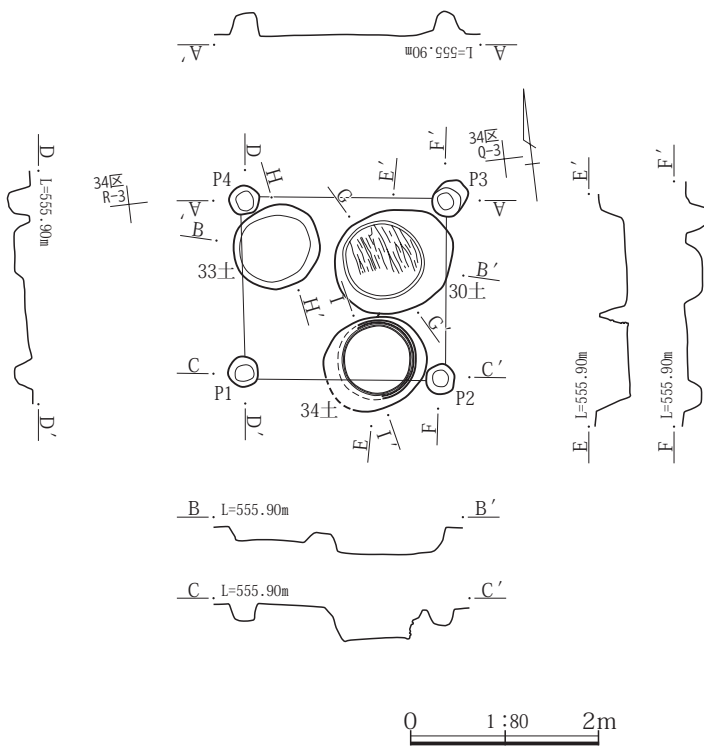


32土坑

- 1 暗褐色土 締りやや強く、地山砂土と上位暗褐色土を不均質に含む。全体に径2cm大の円形のパッチワーク状の斑模様が確認できる。底部にわずかな木材腐朽層がみられる。小円礫は、地山層の崩落か？覆土から、白色陶磁器片出土あり。

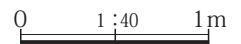


第66図 12号掘立柱建物



30土坑

- 1 暗褐色土 やや粘性ある不均質土。空隙があったことを思わせるような、不均質な部分あり。
- 2 褐色土 焼土灰とも思われる色調暗い灰層。均質。腐食の進む桶底板の下位に薄く、均質に敷かれている様相。



第67図 13号掘立柱建物 1

第3章 確認された遺構と遺物

規模 0.91m×0.91m、深さ0.15m。

埋没土 地山砂土と上位暗褐色土を不均質に含む、締りのやや強い暗褐色土。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位および覆土から中近世に比定される。桶を設置した遺構と推測される。

a.3.3 34号土坑(第68図、PL.24)

位置 34区Q-2グリッド。建物南東隅に位置する。

形状 円形。

規模 1.09m×0.95m、深さ0.37m。

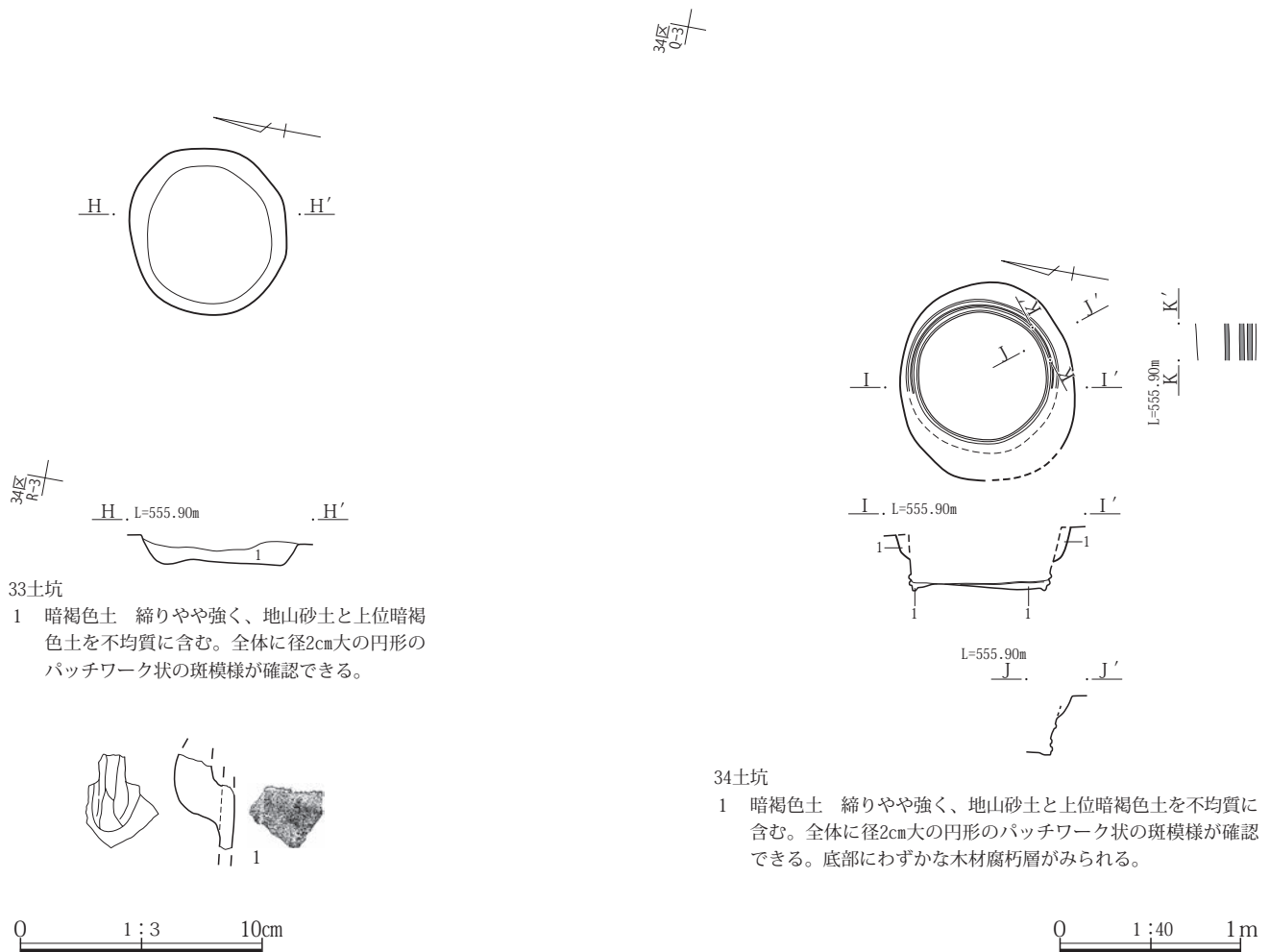
長軸方向 N-77°-E。

埋没土 地山砂土と上位暗褐色土を不均質に含む、締りのやや強い暗褐色土。

重複 なし。

遺物 調査時に、底部からわずかな木材腐朽層が確認されている。また資料化には至らなかったが、覆土から近世の国産施釉陶器片1点(4g)が出土している。

所見 本遺構の年代は、出土層位および覆土から中近世に比定される。桶を設置した遺構と推測される。



第68図 13号掘立柱建物2。9号掘立柱建物出土遺物

第32表 9号掘立柱建物出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	厚重			
第68図	1	在地系土器 内耳鍋	床下土坑 耳部片	-	-	-	白色鈹物、赤色粒 含む。/褐	断面から内面器表褐色、外面器表黒褐色。厚みのある 耳を内面に貼り付け。8建2面P21出土遺物と同一個体か。	信濃型、中世。
PL.58	2	鉄滓 椀形鍛冶滓	3P	長幅 6.3	厚重 7.2 251.30			羽口付着。	

(2)掘立柱建物

1号掘立柱建物と2号掘立柱建物は調査区中央部から近接して確認された。また建物の西側からは1号ピット列と2号ピット列も確認されている。これらの遺構の帰属年代が同時性を満たす根拠に恵まれないため、建物群としての取扱は見合わせた。

11号掘立柱建物は、5号礎石建物に先行する形で存在したと推測されるが、直接の関連は認められなかった。

a 1号掘立柱建物(第69図、PL.25・26)

位置 24区G～I-18～19グリッド。調査区中央部に位置する。

形状等 柱穴12基と礎石がわりと思われる石1か所が確認される。2間×3間の東西棟。

規模 桁行7.97m、梁間3.64m。

桁行方向 N-76°-W。

埋没土 ごくわずかに炭化粒や黄色軽石粒および白色軽石粒を含む暗褐色土。なおP2埋土にはAs-Kkが乱れてはいる。

重複 3号土坑、8号土坑。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は出土層位およびP2埋土から中世に比定される。3号土坑、8号土坑より新しい。なおP10は

P11より新しく、柱を建て替えたものと推察される。

b 2号掘立柱建物(第70・71図、PL.25・26)

位置 24区E～H-20～22グリッド。調査区中央部に位置する。

形状等 柱穴33基と礎石がわりと思われる石2か所が確認される。4間×7間の東西棟。

規模 桁行12.9m、梁間6.73m。

桁行方向 N-78°-W。

本体構造 二重となった柱穴列の外周と内周の間隔は、内周柱穴列の梁間の半分にもおよばない。2間×5間の四辺に張り出し部を設けた4間×7間と推測される。

埋没土 ごくわずかに炭化粒や黄色軽石粒および白色軽石粒を含む暗褐色土。なおP24とP25の埋土は地山黄褐色ロームブロックを1:1に含む。

重複 4号土坑、5号土坑、6号土坑。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。4号土坑、5号土坑、6号土坑より新しい。北辺中央部のP20とP21、南辺中央東よりのP25とP26とP27、東辺南端のP34とP35の各柱穴については、近接する柱穴間の時間差に関するデータを得られなかった。改修を示す事例と複数柱を用いた事例の両者が想定される。

第33表 1号掘立柱建物ピット計測表1

ピット	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
位置	24区I-19	24区H-19	24区H-19	24区G-18-19	24区I-18	24区H-18	24区H-18	24区G-18	24区H-18	24区H-18
規模	長	0.23	0.24	0.26	0.24	0.22	0.22	0.21	0.24	0.19
	短	0.23	0.19	0.21	0.23	0.21	0.21	0.19	0.23	0.17
	深	0.24	0.13	0.14	0.24	0.40	0.36	0.28	0.13	0.18
形状	円形	長円形	長円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形
長軸方向	—	N-25°-E	N-40°-E	N-19°-W	N-21°-E	N-28°-W	N-63°-W	N-41°-E	N-38°-W	N-74°-E
重複										P11
旧名称										

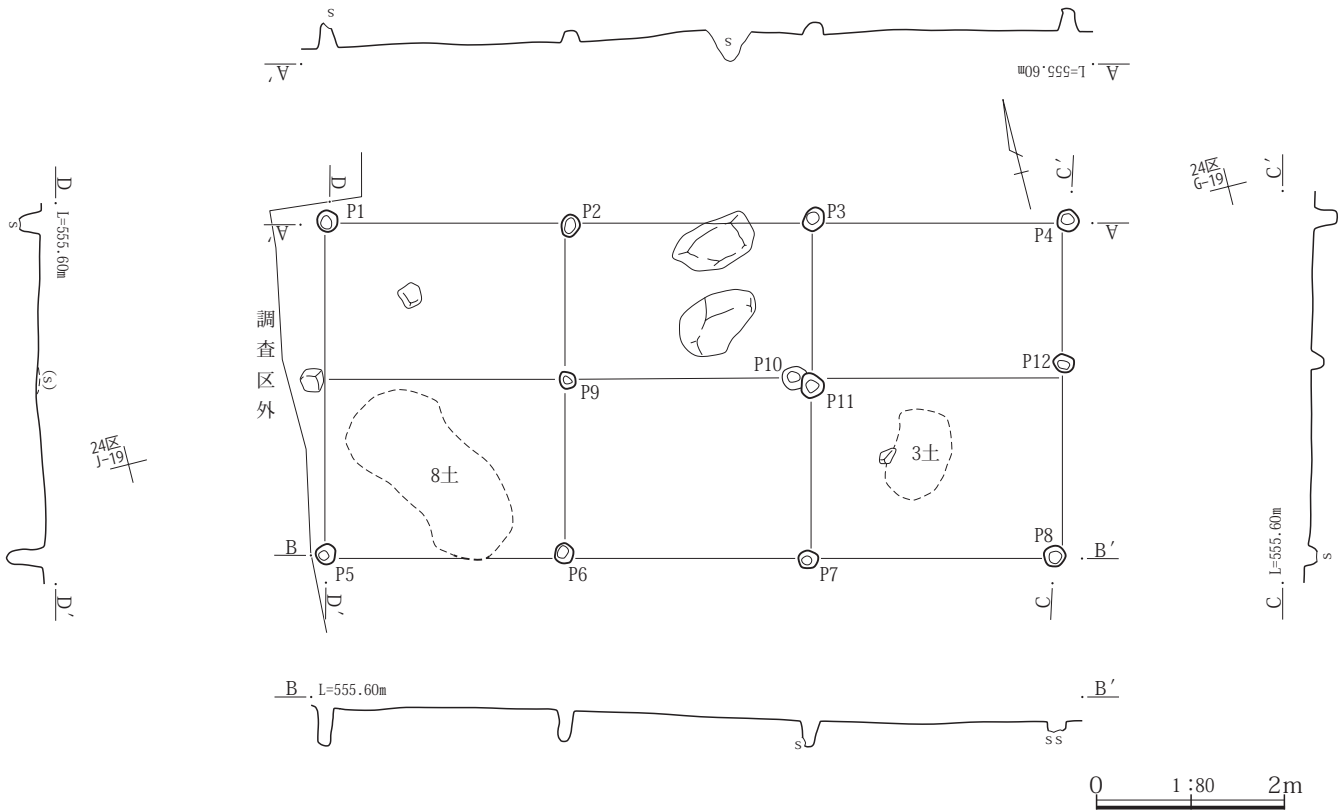
第34表 1号掘立柱建物ピット計測表2

ピット	P11	P12
位置	24区H-18	24区G-18
規模	長	0.26
	短	0.23
	深	0.18
形状	円形	長円形
長軸方向	N-24°-W	N-57°-W
重複	P10	
旧名称		

第35表 1号掘立柱建物柱間計測表

	桁行柱間		桁行柱間		桁行柱間		桁行
	P1	P2	P3	P4	P9	P12	
梁行柱間	— 2.58 —	— 2.57 —	— 2.69 —	— 7.84			
石	1.67	1.64	1.79	1.53			
	— 2.70 —	— 2.59 —	— 2.68 —	— 7.97			
梁行柱間	1.86	1.83	1.85	2.05			
	— 2.53 —	— 2.60 —	— 2.62 —	— 7.75			
梁間	3.53	3.47	3.64	3.58			

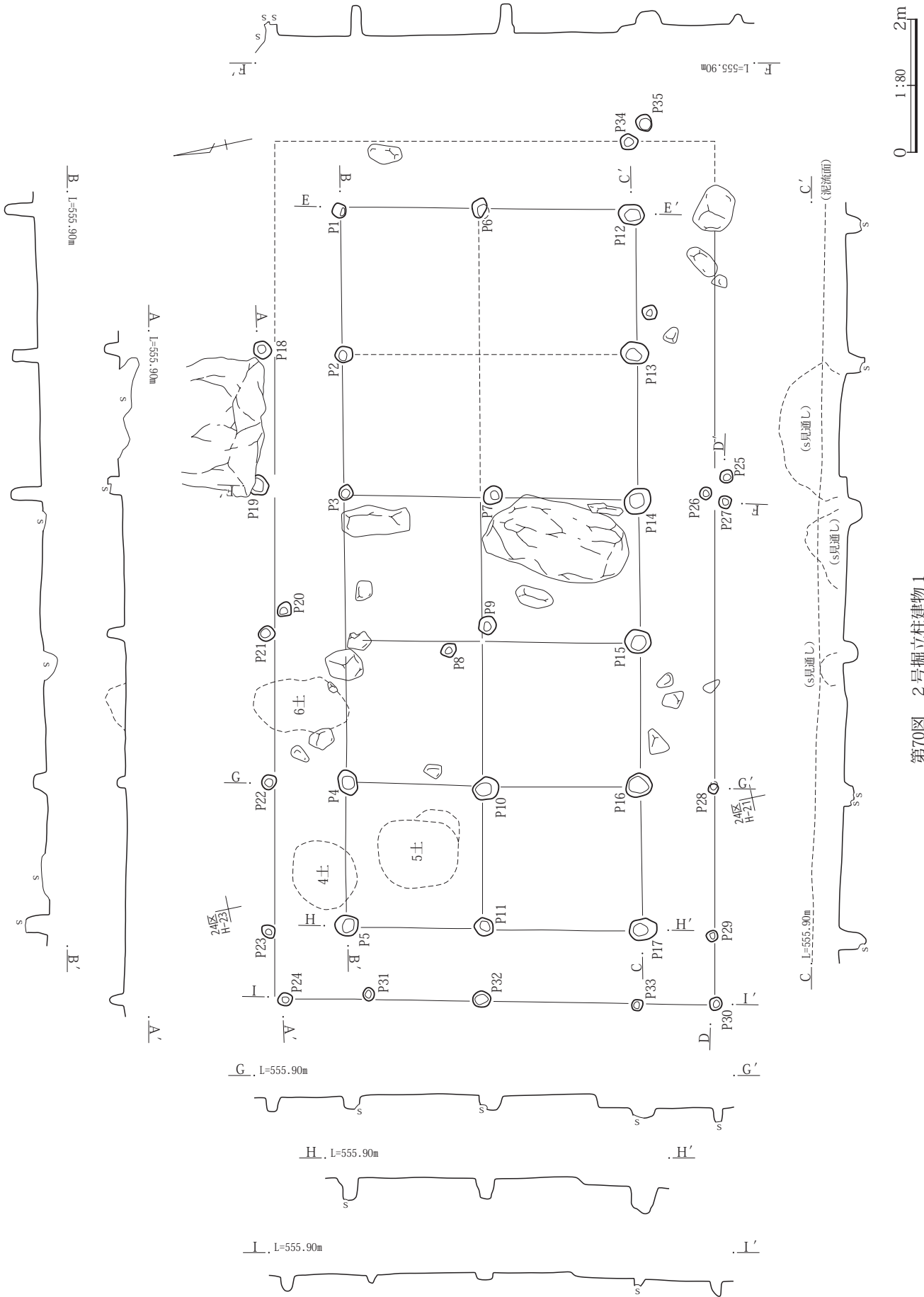
第3章 確認された遺構と遺物



第69図 1号掘立柱建物

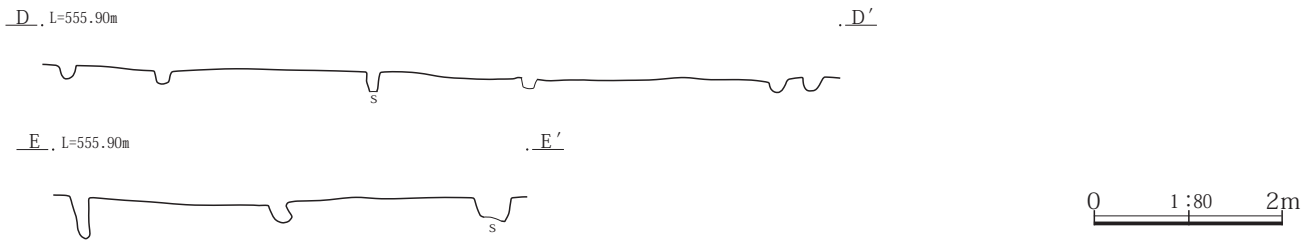
第36表 2号掘立柱建物柱間計測表

	桁行 柱間	桁行 柱間	桁行 柱間	桁行 柱間	桁行 柱間	桁行 柱間	桁行 柱間	桁行 柱間	桁行 柱間	桁行 柱間	内周 桁行	外周 桁行
梁行柱間	P24 — 1.04 — P23 — 2.22 — P22 — 2.24 — P21 — 2.22 — P19 — 2.02 — P18	1.26	1.18	1.18	1.18	1.29	1.22				10.68	
	P31 — 1.06 — P5 — 2.10 — P4 — 2.06 — 石 — 4.34 — P3 — 2.08 — P2 — 2.16 — P1	1.70	2.06	2.06	2.10	2.22		2.10				
梁行柱間	P32 — 1.08 — P11 — 2.06 — P10 — 2.42 — P9 — 1.96 — P7 —	2.30	2.36	2.28	2.26	2.18	4.36	2.26	4.30 — P6		10.74	
	P33 — 1.14 — P17 — 2.16 — P16 — 2.12 — P15 — 2.14 — P14 — 2.18 — P13 — 2.08 — P12 — 1.08 — P34	1.20	1.08	1.14		1.04		1.22			10.68	12.9
梁行柱間	P30 — 1.02 — P29 — 2.22 — P28 —					4.41 — P26 — 4.16			— 石			
内周梁間		4.42	4.43	4.36	4.40	4.36	4.36					
外周梁間	6.46	6.68	6.66		6.73							



第70図 2号掘立柱建物1

第3章 確認された遺構と遺物



第71図 2号掘立柱建物2

第37表 2号掘立柱建物ピット計測表1

ピット	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	
位置	24区E-22	24区F-22	24区F-22	24区G-22	24区H-22	24区E-21	24区F-21	24区G-21-22	24区G-21	24区G-21-22	
規模	長 短 深	0.22 0.21 0.47	0.26 0.25 0.40	0.24 0.21 0.46	0.39 0.27 0.21	0.35 0.31 0.36	0.30 0.28 0.22	0.31 0.26 0.44	0.24 0.20 0.21	0.27 0.25 0.22	0.39 0.34 0.22
形状	円形	円形	円形	長円形	円形	不整形	卵形	円形	円形	不整形	
長軸方向	N-64°-W	N-31°-W	N-64°-W	N-82°-E	N-22°-E	N-51°-W	N-38°-W	N-20°-W	N-22°-W	N-12°-W	
重複											
旧名称											

第38表 2号掘立柱建物ピット計測表2

ピット	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18	P19	P20	
位置	24区H-22	24区E-20-21	24区F-21	24区G-21	24区G-21	24区G-21	24区H-21	24区E-F-22	24区F-22	24区F-22	
規模	長 短 深	0.29 0.27 0.31	0.39 0.30 0.23	0.42 0.33 0.26	0.43 0.37 0.22	0.39 0.35 0.24	0.40 0.35 0.16	0.43 0.31 0.41	0.28 0.25 0.27	0.30 (0.21) 0.21	0.24 0.21 0.15
形状	円形	長円形	長円形	長円形	円形	円形	長円形	円形	長円形	隅丸方形	
長軸方向	N-14°-E	N-20°-E	N-16°-E	N-14°-W	N-5°-E	N-25°-W	N-7°-W	N-54°-E	N-52°-W	N-39°-W	
重複											
旧名称											

第39表 2号掘立柱建物ピット計測表3

ピット	P21	P22	P23	P24	P25	P26	P27	P28	P29	P30	
位置	24区F-G-22	24区G-22	24区H-22	24区H-22	24区F-20	24区F-20	24区F-20	24区G-21	24区H-21	24区H-21	
規模	長 短 深	0.24 0.21 0.27	0.34 0.21 0.23	0.23 0.19 0.23	0.23 0.20 0.23	0.21 0.19 0.15	0.19 0.18 0.08	0.21 0.20 0.14	0.16 0.15 0.21	0.17 0.16 0.13	0.21 0.20 0.22
形状	円形	円形	隅丸方形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	
長軸方向	N-31°-W	N-31°-W	N-51°-E	N-14°-W	N-11°-W	N-46°-W	N-17°-W	N-15°-W	N-13°-W	N-47°-W	
重複											
旧名称											

第40表 2号掘立柱建物ピット計測表4

ピット	P31	P32	P33	P34	P35	
位置	24区H-22	24区H-22	24区H-21	24区E-20	24区E-20	
規模	長 短 深	0.20 0.18 0.09	0.27 0.25 0.11	0.19 0.17 0.12	0.25 0.24 0.07	0.29 0.27 0.22
形状	円形	円形	円形	円形	円形	
長軸方向	N-81°-W	N-8°-W	N-24°-W	N-30°-E	N-46°-W	
重複						
旧名称						

c 11号掘立柱建物(第72・73図、PL.27・28・58)

位置 34区W～Y-12～13グリッド。調査区北西端に位置する。

形状等 柱穴22基を確認する。3間×4間を基本形とした東西棟を確認する。

規模 桁行6.39m、梁間5.97m。

桁行方向 N-77°-W。

本体構造 二重コの字の柱穴列が確認されるが、建物の西端は調査区外に続くものと考えられる。また二重となった柱穴列の外周と内周の間隔は、内周柱穴列の梁間の半分にもおよばない。1間×3間の四辺に張り出し部を設けた、3間×4間ないし3間×5間が基本プランと推測される。

埋没土 炭化粒をわずかに含み、締り弱く、粘質味がや

や強い黒褐色土。

重複 35号土坑。

遺物 P17から鉄製品(1)、P18から銅製品(2)が出土している。また調査時に、P8内の石の下から朱漆の被膜片が確認されており、漆椀が埋納されていたと推測される。

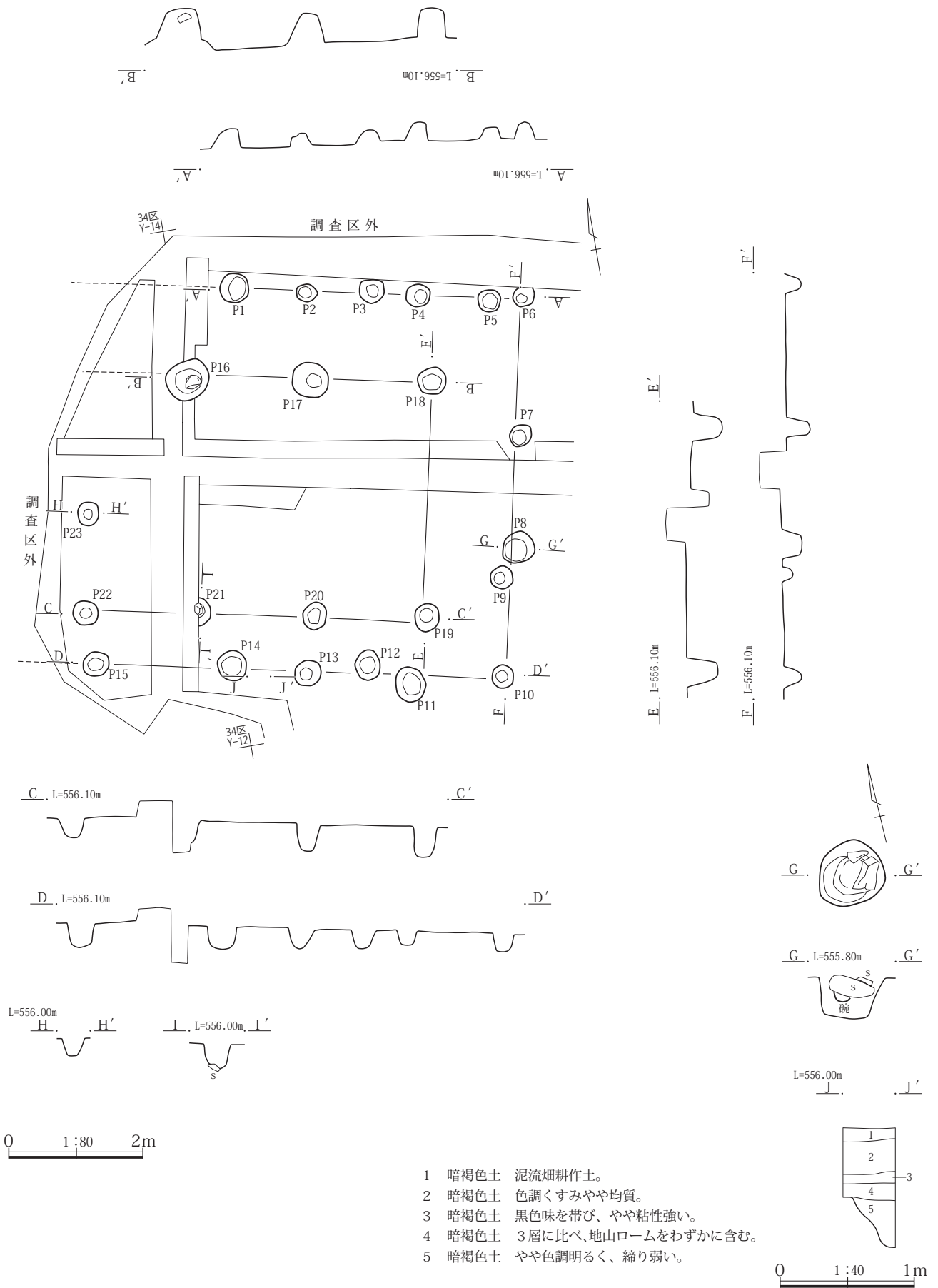
所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。35号土坑より古い。調査区西端のP23を内周柱穴列の一部と想定したが、内周西辺が2間という変則構成となるため、柱穴でない可能性を否定しえない。またP24、P26、P40については、上屋を支える用途以外の目的も想定される。なお、漆椀が埋納されていたと思われるP35は地鎮等との関連が考慮される。

第41表 11号掘立柱建物柱間計測表

	桁行 柱間	桁行 柱間	桁行 柱間	桁行 柱間	桁行 柱間	桁行 柱間	桁行 柱間	桁行 柱間	桁行 柱間	内周 桁行	外周 桁行
梁行柱間			P1 — 1.04 —	P2 — 1.03 —	P3 — 0.75 —	P4 — 1.07 —	P5 — 0.49 —	P6			
梁行柱間		P16 —	1.92 —	P17 — 1.82		— P18					
梁行柱間										2.11	
梁行柱間		3.55					3.59			2.21	
梁行柱間	P23									P9	6.39
梁行柱間	1.53									1.50	
梁行柱間	P22 — 1.73 —	P21 —		1.77 —	P20 — 1.73			— P19			5.23
梁行柱間	0.80									1.08	
梁行柱間	P15 —		2.09 —	P14 — 1.15 —	P13 — 0.95 —	P12 — 0.74 —	P11 —		1.39 —	P10	6.26
内周梁間		3.55									
外周梁間											5.83

第42表 11号掘立柱建物ピット計測表1

ピット	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
位置	34区X-13	34区X-13	34区X-13	34区X-13	34区W-13	34区W-13	34区W-12-13	34区W-12	34区W-12	34区W-X-12
規模										
長	0.46	0.33	0.40	0.37	0.36	0.35	0.37	0.51	0.35	0.35
短	0.45	0.27	0.39	0.36	0.35	0.32	0.32	0.49	0.35	0.32
深	0.29	0.21	0.23	0.29	0.18	0.23	0.40	0.30	0.23	0.26
形状	円形	長円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形
長軸方向	N-26°-W	N-77°-W	N-64°-E	N-48°-W	N-34°-W	N-64°-E	N-55°-E	N-25°-E	-	N-20°-E
重複						28ピット				
旧名称	22ピット	23ピット	24ピット	25ピット	26ピット	27ピット	33ピット	35ピット	43ピット	41ピット



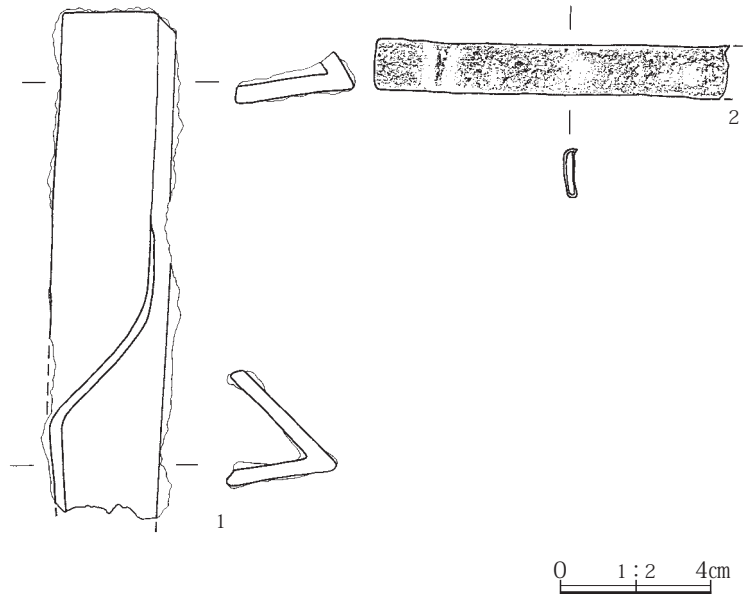
第72図 11号掘立柱建物

第43表 11号掘立柱建物ピット計測表2

ピット	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18	P19	P20
位置	34区X-12	34区X-12	34区X-12	34区X-Y-12	34区Y-12	34区X-Y-13	34区X-13	34区X-13	34区X-12	34区X-12
規模	長	0.54	0.45	0.44	0.47	0.42	0.67	0.58	0.44	0.43
	短	0.46	0.37	0.39	0.44	0.38	0.59	0.55	0.42	0.36
	深	0.28	0.28	0.32	0.32	0.36	0.43	0.44	0.44	0.46
形状	長円形	長円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	長円形	長円形
長軸方向	N-4°-W	N-5°-W	N-57°-E	N-9°-W	N-6°-E	N-64°-E	N-44°-W	N-80°-E	N-12°-E	N-15°-E
重複										
旧名称	47ピット	40ピット	45ピット	39ピット	38ピット	53ピット	30ピット	31ピット	42ピット	51ピット

第44表 11号掘立柱建物ピット計測表3

ピット	P21	P22	P23
位置	34区Y-12	34区Y-12	34区Y-12-13
規模	長	0.44	0.41
	短	(0.18)	0.38
	深	0.30	0.28
形状	不明	円形	隅丸方形
長軸方向	N-10°-E	N-31°-W	N-13°-E
重複			
旧名称	52ピット	37ピット	34ピット



第73図 11号掘立柱建物出土遺物

第45表 11号掘立柱建物出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長	幅	厚	重			
第73図 PL.58	1	鉄製品	P17	13.7	3.5	3.3	121.94			
第73図 PL.58	2	銅製品	P18	9.3	1.4	0.6	10.34			

(3)集石土坑および土坑

26基の遺構は調査区北西部および調査区西部、調査区中央部に散在している。用途を特定できない遺構が大多数であるが、土壇墓3基、馬を埋葬した遺構1基が確認されている。

なお、13号土坑、15号土坑、17～19号土坑および22号土坑はその埋没土が類似し、また1面で確認された1号道に平行な位置関係で南北に連なっている。これらの土坑の間に位置する14号土坑と16号土坑を加え、一連の遺構とも推測されるが、その性格・用途等は不明であり、遺構群としては扱わなかった。

a 1号集石土坑(第74図、PL.28・29)

位置 24区O～P-21～22。調査区西部に位置する。

形状 不整形。

規模 2.01m×1.74m、深さ0.68m。

長軸方向 N-69°-W。

埋没土 人頭大～握拳大の円礫を含み、地山黄褐色ロームを不均質に含む暗褐色土。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。掘り方および礫の出土状況から集石遺構と推測される。

b 2号土坑(第75図、PL.29)

位置 24区H～I-19～20グリッド。調査区中央部に位置する。

形状 長円形。

規模 (1.51)m×1.27m、深さ0.51m。

長軸方向 N-23°-E。

埋没土 やや粘性があり、砂質味のある、少量のAs-Kk(黄褐色土)をブロック状に含む暗褐色土。3～5cm厚の黒色炭層をはさみ、下位は地山ブロックを含む。

重複 なし。

遺物 調査時に、最大径2cm程度の炭片が確認されている。

所見 本遺構の年代は、出土層位および覆土から中世に比定される。焼土層は確認されていないので、消し炭を埋めた遺構と推測される。

c 4号土坑(第75図、PL.29)

位置 24区G～H-22グリッド。調査区中央部に位置する。

形状 円形。

規模 1.07m×0.95m、深さ0.14m。

長軸方向 N-56°-E。

埋没土 炭を含む、やや締りの弱い暗褐色土。下位ほど地山ブロックを多く含む。

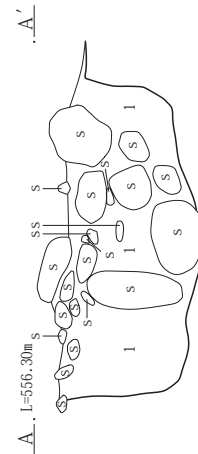
重複 2号掘立柱建物。

遺物 調査時に、最大径2cm、長さ3cm程度の炭片が確認されている。

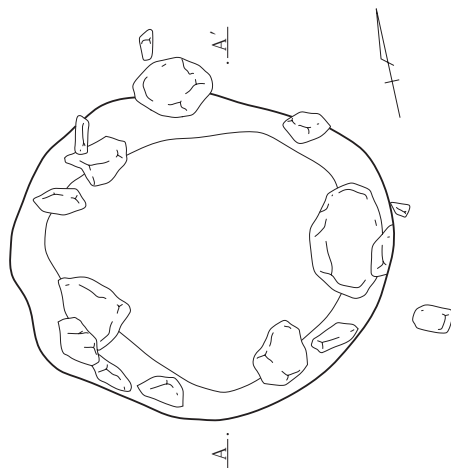
所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。2号掘立柱建物より古い。



24区
G-22



1 暗褐色土 地山黄褐色ロームを不均質に含み、人頭大～握拳大の円礫を含む。

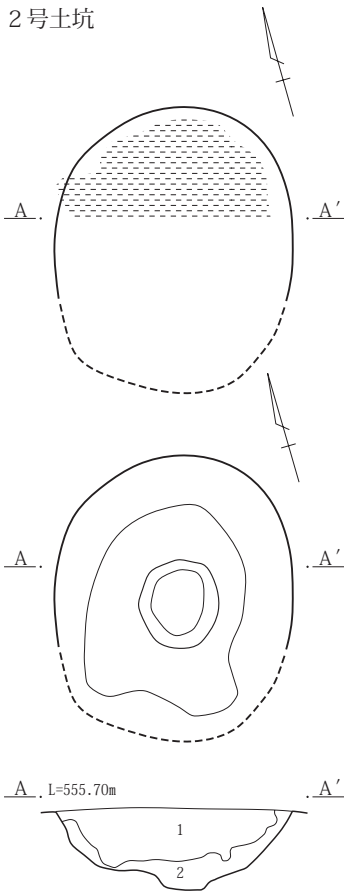


24区
G-22

0 1:40 1m

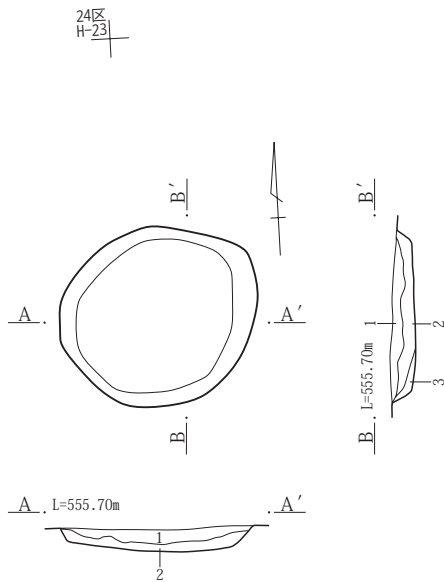
第74図 1号集石土坑

2号土坑



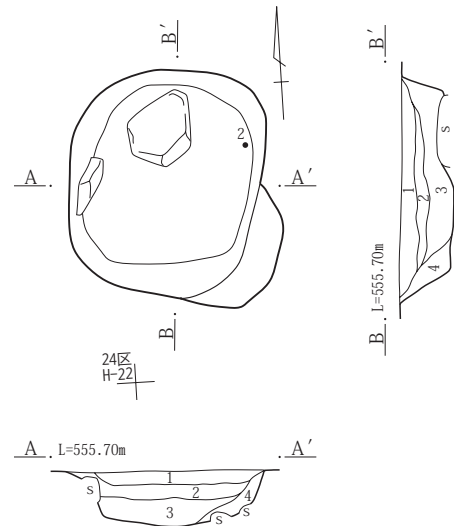
- 1 暗褐色土 やや粘性ある砂質味のある均質土。地山に比べて、くすんだ色調で地山に比して軽石粒を含まない。As-Kk (黄褐色土)を少量ブロック状に含む。本層の下位に3~5cmの厚さで炭層(黒色炭層 材は不明。湿り気強く、炭の原形を確認するのは難しいが、最大でも径2cm程度の丸材を確認できる。)が入る。
- 2 暗褐色土 1層に比べ、地山ブロックを含み、不均質。

4号土坑

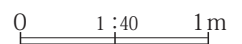


- 1 暗褐色土 炭(年輪5~7年の木材、最大径2cm長さ3cm程度)を含み、締りやや弱い不均質土。
- 2 暗褐色土 1層に比べて、やや色調明るく炭の含まれる割合やや少ない。
- 3 暗褐色土 1、2層に比べて、地山ブロックを多く含む。

5号土坑



- 1 暗褐色土 炭化粒を多く含み、1~2cm程度の炭片をやや均質に含む。締りやや弱く、やや均質。
- 2 暗褐色土 1層に比べて炭・炭化粒が少ない。
- 3 暗褐色土 1層に比べて炭・炭化粒が少なく、締りやや弱く、やや色調明るい。
- 4 暗褐色土 地山ブロックを斑に含み、As-Kkと思われる灰層のブロックをわずかに含む。



第75図 2号土坑、4号土坑、5号土坑

d 5号土坑(第75・86図、PL.29・30・58)

位置 24区G～H-22グリッド。調査区中央部に位置する。

形状 隅丸方形。

規模 1.21m×1.14m、深さ0.28m。

長軸方向 N-18°-E。

埋没土 炭化粒を含む、締りのやや弱い暗褐色土。下位は地山ブロックを斑に含み、As-Kkと思われるブロックをわずかに含む。

重複 2号掘立柱建物。

遺物 覆土上位より混入と思われる中国磁器白磁碗(2)が出土している。

所見 本遺構の年代は覆土および出土遺物から中世に比定される。2号掘立柱建物より古い。

e 6号土坑(第76図、PL.29・30)

位置 24区G-22グリッド。調査区中央部に位置する。

形状 長円形。

規模 1.43m×0.84m、深さ0.54m。

長軸方向 N-14°-E。

埋没土 円礫と炭化物少量を含み、締りの弱い暗褐色土。

下位ほど地山ブロックを多く含む。

重複 2号掘立柱建物。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。2号掘立柱建物より古い。

f 10号土坑(第77・86図、PL.30・31・58)

位置 23区I-22～23グリッド。調査区東部に位置する。

形状 円形。

規模 1.23m×(1.20)m、深さ0.34m。

長軸方向 N-57°-E。

埋没土 礫に覆われた状況で確認された。

重複 なし。

遺物 成人と思われる下肢骨の脇の底面から寛永通寶1枚(8)が、また土坑底部の立ち上がり部付近の底面より16cm浮いた位置から寛永通寶1枚(7)が出土している。

所見 本遺構の年代は、出土遺物から近世に比定される。確認された頭蓋骨と下肢骨の位置関係から、左半身を上にした北頭位西向横臥屈曲葬で、胸元に石を抱え込むよ

うな形で安置された土壙墓と推測される。

g 12号土坑(第77・86図、PL.31)

位置 24区R～S-25グリッド。調査区西部に位置する。

形状 長円形。

規模 1.94m×1.11m、深さ0.20m。

長軸方向 N-26°-E。

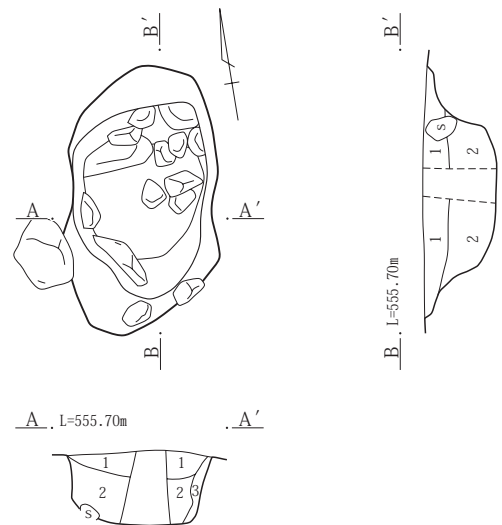
埋没土 地山黄褐色ブロックを10%程度不均質に含む、やや締りのある黒褐色土。

重複 25号土坑、5号ピット。

遺物 土坑底面から瀬戸・美濃陶器碗(4, 5)が出土している。

所見 本遺構の年代は、出土遺物から近世に比定される。25号土坑、5号ピットのいずれよりも古い。

24区
G-23



- 1 暗褐色土 炭化物を少量含み、やや不均質。締り弱い。10cm大の円礫を複数含み、20cm大の円礫が含まれる。
- 2 暗褐色土 1層に比べ白・黄色軽石粒をわずかに含み、1層よりもやや締り弱く不均質。
- 3 暗褐色土 1、2層に比べて、地山ブロックを多く含む。

0 1:40 1m

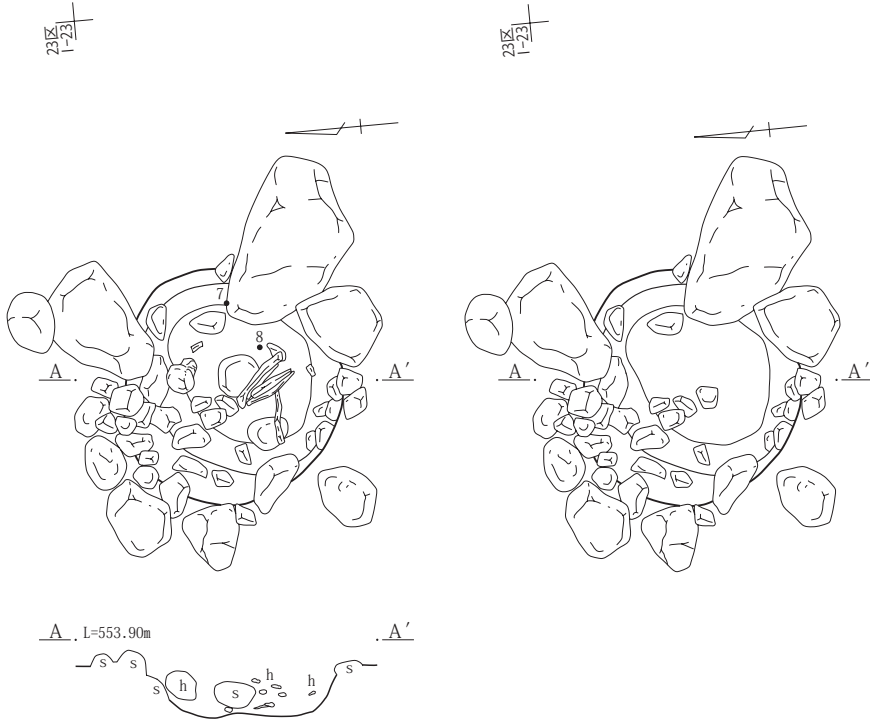
第76図 6号土坑

12号土坑



1 黒褐色土 黒色味やや強く、地山黄褐色ブロックを10%程度不均質に含みやや縮りある粘質土。

10号土坑



0 1:40 1m



10号土坑埋葬状況

第77図 10号土坑、12号土坑

h 13号土坑(第78図、PL.31)

位置 24区Q-24グリッド。調査区西部に位置する。

形状 円形。

規模 0.74m×0.71m、深さ0.07m。

長軸方向 N-81°-W。

埋没土 白色・黄褐色軽石粒をごくわずかに含む、やや締りのある暗褐色土。

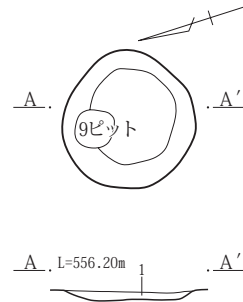
重複 9号ピット。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位および覆土から近世に比定される。9号ピットより古い。

備考 1号道沿いの下位に位置する。17号土坑と同質の覆土。

13号土坑



1 暗褐色土 やや締りある不均質土。白色・黄褐色軽石粒をごくわずかに含む斑状の覆土。

i 14号土坑(第78図、PL.31)

位置 24区Q-24グリッド。調査区西部に位置する。

形状 不整形。

規模 0.92m×0.77m、深さ0.08m。

長軸方向 N-83°-W。

埋没土 不明。

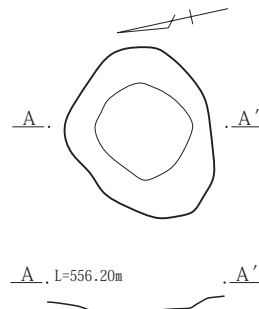
重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。

備考 1号道沿いの下位に位置する

14号土坑



j 15号土坑(第78図、PL.31)

位置 24区Q-23グリッド。調査区西部に位置する。

形状 隅丸方形。

規模 0.85m×0.81m、深さ0.10m。

長軸方向 N-11°-W。

埋没土 白色・黄褐色軽石粒をごくわずかに含む、やや締りのある暗褐色土。

重複 なし。

遺物 なし。

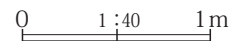
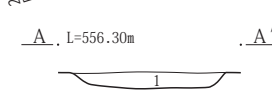
所見 本遺構の年代は、出土層位および覆土から近世に比定される。

備考 1号道沿いの下位に位置する。17号土坑と同質の覆土。

15号土坑



1 暗褐色土 やや締りある不均質土。白色・黄褐色軽石粒をごくわずかに含む斑状の覆土。



第78図 13～15号土坑

k 16号土坑(第79図、PL.32)

位置 24区Q-23グリッド。調査区西部に位置する。

形状 円形。

規模 0.86m×0.85m、深さ0.14m。

長軸方向 N-19°-E。

埋没土 白色・黄褐色軽石粒をごくわずかに含む、やや縮りのある暗褐色土。地山ブロックを層状に含む。

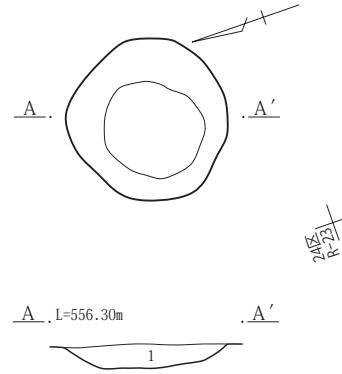
重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位および覆土から中近世に比定される。

備考 1号道沿いの下位に位置する。

16号土坑



1 暗褐色土 やや縮りある不均質土。白色・黄褐色軽石粒をごくわずかに含む斑状の覆土に加え、地山ブロックを層状に含む。

l 17号土坑(第79図、PL.32)

位置 24区Q~R-22グリッド。調査区西部に位置する。

形状 長円形。

規模 1.22m×0.95m、深さ0.13m。

長軸方向 N-15°-E。

埋没土 白色・黄褐色軽石粒をごくわずかに含む、やや縮りのある暗褐色土。

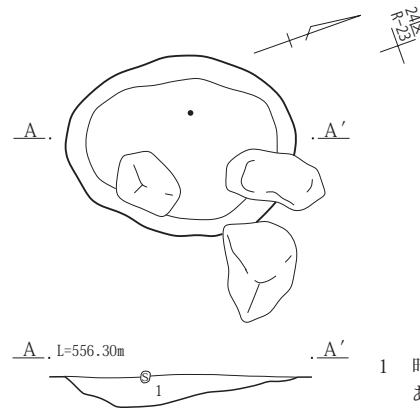
重複 なし。

遺物 資料化には至らなかったが、底から3cm浮いた覆土中から近世の国産磁器片1点(18g)が出土している。

所見 本遺構の年代は、出土遺物から近世に比定される。

備考 1号道沿いの下位に位置する。

17号土坑



1 暗褐色土 やや縮りある不均質土。白色・黄褐色軽石粒をごくわずかに含む斑状の覆土。

m 18号土坑(第79図、PL.32)

位置 24区Q~R-22グリッド。調査区西部に位置する。

形状 長円形。

規模 0.82m×0.64m、深さ0.10m。

長軸方向 N-87°-E。

埋没土 白色・黄褐色軽石粒をごくわずかに含む、やや縮りのある暗褐色土。

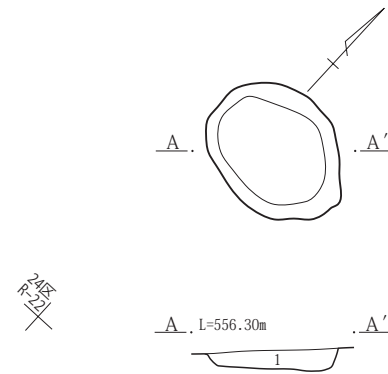
重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位および覆土から近世に比定される。

備考 1号道沿いの下位に位置する。17号土坑と同質の覆土。

18号土坑



1 暗褐色土 やや縮りある不均質土。白色・黄褐色軽石粒をごくわずかに含む斑状の覆土。



第79図 16～18号土坑

n 19号土坑(第80図、PL.32)

位置 24区R-22グリッド。調査区西部に位置する。

形状 長円形。

規模 0.74m×0.63m、深さ0.33m。

長軸方向 N-16°-W。

埋没土 締りやや弱く、粘質味のある暗褐色土。上位は白色軽石を少量含み、下位は白色・黄褐色軽石粒をごくわずかに含む。

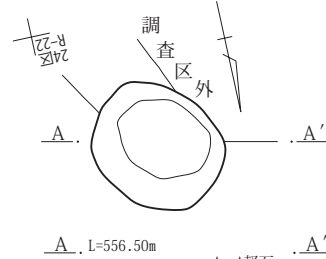
重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位と覆土から中近世に比定される。

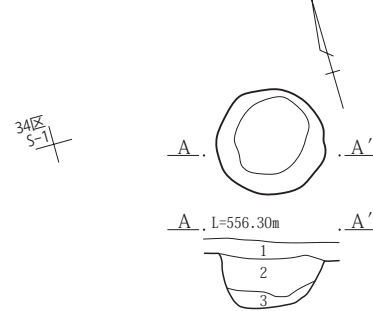
備考 1号道沿いの下位に位置する。

19号土坑



- 1 暗褐色土 締りやや弱く、粘質味あり。白色軽石を少量含む。
- 2 暗褐色土 13号土坑1層と同じ。

20号土坑



- 1 暗褐色土 締りやや弱く、粘質味あり。白色軽石を少量含む。
- 2 暗褐色土 地山ブロックを不均質に含み、わずかに炭化粒を含む。やや粘性強い。
- 3 暗褐色土 地山ブロックを不均質に含み、炭化粒を含まず、締りやや弱く均質。

o 20号土坑(第80図、PL.33)

位置 24区R-25グリッド。調査区西部に位置する。

形状 円形。

規模 0.58m×0.58m、深さ0.37m。

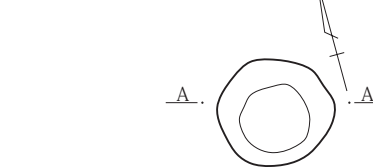
埋没土 締りのやや弱い暗褐色土に覆われる。地山ブロックと炭化粒を含む層を挟み、上位は白色軽石を少量含み、下位は地山ブロックを不均質に含む。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位と覆土から中近世に比定される。

20号土坑



- 1 暗褐色土 締りやや弱く、粘質味あり。白色軽石と黄軽石を少量含む。
- 2 暗褐色土 地山ブロックを不均質に含み、炭化粒を含まず、やや粘性強い。

p 21号土坑(第80図、PL.33)

位置 34区T-1グリッド。調査区西部に位置する。

形状 長円形。

規模 0.62m×0.56m、深さ0.27m。

長軸方向 N-76°-W。

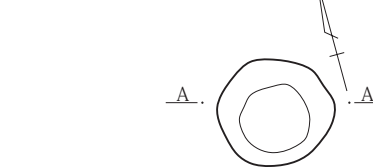
埋没土 地山ブロックを不均質に含み、やや粘性の強い暗褐色土。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位と覆土から中近世に比定される。

21号土坑



- 1 暗褐色土 締りやや弱く、粘質味あり。白色軽石と黄軽石を少量含む。
- 2 暗褐色土 地山ブロックを不均質に含み、炭化粒を含まず、やや粘性強い。

0 1:40 1m

第80図 19～21号土坑

q 22号土坑(第81図、PL.33)

位置 24区Q-22グリッド。調査区西部に位置する。

形状 隅丸方形。

規模 0.81m×0.79m、深さ0.12m。

長軸方向 N-30°-W。

埋没土 白色・黄褐色軽石粒をごくわずかに含む、やや縮りのある暗褐色土。

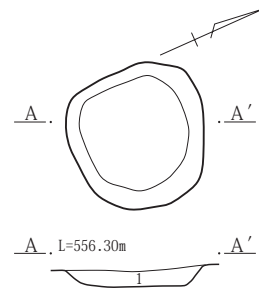
重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位および覆土から近世に比定される。

備考 1号道沿いの下位に位置する。17号土坑と同質の覆土。

22号土坑



1 暗褐色土 やや縮りある不均質土。白色・黄褐色軽石粒をごくわずかに含む斑状の覆土。

r 23号土坑(第81図、PL.33)

位置 24区H~I-22~23グリッド。調査区中央部に位置する。

形状 隅丸長方形。

規模 1.61m×1.14m、深さ0.48m。

長軸方向 N-63°-W。

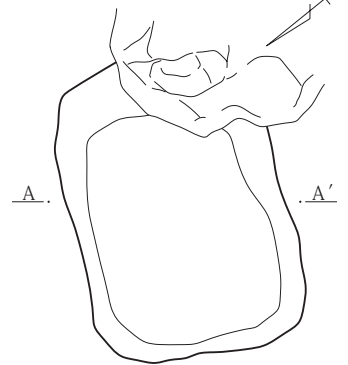
埋没土 縮りやや弱く、白色・黄褐色軽石をごくわずかに含む暗褐色土。

重複 なし。

遺物 覆土より椀形鍛冶滓(49.29g)が出土している。

所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。

23号土坑



s 24号土坑(第82図、PL.34)

位置 24区H~I-21グリッド。調査区中央部に位置する。

形状 隅丸長方形。

規模 1.53m×(1.05)m、深さ0.24m。

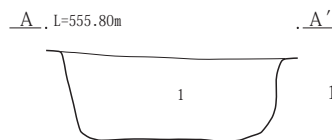
長軸方向 N-10°-E。

埋没土 白色・黄褐色軽石をごくわずかに含む、縮りのやや弱い暗褐色土。

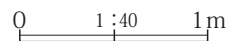
重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。



1 暗褐色土 黒色味やや強く、縮りやや弱い。白色・黄褐色軽石をごくわずかに含む均質土。人頭大の礫2点が含まれる。



第81図 22号土坑、23号土坑

t 25号土坑(第82・86図、PL.34・58)

位置 24区S-25、34区R～S-1グリッド。調査区西部に位置する。

形状 長円形。

規模 1.17m×0.91m、深さ0.32m。

長軸方向 N-34°-E。

埋没土 上位層は締りやや弱く、白色軽石と黄色軽石を少量含む暗褐色土。下位層は地山ブロックを不均質に含む暗褐色土。

重複 12号土坑、5号ピット。

遺物 覆土より瀬戸・美濃陶器丸碗(3)が出土している。

所見 本遺構の年代は出土遺物から近世に比定される。

12号土坑よりあたらしく、5号ピットより古い。なお調査時の所見によれば、覆土下位層は埋土とされる。

備考 天明3年泥流のもたらした礫が、覆土上位層にめり込んでいた。

u 26号土坑(第83図、PL.34)

位置 24区R-24グリッド。調査区西辺に位置する。

形状 円形。

規模 0.73m×0.71m、深さ0.18m。

長軸方向 N-7°-W。

埋没土 白色・黄褐色軽石粒をごくわずかに含む、やや締りのある暗褐色土。

重複 なし。

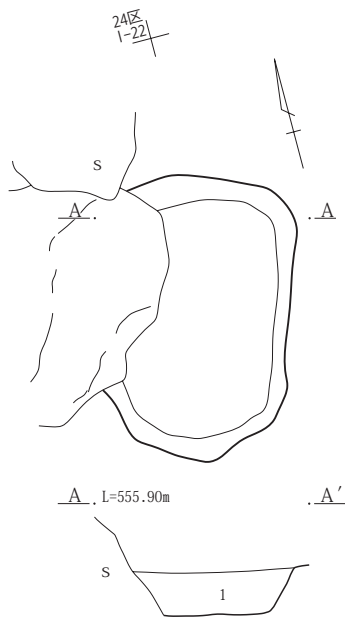
遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位および覆土から近世に比定される。

備考 17号土坑と同質の覆土。

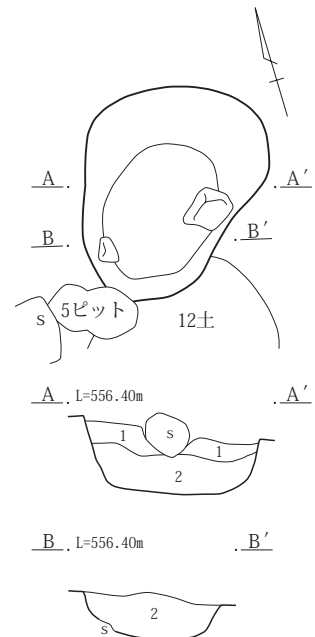
24号土坑

25号土坑

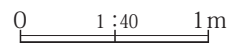


34区
1-11

- 1 暗褐色土 黒色味やや強く、締りやや弱い。白色・黄褐色軽石をごくわずかに含む均質土。



- 1 暗褐色土 締りやや弱く、粘質味あり。白色軽石と黄軽石を少量含む。
2 暗褐色土 地山ブロックを不均質に含み、炭化粒を含まず、やや粘性強い。



第82図 24号土坑、25号土坑

▼ 27号土坑(第83図、PL.34・35)

位置 24区R-23グリッド。調査区西辺に位置する。

形状 隅丸長方形。

規模 0.93m×0.57m、深さ0.29m。

長軸方向 N-16°-E。

埋没土 均質でわずかな白色・黄色軽石と炭化物を含む

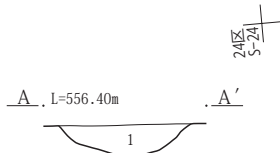
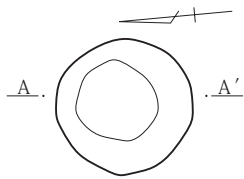
暗褐色土。

重複 なし。

遺物 なし。

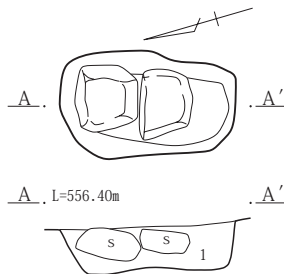
所見 本遺構の年代は、出土層位および覆土から中近世に比定される。

26号土坑



1 暗褐色土 白色・黄褐色軽石粒をごくわずかに含む、やや締りのある暗褐色土。

27号土坑

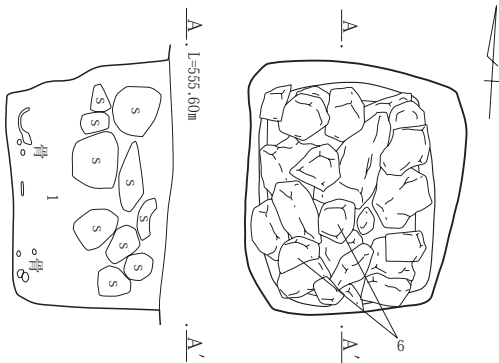


1 暗褐色土 2個の30cm大の礫を含み、バサバサ味のある締り強い粘質土。均質でわずかな白色・黄色軽石と炭化物を含む。



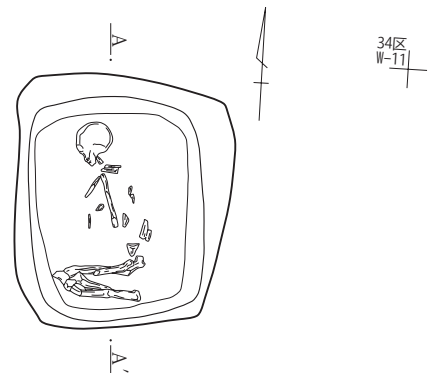
31号土坑埋葬状況

31号土坑



1 暗褐色土 20～50cm大の不均質な亜角礫が充填される。地山下位のロームを一部不均質に含む。締り弱い。

34区 W-11



34区 W-11



第83図 26号土坑、27号土坑、31号土坑

w 31号土坑(第83・86図、PL.35・58)

位置 34区W-10グリッド。調査区北西部に位置する。

形状 隅丸長方形。

規模 0.32m×1.14m、深さ0.87m。

長軸方向 N-5°-W。

埋没土 地山下位のロームを一部不均質に含む暗褐色土。20～50cm大の不均質な垂角礫が充填される。

重複 なし。

遺物 石鉢(6)が2片に割れた状態で、土坑に充填された礫の上層から出土している。

所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。確認された頭蓋骨と下肢骨の位置関係から、左半身を上にした北頭位西向横臥屈曲葬で埋葬された、成人の土壙墓と推測される。

x 35号土坑(第84・86図、PL.35・36)

位置 34区X-11～12グリッド。調査区北西部に位置する。

形状 隅丸方形。

規模 2.15m×1.94m、深さ0.84m。

長軸方向 N-72°-W。

埋没土 黒色味が強く、やや締りの弱い暗褐色土。

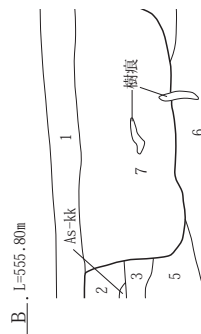
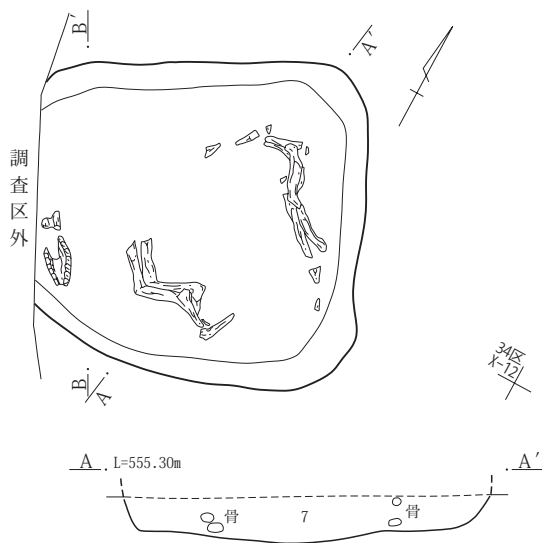
重複 11号掘立柱建物。

遺物 覆土より混入と思われる灰釉陶器皿(1)が、土坑底部から馬骨が出土している。

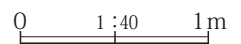
所見 本遺構の年代は、出土層位から近世に比定される。左体側を上にし、頭部を南東に、臀部を北東に位置するように埋納されている。11号掘立柱建物より古い。35号土坑は3面の3・4号竪穴住居覆土上層部まで掘り込まれている。灰釉陶器皿は土坑掘削時に下位の遺構から混入したものと推測される。



馬骨出土状況



- 1 暗褐色土 泥流畑耕作土。
- 2 暗褐色土 色調くすみやや均質。
- 3 暗褐色土 黒色味を帯び、やや粘性強い。
- 4 暗褐色土 3層に比べ、地山ロームをわずかに含む。
- 5 暗褐色土 やや色調明るく、締り弱い。
- 6 暗褐色土 炭化物、焼土ブロックを不均質に含み、粘性やや強い。
- 7 暗褐色土 黒色味が強くやや締り弱い。やや粘性強く、下位の住居焼土ブロックを含む。



第84図 35号土坑

y 36号土坑(第85図、PL.36)

位置 34区Y-12グリッド。調査区北西部に位置する。

形状 円形。

規模 1.10m×(0.93)m、深さ0.47m。

長軸方向 N-5°-E。

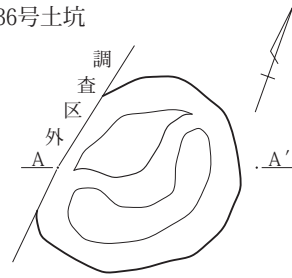
埋没土 地山ロームブロックを含み、締りの弱い暗褐色土。5~20cm程度の礫が集積されている。

重複 なし。

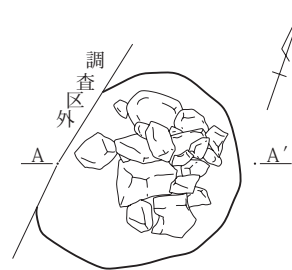
遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。集石土坑のひとつと推測される。

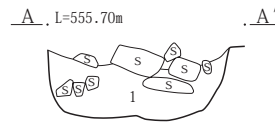
36号土坑



34区
Y-12



34区
Y-13



1 暗褐色土 地山ロームブロックを含み、締り弱い。5~20cm程度の不均質な礫を充填する。

z 42号土坑(第85図、PL.36)

位置 34区S-9~10グリッド。調査区北西部に位置する。

形状 隅丸長方形。

規模 (1.23)m×1.13m、深さ0.60m。

長軸方向 N-12°-E。

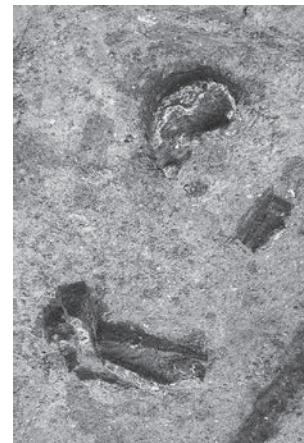
埋没土 黒褐色の埋土上位は黄色軽石粒をごく少量含み、中位はわずかに地山黄褐色のロームブロックを含む。

人骨を覆う埋土下位は、20cm大の垂円礫を含む。

重複 なし。

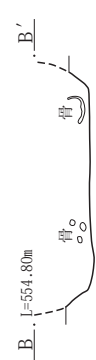
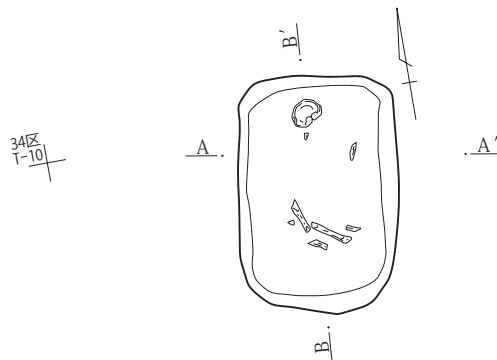
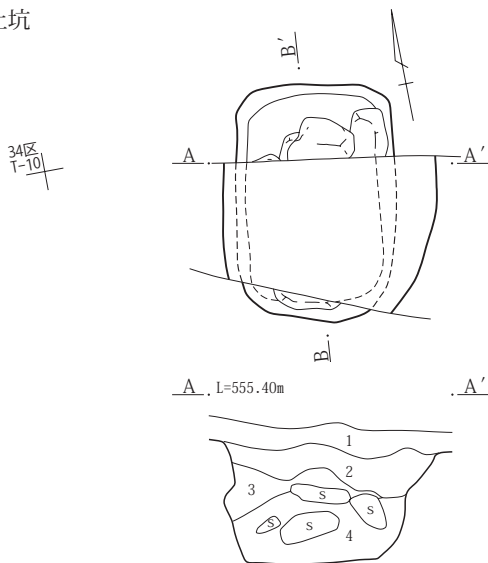
遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位および埋土から近世に比定される。頭蓋骨と下肢骨の位置関係から、北頭位横臥屈曲葬で埋葬された土壙墓と推測される。

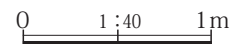


42号土坑埋葬状況

42号土坑



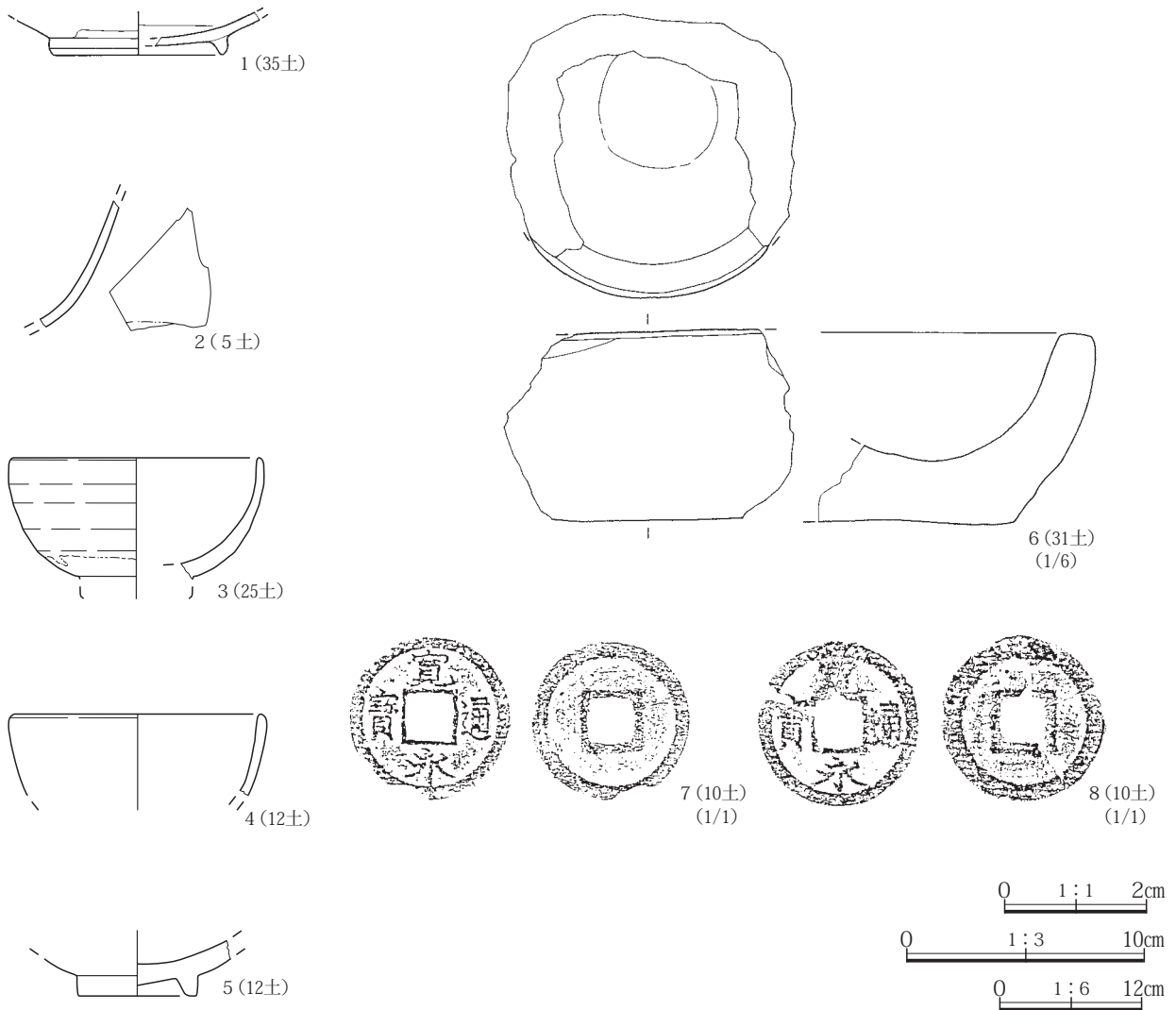
- 1 暗褐色土 泥流畑耕作土。
- 2 黒褐色土 1~2cm大の黄色軽石粒をごく少量含み、締りやや弱く、粘性やや強い。
- 3 黒褐色土 2層に比べ、わずかに地山黄褐色のロームブロックを含む。
- 4 黒褐色土 20cm大の垂円礫を含み、締り弱い。人骨を下位に含む。



第85図 36号土坑、42号土坑

第46表 土坑出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				底台	高さ	厚				
第86図 PL.58	1	灰釉陶器 皿	35号土坑 底部～体部下位 片	底台 7.5 7.0			微砂粒/還元焰/暗 灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施釉方法は漬け掛け。	大原2号窯式 期。	
第86図 PL.58	2	中国磁器 白磁碗	5号土坑覆土上 位 体部片	口 底	- -	高	-	夾雑物含まない。 /灰白	外面回転篋削り。体部内湾し、口縁部下で直線的に開く。内面から体部外面下位透明釉。	11世紀後半～ 12世紀後半。
第86図 PL.58	3	瀬戸・美濃 陶器 丸碗	25号土坑覆土 口縁部～体部 1/4	口 底	(10.4) -	高	-	白色鉱物少量含 む。/淡黄	口縁部外面以下回転篋削り。内面から高台脇鉛釉。	18世紀中葉～ 後葉。
第86図	4	瀬戸・美濃 陶器 碗	12号土坑底部 口縁部1/8	口 底	(10.3) -	高	-	夾雑物含まない。 /灰白	内外面鉛釉。貫入。釉に若干ザラツキが認められ、被熱の可能性あり。	江戸時代。
第86図	5	瀬戸・美濃 陶器 碗	12号土坑底部 底部1/2	口 底	- 5.0	高	-	白色鉱物微量含 む。/灰白	高台内兜巾状をなす。内面鉛釉。	江戸時代。
第86図 PL.58	6	石製品 石鉢	31号土坑覆土上 層 1/3	口 高	28.5 15.8	厚 重	- 3838.8	粗粒輝石安山岩	多孔質の石材である。内面は全体的に比較的滑らかである。外面の一部に平ノミ状の工具痕が僅かに認められる。	2片接合 法量は接合状 態で計測。
第86図 PL.58	7	古銭 寛永通寶	10号土坑+16cm 完形	縦 横	2.194 2.256	厚 重	0.119 1.60			
第86図 PL.58	8	古銭 寛永通寶	10号土坑底部 完形	縦 横	2.341 2.319	厚 重	0.130 1.36			



第86図 土坑出土遺物

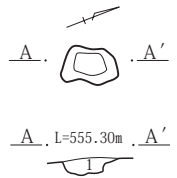
(4) 焼土遺構

単体の焼土遺構は調査区の西半で確認されており、東半からは確認されていない。遺構は調査区内に散在しており、近接する他遺構との関係は確認できなかった。

a 2号焼土遺構(第87図、PL.37)

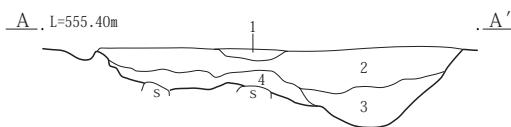
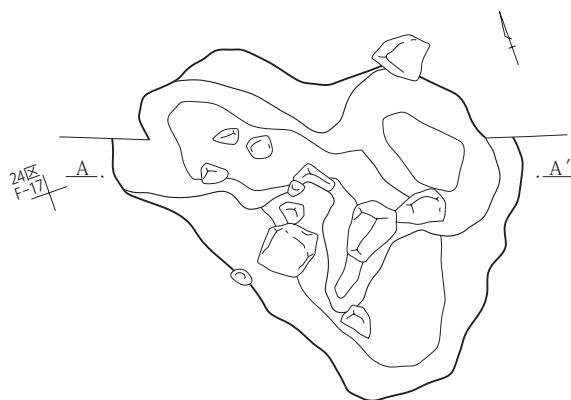
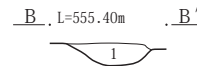
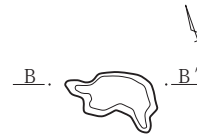
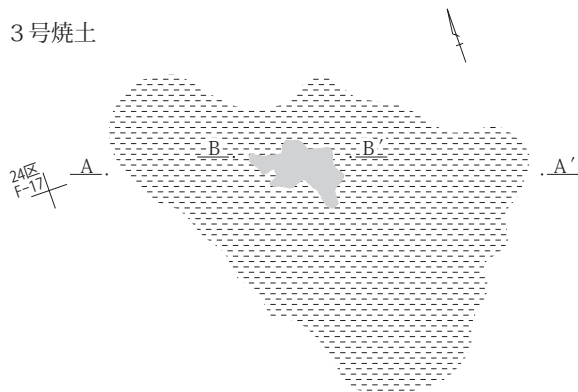
位置 24区F-19グリッド。調査区中央部に位置する。
 形状等 不整形。少量の1~2cm大の炭を不均質に含む、赤褐色の焼土ブロック。
 規模 0.33m×0.20m、深さ0.09m。
 長軸方向 N-29°-E。
 重複 なし。
 遺物 なし。
 所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。

2号焼土

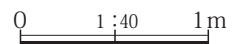


1 赤褐色土 パサパサしたやや不均質な焼土ブロック。全体的に少量の1~2cm大の炭を不均質に含む。色調明るい。

3号焼土



- 1 赤褐色土 パサパサしたやや均質な焼土ブロック。全体的に少量の2cm大の炭を不均質に含む。色調明るく、やや均質に層状にも見える。上位部分には2層と同じような暗褐色土を含む。
- 2 暗褐色土 締めやや弱く、2cm大の炭を含む。やや粘性あり。
- 3 暗褐色土 2層に比べ、炭の割合が少ない。2層と色調変わらず、地山ブロックを少量含む。
- 4 暗黄褐色土 2層に比べ、地山黄褐色ブロックを1:1程度含み、わずかに炭化物を含む。



第87図 2号焼土遺構、3号焼土遺構

b 3号焼土遺構(第87図、PL.37)

位置 24区E-16～17グリッド。調査区中央部に位置する。

形状等 不整形。締りやや弱く、2cm大の炭を含む暗褐色土の中心部分に、少量の2cm大の炭を不均質に含む赤褐色の焼土ブロックが位置する。

規模 2.21m×1.51m、深さ0.40m。焼土部0.49m×0.26m、深さ0.10m。

長軸方向 N-46°-W。

埋没土 覆土下位は上位より炭化物の含有量の少ない暗褐色土で、最下層は地山黄褐色ブロックを含む。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。遺構の設けられた窪地は、複数回にわたり使用されたものと推測される。

c 4号焼土遺構(第88図、PL.37・38)

位置 24区N-24グリッド。調査区西部に位置する。

形状等 円形。

規模 0.43m×0.36m、深さ0.10m。

長軸方向 N-82°-E。

埋没土 焼土ブロックと少量の1～2cm大の炭をほぼ均等に含む赤褐色土。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。

d 5号焼土遺構(第88・91図、PL.38・58)

位置 24区P-21グリッド。調査区西辺に位置する。

形状等 不整形。いびつな隅丸方形の窪地の中央部に焼土ブロックと炭を層状に含む赤褐色土が堆積している。

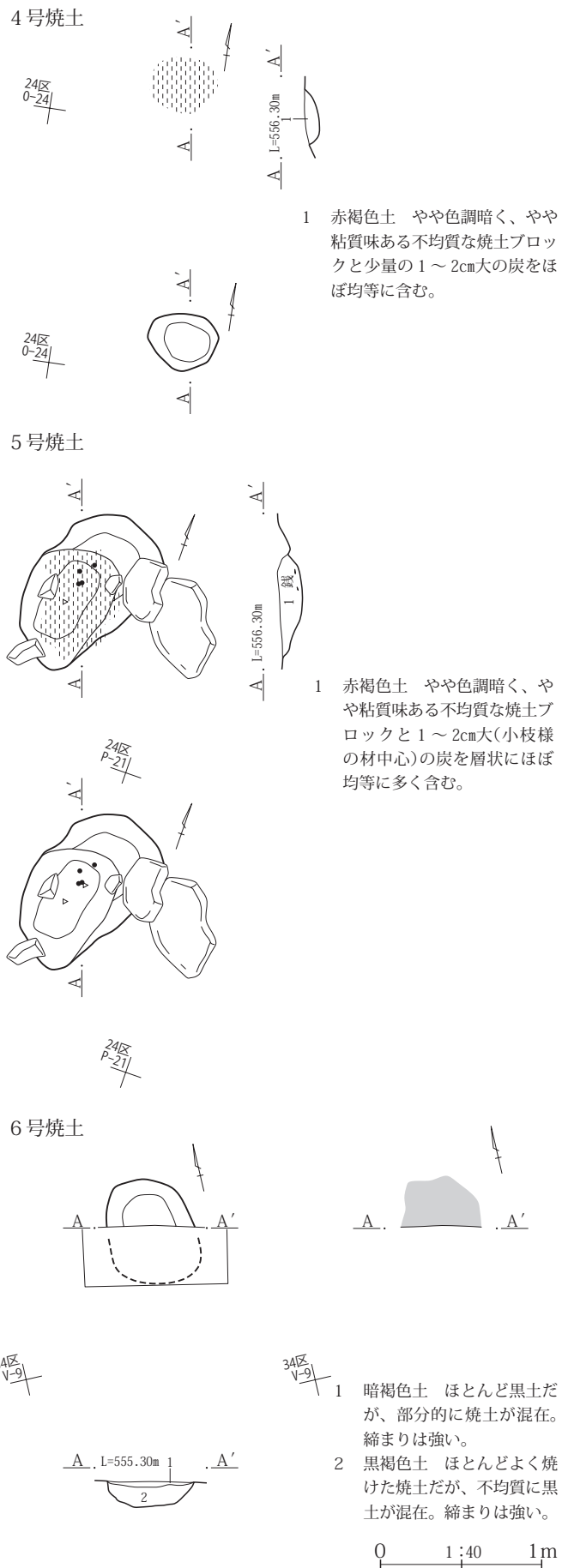
規模 0.98m×0.64m、深さ0.14m。

長軸方向 N-29°-E。

埋没土 やや粘質味ある不均質な焼土ブロックと小枝様の1～2cmの炭を層状に含む赤褐色土。

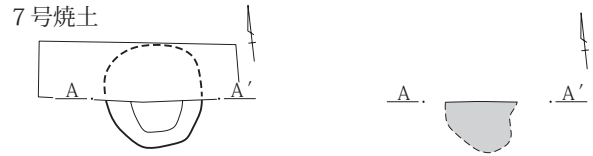
重複 なし。

遺物 元祐通寶を含む渡来銭と思われる古銭が、底面付近(1, 2)および5cm浮いた位置(3, 4)から出土して



第88図 4～6号焼土遺構

いる。また調査時に、覆土中の骨片が確認されている。
 所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。



e 6号焼土遺構(第88図、PL.38・39)

位置 34区U-9グリッド。調査区北西部に位置する。
 形状等 不整形。土坑状の窪みに焼土の混在した暗褐色土が堆積している。

規模 (0.67)m×0.51m、深さ0.15m。

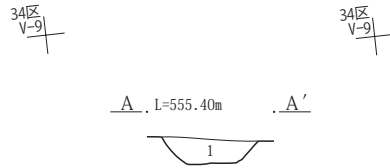
長軸方向 N-8°-W。

埋没土 覆土上位は黒土に焼土が混在した暗褐色土、下位は焼土に黒土が混在した黒褐色土。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。



1 暗褐色土 不均質に焼土と黒土が混在。部分的に灰の層あり。締まりは強い。

f 7号焼土遺構(第89図、PL.39)

位置 34区U-9グリッド。調査区北西部に位置する。

形状等 不整形。

規模 (0.54)m×0.50m、深さ0.10m。

長軸方向 N-4°-W。

埋没土 焼土と黒土が混在し、部分的に灰層の存在する暗褐色土。

重複 3号ピット列。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。3号ピット列より新しい。



1 暗褐色土 不均質に焼土と黒土が混在。締まりは強い。範囲は狭く、浅い。

g 8号焼土遺構(第89図、PL.39)

位置 34区V-9グリッド。調査区北西部に位置する。

形状等 不整形。

規模 (0.43)m×0.41m、深さ0.03m。

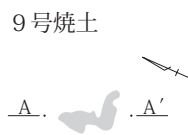
長軸方向 N-35°-E。

埋没土 不均質に焼土と黒土が混在する暗褐色土。

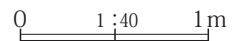
重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。



1 暗褐色土 よく焼けた均質な焼土。炭化物を含まず、締まりは強い。範囲は狭く浅い。



第89図 7～9号焼土遺構

h 9号焼土遺構(第89図、PL.40)

位置 34区Q-6グリッド。調査区北西部に位置する。

形状等 不整形。よく焼けた均質な焼土。

規模 0.31m×(0.18)m、厚さ0.04m。

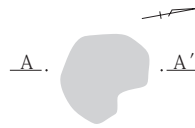
長軸方向 N-24°-W。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。

所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。



i 12号焼土遺構(第90図、PL.40)

位置 34区T-9グリッド。調査区北西部に位置する。

形状等 不整形。焼土灰を層状に含み、よく焼けた橙褐色の焼土。

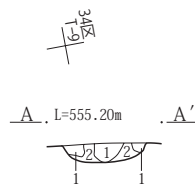
規模 0.56m×0.46m、深さ0.20m。

長軸方向 N-34°-W。

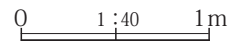
埋没土 地山とほぼ同質な黒褐色土の中に、焼土と焼土灰を層状に含む橙褐色土が点在している。

重複 なし。

遺物 なし。



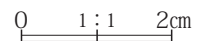
- 1 橙褐色土 焼土灰を層状に含み、よく焼けた均質な焼土。炭化物を含まず、縮り弱い。
- 2 黒褐色土 地山とほぼ同質。粘性ややあり、縮り弱い。



第90図 12号焼土遺構

第47表 焼土遺構出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				縦 横	厚	重			
第91図 PL.58	1	古銭	5号焼土底面 完形	縦 2.528 横 2.503	厚 0.182 重 1.80				
第91図 PL.58	2	古銭	5号焼土底面 完形	縦 2.393 横 2.397	厚 0.163 重 1.79				
第91図 PL.58	3	古銭 元祐通寶	5号焼土+5cm 完形	縦 2.445 横 2.442	厚 0.144 重 2.60				
PL.58	4	古銭	5号焼土+5cm 1/4	縦 - 横 -	厚 0.132 重 0.79				



第91図 焼土遺構出土遺物

(5)ピット列およびピット

ピット列は調査区北西部と中央部の二か所から確認されている。それぞれのピット列は近接して確認されており、柵列の様相をていしてはいるが、個々の存在時期を特定することができなかったため、個別の遺構として記載する。

a 1号ピット列(第92図、PL.40)

位置 24区H～I-19～23グリッド。調査区中央部に位置する。

規模および走向 確認長13.60m、N-11°-E。

埋没土 不明。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。

備考 調査時の名称は、1号柵列。

b 2号ピット列(第92図、PL.40)

位置 24区I-20～23グリッド。調査区中央部に位置する。

規模および走向 確認長11.29m、N-12°-E。

埋没土 不明。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。

備考 調査時の名称は、2号柵列。

c 3号ピット列(第93図、PL.41・42)

位置 34区S～W-9グリッド。調査区北西部に位置する。

規模および走向 確認長16.54m、N-82°-W。

埋没土 ごくわずかな炭化粒を含み、締りのやや弱い黒褐色土。

重複 7号焼土遺構。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。7号焼土遺構の下位に位置する。

備考 調査時の名称は、3号柵列。

d 4号ピット列(第93図、PL.41)

位置 34区S～W-9～10グリッド。調査区北西部に位置する。

規模および走向 確認長16.58m、N-81°-W。

埋没土 ごくわずかな炭化粒を含み、締りのやや弱い黒褐色土。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。

備考 調査時の名称は、4号柵列。

e 5号ピット列(第93図、PL.41・42)

位置 34区Q～R-8～9グリッド。調査区北西部に位置する。

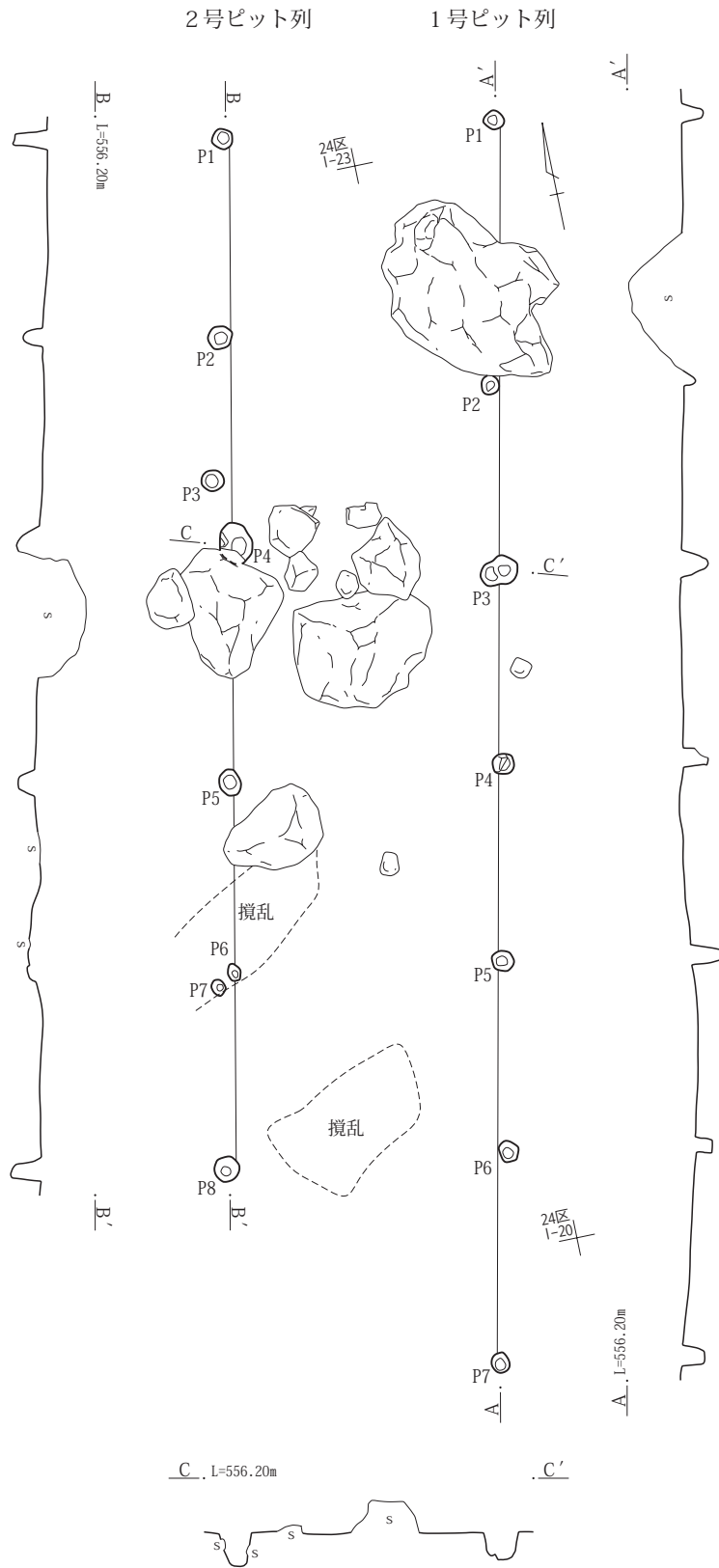
規模および走向 確認長6.43m、N-81°-W。

第48表 1号ピット列計測表

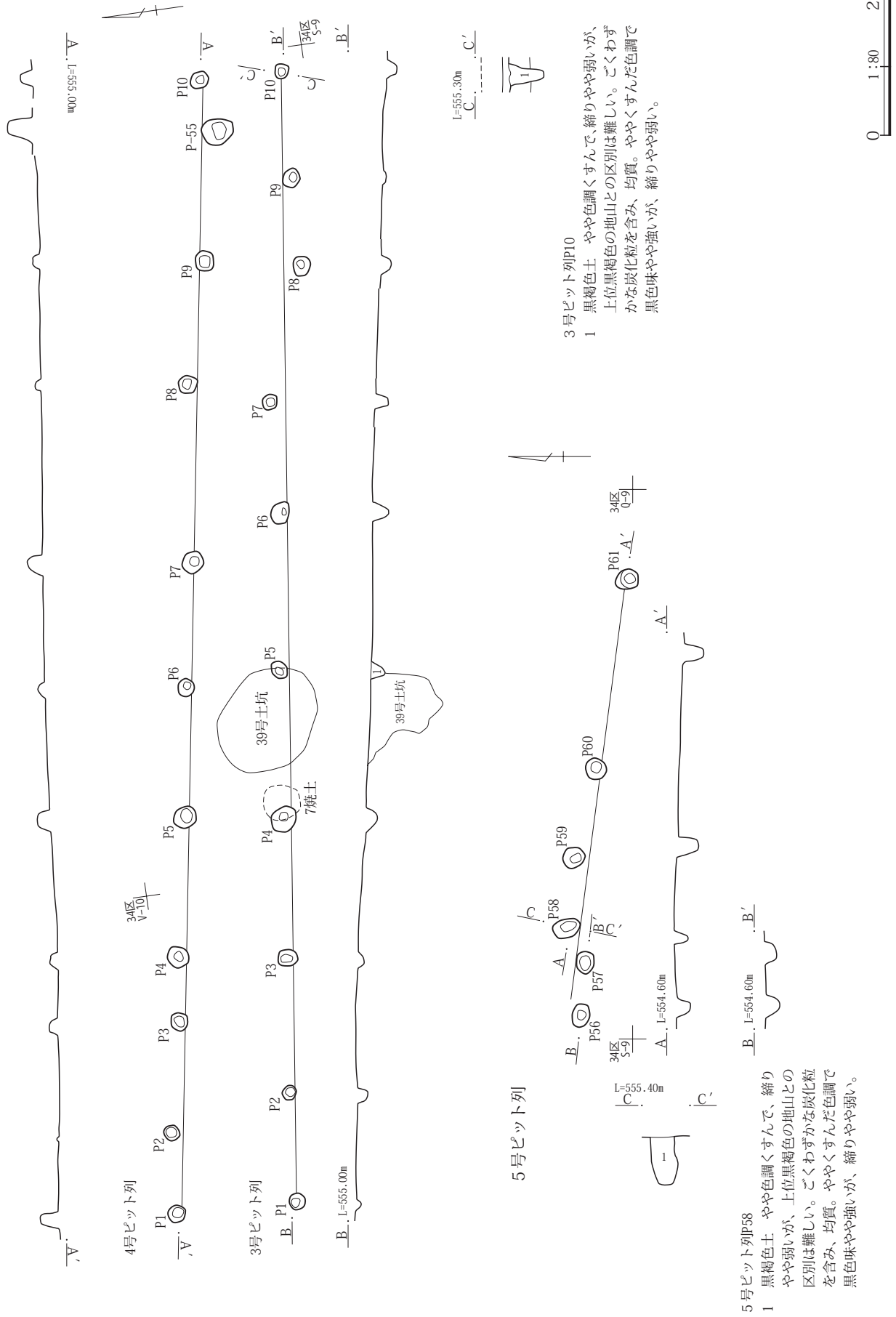
確認長	13.60 m		走向			N-11°-E		旧名称		1号柵列	
ピット		P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7			
規模	長	0.23 m	0.22 m	0.42 m	0.23 m	0.24 m	0.23 m	0.22 m			
	短	0.21 m	0.21 m	0.32 m	0.22 m	0.22 m	0.21 m	0.20 m			
	深	0.22 m	0.14 m	0.31 m	0.29 m	0.43 m	0.20 m	0.27 m			
形状		円形	円形	不整形	円形	円形	円形	円形			
長軸方向		N-72°-W	N-31°-E	N-72°-E	N-13°-E	N-54°-W	N-4°-W	N-24°-E			
次杭間隔		2.90 m	2.01 m	2.12 m	2.14 m	2.11 m	2.32 m				

第49表 2号ピット列計測表

確認長	11.29 m		走向			N-12°-E		旧名称		2号柵列	
ピット		P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8		
規模	長	0.23 m	0.27 m	0.25 m	0.48 m	0.28 m	0.20 m	0.19 m	0.28 m		
	短	0.23 m	0.25 m	0.22 m	0.37 m	0.23 m	0.15 m	0.14 m	0.27 m		
	深	0.38 m	0.23 m	0.17 m	0.38 m	0.18 m	0.15 m	0.05 m	0.35 m		
形状		円形	円形	円形	長円形	円形	円形	円形	円形		
長軸方向		—	N-74°-E	N-72°-W	N-6°-W	N-13°-W	N-16°-W	N-12°-W	N-35°-E		
次杭間隔		2.18 m	1.56 m	0.73 m	2.62 m	2.08 m	0.23 m	1.99 m			



第92図 1号ピット列、2号ピット列



3号ピット列P10

- 1 黒褐色土 やや色調くすんで、締りやや弱いが、上位黒褐色の地山との区別は難しい。ごくわずかな炭化粒を含み、均質。ややくすんだ色調で黒色味やや強いが、締りやや弱い。

5号ピット列

5号ピット列P58

- 1 黒褐色土 やや色調くすんで、締りやや弱い、上位黒褐色の地山との区別は難しい。ごくわずかな炭化粒を含み、均質。ややくすんだ色調で黒色味やや強いが、締りやや弱い。

第93図 3号～5号ピット列

第3章 確認された遺構と遺物

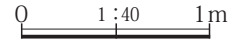
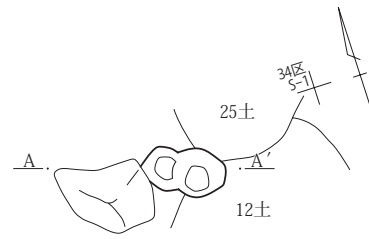
埋没土 ごくわずかな炭化粒を含み、締りのやや弱い黒褐色土。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から中近世に比定される。

備考 調査時の名称は、P-56,57列、P-58～61列。



第94図 5号ピット

f 5号ピット(第94図、PL.34)

位置 24区S-25グリッド。調査区西部に位置する。

形状 不整形。

規模 0.47m×0.28m、深さ0.15m。

長軸方向 N-57°-W。

埋没土 不明。

重複 12号土坑、25号土坑。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、重複遺構との関係から近世に比定される。12号土坑、25号土坑より新しい。

第50表 3号ピット列計測表

確認長	16.54 m	走向	N-82°-W			旧名称	3号柵列					
ピット	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10		
規模	長 0.24 m	0.22 m	0.29 m	0.42 m	0.28 m	0.35 m	0.26 m	0.30 m	0.28 m	0.23 m		
	短 0.24 m	0.20 m	0.24 m	0.35 m	0.21 m	0.27 m	0.22 m	0.26 m	0.25 m	0.22 m		
	深 0.10 m	0.15 m	0.10 m	0.21 m	0.20 m	0.31 m	0.20 m	0.16 m	0.13 m	0.15 m		
形状	円形	円形	長円形	長円形	長円形	卵形	隅丸方形	円形	円形	円形		
長軸方向	—	N-42°-W	N-12°-E	N-28°-W	N-46°-E	N-48°-W	N-43°-W	N-55°-W	N-30°-W	N-32°-W		
次杭間隔	1.58 m	1.96 m	2.04 m	2.16 m	2.29 m	1.63 m	2.04 m	1.28 m	1.57 m			

第51表 4号ピット列計測表

確認長	16.58 m	走向	N-81°-W			旧名称	4号柵列					
ピット	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P55	P10	
規模	長 0.27 m	0.24 m	0.27 m	0.32 m	0.36 m	0.27 m	0.32 m	0.29 m	0.28 m	0.46 m	0.28 m	
	短 0.25 m	0.23 m	0.27 m	0.32 m	0.31 m	0.24 m	0.31 m	0.26 m	0.26 m	0.39 m	0.24 m	
	深 0.29 m	0.10 m	0.13 m	0.15 m	0.19 m	0.10 m	0.23 m	0.13 m	0.16 m	0.37 m	0.18 m	
形状	円形	円形	円形	円形	長円形	円形	円形	円形	隅丸方形	長円形	長円形	
長軸方向	N-18°-W	N-22°-E	—	—	N-16°-W	N-79°-W	N-20°-W	N-9°-W	N-78°-W	N-12°-E	N-10°-W	
次杭間隔	1.17 m	1.64 m	0.95 m	2.03 m	1.89 m	1.84 m	2.59 m	1.81 m	1.91 m	0.80 m		

第52表 5号ピット列計測表

確認長	6.43 m	走向	N-81°-W			旧名称	仮P3列(58-61P)	
ピット	P56	P57	P58	P59	P60	P61		
規模	長 0.34 m	0.33 m	0.40 m	0.33 m	0.32 m	0.36 m		
	短 0.26 m	0.26 m	0.27 m	0.30 m	0.30 m	0.28 m		
	深 0.22 m	0.17 m	0.21 m	0.20 m	0.31 m	0.31 m		
形状	長円形	長円形	長円形	円形	円形	長円形		
長軸方向	N-83°-W	N-85°-E	N-22°-W	N-14°-W	N-50°-E	N-30°-W		
次杭間隔	0.78 m	0.59 m	1.00 m	1.33 m	2.77 m			

g 9号ピット(第95図、PL.31)

位置 24区Q-24グリッド。調査区西部に位置する。

形状 隅丸方形。

規模 0.23m×0.21m、深さ0.33m。

長軸方向 N-22°-W。

埋没土 不明。

重複 13号土坑。

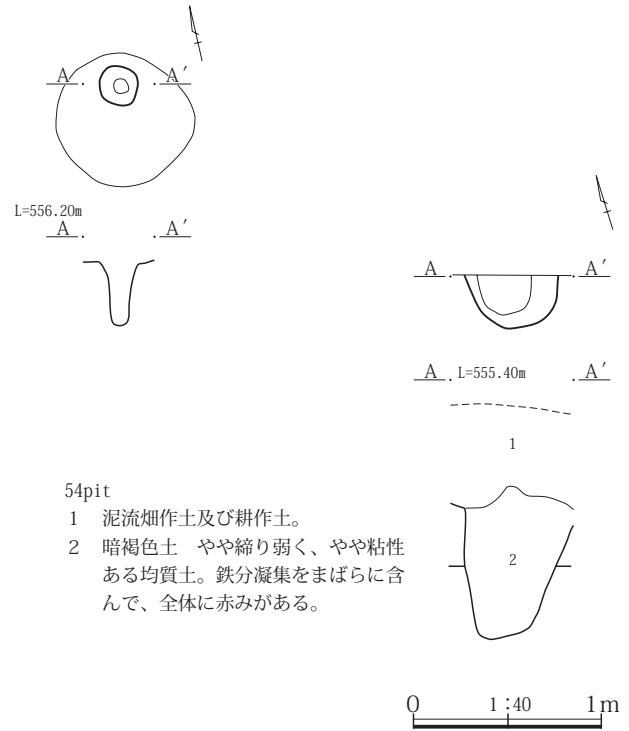
遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、重複遺構との関係から近世に比定される。13号土坑より新しい。

9号ピット

24区 Q-24
54号ピット

34区 Q-12



h 54号ピット(第95図、PL.42)

位置 34区Q-11グリッド。調査区北辺に位置する。

形状 不明。

規模 0.50m×(0.27)m、深さ0.33m。

長軸方向 N-73°-W。

埋没土 鉄分凝集をまばらに含み、全体に赤みのある暗褐色土。

重複 なし。

遺物 なし。

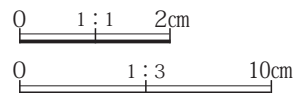
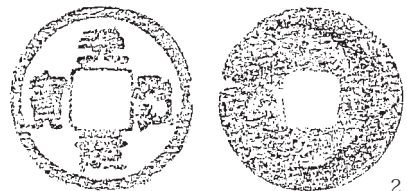
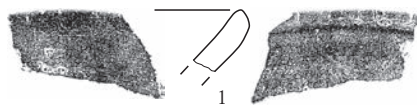
所見 本遺構の年代は、出土層位から近世に比定される。

第95図 9号ピット、54号ピット

(6) 遺構外出土の遺物

第53表 遺構外出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	厚重			
第96図 PL.59	1	在地系土器 片口鉢	34区V-W-5-11グリッド 口縁部片	-	-	-	白色、黒色鉱物含む。/橙	器壁厚く、口縁端部外面を平坦に撫でる。	中世。
第96図 PL.59	2	古銭 天聖元寶	24区G-21グリッド 完形	縦 2.480	厚 2.478	重 0.136 2.57			



第96図 遺構外出土遺物

3 3面(古代以前)

3面は基本土層第7層のAs-Kk層の下位に位置する、平安時代の遺構と縄文時代の遺構により構成される。竪穴住居4軒、掘立柱建物1棟、竪穴状遺構1基、土坑15基、焼土遺構1基が確認された。遺構の確認された地点は調査区内に散在するが、概ね調査区北西部と調査区東部に集中し、調査区西辺から調査区中央部にかけてはまばらに確認されている。

調査区北西部は、各時代にわたり調査区内でも標高の高い場所となっており、継続して住居等に使用されたものと推察される。

(1) 竪穴住居

竪穴住居は調査区の東西両端部でのみ確認され、その中間部分からは確認されていない。調査区北西部で確認された3号竪穴住居と4号竪穴住居は、先行する住居跡を再利用したと思われる、まったく同位置に構築されている。構築された時期も近接していると考えられ、両者の分離は難しいため、3・4号竪穴住居として記載した。

a 1号竪穴住居(第97～99図、PL.42～44・59)

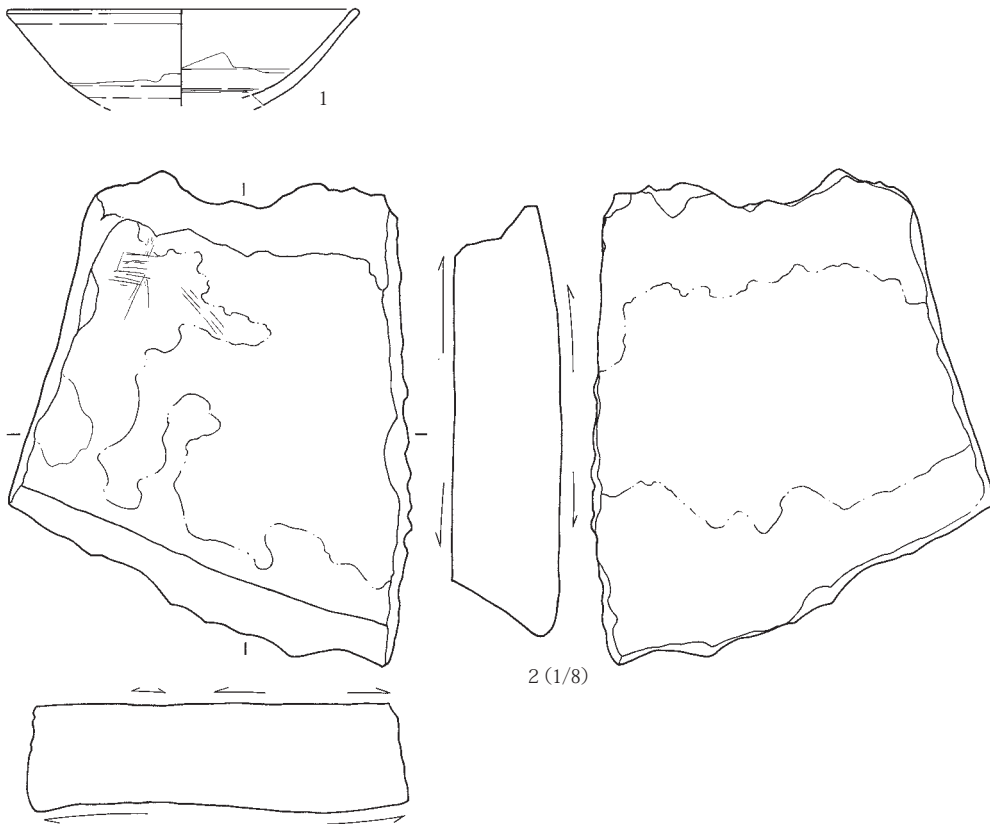
位置 23区I～J-20～21グリッド。調査区東部に位置する。

形状 隅丸長方形。

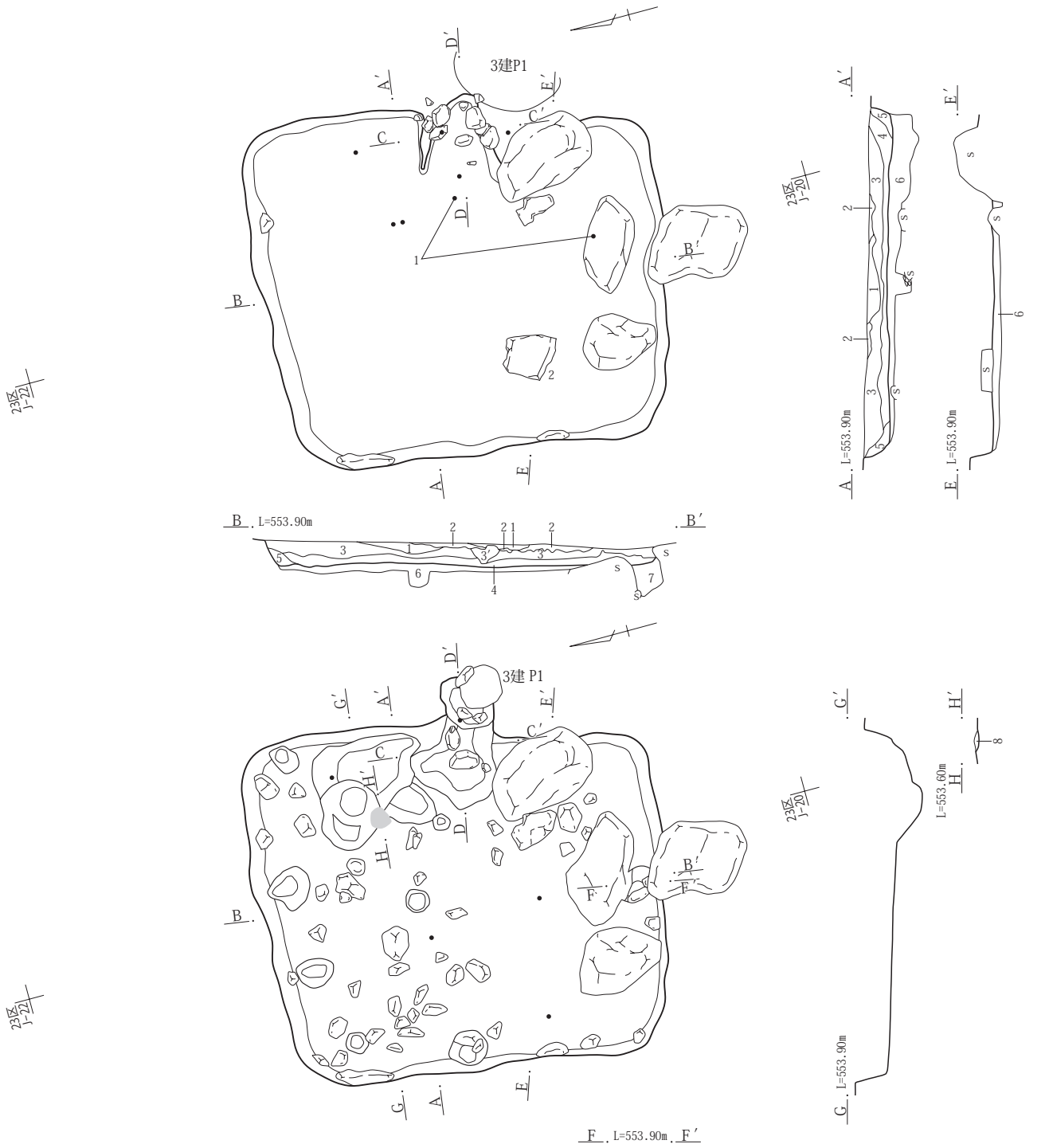
規模 3.49m×4.13m、深さ0.36m、面積10.77㎡。

第54表 1号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第97図	1	灰釉陶器 椀	カマド+3cm 口縁部～体部片	口	13.6		微砂粒/還元焰	ロクロ整形。	
第97図 PL.59	2	石皿	床面 完形	長 幅	52.4 42.8	厚 重	11.8 42680.0	粗粒輝石安山岩	表裏面と下側面は自然面であり大形角礫を利用している。その形状から露頭採集の可能性がある。左右側面と上側面は剥離面で構成されている。表裏面に非常に滑らかな部分が認められ砥石として利用された可能性がある。表面の左上方には線條痕が集中する。



第97図 1号竪穴住居出土遺物



- 1 暗褐色土 やや砂質味強く、粘性を帯びた均質土。軽石粒をごくわずか含む。
- 2 As-kkテフラ (暗黄褐色)
- 3 暗褐色土 締り弱く、やや粘性ある均質土。炭化粒をやや多く含み、小礫をわずかに含む。
- 3' 暗褐色土 3層に比べて、As-kk (灰色)をブロック状に多く含む粘質土。
- 4 暗褐色土 3層に比べて炭化物を少量含み、地山ブロックをわずかに含む。
- 5 暗褐色土 地山ブロックを不均質に多く含み、僅かに炭化粒も含む。
- 6 黒褐色土 炭化物をごく少量含み、やや締り欠く。ローム粒をごく少量含み、3cm大の円礫数個含む。
- 7 黒褐色土 炭化物をごく少量含み、やや締り欠く。ローム粒をごく少量含み、小礫を含む。
- 8 赤褐色土 1cm大の炭化粒を少量含み、不均質な焼土ブロック。

第98図 1号竪穴住居 1

主軸方向 N-83°-W。

埋没土 覆土上層に暗黄褐色のAs-Kkテフラの堆積が認められる。遺構を埋める暗黒褐色の覆土は炭化粒を含み、下位は地山ブロックを含む。また壁際には、地山ブロックの含有度合いの高い暗褐色土が、崩落様に堆積している。

カマド 西辺中央部に位置する。片袖は地表に頭をだした地山の石を取り込む形で構築され、両袖とも住居内に突出する。カマド上辺には石が散在しており、石組みがなされていたと推測される。火床は住居の壁線の内側に位置する。

壁溝 なし。

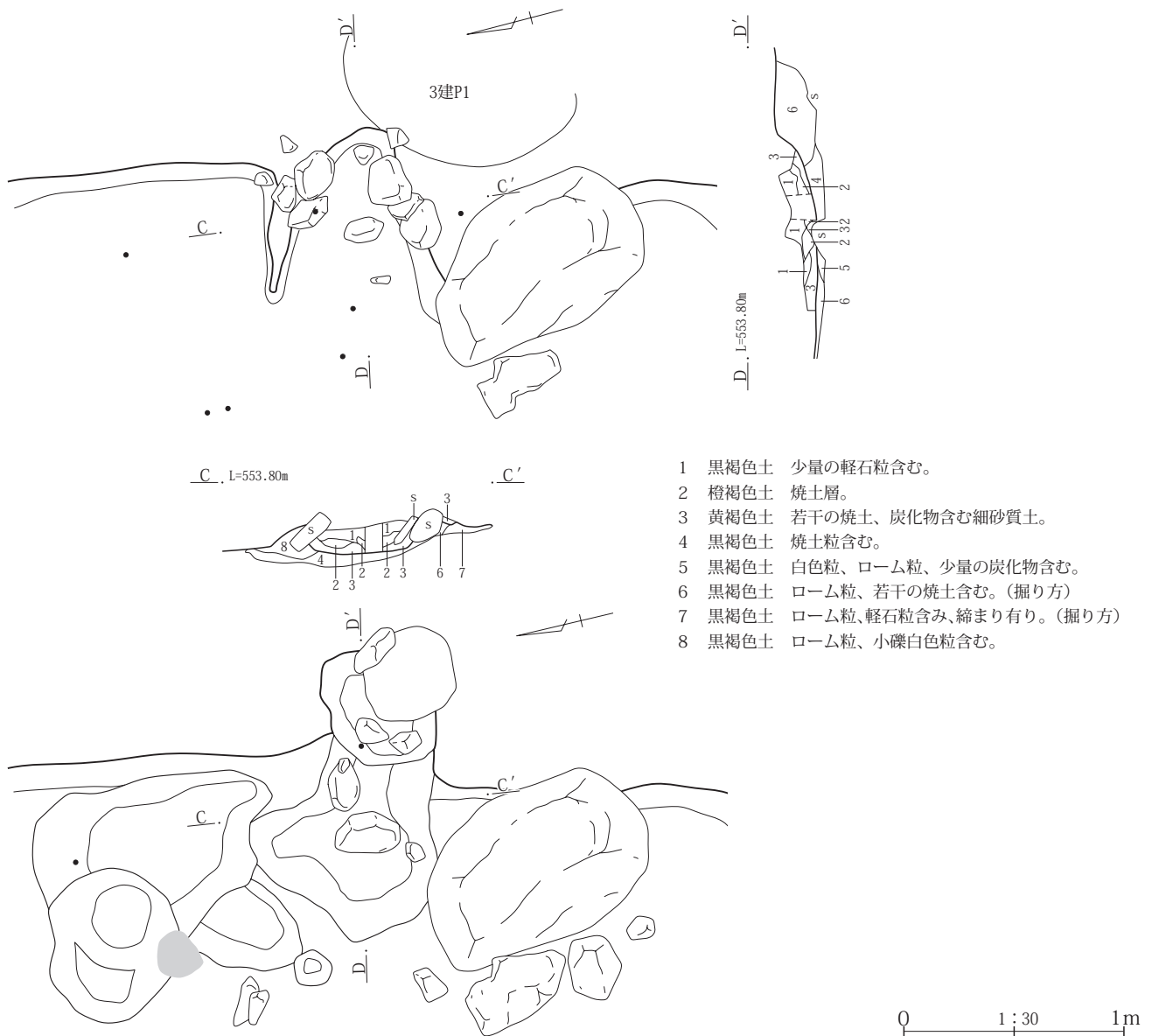
掘り方 炭化物とローム粒をごく少量含む黒褐色土により床面が整形されている。なおカマド手前やや北寄りの地点から、1cm大の炭化粒を少量含む、不均質な焼土ブロックが確認されている。

重複 3号掘立柱建物。

遺物 床面から灰釉陶器椀(1)および石皿(2)が出土している。このほか、覆土中から内黒椀の破片など5片(32g)が出土している。

所見 本住居の年代は埋没土および出土遺物から平安時代に比定される。なお、3号掘立柱建物より古い。

床面出土の石皿は重量が40kgを超えるものである。その出自は縄文時代に遡る可能性が高いが、砥石あるいは



第99図 1号竪穴住居2

台石などの用途のために、遺構内に持ち込まれ使用されたと推測される。

b 2号竪穴住居(第100・101図、PL.44・45・59)

位置 34区U～V-12～13グリッド。調査区北西端に位置する。

形状 遺構の北半が調査区外にあり不明、西辺と南辺のみ確認される。なお南西隅と南東隅の曲率が相違する。

規模 4.08m×(2.89)m、深さ0.29m、面積(5.68) m²。

長軸方向 N-77°-E。

埋没土 白色軽石をわずかに含む黒褐色土。床面中央部を中心に地山ロームを不規則に含み、炭化物を少量含む黒褐色土が堆積する。なお調査時に、覆土上層で、レンズ状に堆積したAs-Kkと考えられる火山灰層が確認され

ている。

カマド 不明。

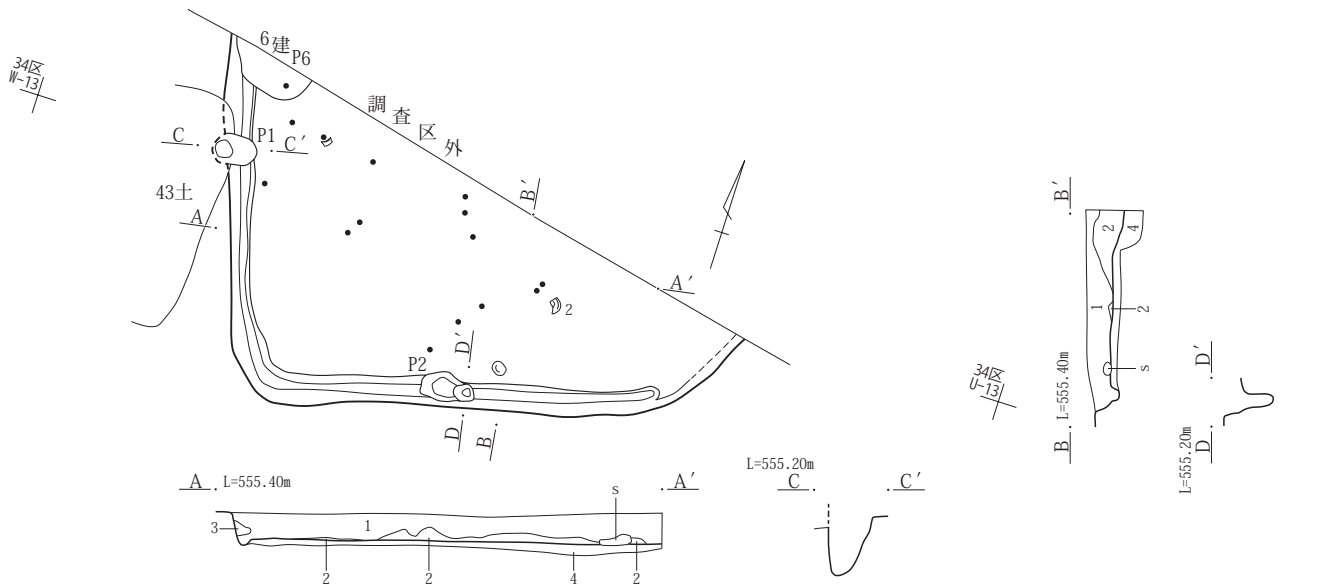
壁溝 西辺および南辺において幅26cm、深さ4cm程度の溝が確認されている。

掘り方 地山ロームおよび炭化物を含む黒褐色土による貼床が認められる。また調査区境界沿いに、一段深くなる一画が存在している。

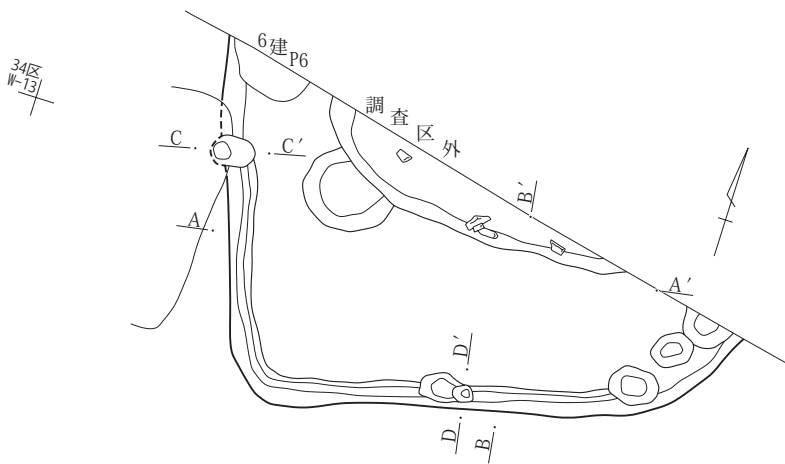
重複 43号土坑。

遺物 床面から須恵器甕(2)、掘り方から土師器甕(1)が出土している。このほか、覆土中から須恵器や施釉陶器の破片12片(116g)が出土している。

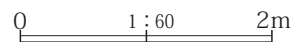
所見 本住居の年代は、埋没土および出土遺物から平安時代に比定される。43号土坑よりも古い。

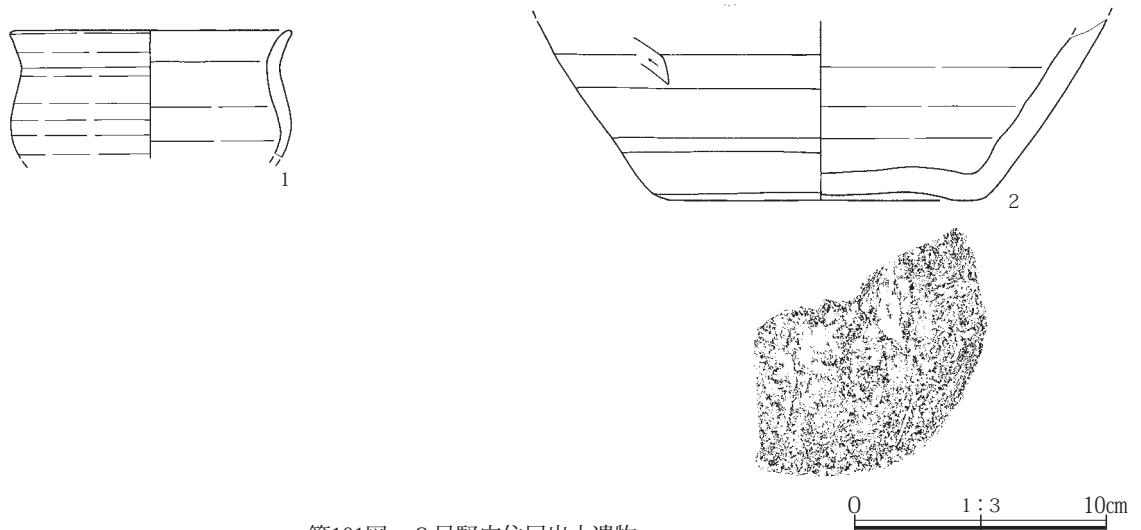


- 1 暗灰褐色土 レンズ状に堆積したAs-Kkと考えられる火山灰層。
- 2 黒褐色土 締り弱く、粘性のやや強い均質土。白色軽石をわずかに含む。
- 3 黒褐色土 2層に加え、地山ロームを不規則に含み、炭化物を少量含む。
- 4 黄褐色土 地山崩落ローム。
- 5 黒褐色土 やや締りある貼床。地山ロームおよび、暗色帯相当の粘質土を主体として、炭化物を少量含み、不均質。



第100図 2号竪穴住居





第101図 2号竪穴住居出土遺物

第55表 2号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	底	厚			
第101図	1	土師器 甕	掘り方 口縁部胴部上位 片	口	11.0		細砂粒/良好/浅黄 橙	ロクロ整形。	北陸系。
第101図 PL.59	2	須恵器 甕	床面 底部～胴部下位 片	底	13.5		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰黄	ロクロ整形。底部は手持ちへら削り、胴部下位は回転 へら削りか、一部不定方向のへら削りがみられる。	

c 3・4号竪穴住居(第102～107図、PL.45～47)

3号竪穴住居と4号竪穴住居は同一位置から重なって検出された。遺構の存在する範囲には、ほぼ全面にわたり黒変した焼土面がひろがり、炭化材も散在していた。上位となる3号竪穴住居の南端は確認できる状況になかったが、遺構南辺に黒変していない領域が認められた。黒変した領域を3号竪穴住居、その外にまでひろがる領域を4号竪穴住居と推定した。

c. 1 3号竪穴住居(第102～106図、PL.45～47・59)

位置 34区W～X-11～12グリッド。調査区北西端に位置する。

形状 隅丸方形。住居北東部に径0.77m、深さ0.2mの掘り込みが存在する。また住居中央部やや北よりに、径0.87m、深さ0.24mと径0.65m、深さ0.19mの連なった掘り込みが存在する。このほか住居南西部に径0.51m、深さ0.67mの掘り込み、住居中央南東よりに径0.39m、深さ0.33mの掘り込みが存在する。

規模 4.44m×(3.81)m、深さ0.45m、面積(12.23) m²。

主軸方向 N-27°-W。

埋没土 白色・黄色軽石粒をわずかに含む黒褐色土に覆われ、床面にはよく焼けた焼土ブロックと1～3cm大の炭を不均質に含む黒褐色土が堆積する。なお覆土上層にはAs-Kkのレンズ状の堆積が確認されている。

カマド 北辺やや北よりに位置する。黄褐色粘質土によりカマドを構築していたものと推測されるが、上部構造をとどめていない。火床は壁線より内側に存在したと推測される。

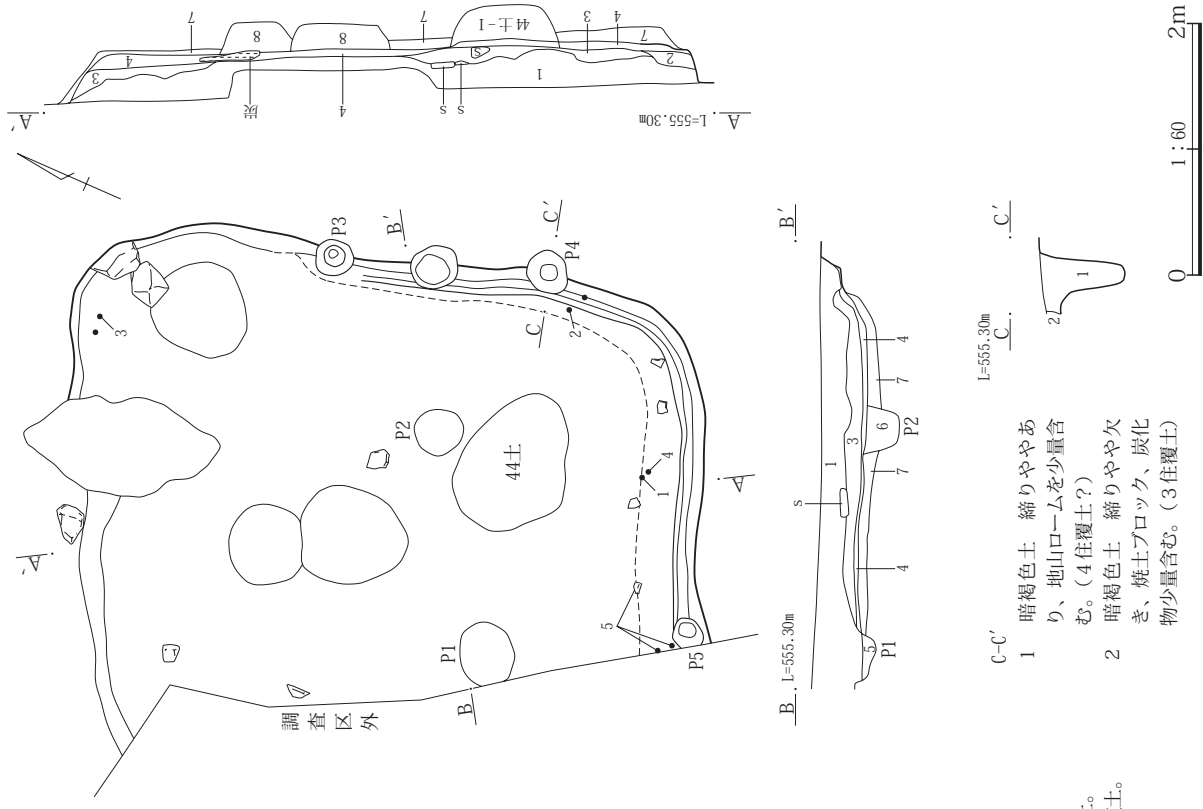
壁溝 なし。

掘り方 地山ロームをブロックで含む黒褐色土。

重複 4号竪穴住居、44号土坑。

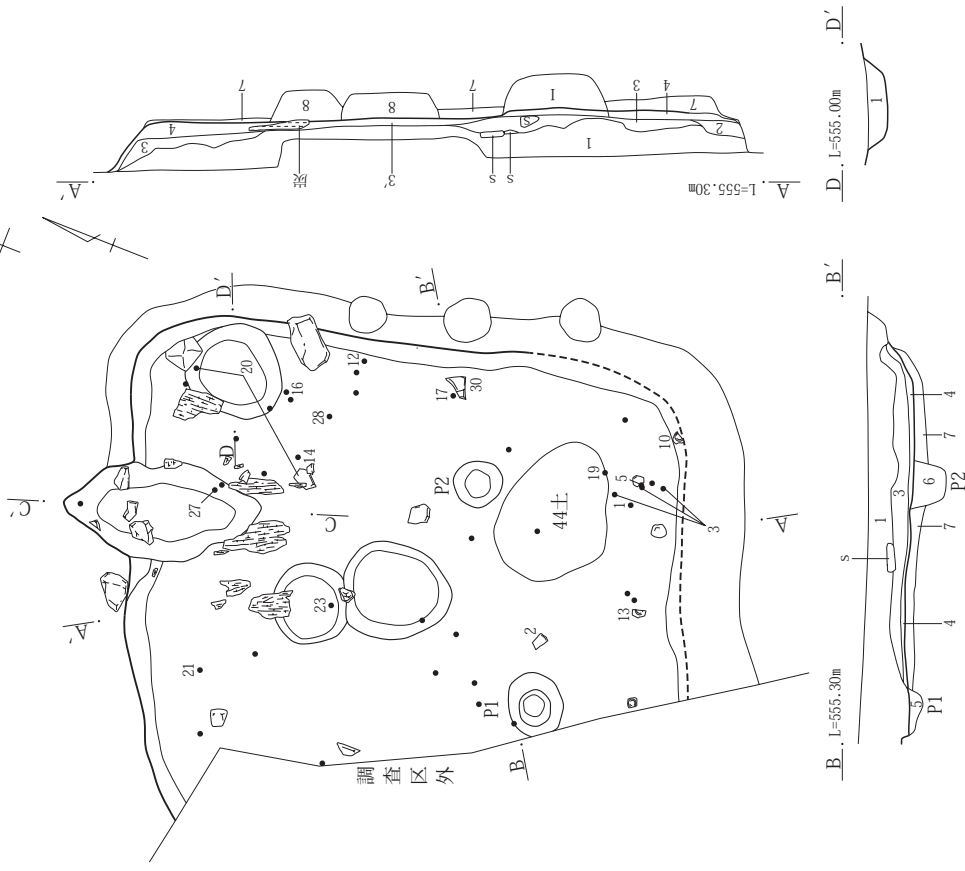
遺物 床面から須恵器椀(3,10)、灰釉陶器皿(14)、黒色土器椀(23,24)が出土している。なお調査時に、カマド周辺を中心に炭化物の存在が確認されている。覆土からは須恵器椀(2,6～8)、灰釉陶器椀(15～17,19)、灰釉陶器皿(13)、黒色土器鉢(26,27)、土師器甕(29)が出土している。掘り方からは須恵器椀(4,5,9)、須恵器坏(1)、灰釉陶器椀(18,21)、灰釉陶器皿(11,12)、黒色土器椀(22,25)、須恵器甕(30)、土師器甕(28)が出土している。このほか土師器や須恵器などの破片183片

4号竪穴住居



- C-C'
- 1 暗褐色土 締めややあり、地山ロームを少量含む。(4住覆土?)
 - 2 暗褐色土 締めやや欠き、焼土ブロック、炭化物少量含む。(3住覆土)

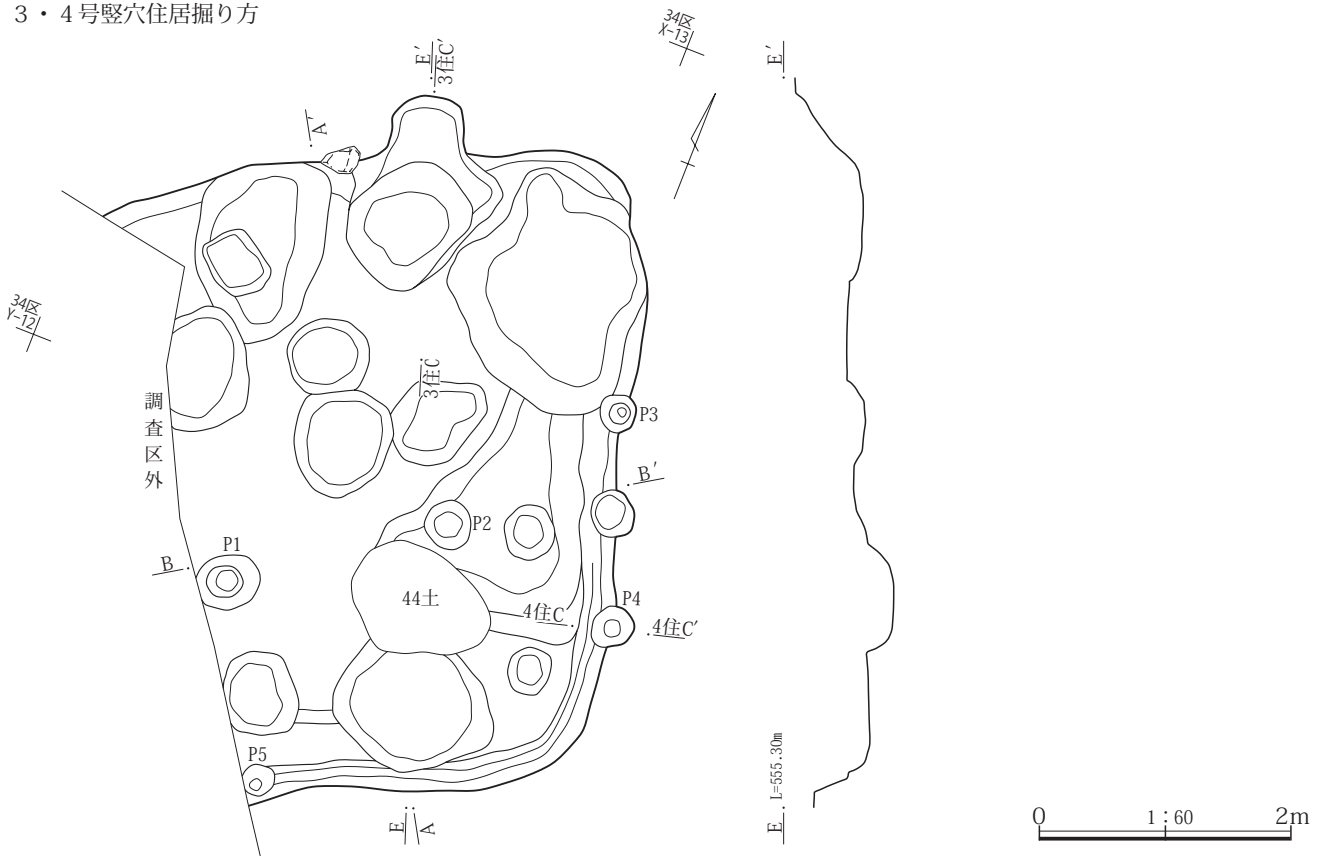
3号竪穴住居



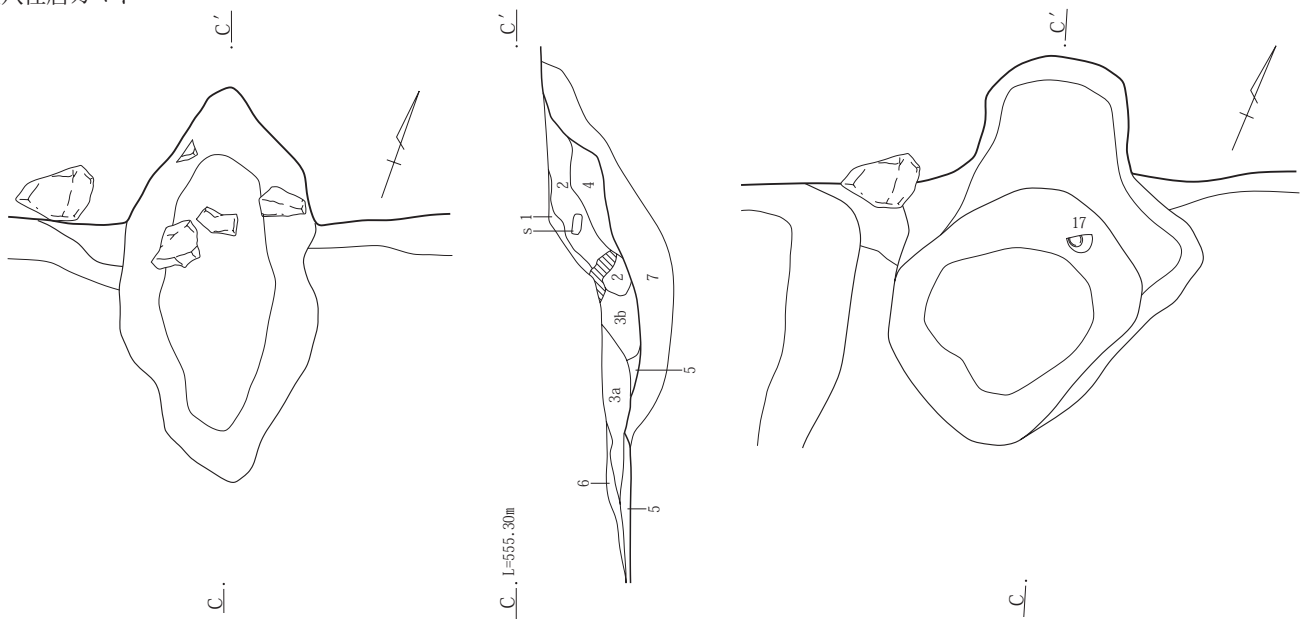
- 1 黒褐色土 やや締めある不均質土。白色・黄色軽石粒をわずかに含む。
- 2 黄褐色土 地山崩落ローム。
- 3 黒褐色土 色調の明るいよく焼けた焼土ブロックと1~3cm大の炭を不均質に含む。
- 4 黒褐色土 1層に比べやや締め強く、ハサつく。炭化物を含まない。地山ロームを少量ブロックで含む。
- 5 暗褐色土 3住P1:炭化物をやや多く含む、締め弱い。くすんだ焼土や赤味を帯びた地山ロームを主体とする不均質土。
- 6 暗褐色土 3住P2:炭化物を少量含む、締め弱い。粘性やや強く締めを欠く、くすんだ地山ロームを主体とするやや均質土。
- 7 暗褐色土 焼土ブロック、地山ローム含む粘質土。
- 8 暗褐色土 やや色調明るく、焼土ブロック、炭をやや乱れて含む粘質土。

第102図 3・4号竪穴住居1

3・4号竪穴住居掘り方



3号竪穴住居カマド



- 1 暗褐色土 小石、焼土、炭粒含む。
- 2 くすんだ黄褐色土 ローム小ブロック。小礫含む。粘性強い。
- 3a 褐色土 2層ロームブロック。
- 3b " 小ブロックに炭化物、焼土小ブロック混じる。3a層より炭化物少ない。
- 4 黄褐色粘質土 焼土化したブロック多く混じる。(天井崩落土か?)
- 5 黄褐色粘質土 床面。
- 6 焼土。
- 7 暗褐色土 焼土ブロック、地山ローム含む粘質土。

第103図 3・4号竪穴住居2

(2,710 g)が出土している。

所見 3号竪穴住居の年代は、覆土と出土遺物から平安時代(10世紀前半)に比定される。4号竪穴住居より新しく、44号土坑より古い。4号竪穴住居のプランを再利用したものと推測される。なお、本遺構は焼失家屋の可能性が高い。

c. 2 4号竪穴住居(第102・103・107図、PL.46・47・60)

位置 34区W~X-11~12グリッド。調査区北西端に位置する。

形状 北東隅から東辺および南辺が確認されたにとどまる。隅丸方形と推測される。

規模 4.96m×(4.01)m、深さ0.45m、面積(14.95) m²。

主軸方向 N-25°-W。

埋没土 3号竪穴住居に切られ、周辺部しか確認できない。地山ロームを少量含む暗褐色土。

カマド 不明。

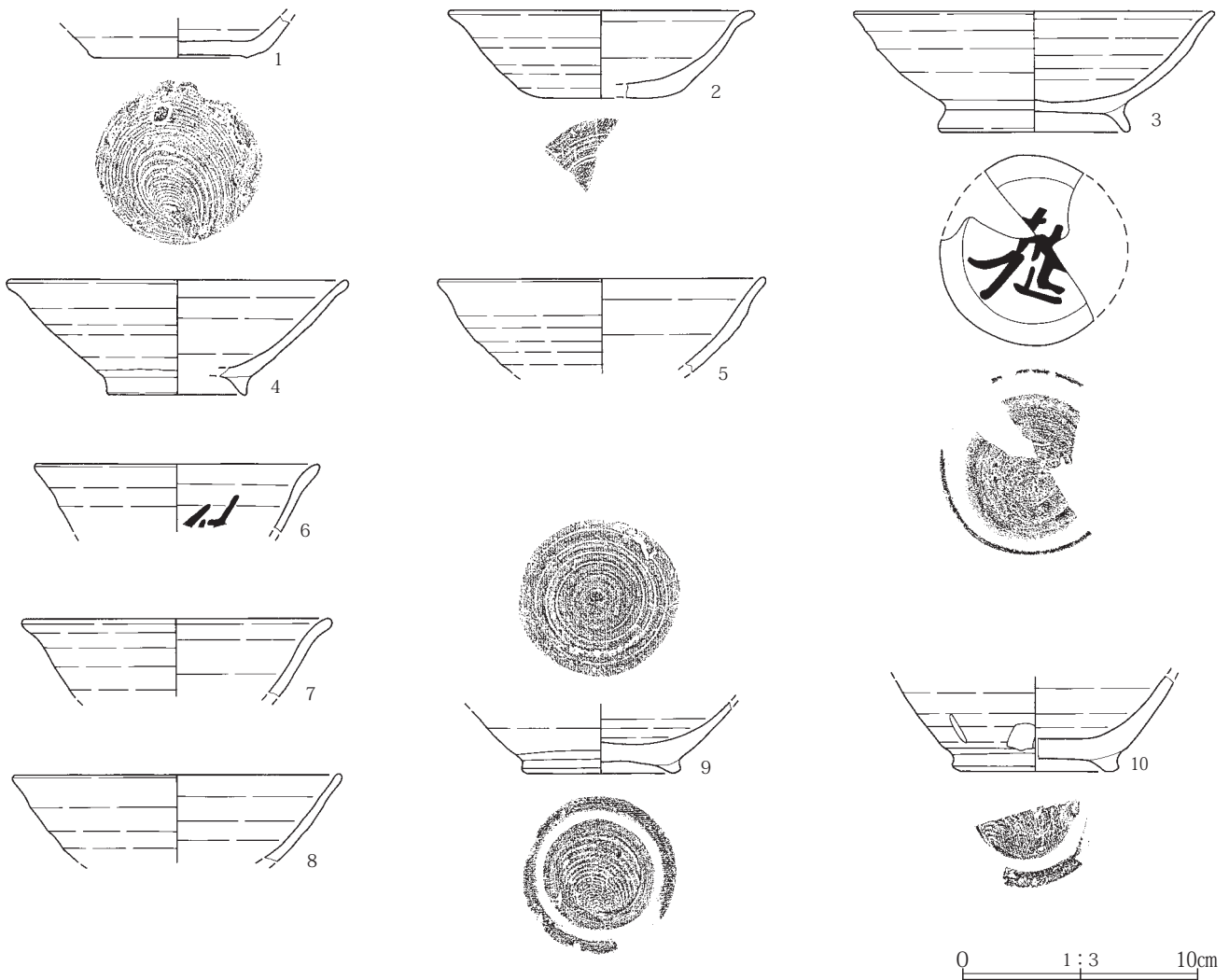
壁溝 南辺から東辺半ばにかけて、幅0.2m、深さ2cm程度の溝がめぐる。溝内には径0.26~0.37m、深さ0.06~0.6mの掘り込みが、南辺1か所、東辺3か所に存在している。

掘り方 3号竪穴住居に切られる。

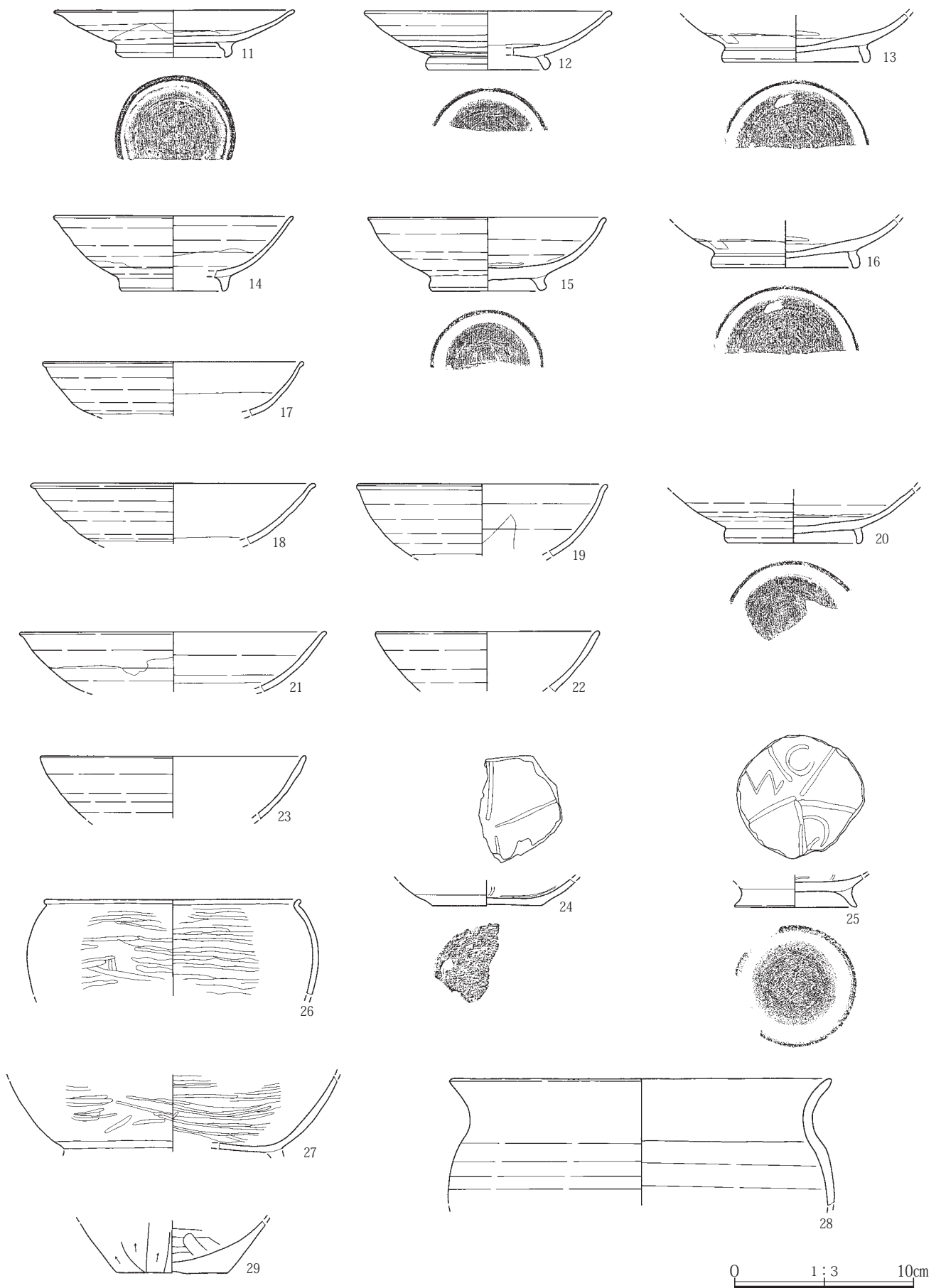
重複 3号竪穴住居、44号土坑。

遺物 床面から黒色土器椀(5)、覆土から須恵器椀(2)、掘り方から須恵器椀(1, 3, 4)が出土している。このほか須恵器などの破片31片(1,070 g)が出土している。

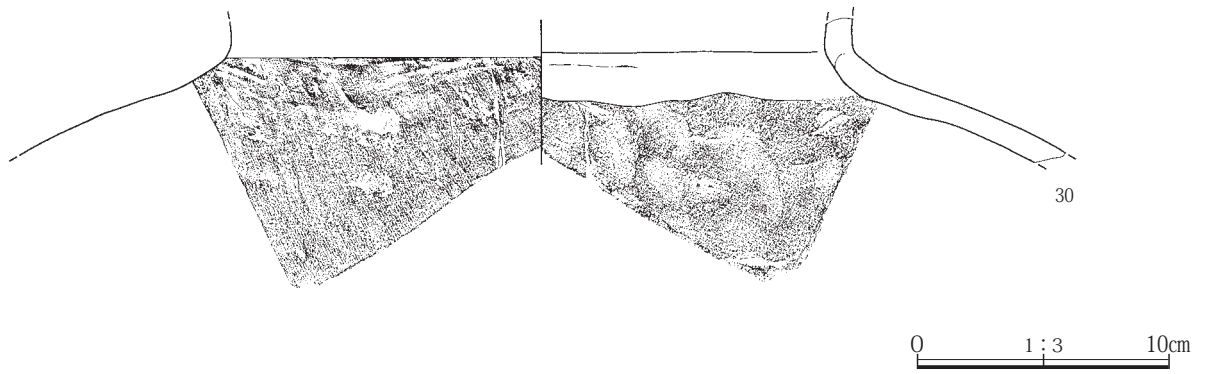
所見 4号竪穴住居の年代は、3号竪穴住居との重複関係から平安時代に比定される。3号竪穴住居、44号土坑のいずれよりも古い。出土した遺物間に有意義な時間差は認めがたい。両住居はわずかな期間に構築されたものと推測される。



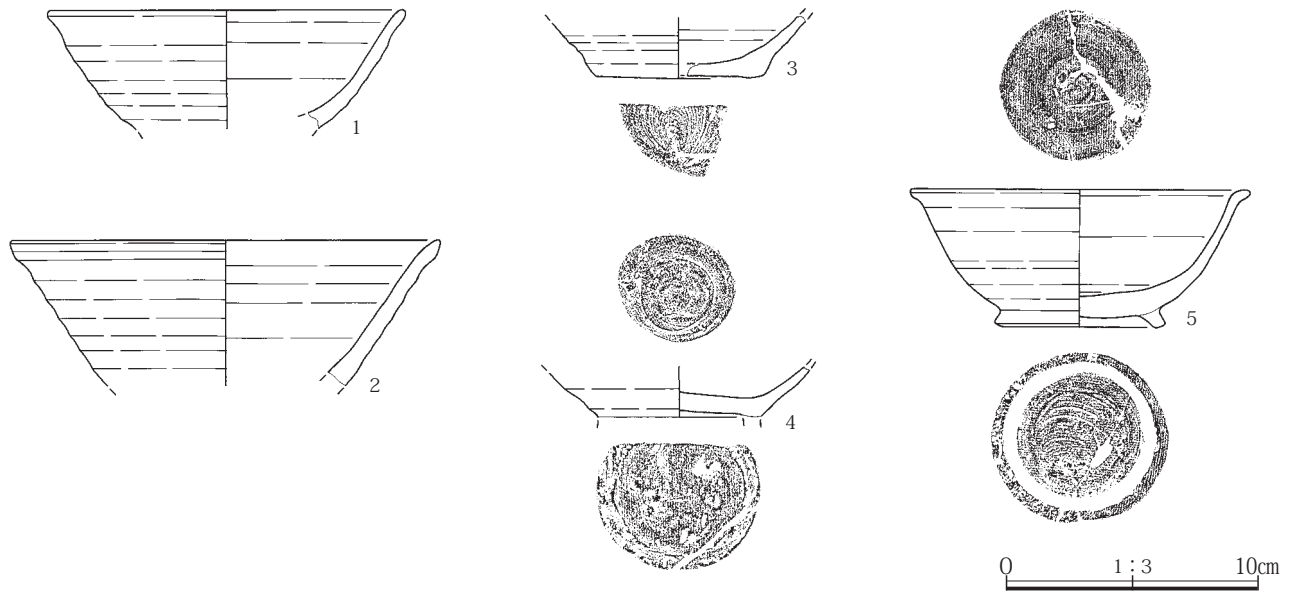
第104図 3・4号竪穴住居出土遺物1(3号竪穴住居部分)



第105図 3・4号竪穴住居出土遺物2(3号竪穴住居部分)



第106図 3・4号竪穴住居出土遺物3(3号竪穴住居部分)



第107図 3・4号竪穴住居出土遺物4(4号竪穴住居部分)

第56表 3・4号竪穴住居出土遺物観察表1(3号竪穴住居部分)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				底	口底	高			
第104図	1	須恵器 杯	3住掘り方 底部	底	7.2		細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第104図 PL.59	2	須恵器 椀	3住覆土 1/5	口底	12.6 5.3	高 3.7	細砂粒/酸化焰/浅黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第104図 PL.59	3	須恵器 椀	3住+ 1cm 1/4	口底	15.0 7.6	台高 7.8 5.1	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付によるナデで不鮮明。	底部に墨書「柁」か。
第104図 PL.59	4	須恵器 椀	3住掘り方 1/5	口底	14.4 6.0	台高 5.8 4.8	細砂粒/還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回りか。底部の整形は不明、高台は貼付。	
第104図	5	須恵器 椀	3住掘り方 口縁部～体部 1/3	口	13.6		細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回りか。	
第104図 PL.59	6	須恵器 椀	3住覆土 口縁部片	口	11.8		細砂粒 /還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転右回りか。	内面体部に墨書。
第104図	7	須恵器 椀	3住覆土 口縁部～体部 1/4	口	12.9		細砂粒/還元焰・ 燻/褐灰	ロクロ整形、回転右回りか。	
第104図	8	須恵器 椀	3住覆土 口縁部～体部 1/3	口	13.6		細砂粒/酸化焰/浅黄	ロクロ整形、回転右回りか。	
第104図 PL.59	9	須恵器 椀	3住掘り方 底部～体部下位 片	底台	6.6 6.0		細砂粒 /還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り後高台を貼付。	

第3章 確認された遺構と遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				底台	口底	台高			
第104図 PL.59	10	須恵器 椀	3住+ 1 cm 底部～体部片	底台	7.0 6.0		細砂粒 /還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り後高台を貼付。	
第105図 PL.59	11	灰釉陶器 皿	3住掘り方 1/2	口底	13.0 6.4	5.8 4.1	微砂粒/還元焰/灰 黄褐	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施釉方法は漬け掛け。内面底部に重ね焼き痕が残る。	大原2号窯式 期。
第105図 PL.59	12	灰釉陶器 皿	3住掘り方 1/3	口底	13.6 6.2	6.5 3.3	微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施釉方法は漬け掛け。	大原2号窯式 期。
第105図 PL.59	13	灰釉陶器 皿	3住覆土 底部～体部下 半	底台	6.6 6.5		微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。体部下位は回転ヘラナデ、底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施釉方法は刷毛塗りか。	光ヶ丘1号窯 式期。
第105図 PL.59	14	灰釉陶器 皿	3住+ 0 cm 口縁部～底部 片	口底	13.0 6.2	5.6 4.1	微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施釉方法は漬け掛け。	大原2号窯式 期。
第105図 PL.59	15	灰釉陶器 椀	3住覆土 1/4	口底	13.0 6.3	6.0 4.1	微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施釉方法は漬け掛け。内面底部に重ね焼き痕が残る。	大原2号窯式 期。
第105図 PL.59	16	灰釉陶器 椀	3住覆土 底部1/2	底台	8.0 7.8		微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施釉方法は漬け掛け。内面底部に重ね焼き痕が残る。	大原2号窯式 期。
第105図 PL.59	17	灰釉陶器 椀	3住覆土 口縁部1/3	口	14.3		微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回りか。施釉方法は刷毛塗り。	光ヶ丘1号窯 式期。
第105図 PL.59	18	灰釉陶器 椀	3住掘り方 口縁部1/4	口	15.5		微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回りか。施釉方法は刷毛塗り。	光ヶ丘1号窯 式期。
第105図 PL.59	19	灰釉陶器 椀	3住覆土 口縁部片	口	13.7		微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回りか。施釉方法は漬け掛けか。	大原2号窯式 期。
第105図 PL.59	20	灰釉陶器 椀	3住覆土 底部～体部 片	底台	7.5 7.3		微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施釉方法は漬け掛け。	大原2号窯式 期。
第105図 PL.59	21	灰釉陶器 椀	3住掘り方 口縁部片	口	16.9		微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回りか。施釉方法は漬け掛けか。	大原2号窯式 期。
第105図 PL.59	22	黒色土器 椀	3住掘り方 口縁部片	口	12.3		細砂粒/酸化焰/ 橙	内面黒色処理。ロクロ整形、回転右回り。	
第105図 PL.59	23	黒色土器 椀	3住+ 1 cm 口縁部1/4	口	14.6		細砂粒/酸化焰/ にぶい黄橙	内面黒色処理。ロクロ整形、回転右回り。	
第105図 PL.59	24	黒色土器 椀	3住+ 1 cm 底部～体部下 位片	底	6.0		細砂粒/酸化焰/ にぶい黄橙	内面黒色処理。ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。内面底部に花卉状の暗文。	
第105図 PL.59	25	黒色土器 椀	3住掘り方 底部	底台	6.1 6.6		細砂粒/酸化焰/ 橙	内面黒色処理。ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。内面底部に暗文。	
第105図 PL.59	26	黒色土器 鉢?	3住覆土 口縁部～体部 中位片	口	14.1		細砂粒/酸化焰/ にぶい褐	内面黒色処理。ロクロ整形。内外面ともヘラ磨き。	
第105図 PL.59	27	黒色土器 鉢?	3住覆土 底部～体部 中位片	底	12.0		細砂粒/酸化焰/ にぶい黄橙	内面黒色処理。ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付が剥落。内面はヘラ磨き。	
第105図 PL.59	28	土師器 甕	3住掘り方 口縁部～胴部 上位片	口	21.0		細砂粒/良好/ にぶい黄橙	ロクロ整形。	北陸系。
第105図 PL.59	29	土師器 甕	3住覆土 底部胴部下 位小片	底	6.2		細砂粒・粗砂粒/ 良好/明黄褐	底部と体部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	羽釜の可能性 あり。
第106図 PL.59	30	須恵器 甕	3住掘り方 頸部～胴部 上位片				細砂粒/還元焰/ 灰黄	頸部にて胴部と口縁部を接合。胴部は外面がたたきであるが、ほとんどナデ消されている。内面は無文のアテ具痕が残る。	

第57表 3・4号竪穴住居出土遺物観察表2(4号竪穴住居部分)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	台高	底高			
第107図	1	須恵器 椀	4住掘り方 口縁部～体部 1/4	口	13.8		細砂粒/酸化焰/ 灰白	ロクロ整形、回転右回りか。	
第107図	2	須恵器 椀	4住覆土 口縁部～体部 1/4	口	16.9		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回りか。	
第107図	3	須恵器 椀	4住掘り方 底部～体部下 位片	底	6.6		細砂粒/還元焰/ 灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第107図 PL.60	4	須恵器 椀	4住掘り方 底部～体部下 位片	底 0	6.4		細砂粒/酸化焰/ 明黄褐	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転糸切り後ナデ、高台は貼付が剥落。	
第107図 PL.60	5	黒色土器 椀	4住+ 2 cm 1/3	口底	13.0 6.2	5.8 5.4	細砂粒/還元焰/ 黒褐	内外面とも黒色処理。ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り後高台を貼付。	

(2)掘立柱建物

a 3号掘立柱建物(第108～112図、PL.47～50・60)

位置 23区G～I-20～23グリッド。調査区東辺に位置する。

形状等 柱穴10基が確認されている。1間×4間の南北棟。調査時において、P10覆土からAs-Kk(灰色)テフラと考えられる火山灰層が確認されている。

規模 桁行9.81m、梁間4.85m。

桁行方向 N-15°-E。

付属施設 焼土遺構1基。付属施設については後述する。

重複 1号竪穴住居、11号土坑。

遺物 床面より磨石(1)が出土している。

所見 本遺構の年代は、埋没土および1号竪穴住居との重複関係から平安時代に比定されるが、As-Kkが埋土に

由来する場合、中世にさかのぼる可能性を残す。1号竪穴住居、11号土坑より新しい。

a.1 1号焼土遺構(第108図、PL.50)

位置 23区H-21グリッド。建物内中央部に位置する。

形状等 不整形。少量の1cm大の炭化粒を不均質に含む赤褐色の焼土ブロック。

規模 0.85m×0.39m、深さ0.10m。

長軸方向 N-40°-W。

重複 なし。

遺物 なし。

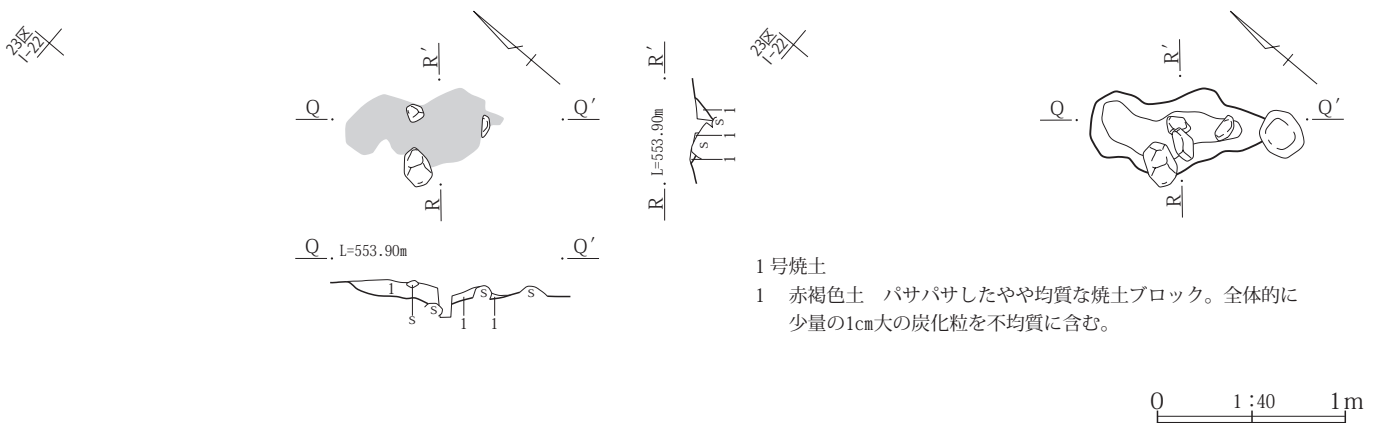
所見 本遺構の年代は、出土層位から平安時代に比定される。

第58表 3号掘立柱建物柱間計測表

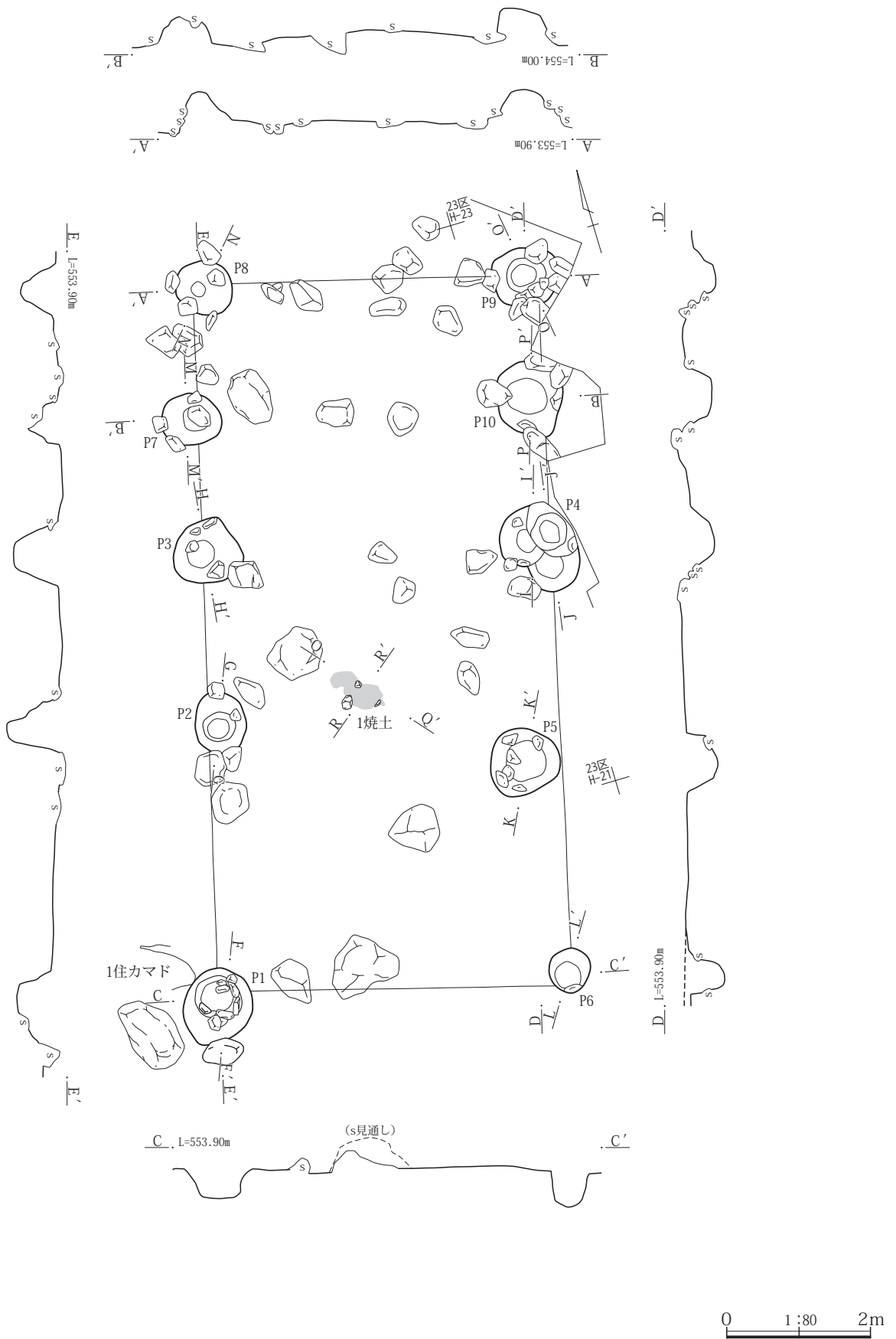
	桁行柱間		桁行柱間		桁行柱間		桁行柱間		桁行	
	P9	P10	P4	P5	P6	P8	P7	P3		P2
梁行柱間	4.52	4.60	4.71	4.29	4.85	1.68	2.14	2.93	3.01	9.72
梁間	4.52	4.60	4.71	4.29	4.85	1.80	1.88	2.41	3.72	9.81

第59表 3号掘立柱建物ピット計測表

ピット	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
位置	23区I-20	23区I-21	23区I-22	23区G-H-21	23区H-21	23区H-20	23区H-I-22	23区H-22-23	23区G-22	23区G-H-22
規模	長 1.09 短 0.93 深 0.47	(0.88) 0.70 0.76	0.95 0.93 0.65	1.25 1.01 0.74	0.98 0.96 0.42	0.61 0.58 0.49	0.83 0.72 0.45	0.82 0.72 0.58	0.92 (0.86) 0.51	1.09 0.94 0.51
形状	円形	長円形	円形	不整形	円形	円形	円形	円形	円形	長円形
長軸方向	N-35°-E	N-8°-E	N-58°-W	N-12°-W	N-46°-E	N-5°-E	N-63°-W	N-44°-W	N-47°-W	N-16°-W
重複	1住									
旧名称										

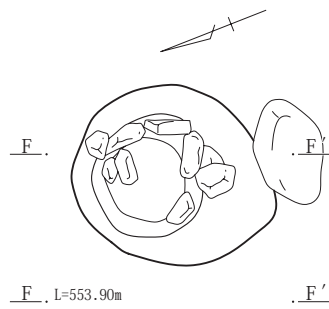


第108図 3号掘立柱建物 1

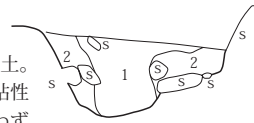


第109図 3号掘立柱建物2

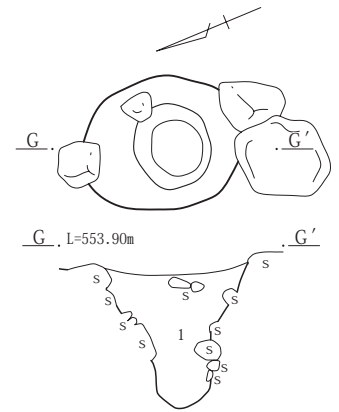
P 1



- 1 暗褐色土 締めやや弱い均質土。地山ブロックを含まず、やや粘性あり。黄色・白色軽石をごくわずかしき含まない。
- 2 暗褐色土 1層に比べやや締めは強く、地山黄褐色ブロックを1:1に乱れて含む。人頭～握り拳大の根固めと考えられる円礫を多く含む。

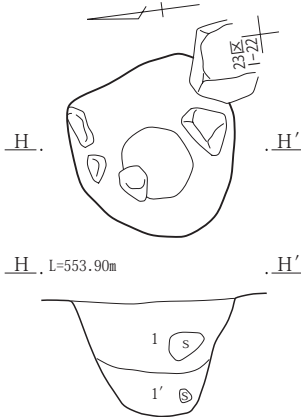


P 2



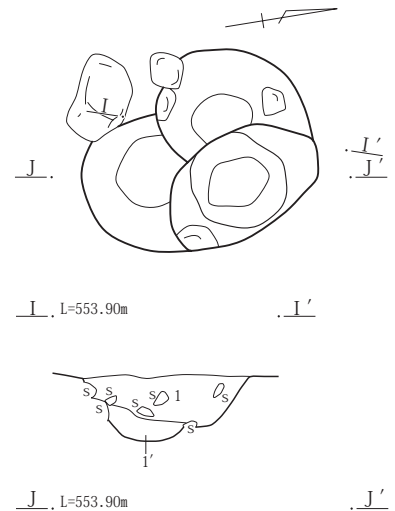
- 1 黒褐色土 締め粘性やや強く、3～20cm大の根固めと考えられる円礫を多く含み、地山黄褐色ブロックを少量乱れて含み、全体に不均質。

P 3



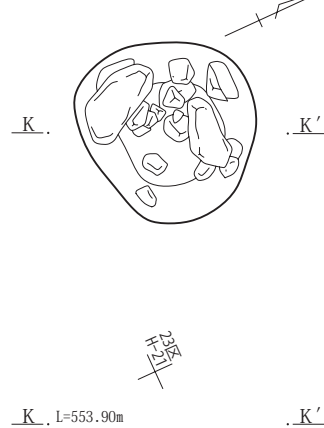
- 1 黒褐色土 締め粘性やや強く、5～20cm大の円礫を複数個含み、地山黄褐色ブロックを少量乱れて含む。
- 1' 黒褐色土 1層に比べて、締めが弱く、色調明るい。

P 4



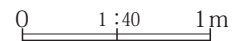
- 1 黒褐色土 締め粘性やや強く、5～20cm大の根固めと考えられる円礫を複数個含み、地山黄褐色ブロックを少量乱れて含み、全体に不均質。
- 1' 黒褐色土 1層に比べて、締めが弱く色調明るい。地山明黄色ブロックが層状に薄く堆積し、1層と分層できる。
- 2 黒褐色土 締めやや弱く均質。混入物ほとんどなく均質で粘性やや強い。

P 5

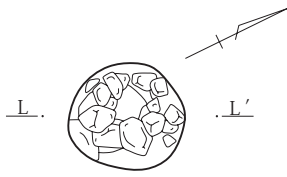


- 1 黒褐色土 締め粘性やや強く、3～20cm大の根固めと考えられる円礫を多く含み、地山黄褐色ブロックを少量乱れて含み、全体に不均質でややパサパサ味がある。

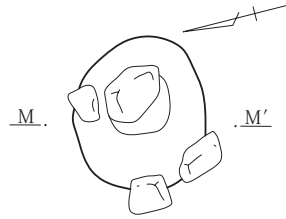
第110図 3号掘立柱建物3



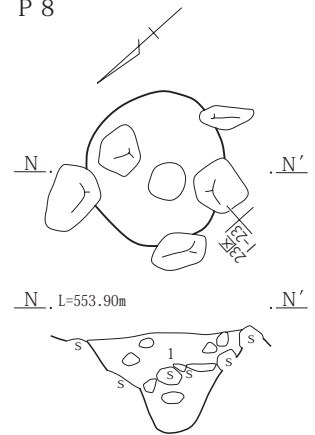
P 6



P 7

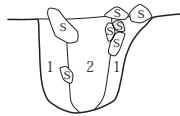


P 8



23区
H+23

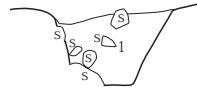
L, L', L=553.90m



- 1 黒褐色土 地山黄褐色土ブロックをわずかに含み、締り弱く、粘性やや強い。人頭～握り拳大の根固めと考えられる円礫を多く含み、根固めの状況が明瞭である。
- 2 褐色土 軽石粒をほとんど含まず、締り弱く均質で円礫による根固め内部の状況から、柱痕と考えられる。

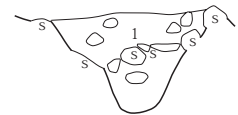
23区
H+23

M, M', L=553.90m



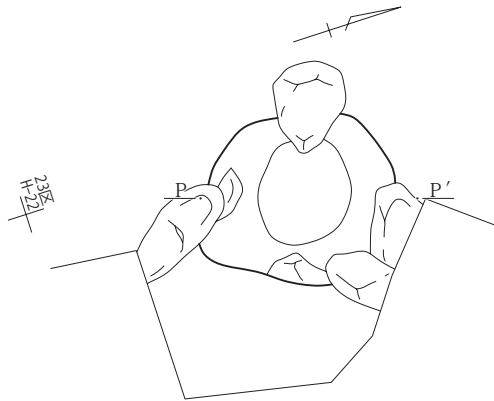
- 1 黒褐色土 締り粘性やや弱く均質。軽石粒をほとんど含まず、色調ややくすんでいる。握り拳大の亜角礫を複数含む。(P10と土層雰囲気似ている。)

N, N', L=553.90m



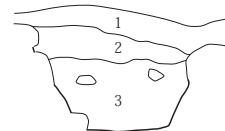
- 1 黒褐色土 締り粘性やや強く、10～20cm大の円礫をやや多く含み、全体にやや均質。

P 10

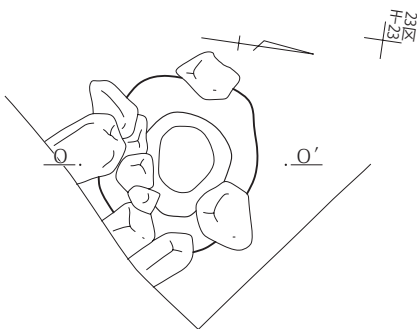


P, P', L=555.00m

天明泥流堆積物
及び表土



P 9



O, O', L=553.90m

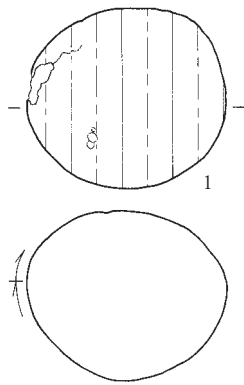


- 1 黒褐色土 締り粘性やや強く、円礫を複数個含み、地山黄褐色ブロックを少量乱れて含み、全体に不均質。
- 1' 黒褐色土 1層に比べて、締りが弱く色調明るい。1層との境界面に鉄分凝集層が形成されている。

- 1 暗褐色土 ややくすんだ色調の均質土。わずかに炭化粒を含む。
- 2 暗褐色土 白色軽石を含み、やや粘性強い不均質土。下位に鉄分凝集層が形成されている。
- 3 黒褐色土 締り粘性やや弱く均質。軽石粒をほとんど含まず、色調ややくすんでいる。礫を土層の周囲のみに含む。3層上位にわずかにAs-Kk (灰色)テフラと考えられる火山灰層が認められた。(P7と土層雰囲気似ている。)

0 1:40 1m

第111図 3号掘立柱建物4



第112図 3号掘立柱建物出土遺物

第60表 3号掘立柱建物出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長幅	7.9 7.1	厚重	6.7 467.6			
第112図 PL.60	1	礫石器 磨石	3建物 完形	長幅	7.9 7.1	厚重	6.7 467.6	粗粒輝石安山岩	極円礫を利用していると考えられる。全面が磨面で構成される。	

(3) 竪穴状遺構

a. 1号竪穴状遺構(第113図、PL.51・52)

位置 33区L～M-1、23区L～M-25グリッド。調査区東部に位置する。

形状 隅丸台形。

規模 3.87m×3.61m、深さ0.47m、面積9.74㎡。

長軸方向 N-10°-E。

埋没土 上位より、鉄分層、黄色パミス含む黒色土、黄褐色パミスが混入する暗赤褐色土、As-Kkを含む灰黒色土、ローム小粒を多く含む暗黒褐色土が層状に堆積する。

掘り方 ローム小粒を含む黒褐色土と暗黒褐色土により床面が整形されている。

付属施設 焼土遺構1基、ピット2基。付属施設については後述する。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位および覆土から平安時代に比定される。

a. 1 焼土遺構(第113図、PL.51)

位置 33区M-1、23区M-25グリッド。遺構中央部に位置する。

形状 不整形。炭化粒を少量含む赤褐色土が、焼土が少量混じる暗褐色土の上に堆積している。

規模 0.57m×0.41m、深さ0.19m。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 遺構内の地表に頭を出した石を利用した炉と推測される。

a. 2 P1(第113図、PL.52)

位置 23区L-25グリッド。遺構東辺よりに位置する。

形状 円形。

規模 0.24m×0.17m、深さ0.26m。

長軸方向 N-55°-W。

埋没土 炭化粒をわずかに含む暗褐色土。

重複 なし。

遺物 なし。

a. 3 P2(第113図、PL.52)

位置 33区L～M-1グリッド。遺構中央部に位置する。

形状 円形。

規模 0.25m×0.24m、深さ0.30m。

埋没土 炭化粒をわずかに含み、黄色軽石をごくわずかに含む暗褐色土。

重複 なし。

遺物 なし。

(4)土坑

確認された土坑15基は調査区の東部、中央部、北西部に点在している。多くの土坑が個々に分散するなか、北西部の竪穴住居の東、住居から12mほど離れた標高554.65m前後のところに、平安時代と考えられる陥穴が列をなすように集まっている。なお、調査区西部の28号土坑からは縄文前期の遺物が出土している。

a 1号土坑(第114図、PL.52)

位置 23区I-19グリッド。調査区東部に位置する。

形状 隅丸方形。

規模 0.83m×0.66m、深さ0.58m。

長軸方向 N-75°-W。

埋没土 3～5cm大の礫を含む暗褐色土に覆われるが、下位は礫の混じり方が少ない。なお中位に地山ブロックを含む。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から平安時代に比定される。

b 3号土坑(第114図、PL.52)

位置 24区G～H-18グリッド。調査区中央部に位置する。

形状 隅丸長方形。

規模 0.95m×0.60m、深さ0.21m。

長軸方向 N-33°-E。

埋没土 炭化粒をやや多く含み、地山ブロックをわずかに含む暗褐色土。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から平安時代に比定される。

c 7号土坑(第114図、PL.53)

位置 24区D-20グリッド。調査区中央部に位置する。

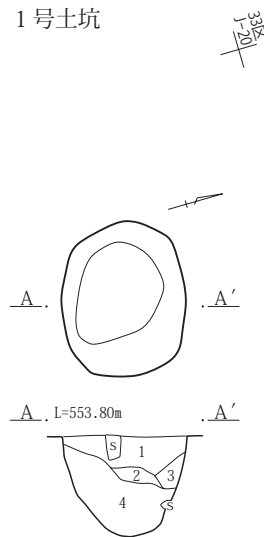
形状 長円形。

規模 0.92m×0.78m、深さ0.24m。

長軸方向 N-17°-E。

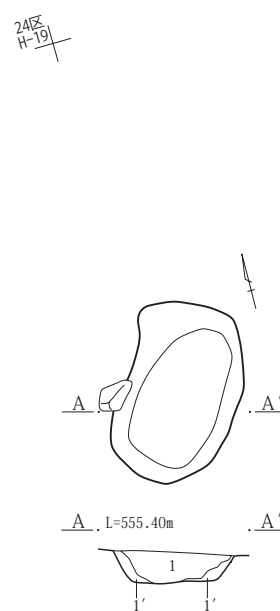
埋没土 1～2cm大の炭化物を少量含み、わずかに地山

1号土坑



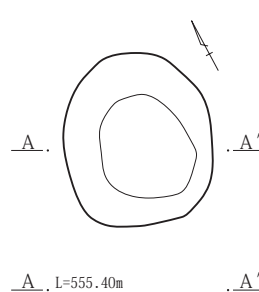
- 1 暗褐色土 やや粘性ある砂質味のある均質土。地山に比べて、くすんだ色調を呈している。地山に比して軽石粒を含まない。3～5cm大の礫を少量含む。
- 2 暗褐色土 1層に比べ、締め弱く礫を含まない。
- 3 暗褐色土 1層に加え暗黄褐色の地山ブロックを含む不均質土。礫を含まない。
- 4 暗褐色土 1層に比べ、礫を含まない。

3号土坑

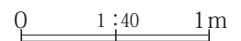


- 1 暗褐色土 炭化粒をやや多く含み、地山黄褐色土ブロックをわずかに含む。黄色軽石を含む割合は、地山に比べてかなり少ない。
- 1' 暗褐色土 地山崩落ブロックを不均質に多く含む。

7号土坑



- 1 暗褐色土 1～2cm大の炭化物を少量不均質に含み、わずかに地山ブロックを含む。
- 2 暗褐色土 1層に比べ、地山黄褐色土ブロックを多く含み、やや色調明るく締めを欠く。



第114図 1号土坑、3号土坑、7号土坑

第3章 確認された遺構と遺物

ブロックを含む暗褐色土。下位ほど地山ブロックを多く含む。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から平安時代に比定される。

d 8号土坑(第115図、PL.53)

位置 24区 I-18～19グリッド。調査区中央部に位置する。

形状 長円形。

規模 2.07m×1.03m、深さ0.32m。

長軸方向 N-30°-W。

埋没土 1～2cm大の炭化物を少量不均質に含み、わずかに地山ブロックを含む暗褐色土。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から平安時代に比定される。

e 9号土坑(第115図、PL.53)

位置 23区 K～L-24～25グリッド。調査区東部に位置する。

形状 円形。底部中央付近に大小2か所の焼土が認められる。

規模 1.02m×0.95m、深さ0.23m。

長軸方向 N-24°-E。

埋没土 炭化物を含む暗褐色土。

重複 なし。

遺物 なし。

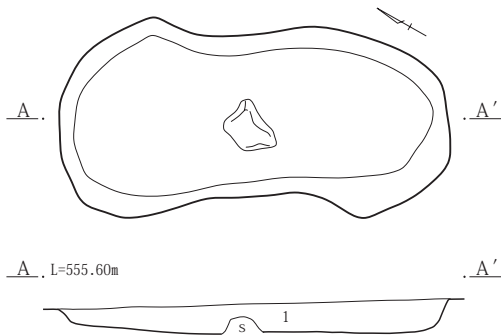
所見 本遺構の年代は、出土層位から平安時代に比定される。調査時に、遺構周辺から炭化物が確認されている。炉として使用されていた可能性も否定しえない。

9号土坑

33区
L-24

8号土坑

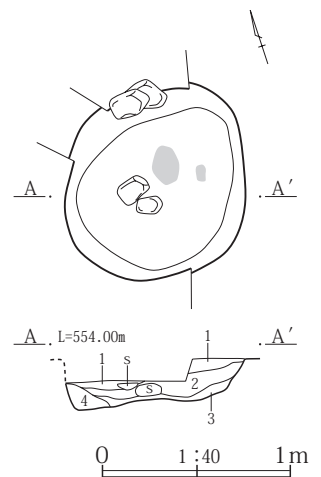
24区
I-18



1 暗褐色土 1～2cm大の炭化物を少量不均質に含み、わずかに地山ブロックを含む。縮りやや弱く砂質味強い。部分的に鉄分凝集層あり。

- 1 暗褐色土 1～2cm大の炭化物をやや多く含み、ややパサパサ味のある粘質土。小礫を少量含む。
- 2 暗褐色土 1層に比べ、炭化物を1：1に含みやや粘性ある不均質土。握りこぶし大の円礫を含む。
- 3 暗褐色土 1層に比べ、炭化物の割合が少ない粘質土。地山ブロック中に炭化物が含まれるようにもみえる。
- 4 暗褐色土 3層に比べ、やや炭化物の割合が多く不均質。

第115図 8号土坑、9号土坑



f 11号土坑(第116図、PL.53)

位置 23区H-20グリッド。調査区東部に位置する。

形状 隅丸方形。

規模 0.95m×0.76m、深さ0.34m。

長軸方向 N-83°-E。

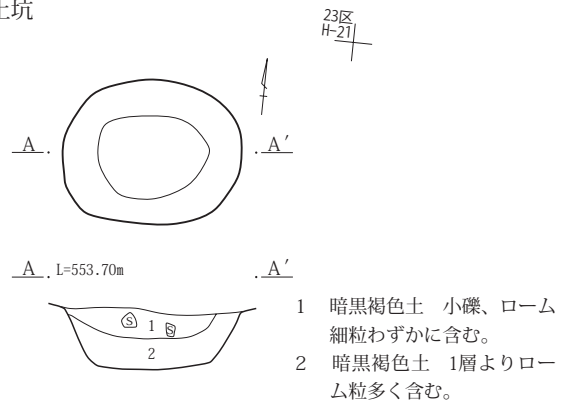
埋没土 ローム粒を含む暗褐色土。

重複 3号掘立柱建物。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位および覆土から平安時代以前に比定される。縄文時代にさかのぼる可能性も高い。3号掘立柱建物より古い。

11号土坑



g 28号土坑(第116図、PL.54・60)

位置 24区P-24グリッド。調査区西部に位置する。

形状 円形。

規模 1.47m×1.34m、深さ0.17m。

長軸方向 N-18°-W。

埋没土 地山ロームを含み、やや縮りのある暗黄褐色土。

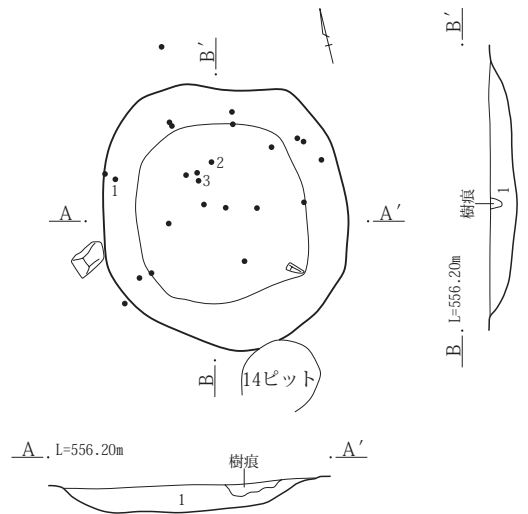
重複 なし。

遺物 覆土より縄文土器関山I式の土器片(1, 2, 3)が出土している。このほかに、覆土より縄文時代前期の土器片を主体とする土器片35点が出土している。

所見 本遺構の年代は、出土遺物から縄文時代前期に比定される。

28号土坑

24区
P-24



h 37号土坑(第117図、PL.54)

位置 34区V-8グリッド。調査区北西部に位置する。

形状 隅丸長方形。

規模 1.31m×0.73m、深さ(0.17)m。

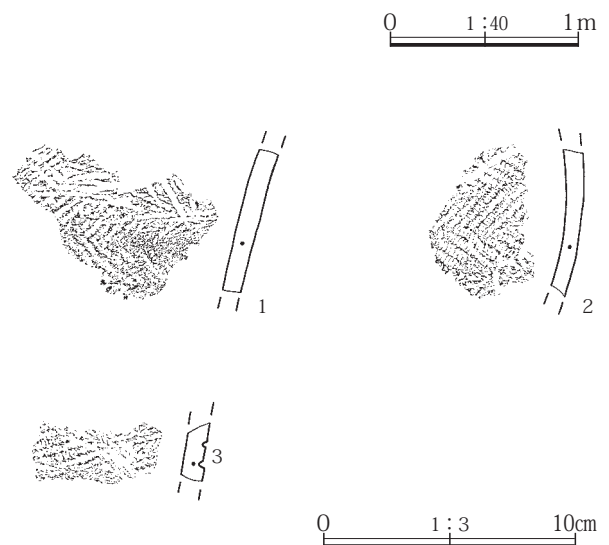
長軸方向 N-78°-W。

埋没土 地山崩落ロームを主体に、黒褐色土を不均質に含む黄褐色土。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から平安時代に比定される。わずかな底部のみの検出であるが陥穴と推測される。



第116図 11号土坑、28号土坑。土坑出土遺物

第61表 土坑出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第116図 PL.60	1	縄文土器 深鉢	28土坑覆土 胴部片		A	0段多条のRL・LR縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成か。口縁部にR・L一對の原体側面圧痕や半截竹管の短沈線文を施す。2・3と同一個体。	関山I式。
第116図 PL.60	2	縄文土器 深鉢	28土坑覆土 胴部片		A	0段多条のRL・LR縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成か。1・3と同一個体。	関山I式。
第116図 PL.60	3	縄文土器 深鉢	28土坑覆土 口縁部片		A	0段多条LR縄文を横位施文。口縁部にR・L一對の原体側面圧痕や円形刺突文を施す。1・2と同一個体。	関山I式。

註 縄文土器胎土分類

A 中量の円磨度の進んだ灰白色岩片の礫・粗砂や少量の石英・珪質乳白色岩片・輝石の粗・細砂と繊維を含む緻密な胎土。

i 38号土坑(第117図、PL.54)

位置 34区U-8~9グリッド。調査区北西部に位置する。

形状 長円形。

規模 1.48m×0.94m、深さ0.98m。

長軸方向 N-60°-W。

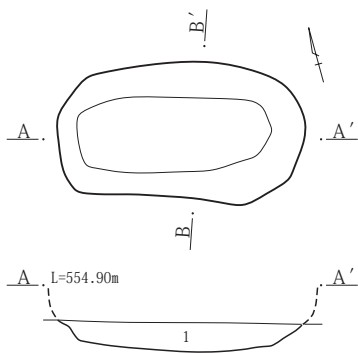
埋没土 地山ロームを含む黄褐色土および暗褐色土。中に暗褐色土をはさむ。

重複 なし。

遺物 なし。

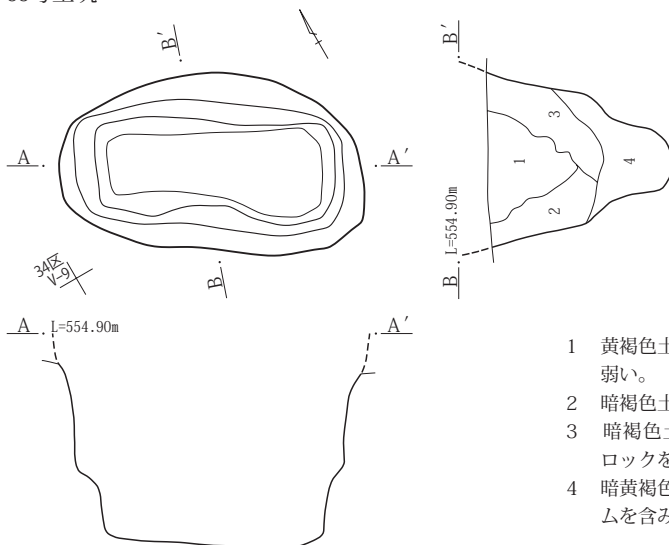
所見 本遺構の年代は、出土層位から平安時代に比定される。陥穴と推測される。

37号土坑

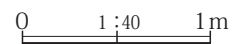


1 黄褐色土 地山崩落ロームを主体に、黒褐色土を不均質に含み、縮り弱い。

38号土坑



- 1 黄褐色土 地山ロームを1:1に含み、縮り弱い。
- 2 暗褐色土 均質な暗褐色土。やや粘性強い。
- 3 暗褐色土 2層より不均質。地山ロームブロックを少量含む。
- 4 暗黄褐色土 1層よりも色調暗いが地山ロームを含み、縮り弱い。



第117図 37号土坑、38号土坑

j 39号土坑(第118図、PL.54・55)

位置 34区U-9グリッド。調査区北西部に位置する。
 形状 長円形。底部東西両端に傾斜角のついた掘り込みをもつ。掘り込みの伏角は東側62.1°、西側64.5°。
 規模 1.67m×1.32m、深さ1.44m。
 長軸方向 N-43°-W。

埋没土 地山ロームを含む黄褐色土および暗褐色土。

重複 3号ピット列。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から平安時代に比定される。底部に逆茂木2本を設置した陥穴と推測される。3号ピット列より古い。

k 40号土坑(第119図、PL.55)

位置 34区T-10グリッド。調査区北西部に位置する。
 形状 長円形。底部東西両端に掘り込みをもつ。掘り込みの伏角は東側63.5°、西側63.6°。
 規模 1.68m×1.34m、深さ1.58m。
 長軸方向 N-19°-W。

埋没土 地山ロームを含む黄褐色土および暗褐色土。

重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から平安時代に比定される。底部に逆茂木2本を設置した陥穴と推測される。

l 41号土坑(第120図、PL.55)

位置 34区S~T-10グリッド。調査区北西部に位置する。

形状 長円形。

規模 1.04m×0.73m、深さ0.23m。

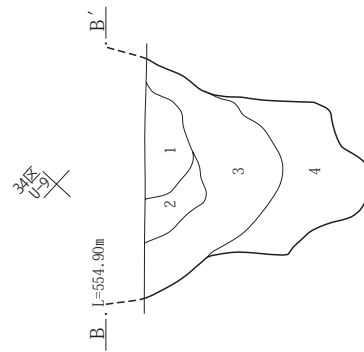
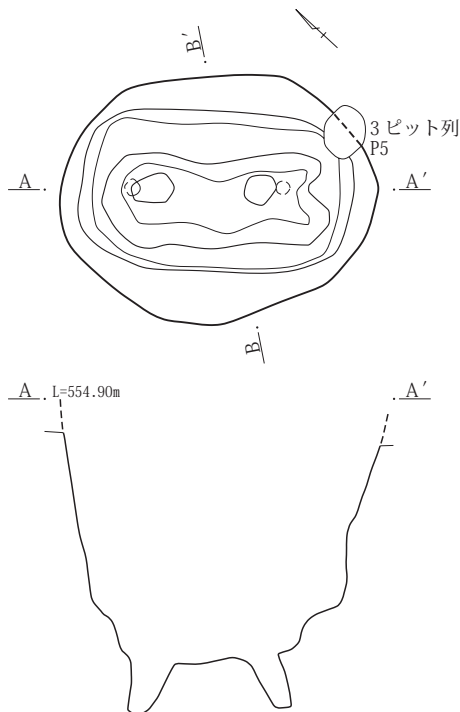
長軸方向 N-63°-W。

埋没土 地山ロームを含む黒褐色土。

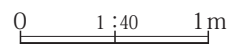
重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から平安時代に比定される。わずかな底部のみの検出であるが陥穴と推測される。



- 1 暗黄褐色土 やや褐色味を帯びた地山ロームブロック。
- 2 黒褐色土 地山ロームと黒褐色土を1：1に不均質に含み、やや縮り弱い。
- 3 黒褐色土 2層に比べ、地山ロームと黒褐色土を1：3に含む。
- 4 黄褐色土 地山ロームの崩落ブロックを含み、地山ロームと黒褐色土を3：1にやや均等に含む。



第118図 39号土坑

m 43号土坑(第120図、PL.55)

位置 34区V-12～13グリッド。調査区北西部に位置する。

形状 隅丸長方形。

規模 1.91m×0.82m、深さ0.37m。

長軸方向 N-1°-E。

埋没土 地山ローム、炭化粒を含む暗褐色土。

重複 2号竪穴住居。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から平安時代に比定される。2号竪穴住居より新しい。

n 44号土坑(第120図、PL.56)

位置 34区W～X-11グリッド。調査区北西部に位置する。

形状 長円形。

規模 1.14m×0.88m、深さ0.35m。

長軸方向 N-88°-W。

埋没土 焼土ブロック、炭化物を含む暗褐色土。

重複 3・4号竪穴住居。

遺物 覆土より須恵器片1片(150g)が出土しているが、資料化には至らなかった。

所見 本遺構の年代は、出土遺物から平安時代に比定される。3・4号竪穴住居より新しい。

o 45号土坑(第120図、PL.56)

位置 34区M-9～10グリッド。調査区北西部に位置する。

形状 長円形。底部中央付近に掘り込みをもつ。掘り込みの伏角は53.5°。

規模 1.97m×1.23m、深さ1.17m。

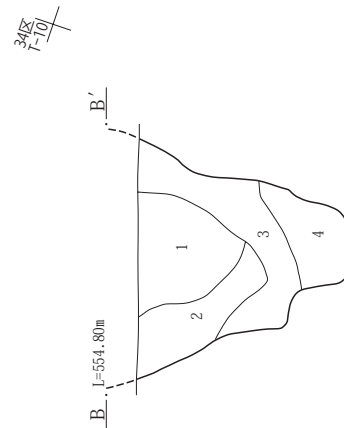
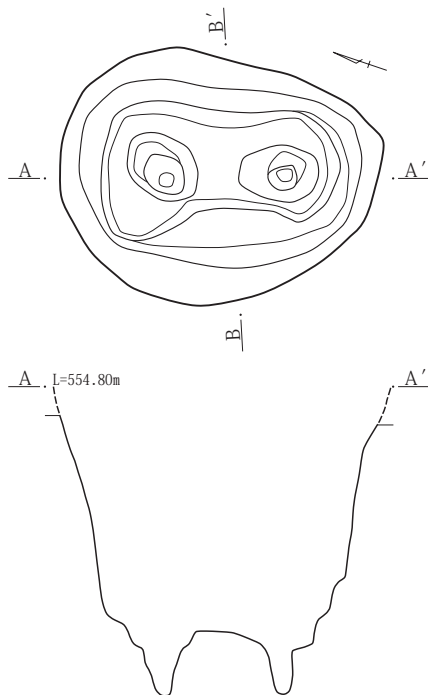
長軸方向 N-74°-W。

埋没土 粘質土を含む黒褐色土。

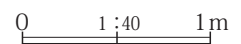
重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から平安時代に比定される。底部に逆茂木1本を設置した陥穴と推測される。

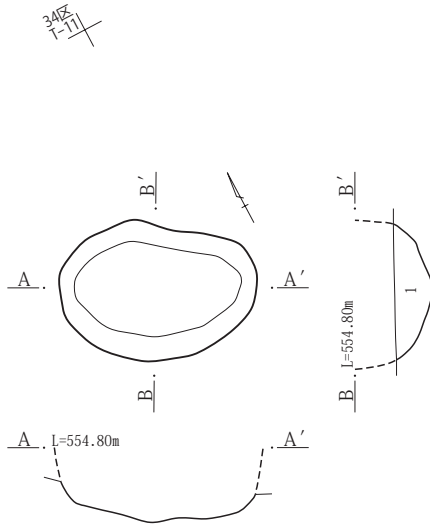


- 1 暗褐色土 ややくすんだ色調の均質土。粘性やや強い。
- 2 黒褐色土 地山ロームと黒褐色土を1:1に不均質に含み、やや締り弱く、粘性あり。
- 3 黒褐色土 2層に比べ、地山ロームが少ない。
- 4 黄褐色土 地山ロームと黒褐色土互層に入る。



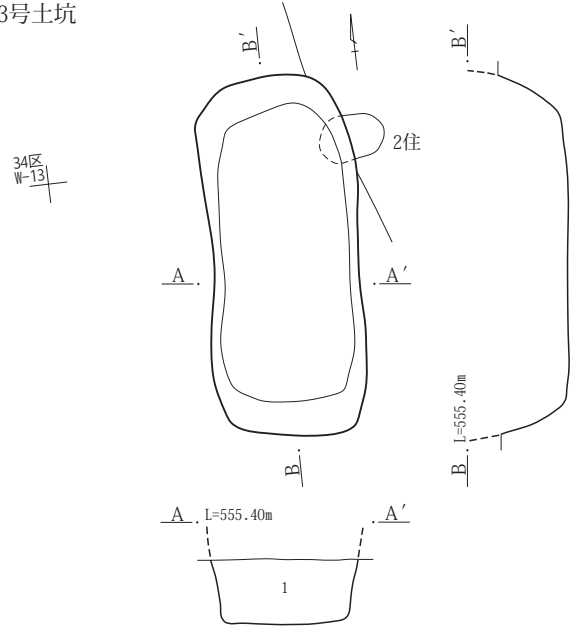
第119図 40号土坑

41号土坑



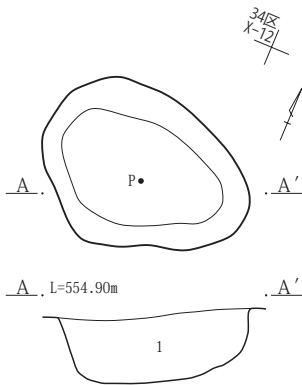
1 黒褐色土 上位黒褐色土と地山ロームを斑状に含む。締り弱い。

43号土坑



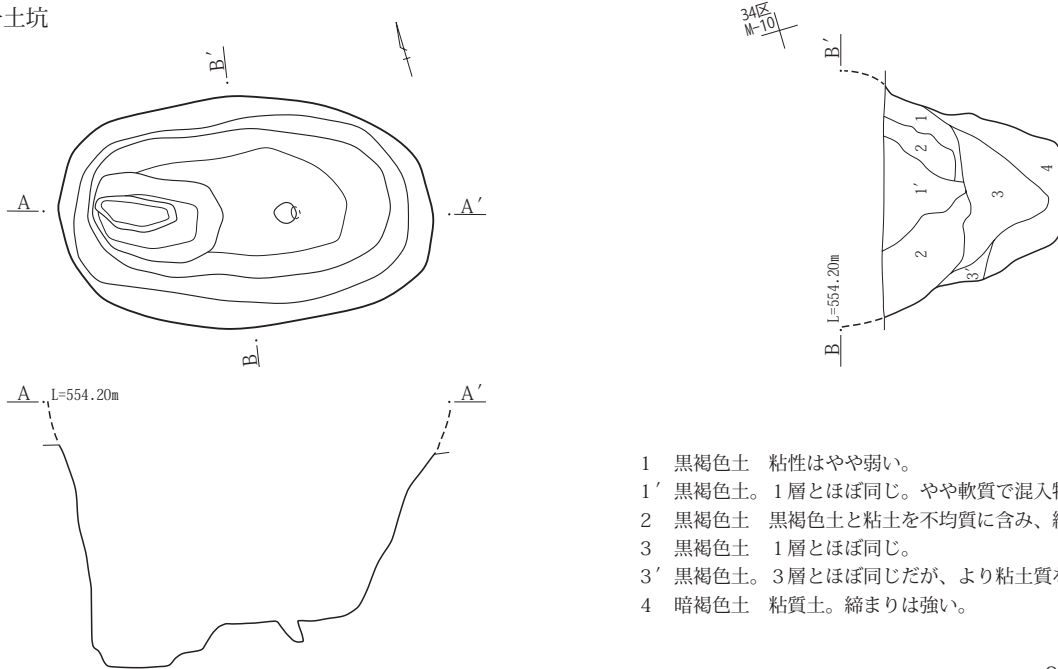
1 暗褐色土 締り弱く、地山ロームと黒褐色土に加え、わずかに炭化粒を含む。

44号土坑

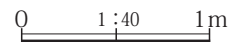


1 暗褐色土 焼土ブロック、炭化物を乱れて含む。やや粘性強く締り弱い。

45号土坑



1 黒褐色土 粘性はやや弱い。
 1' 黒褐色土。1層とほぼ同じ。やや軟質で混入物少ない。
 2 黒褐色土 黒褐色土と粘土を不均質に含み、締まりは強い。
 3 黒褐色土 1層とほぼ同じ。
 3' 黒褐色土。3層とほぼ同じだが、より粘土質を多く含む。
 4 暗褐色土 粘質土。締まりは強い。



第120図 41号土坑、43～45号土坑

(5) 焼土遺構

a 10号焼土遺構(第121図、PL.56)

位置 34区S-1グリッド。調査区西辺に位置する。

形状 不整形。

規模 (0.90)m×(0.79)m、深さ0.20m。

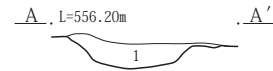
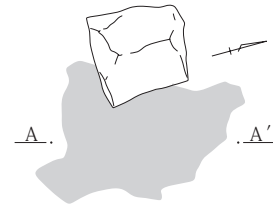
長軸方向 N-2°-W。

埋没土 部分的に炭が点在し、焼土灰を層状に含む橙褐色土。

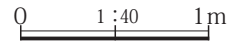
重複 なし。

遺物 なし。

所見 本遺構の年代は、出土層位から平安時代に比定される。



1 橙褐色土 焼土灰を層状に含み、よく焼けた均質な焼土。部分的に炭が点在し、締まりは強い。



第121図 10号焼土遺構

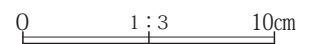
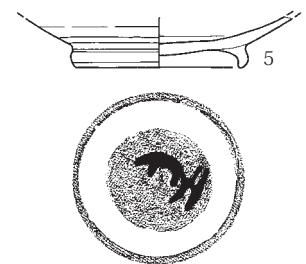
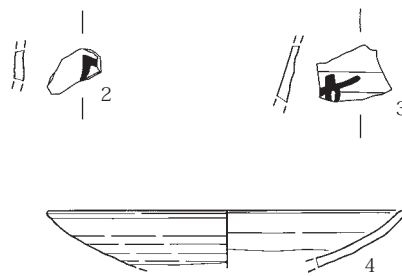
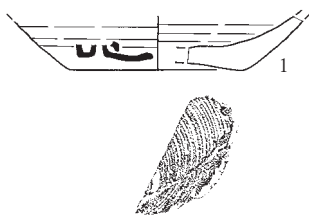
(6) 遺構外出土の遺物

遺構外からは縄文時代の遺物を中心に平安時代、弥生時代の遺物が出土している。

a 土器

a. 1 平安時代

遺物はいずれも調査区西部の確認トレンチから出土したもので、遺構を伴っていない。

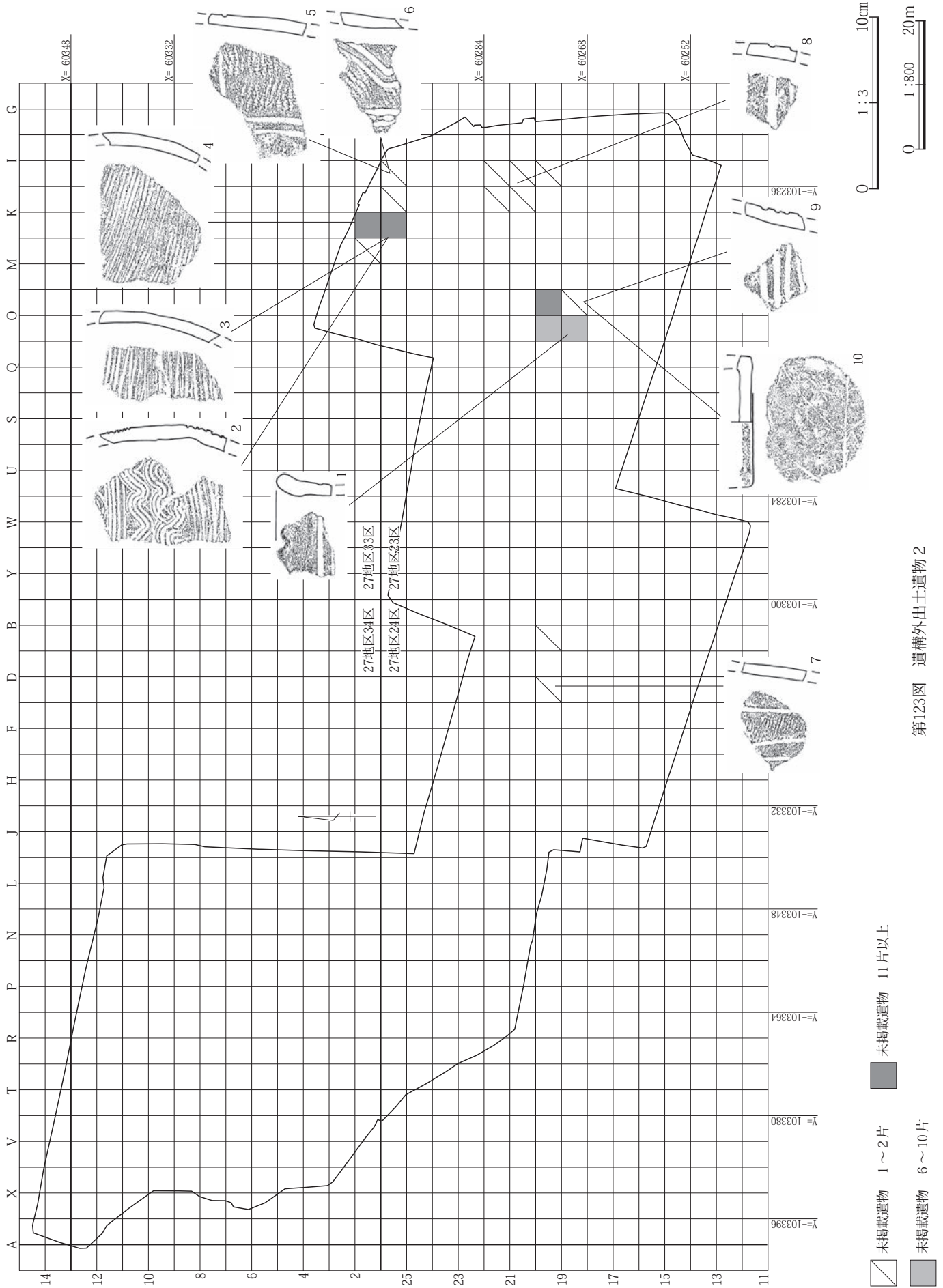


第122図 遺構外出土遺物 1

a. 2 弥生時代

遺跡の概要(本章1節2(3))で述べたように、本遺跡

からは弥生時代の遺構は検出されなかったが、調査区東部を中心に弥生時代中期の土器片が出土している。

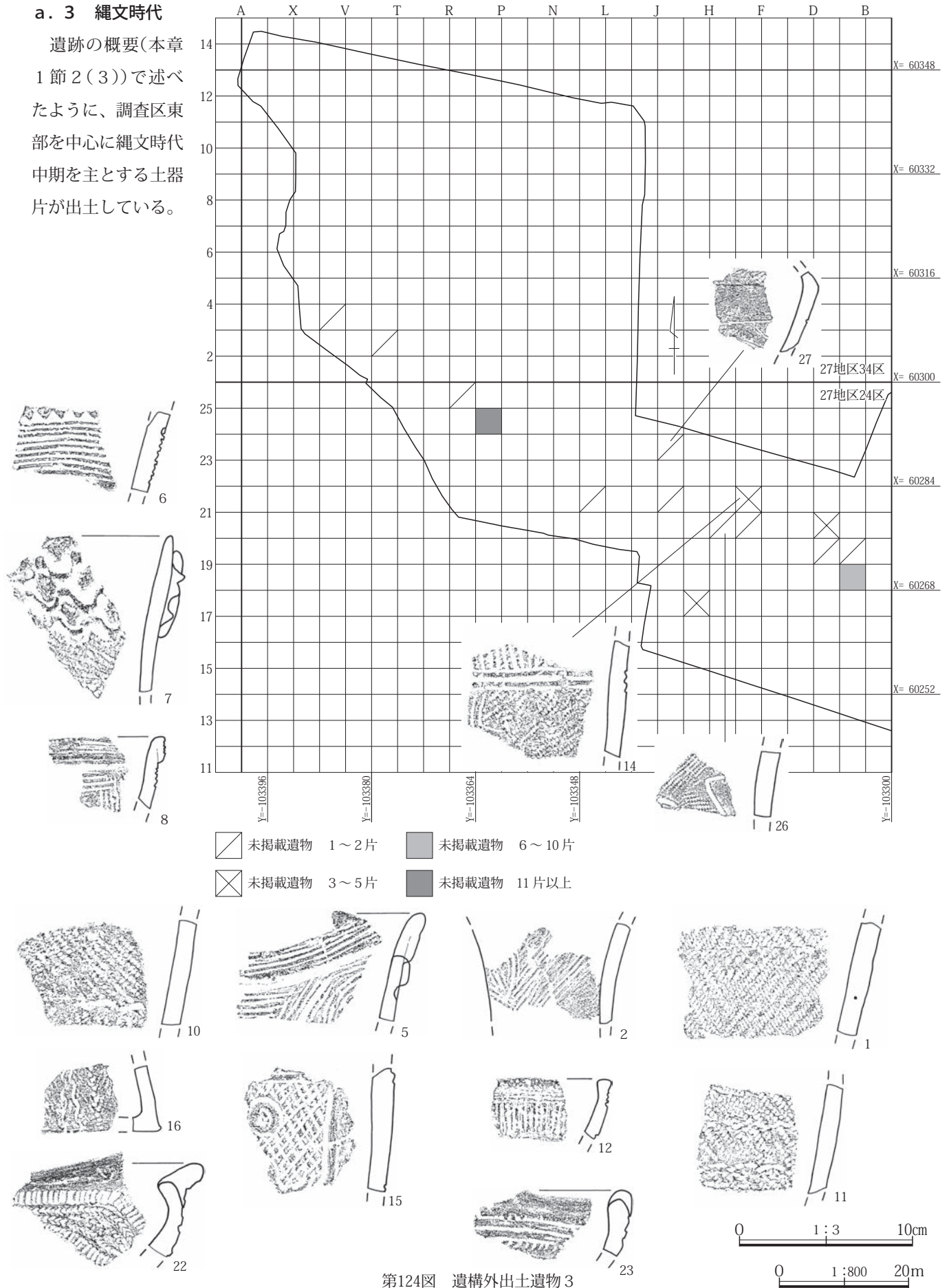


第123図 遺構外出土遺物2

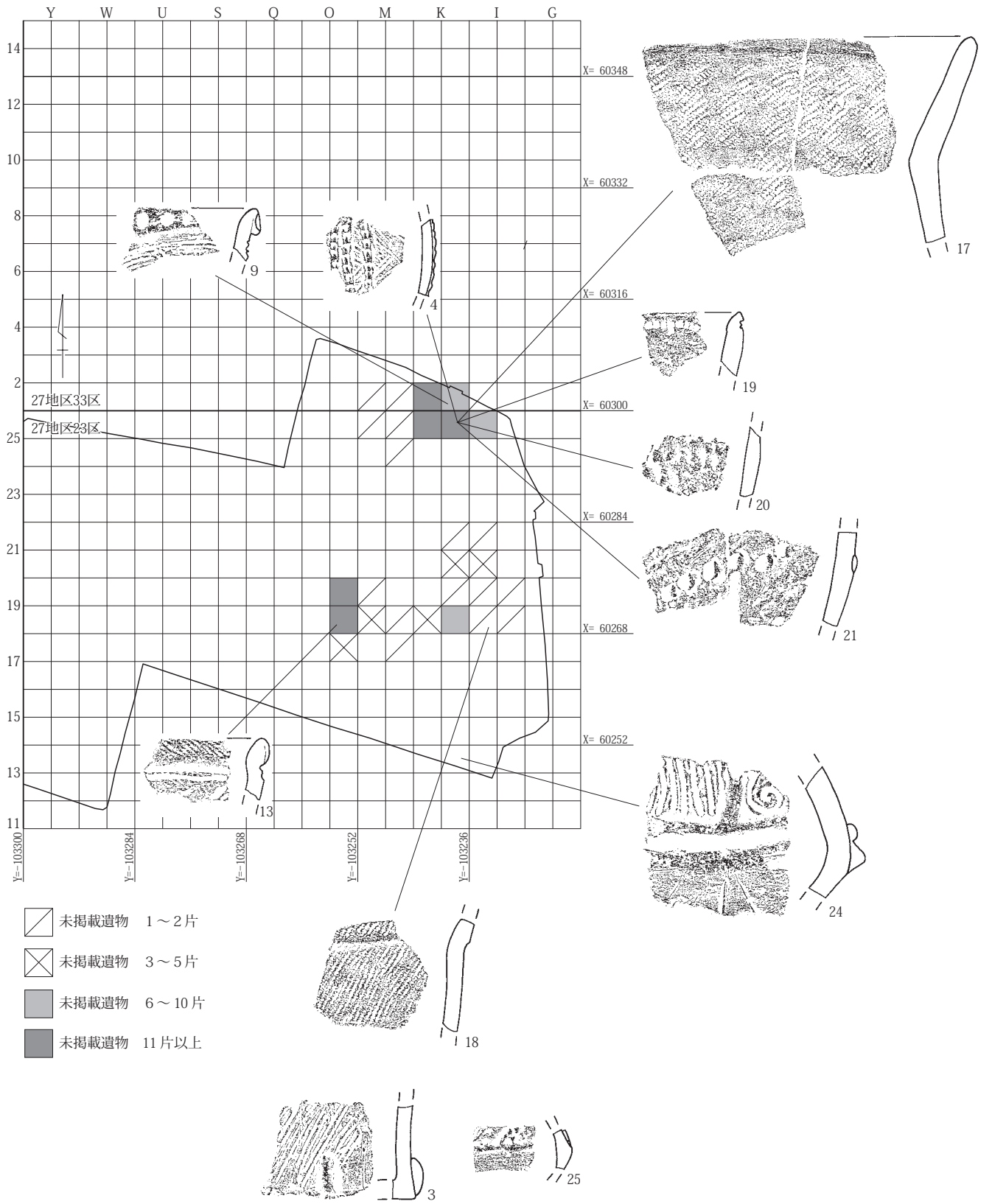
- 未掲載遺物 1～2片
- 未掲載遺物 6～10片
- 未掲載遺物 11片以上

a. 3 縄文時代

遺跡の概要(本章1節2(3))で述べたように、調査区東部を中心に縄文時代中期を主とする土器片が出土している。



第124図 遺構外出土遺物3



0 1:3 10cm

0 1:800 20m

第125図 遺構外出土遺物4

第3章 確認された遺構と遺物

第62表 遺構外出土遺物観察表1

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第122図 PL.60	1	須恵器 杯	34区V-4～7グリッド 底部～体部下位片	底	6.7		細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	外面体部に墨書。
第122図	2	須恵器 杯	34区V-4～7グリッド 体部片				細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形。	外面体部に墨書。
第122図 PL.60	3	須恵器 椀	34区V-4～7グリッド 体部片				細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形。	外面体部に墨書。
第122図	4	灰釉陶器 皿	34区V～X-7～13グリッド 口縁部1/4						
第122図 PL.60	5	灰釉陶器 椀	34区V-4～7グリッド 底部～体部下位	底台	6.8 6.5		微砂粒/還元焰/黄灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施釉方法は漬け掛け。	大原2号窯式期。

第63表 遺構外出土遺物観察表2

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第123図 PL.60	1	弥生土器 甗	23区O-18グリッド 口縁片				R	波状口縁頂部に刻目を施す。口縁部は横線文を施文。内外面共に風化。	弥生前期？
第123図 PL.60	2	弥生土器 壺	23区K-25グリッド 胴部片				O	櫛歯状具の横線文や波状文を交互・多段に施文。内面風化・剥離。3と同一個体か。	岩櫃式。
第123図 PL.60	3	弥生土器 甗	23区K-25・33区 K-2グリッド 胴部片				O	櫛歯状具の条痕文を横位に施文。内面やや風化、剥離。2と同一個体か。	弥生中期。
第123図 PL.60	4	弥生土器 甗	33区K-1グリッド 胴部片				G	櫛歯状具の条痕文を斜位に施文。内外面共にやや被熱風化、内面やや粗い横位磨き。	弥生中期。
第123図 PL.60	5	弥生土器 筒形土器	23区I-25グリッド 胴部片				R	横・縦位に単沈線文を施し、LR縄文を充填的に斜位に施文。内外面共にやや被熱風化、内面一部に煤状炭化物付着。	弥生中期。
第123図 PL.60	6	弥生土器 甗	23区I-25グリッド 胴部片				R	刺突文を挟む縦位の沈線文・蛇行文や横線文を施文し、LR縄文を充填的に横位に施文。内外面共に炭素吸着。	弥生中期。
第123図 PL.60	7	弥生土器 筒形土器	24区D-19グリッド 胴部片				O	単沈線文を縦位に施し、LR縄文を充填的に施文。	弥生中期。
第123図 PL.60	8	弥生土器 壺	23区I～J-20～21グリッド 胴部片				O	やや幅広の横線文を施す。内面赤色塗彩。	弥生中期。
第123図 PL.60	9	弥生土器 甗	23区N-18グリッド 胴部片				R	横帯文を施す。内外面共にやや風化。	弥生中期。
第123図 PL.60	10	弥生土器 甗	23区N-18グリッド 底部1/2				K	外底面に木葉痕。内外面共にやや被熱風化、外底面に焼却灰付着。	弥生中期。

註 弥生土器胎土分類

G 多量の珪質乳白色岩片礫・粗砂や中量の灰白色岩片・輝石と少量の石英粗・細砂を含むやや緻密な胎土。

K 多量の円磨度の進んだ灰白色・赤色岩片礫・粗砂と少量の珪質灰白色岩片や輝石の細砂を含むやや緻密な胎土。

O 中量の円磨度の進んだ珪質乳白色岩片礫・粗砂と少量の灰白色岩片や輝石の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。

R 多量の珪質乳白色岩片細砂や中量の灰白色岩片・輝石の粗・細砂を含む緻密な胎土。

凡例

○各分類は肉眼観察による相対的なものである。

○土器断面の▼印は接合痕を表す。

第64表 遺構外出土遺物観察表3

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第124図 PL.60	1	縄文土器 深鉢	24区 口縁片			B	0段多条のRL・LR縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。内外面共にやや被熱風化、外面煤状炭化物付着。	有尾式。
第124図 PL.60	2	縄文土器 深鉢	24区 胴部下位1/3			C	LR縄文を横位・多段に施文。半截竹管の平行集合沈線文によりレンズ状の意匠を構成。内面やや被熱風化。	諸磯c式。
第125図 PL.60	3	縄文土器 深鉢	遺構外 底部片			C	半截竹管の平行集合沈線文を斜位に施し、棒状貼付文を施文。内面煤状炭化物付着。	諸磯c式。
第125図 PL.60	4	縄文土器 深鉢	23区J-25グリッド 胴部片			C	半截竹管の平行集合沈線文を羽状に施し、結節浮線文を縦位に貼付。内外面共に一部に煤状炭化物付着。	諸磯c式。
第124図 PL.60	5	縄文土器 深鉢	24区 口縁片			N	外面に折り返す複合波状口縁で山形状の小突起を付す。半截竹管の重ね引きによる半隆起線的な平行沈線文で文様構成。内面横位磨き。	晴ヶ峰式。
第124図 PL.60	6	縄文土器 深鉢	24区 胴部片			E	鋸歯状陰刻文や半截竹管の重ね引き平行集合沈線文を施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面被熱風化・剥離。	晴ヶ峰式。
第124図 PL.60	7	縄文土器 深鉢	24区 口縁片			L	R縄文を横位・多段に施文。口縁部に上下方向から指頭状の押圧を加えた3条の横位波状隆帯文を施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	前期末葉。
第124図 PL.60	8	縄文土器 深鉢	24区 口縁片			M	外面に折り返す複合口縁。半截竹管の重ね引きによる平行沈線文を横・縦位に施文内外面共にやや風化、内面撫で状の横位磨き。	前期末葉。
第125図 PL.60	9	縄文土器 深鉢	33区J-1グリッド 口縁片			M	外面に折り返す複合口縁で篋状具の横位刺突文を施す。下位に櫛歯状具の集合沈線文を横位施文。内外面共に被熱風化。	前期末葉。
第124図 PL.60	10	縄文土器 深鉢	24区 胴部片			G	RL縄文を横位・多段に施文し、L結節縄文を横位に施す。内外面共に被熱風化。	前期末葉。
第124図 PL.60	11	縄文土器 深鉢	24区 胴部片			G	RL縄文を横位・多段に施文し、L結節縄文を横位に施す。外面煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	前期末葉。
第124図 PL.60	12	縄文土器 深鉢	24区 口縁片			I	半截竹管の平行沈線文を横帯状に施文し、その区画内に同沈線文を縦位密集施文。外面やや被熱風化・剥離。内面横位磨き。	五領ヶ台式。
第125図 PL.60	13	縄文土器 深鉢	23区N-18グリッド 口縁片			P	複合口縁。RL縄文を横位・多段に施文し、横線文や曲線文を施す。内外面共にやや被熱風化、外面一部に煤状炭化物付着。	五領ヶ台式。
第124図 PL.60	14	縄文土器 深鉢	24区F-21グリッド 胴部片			D	LR縄文を横位・多段に施文。半截竹管の重ね引き平行沈線文を横・縦位に施文。内面やや被熱風化。	五領ヶ台式。
第124図 PL.60	15	縄文土器 深鉢	24区 胴部片			D	半截竹管の重ね引き平行沈線により斜格子文を施し、区画内に同工具の円文を施文。内外面共にやや被熱風化。	五領ヶ台式。
第124図 PL.61	16	縄文土器 深鉢	24区 胴部片			N	RL・LRの結束縄文やR結節縄文を縦位施文。内面煤状炭化物付着。	五領ヶ台式。
第125図 PL.61	17	縄文土器 深鉢	23区J-25グリッド 口縁片			F	RL縄文を相互に10mm前後の間隔を空けて縦位施文。外面口唇部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	中期前半。
第125図 PL.61	18	縄文土器 深鉢	23区I-18グリッド 胴部片			D	段状の括れ部を持つ。LR縄文を横位・多段に施文。内面被熱風化。	五領ヶ台式。
第125図 PL.61	19	縄文土器 深鉢	23区J-25グリッド 口縁片			H	単列の角押文により楕円形状意匠を構成。内外面共にやや被熱風化。	阿玉台I a式。
第125図 PL.61	20	縄文土器 深鉢	23区J-25 胴部片			D	横位のヒダ状圧痕を複数段に施す。内外面共にやや被熱風化。	阿玉台I a式。
第125図 PL.61	21	縄文土器 深鉢	23区J-25グリッド 胴部片			J	ヒダ状圧痕を模した篋状具の横位刺突文を施す。外面煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	阿玉台II式？
第124図 PL.61	22	縄文土器 深鉢	24区 口縁片			I	波状口縁。キャタピラ文や三角押文を施す。内面横位磨き。	勝坂1式。
第124図 PL.61	23	縄文土器 深鉢	24区 口縁片			M	口唇部に把手または突起を付す。半截竹管の重ね引き平行沈線文や爪形文を施す。外面やや被熱風化・煤状炭化物付着、内面横位磨き。	勝坂3式。
第125図 PL.61	24	縄文土器 浅鉢	23区J-13グリッド 肩部片			L	隆線の区画文を施し、沈線渦巻文や重層的な弧状短沈線文を充填的に施文。内面被熱風化。	加曾利E2式。
第125図 PL.61	25	縄文土器 瓢形	23区 胴部片			Q	横・縦位の微隆起線文交点に刺突文を施す。内外面共にやや風化。	加曾利E5式。
第124図 PL.61	26	縄文土器 深鉢	24区G-20グリッド 胴部片			N	沈線区画文を施し、LR縄文を充填施文。内面やや被熱風化。	称名寺I式。
第124図 PL.61	27	縄文土器 深鉢	24区H～I- 22～23グリッド 頸部片			N	口縁部がく字状に内折。やや繊細な横線文と斜線文を施す。内外面共に横位磨き。	高井東式。

第3章 確認された遺構と遺物

註 縄文土器胎土分類

- B 多量の石英・珪質乳白色岩片や中量の輝石・灰白色岩片の粗・細砂と繊維を含むやや緻密な胎土。
- C 多量の円磨度の進んだ灰白色岩片礫・粗砂や少量の珪質乳白色岩片・輝石細砂を含むやや緻密な胎土。
- D 多量の円磨度の進んだ長石・石英・雲母の粗・細砂や少量の輝石粗・細砂を含む緻密な胎土。
- E 多量の円磨度の進んだ灰白色岩片礫・粗砂や輝石粗・細砂と少量の石英粗・細砂を含むやや緻密な胎土。
- F 中量の円磨度の進んだ灰白色岩片の粗・細砂や輝石と珪質乳白色岩片の細砂を含むやや緻密な胎土。
- G 多量の珪質乳白色岩片礫・粗砂や中量の灰白色岩片・輝石と少量の石英粗・細砂を含むやや緻密な胎土。
- H 多量の長石・石英や少量の輝石・黒色岩片の粗・細砂と少量の雲母粗・細砂を含む緻密な胎土。
- I 中量の結晶片岩礫・粗砂や少量の石英・灰白色岩片の粗・細砂を含む滑り感のある緻密な胎土。
- J 中量の珪質乳白色岩片・石英・輝石・灰白色岩片の粗・細砂や赤色岩片礫・粗砂を含む極めて緻密な胎土。
- L 多量の円磨度の進んだ灰白色岩片礫・粗砂と中量の輝石細砂や珪質乳白色岩片・石英の粗・細砂を含むやや粗雑な胎土。
- M 少量の円磨度の進んだ灰白色岩片礫・粗砂や輝石細砂・珪質乳白色岩片の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。
- N 中量の円磨度の進んだ珪質灰白色岩片の粗・細砂と少量の灰白色岩片礫・粗砂や輝石粗・細砂を含む緻密な胎土。
- P 中量の円磨度の進んだチャート礫や灰白色岩片・珪質乳白色岩片・輝石の粗・細砂を含む緻密な胎土。
- Q 中量の円磨度の進んだ灰白色・黒色岩片や輝石・石英の粗・細砂と少量の赤色岩片礫を含む緻密な胎土。

凡例

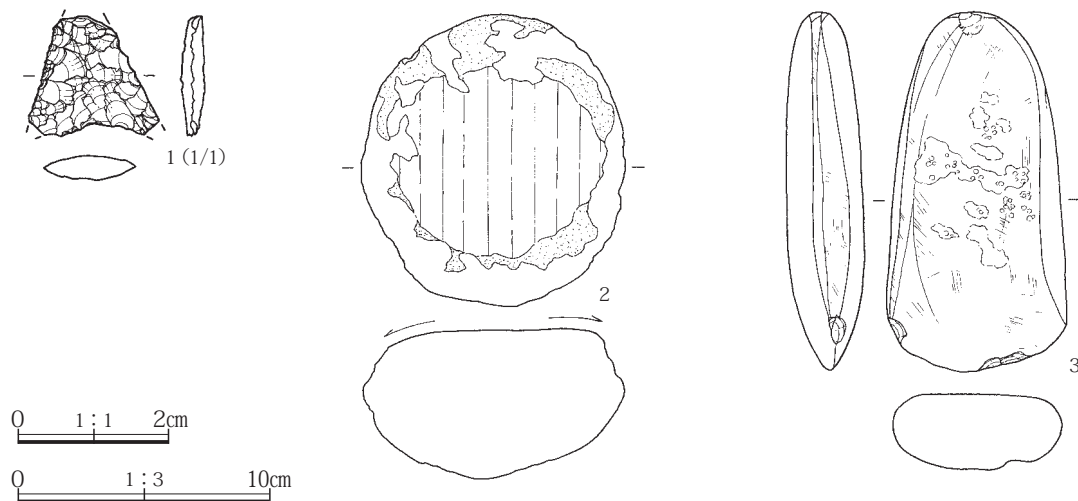
○各分類は肉眼観察による相対的なものである。

○土器断面の▼印は接合痕を表す。

b 石器

遺跡の概要(本章1節2(3))節で述べたように、土器

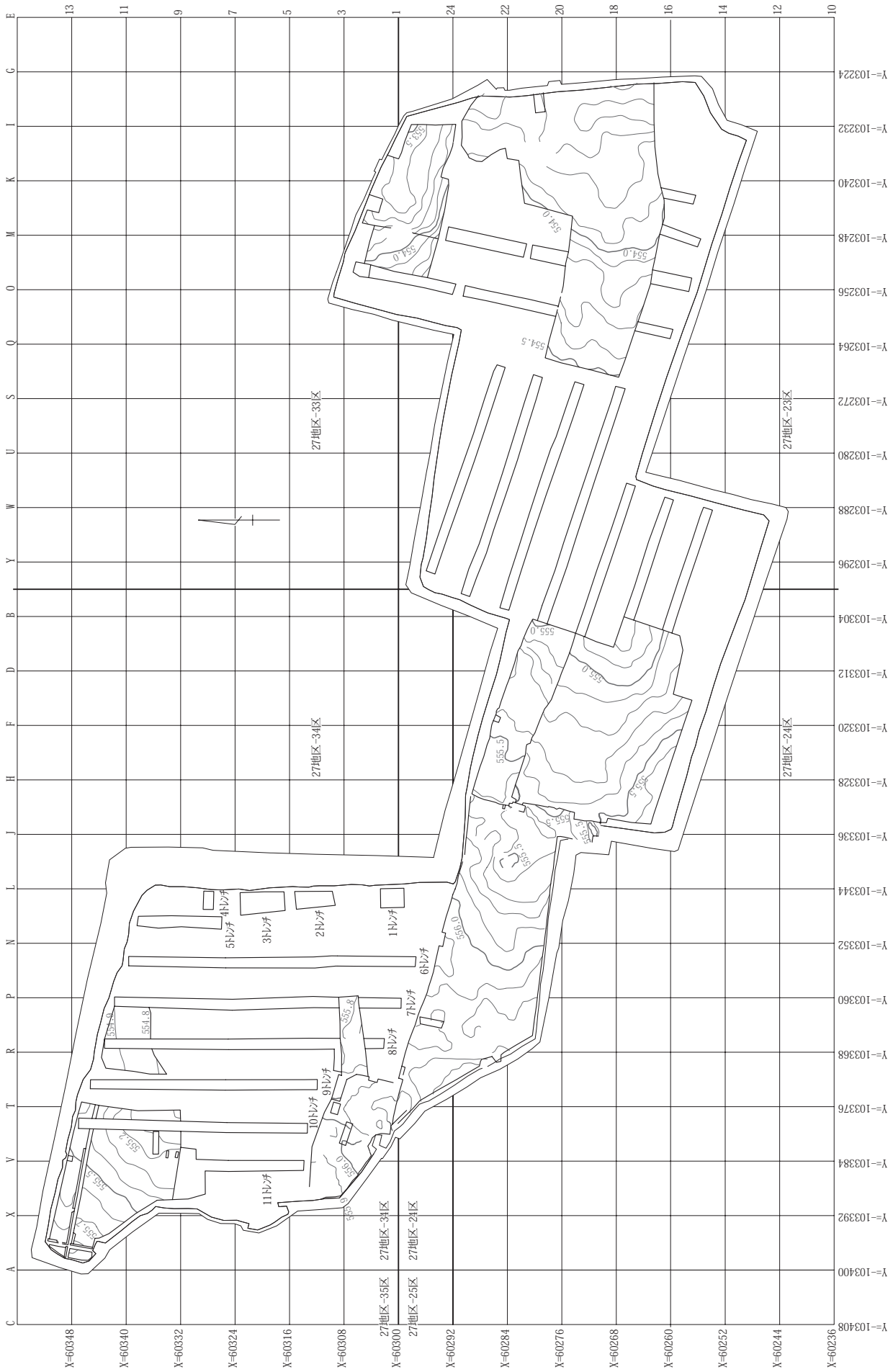
と異なり石器は調査区北西部からも出土している。



第126図 遺構外出土遺物 5

第65表 遺構外出土遺物観察表 4

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				長 幅	(1.6) (1.7)	厚 重				0.3 0.8
第126図 PL.61	1	剥片石器 石鏃	23区I~J- 20~21グリッド 2/3	長 幅	(1.6) (1.7)	厚 重	0.3 0.8	流紋岩凝灰岩	押圧剥離により整形する。先端部および左脚部欠損。	凹基無茎鏃。
第126図 PL.61	2	礫石器 磨石	34区U~V- 12~13グリッド 完形	長 幅	11.5 10.4	厚 重	5.8 988.9	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表面の中央に磨面が認められやや内湾した形態である。側面部には全体的に剥落が認められ風化により生じたものと判断されるが、敲打により生じた可能性もある。	
第126図 PL.61	3	剥片石器 磨製石斧	34区V~Y- 11~13グリッド 完形	長 幅	14.2 7.1	厚 重	3.1 512.8	変輝緑岩	全体的によく研磨されており丁寧に仕上げられている。細かい線条痕がわずかに認められる。刃部には先端方向からの剥離痕が散在するが使用痕の可能性はある。	



第127図 トレンチ設定図

第3章 確認された遺構と遺物

4 未掲載遺物

第66表 未掲載遺物(近世)

区	遺構番号	遺構種、層位	中国磁器		中国陶器		国産磁器		国産施釉陶器		国産焼締陶器		在地系焙烙・鍋		在地系皿	在地系その他	瓦
			点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数
A		泥流面			30	112	58	398					1	6			
A	23区				1	7											
A	23区N-19	グリッド					1	1									
A	23区K-20	グリッド					1	10									
A	23区L-24	グリッド					1	28									
A	24区I-19	グリッド					1	9									
A	24区						1	3									
A							1	3									
B					5	7	30	307									
B	12	土坑					2	11									
B	17	土坑			1	18											
B	10	ピット					1	2									
C	5	建物					1	3									
C	5	建物堀方					3	11									
C	5	建物土間上					3	15									
C	6	建物					1	2									
C	7	建物			1	3	7	148									
C	7	建物1土坑					1	38									
C	8	建物堀方					4	48									
C	9	建物2ピット					1	8									
C	32	土坑			1	8											
C	34	土坑					1	4									
C	11	焼土					1	4									
C	8	畑					7	46									
C	10	畑					1	61									
C	1	道					1	34									
C		A下			2	38	7	63									
		計	0	0	41	193	136	1,257	0			1	6		0	0	0

第67表 未掲載遺物(中世)

区	遺構番号	遺構種、層位	中国磁器		中国陶器	国産施釉陶器		国産焼締陶器		在地系鉢・鍋		在地系皿	在地系器種不詳	瓦
			点数	重量	点数	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数
A		泥流面	1	2										
A	24区					1	2							
C	7	建物							1	18				
C	7	建物1土坑												
C	8	建物11ピット							1	11				
C	9	建物床下土坑							10	71				
C		A下						1	39					
		計	1	2	0	1	2	1	39	12	100	0	0	0

第68表 未掲載遺物(古代)

区	遺構番号	遺構種、層位	土師器					須恵器					灰釉陶器		瓦	
			小型製品		中型製品	大型製品		小型製品		中型製品	大型製品		点数	重量	点数	
			点数	重量	点数	点数	重量	点数	重量	点数	重量	重量				
A	1	住居						6	39			1	33			
A		泥流面														
A	2	面										1	48			
A												1	37			
C	2	住居						7	58			3	50	2	8	
C	3	住居				63	1160	81	655			19	714	20	181	
C	4	住居						14	160			12	853	5	57	
C	34	土坑						1	15							
C	35	土坑										3	82	1	2	
C	44	土坑										1	150			
C	31	ピット						1	3							
C	37	ピット										1	32			

区	遺構番号	遺構種、層位	土師器			須恵器			灰釉陶器	瓦
			小型製品	中型製品	大型製品	小型製品	中型製品	大型製品		
C	51	ピット				1	2			
C	10	畑			1	9		1	4	
C	5	建物1炉						1	13	
C	5	建物掘り方				2	9		14	
C	5	建物11焼土			2	47	1	2	36	
C	6	建物			1	5		2	12	
C	1	トレンチ						1	32	
C	7・8	トレンチ			1	8		3	115	
C	11	トレンチ	6	7			13	171	16	
C	11	トレンチ拡張	2	8					529	

註 大中小は、想定器形の大小に基づく。小は杯・碗・皿など、中は高杯・小型壺など、大は甕・羽釜・壺など。

第69表 未掲載遺物(弥生時代)

区	遺構番号	遺構種	点数	備考
23	I-19	グリッド	1	
23	I-20	グリッド	1	1住混入分
23	I-21	グリッド	2	1住混入分
23	J-20	グリッド	1	1住混入分
23	J-21	グリッド	1	1住混入分
23	J-25	グリッド	2	
23	K-25	グリッド	70	
23	N-18	グリッド	2	
23	N-19	グリッド	34	
23	O-18	グリッド	6	
23	O-19	グリッド	8	
23			8	
24	B-19	グリッド	1	
24			1	
33	K-1	グリッド	12	
33	L-1	グリッド	2	

第71表 未掲載遺物(剥片)

区	遺構名	石材	出土点数	総重量(g)	備考
A	23区1号竪穴状遺構	変質安山岩	1	84.7	
A	泥流面	黒曜石	1	1.4	
A	泥流面	流紋岩凝灰岩	2	3.4	
A	23区I-25 2面	黒曜石	1	1.1	
A	33区J-1 2面	黒色頁岩	1	2.5	
A	33区K-1 2面	黒曜石	2	2.7	
A	23区K-1 2面	流紋岩凝灰岩	1	11.5	
A	23区K-25 2面	黒曜石	3	2.1	
A	23区K-25 2面	細粒輝石安山岩	1	19.1	
A	23区L-25 2面	黒曜石	1	0.9	
B	泥流耕作土	流紋岩凝灰岩	1	3.0	
B	2面	黒曜石	1	1.0	
C	3号住居フク土B	黒色頁岩	1	1.6	
C	A下	黒曜石	1	3.2	
C	2面一括	黒曜石	1	4.7	

第70表 未掲載遺物(縄文時代)

区	遺構番号	遺構種	点数	備考	区	遺構番号	遺構種	点数	備考
23	G-23	グリッド	1		24	C-18	グリッド	7	
23	H-18	グリッド	1		24	C-19	グリッド	1	
23	H-19	グリッド	2		24	D-19	グリッド	2	
23	I-18	グリッド	2		24	D-20	グリッド	3	
23	I-19	グリッド	1		24	F-20	グリッド	1	
23	I-20	グリッド	5	1住混入分を含む	24	F-21	グリッド	5	
23	I-21	グリッド	2	1住混入分	24	G-20	グリッド	1	
23	I-25	グリッド	10		24	H-17	グリッド	3	
23	J-18	グリッド	6		24	I-21	グリッド	2	
23	J-19	グリッド	1		24	L-21	グリッド	2	
23	J-20	グリッド	3	1住混入分を含む	24	P-24	グリッド	38	
23	J-21	グリッド	2	1住混入分	24	Q-25	グリッド	2	
23	J-25	グリッド	23		24			88	
23	K-18	グリッド	4		33	J-1	グリッド	10	
23	K-25	グリッド	14		33	K-1	グリッド	32	
23	L-17	グリッド	2		33	L-1	グリッド	1	1竪混入分
23	L-18	グリッド	1		33	M-1	グリッド	1	1竪混入分
23	L-24	グリッド	1		34	T-2	グリッド	1	
23	L-25	グリッド	1	1竪混入分	34	V-3	グリッド	1	
23	M-18	グリッド	3		34		グリッド	5	
23	M-19	グリッド	1						
23	M-25	グリッド	1	1竪混入分					
23	N-17	グリッド	3						
23	N-18	グリッド	41						
23	N-19	グリッド	12						
23			8						

第4章 まとめ

1 土地利用について

下田遺跡は吾妻川に突き出した舌状の中位段丘面に立地する。その舌状の台地の付け根側、調査区の北西部には谷地形が存在し、時を経るに従い埋没していったと推測される。この地点は弥生時代以前の遺物が採取されていない場所でもあり、第6層の堆積した時点で標高差1m程度の窪地となり、谷も消失する。

縄文時代の遺構が、谷南の微高地である第5地点周辺から検出されてはいるが、遺物の出土は第9地点周辺に集中し、その傾向は弥生時代も同様である。また平安時代の遺構も、第5地点ではなく第9地点周辺に集中する。

平安時代の住居は調査区の東西両端、第9地点周辺と第8地点周辺に限られる。まだ浅い谷の残る平安時代の第8地点周辺の住居は、その東に位置する陥穴群との関係を含め、西に隣接する下原遺跡との関連が推察されるが、第9地点を選地する意図は明らかでない。

平安時代の末頃までは、本遺跡が位置する台地の付け根側第8地点よりも、浅い谷を挟んだ台地中ほどの第2地点や第5地点のほうが標高が高いが、この周辺から検出された古代の遺構は10号焼土遺構のみである。標高の違いを別とすれば、第5地点と第9地点の土層構成はほぼ共通し、土地の変化もまた同様と考えられる。どちらの地表も河原と大差なく、立地対象としての適性は低い。第5地点の方が大きな石が少なめである。にもかかわらず、立地に適さぬ土地に、あえて微高地を選ばず、その後背の低地側を立地にあてるとすれば、その理由は後背地自体にあるとすべきであろう。

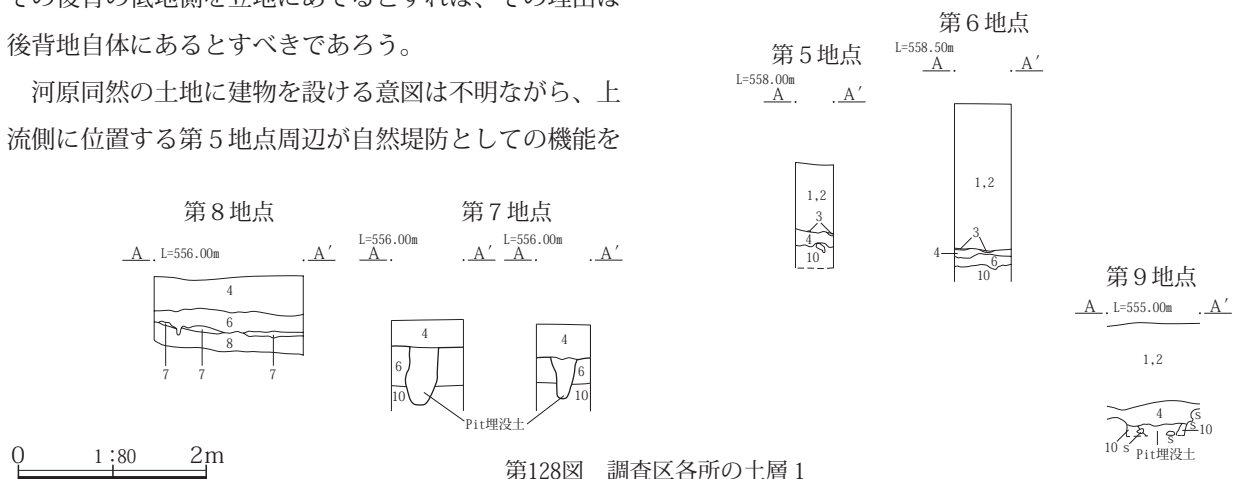
河原同然の土地に建物を設ける意図は不明ながら、上流側に位置する第5地点周辺が自然堤防としての機能を

有すると考えられたとするなら、第9地点側が立地として選定される理由となり得るのではなからうか。また微高地を背に、東に開けた緩斜面という環境も選定に加味されたと考えられる。

中世になると、あい変わらず河原同然の第6地点周辺から掘立柱建物が検出され、逆に第9地点からは住居が消える。第4地点、第6地点、第7地点の土層構成は類似(第72表)するが、標高は第6地点がやや高い。

建物内に地山の大きな石が顔を出していても構わず、そこに建てなければならない理由として、本遺跡より一段上の段丘面に占地する林城との関連が想起される。1号掘立柱建物とこれに隣接する1組みの柵列が共伴するのであれば、林城との関連も強まるのであるが、柵2条の設置時期は確定できず、共伴の認定は行っていない。本遺跡の一段上の段丘面は、中世にはいつてから建物等が作られるようになるため、この地区の開発と林城築城とが関連することは間違いないのであろうが、今回の調査では中世城郭との繋がりを実証する資料は得られていない。

なお、耕地としての利用を考慮する場合、作土の存在が不可欠である。第8層は分布範囲が限定されると推測されるため、耕地の確保は第6層の堆積を待つ必要があったと考えられる。しかしながら表土に石が多く含まれる土地柄のため、広めの耕地を確保できるようになるのは、第4層の堆積する近世以降と思われる。

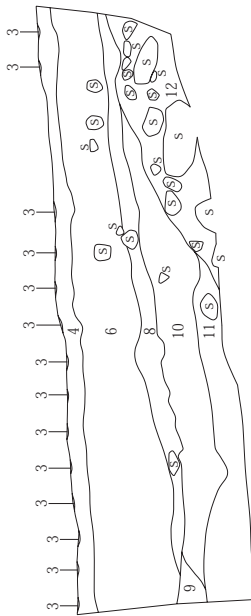


第128図 調査区各所の土層 1

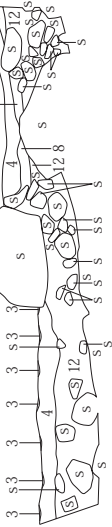
1,2



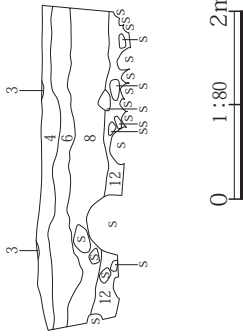
1,2



1,2



1,2



土層註

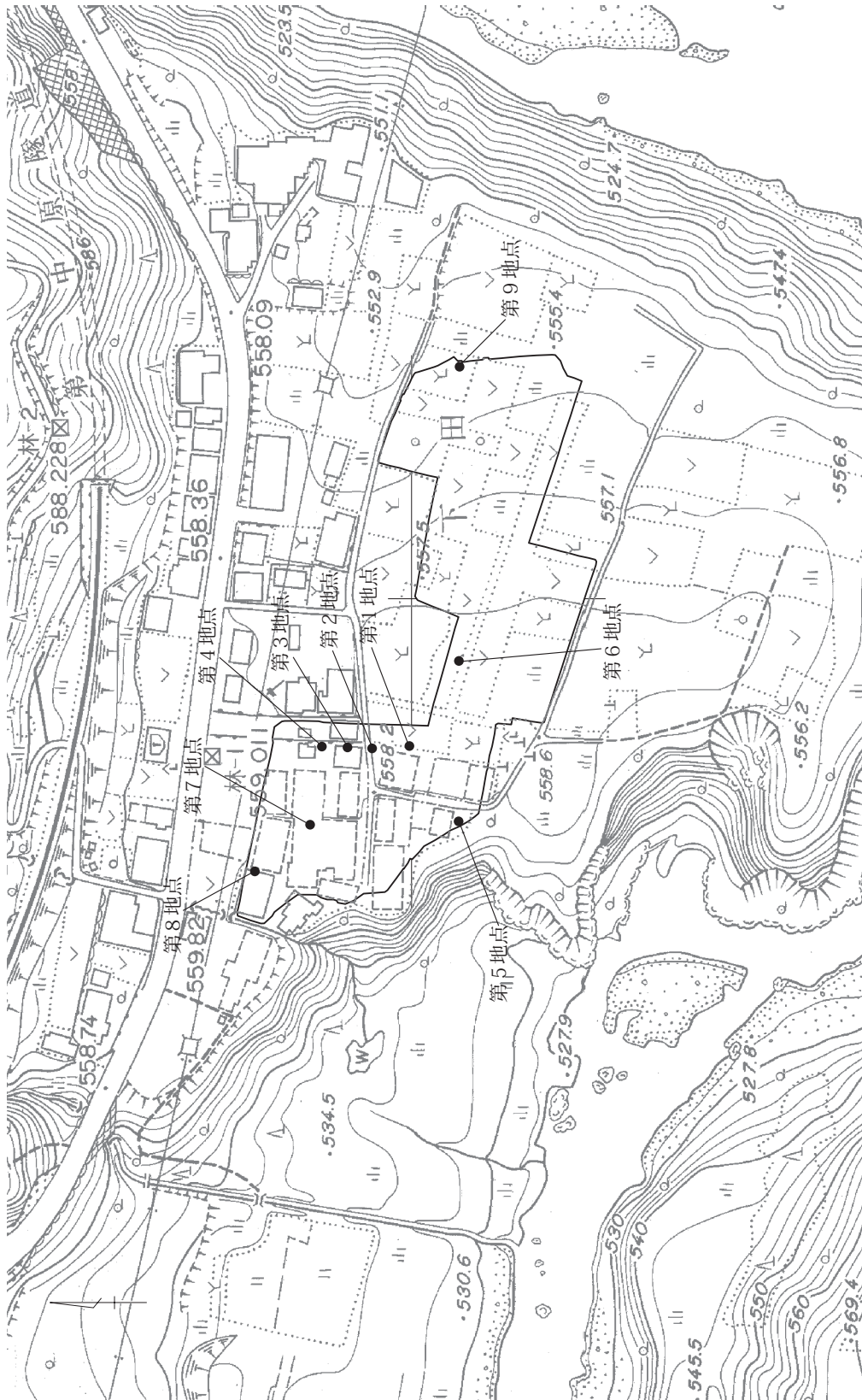
- 第1層 表土および現代の耕作土。
- 第2層 天明3年泥流堆積物。締りを欠き、礫などの混入物が比較的少なく、他遺跡で見られる天明堆積物に比べて、均質な印象をうける。破碎岩片等が極めて少ない。
- 第3層 浅間A軽石(As-A)層。天明泥流直下の窪地状となっている地点に散在する。1号道、畑の畝間などにおいて、厚さ1~2cm程度の堆積が確認されている。
- 第4層 暗褐色土。泥流下耕作土。恒常的に耕耘が行われた耕作土である。色調はくすみ、黒味が強。締まりは弱目ではあるが粘性の強い均質土である。白色軽石を少量含み、部分的に炭化粒を含む場合もある。
- 第5層 鉄分凝集層。層として完全に単体分離することは難しいが、第4層の下位部分あるいは第6層の上位部分としてその存在が認められる。
- 第6層 暗褐色土。第4層に比べ、径3mm前後の大きさの黄褐色軽石粒が少量含まれる。
- 第7層 浅間粗川チフラ(As-Kk)層。2号竪穴住居、3・4号竪穴住居などにおいて、部分的に層状の堆積が認められる。
- 第8層 暗褐色土。色調やや明るい漸移層であり、均質ではあるが全体に径2cm大の円形のパッチワーク状の斑模様を確認できる。3~5cm大の黄褐色・白色軽石粒を均等に少量含む。
- 第9層 暗灰褐色土。下位の第10層と基本的に構成物は変わらないが、緑色味がやや強く、色調は全体に暗い。水性堆積したものと考えられる。
- 第10層 暗黄褐色土。不均質なローム漸移層である。砂質味が強く、ボサボサであり、樹痕と思われれる黒色ブロックを所々に含む。ややバサバサした斑なローム状の土質に黒色炭化物を含む場合もある。
- 第11層 暗黄褐色土。ローム層。上位の第9層、第10層に比べ締りやや強く、粘性も認められる、やや安定したローム層である。第9層、第10層よりも軽石の含まれる割合が少ない。
- 第12層 黄褐色土。10~50cm大の円礫を多く含む、均質な砂層である。締りは弱い。

第72表 土層比較

地点	遺構名等/土層番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
8	2号竪穴住居	-	-	-	○	○	○	○	○	-	-	-	-
3	3号トレンチ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
1	1号トレンチ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
4	4号トレンチ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
6	A区基本土層	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
7	3号、4号ピット列	-	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2	2号トレンチ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5	B区基本土層	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
9	3号掘立柱建物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

註 該当する土層が存在する場所に○印を付し、その土層が存在しない場合は空欄とした。また、一印は記録のないことを意味する。

第129図 調査区各所の土層2



第130図 調査区各所の土層3(「長野原都市計画図2」長野原町平成13年9月に加筆)

2 畑について

1面の畑地に関連する計測記録を本稿にまとめた。

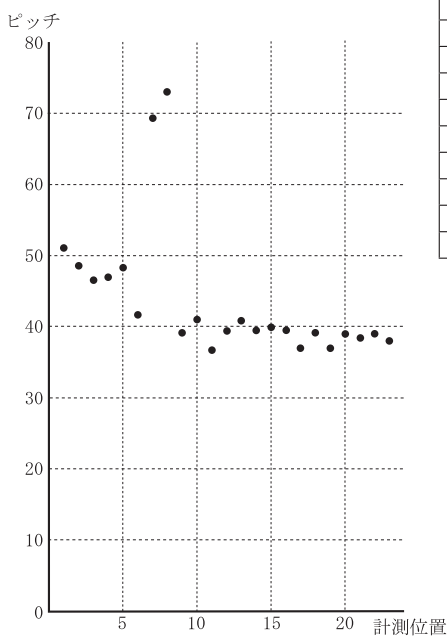
第3章第1節2でふれた畑の畝のピッチの計測箇所を第133図に記した。計測地点1～8は整理工程において1/40遺構図を計測対象とした。計測地点9～23は発掘調査時に現地測定を行った。計測結果は第73表にまとめた。1面8号掘立柱建物脇の第7地点、第8地点のピッチは、突出して他の地点より広いが、第131図に明らかのように畝ピッチ45cm前後にも断絶が認められる。1面9号畑の値は得られなかったが、1面5号礎石建物の東に連なる調査区北西部の畑と、1面1号道の東に連なる調査区南側の畑の栽培対象が異なる可能性が推察される。

第73表 畝計測表

計測地点	遺構名	測定範囲長 (cm)	畝本数	畝のピッチ (cm)	走向
1	1畑	562	11	51.1	N-71°-W
2	2畑	340	7	48.6	N-74°-W
3	3畑	745	16	46.6	N-71°-W
4	4畑	798	17	46.9	N-71°-W
5	5畑	145	3	48.3	N-73°-W
6	6畑	250	6	41.7	N-71°-W
7	8畑南	208	3	69.3	N-74°-W
8	8畑北	730	10	73.0	N-78°-W
9	10畑北	235	6	39.2	N-80°-W
10	10畑中	820	20	41.0	N-76°-W
11	10畑南	735	20	36.8	N-76°-W
12	11畑北	788	20	39.4	N-87°-W
13	11畑南	572	14	40.9	N-77°-W
14	12畑北	790	20	39.5	N-82°-W
15	12畑南	798	20	39.9	N-82°-W
16	13畑北	395	10	39.5	N-88°-W
17	13畑南	370	10	37.0	N-86°-W
18	14畑北	392	10	39.2	N-87°-W
19	14畑南	740	20	37.0	N-88°-W
20	15畑北	390	10	39.0	N-89°-W
21	15畑南	768	20	38.4	N-89°-E
22	16畑北	390	10	39.0	N-87°-W
23	16畑南	190	5	38.0	N-89°-E

第74表 平坦面計測表

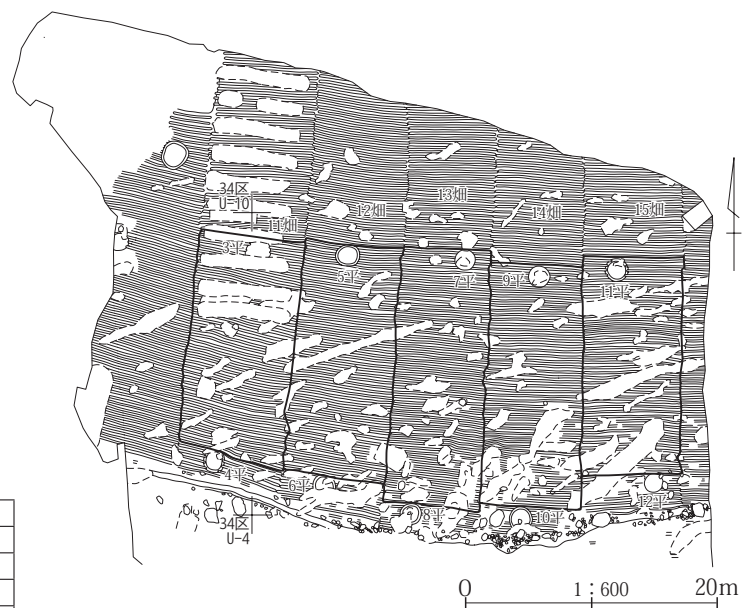
	帰属畑	検出位置	外寸(m)			内寸(m)			内外差(m)	
			長軸	短軸	長軸方向	長軸	短軸	長軸方向	長軸	短軸
3-1平	3畑	23区Y-24	1.17	1.12	N-52°-W	0.84	0.79	N-52°-W	0.33	0.33
1平	10畑	34区V-10～11	2.24	2.03	N-15°-E	1.84	1.76	N-4°-W	0.40	0.27
2平	10畑	34区W-9	1.46	1.37	N-48°-E	1.26	1.17	N-53°-E	0.20	0.20
3平	11畑	34区T～U-9	2.04	(1.35)	N-68°-E	1.79	(1.29)	N-62°-E	0.25	
4平	11畑	34区U-4～5	1.81	1.79	N-40°-E	1.47	(1.33)	N-33°-W	0.34	
5平	12畑	34区R～S-8～9	1.93	1.77	N-61°-E	1.55	1.43	N-56°-E	0.38	0.34
6平	12畑	34区S-4	1.84	(1.33)	N-63°-W	1.43	1.23	N-65°-W	0.41	
7平	13畑	34区P-9～10	1.65	1.65	—	—	—	—		
8平	13畑	34区Q～R-3～4	1.69	1.64	N-80°-E	1.29	1.23	N-12°-W	0.40	0.41
9平	14畑	34区O-8	1.72	1.72	—	—	—	—		
10平	14畑	34区O-3～4	1.91	1.83	N-45°-E	1.57	1.44	N-45°-E	0.34	0.39
11平	15畑	34区M-8～9	1.83	1.81	N-77°-E	1.45	1.38	N-25°-W	0.38	0.43
12平	15畑	34区L-4	1.52	1.44	N-31°-E	—	—	—		
13平	9畑	34区M～N-2～3	1.93	1.73	N-3°-E	1.50	1.33	N-3°-E	0.43	0.40
		平均	1.77	1.66		1.45	1.45		0.35	0.35



第131図 畝ピッチの分布

第75表 平坦面間の面積

計測範囲四辺長	11畑	12畑	13畑	14畑	15畑
東辺(m)	18.50	18.80	20.85	19.00	17.20
西辺(m)	17.00	18.40	20.30	18.80	17.50
南辺(m)	8.45	8.00	7.70	7.90	8.10
北辺(m)	8.30	7.80	6.90	7.25	8.00
単位あたり面積(m ²)	148.3	147.7	152.0	145.6	135.9

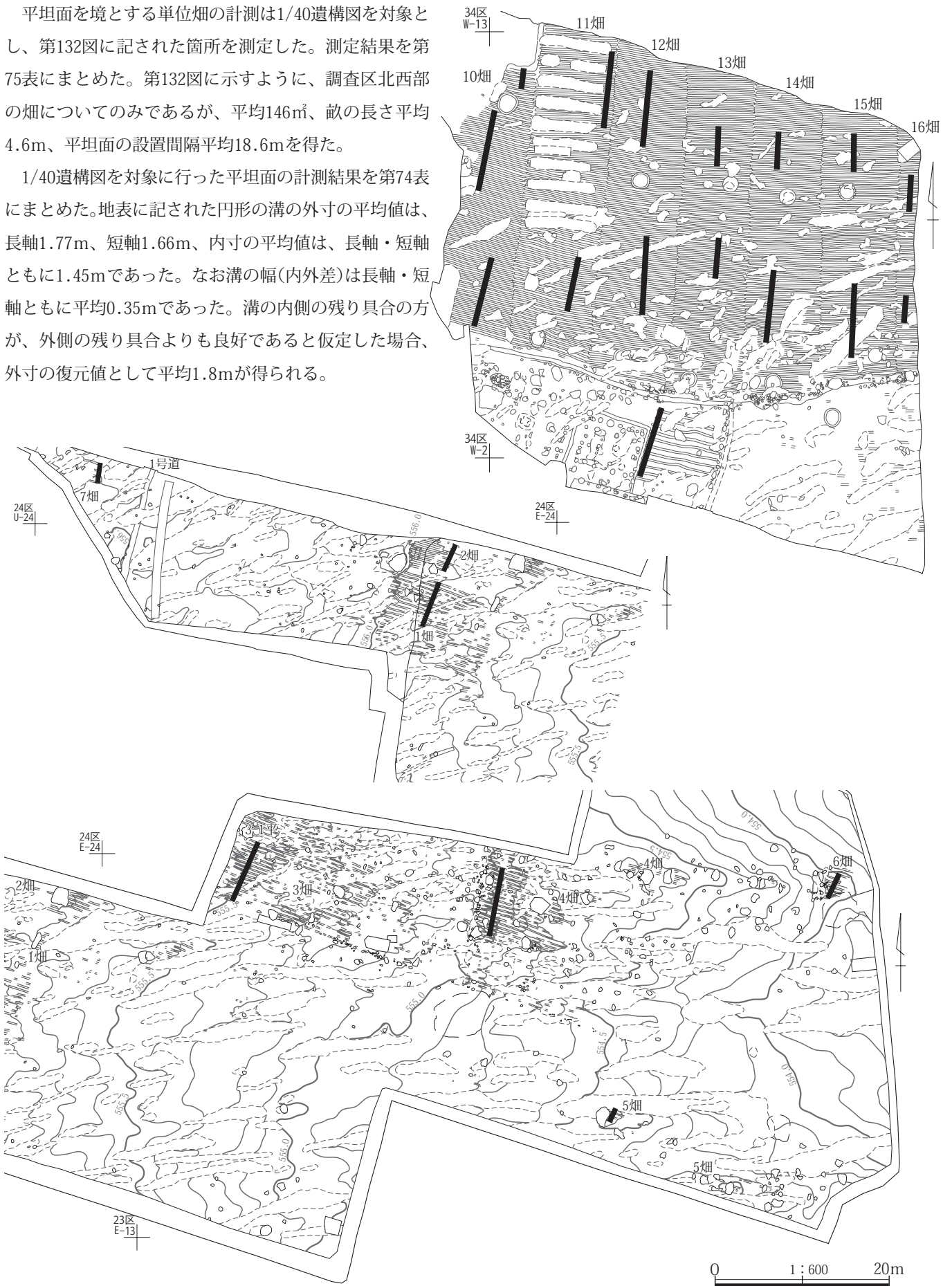


第132図 単位面積計測位置

第4章 まとめ

平坦面を境とする単位畑の計測は1/40遺構図を対象とし、第132図に記された箇所を測定した。測定結果を第75表にまとめた。第132図に示すように、調査区北西部の畑についてのみであるが、平均146㎡、畝の長さ平均4.6m、平坦面の設置間隔平均18.6mを得た。

1/40遺構図を対象に行った平坦面の計測結果を第74表にまとめた。地表に記された円形の溝の外寸の平均値は、長軸1.77m、短軸1.66m、内寸の平均値は、長軸・短軸ともに1.45mであった。なお溝の幅(内外差)は長軸・短軸ともに平均0.35mであった。溝の内側の残り具合の方が、外側の残り具合よりも良好であると仮定した場合、外寸の復元値として平均1.8mが得られる。



第133図 畝ピッチ計測位置

3 桶の復元

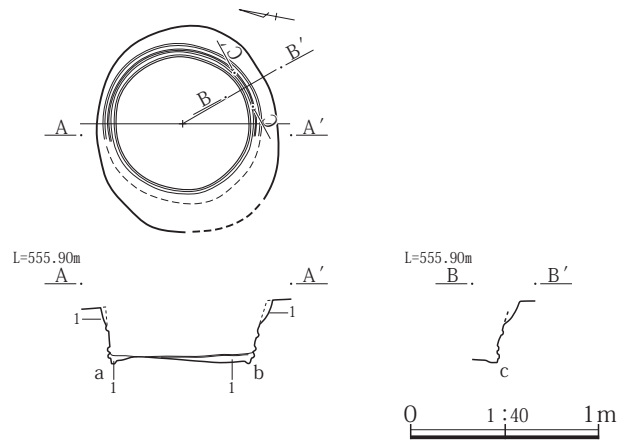
2面西辺建物群からは桶を埋め込んだと思われる土坑が4基検出されている。なかでも13号掘立柱建物の34号土坑は遺存状態が良好で、箍を3本巻いた結桶の外形が圧痕として土坑壁にプリントされた状態であった。土坑壁に残された圧痕は、土圧などにより押しつぶされ、桶本来の形状から変形していることが読み取れる。また土坑断面を計測する際に、土坑の中心点をとる中軸線よりも8cm程度西に離れた位置に測定断面が設定されたため、第134図の断面形状は斜め切りされた断面のものであり、そのままでは正投影された遺物実測図として使用できない。箍の形状を得るために測られた3地点目の断面も、その延長が中心点より3cmほど北の地点をとる軸線に沿って測られており、若干の誤差を含むと考えられる。

34号土坑の断面図と平面図とを比較照合し、補正のための基準点(+印)を設定し、その基準点と本来の中心点との水平距離を平面図から測りだし、断面形状の補正を行った(第135図)。なお、c断面の底部形状についてはその変形要因を絞り切れず補正は保留した。

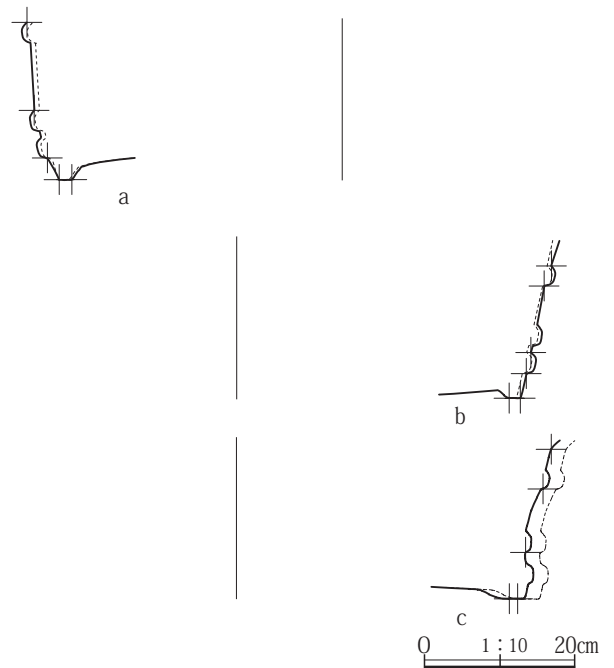
a断面は下段上側の箍のあたりで側板が折れたと考えられる。b断面は側板が全体に外に開いたと考えられる。c断面は下段上側の箍の上で側板が折れて外反したと考えられるが、下半にはやや内側への傾斜も認められる。概ねa断面の上半に側板本来の傾斜が保たれていると仮定した。また側板の厚さは、土坑底部に残された溝の下端を基準とし、底板の厚さは側板と同厚と仮定した。

推定復元(第137図)として、口縁部外径0.80m以上、底部外径0.75m、高さ0.34m以上の値が得られた。板厚を1.6cmと仮定した場合、口縁部内径0.76m以上、内底直径0.72m、深さ0.28m、容積120リットル以上となる。

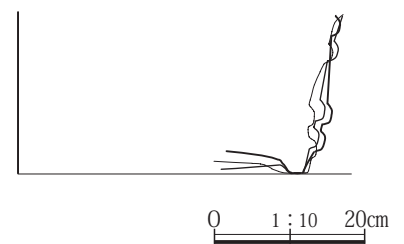
水桶などの水密性を要求される桶の底部付近には箍が複数本かけられており、この桶もまた水密性が求められる用途に用いられたと推測される。江戸時代後期頃の江戸市中に設けられた公衆後架には、四斗樽が転用されていたという。四斗樽は直径60cm、高さ60cm程度であり、容積は復元桶の半分程度だが、高さは倍近くある。後架としては復元桶がやや浅めなことから、12号掘立柱建物と13号掘立柱建物とで大小の使い分けが行われていたという想定も可能であろうか。



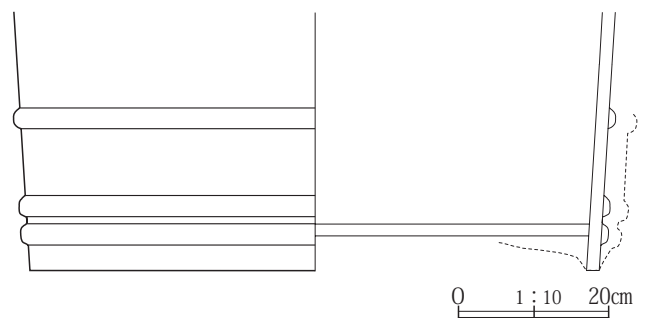
第134図 34号土坑



第135図 基準点に基づく断面形状補正



第136図 三か所の断面比較



第137図 34号土坑桶推定復元

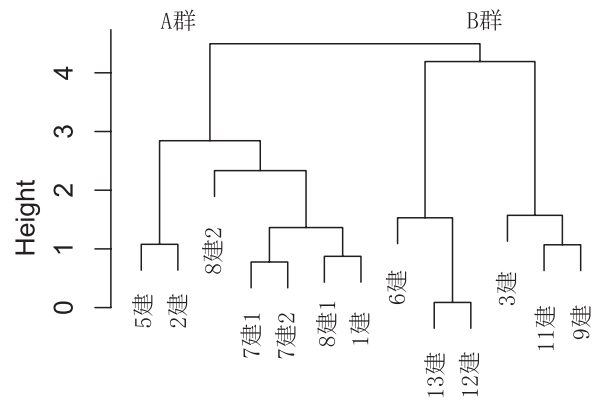
4 掘立柱建物について

下田遺跡で検出された掘立柱建物と礎石建物(以下、建物)は出土層位に基づいて帰属時期を特定できないものが多かった。時代変遷を読み取るには至らなかったため、建物各部の計測値を元に形式的分類を試みた。

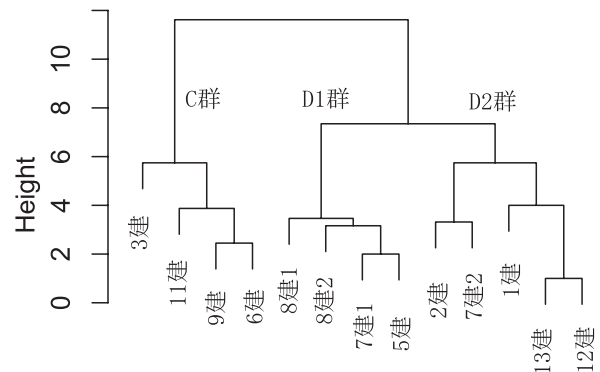
建物本体の内周部の外側に、内周部の柱間より狭い間隔で外周となる張出部を設けた事例と、張出部を持たない事例の両者があるため、比較対象から張出部を除外し、第77表の項目(長軸、min、maxの値を除く)を元にRによるクラスター分析を行い、第138図を得た。

結果は梁間の間数の影響が大きく、複数間のA群は桁行の柱間間隔により細分され、1間のB群は梁間柱間と桁行柱間の間隔比により二分される結果となった。資料13件を三分する結果は妥当とも言えるが、A群の分離が不十分と思われる。そこで梁間間数の影響力を抑制するために、順序数に基づく比較を試みた。

第76表は第77表に記録された計測値を、各項目ごとにその大小に基づく順位に置き換えたものである。この第76表を元にクラスター分析を行い第139図をえた。梁間柱間と桁行柱間の間隔比によりC群、D1群、D2群に三分される結果となった。2号建物が例外要素ではあるが概ね、梁間/桁行比が1.5以上の場合にC群、梁間/桁行比が1.1以下の場合にD2群、その中間の場合はD1群に区分されると考えられる。ただし例外要素の件もあり、D群の分別はこの他の要因の影響も否定し得ない。なお、中間形態であるD1群の建物は近世に帰属する。梁間/桁行比1.4~1.0を近世後半の目安としうる可能性がある。



第138図 下田遺跡建物のクラスター分析



第139図 順序数によるクラスター分析

第76表 下田遺跡建物の分析対象項目(順位)

遺構名	内周		柱間平均		柱間比 梁/桁
	梁間	桁行	梁間	桁行	
11号掘立柱建物	1	3	8	1	8
3号掘立柱建物	1	4	9	6	7
9号掘立柱建物	1	4	7	2	6
6号掘立柱建物	1	2	6	2	5
7号掘立柱建物1面	2	4	4	2	4
5号礎石建物	3	5	3	1	4
2号掘立柱建物	2	5	5	4	3
8号掘立柱建物2面	4	3	3	3	3
8号掘立柱建物1面	2	3	1	1	3
13号掘立柱建物	1	1	2	4	2
12号掘立柱建物	1	1	2	5	2
7号掘立柱建物2面	2	4	5	7	2
1号掘立柱建物	2	3	1	7	1

第77表 下田遺跡建物の分析対象項目(計測値)

遺構名	内周			梁間柱間(m)			桁行柱間(m)			柱間比 梁/桁	記載項目
	梁間	桁行	長軸(°)	min	平均	max	min	平均	max		
11号掘立柱建物	1	3	N-77-W	3.55	3.58	3.60	1.73	1.79	1.92	2.00	内周梁間 桁行 長軸 梁間柱間 桁行柱間 柱間比
3号掘立柱建物	1	4	N-15-E	4.29	4.59	4.85	1.68	2.45	3.72	1.88	
9号掘立柱建物	1	4	N-23-E	2.94	3.31	3.48	1.77	1.89	2.08	1.75	
6号掘立柱建物	1	2	N-8-E	2.66	2.80	2.89	1.73	1.87	1.97	1.50	
7号掘立柱建物1面	2	4	N-69-W	2.05	2.10	2.15	1.69	1.87	2.14	1.12	
5号礎石建物	3	5	N-79-W	1.59	1.97	2.27	1.59	1.81	1.94	1.09	
2号掘立柱建物	2	5	N-78-W	2.06	2.19	2.36	1.96	2.14	2.42	1.02	
8号掘立柱建物2面	4	3	N-16-E	1.84	1.95	2.14	1.84	1.99	2.14	0.98	
8号掘立柱建物1面	2	3	N-73-W	1.49	1.77	2.08	1.75	1.80	1.85	0.98	
13号掘立柱建物	1	1	N-7-E	1.83	1.86	1.89	2.09	2.11	2.12	0.88	
12号掘立柱建物	1	1	N-13-E	1.89	1.89	1.89	2.19	2.19	2.19	0.86	
7号掘立柱建物2面	2	4	N-73-W	1.95	2.21	2.47	2.25	2.59	3.22	0.85	
1号掘立柱建物	2	3	N-76-W	1.53	1.78	2.05	2.53	2.62	2.70	0.68	

抄 録

書名ふりがな	しもだいせき
書 名	下田遺跡(2)
副 書 名	ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	52
シ リ ー ズ 名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	629
編 著 者 名	佐藤元彦
編 集 機 関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発 行 機 関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20170310
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住 所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	しもだいせき
遺 跡 名	下田遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんながのはらまちおおあざはやしあざしもはら
遺 跡 所 在 地	群馬県吾妻郡長野原町大字林字下原 701- 2 他
市町村コード	10424
遺 跡 番 号	47
北緯(世界測地系)	363228
東経(世界測地系)	1384034
調 査 期 間	20130701-20131227, 20140414-20140631
調 査 面 積	10,358
調 査 原 因	ダム建設
種 別	集落
主 な 時 代	平安/中近世
遺 跡 概 要	縄文・弥生-土器・石器-土坑1 / 平安-集落-竪穴住居4 + 竪穴状遺構1 + 掘立柱建物1 + 土坑15 + 焼土遺構1 / 中近世-集落-掘立柱建物11 + 礎石建物1 + 土坑26 + 焼土遺構9 + 柵5 + 道1 + 畑15 + ピット3
特 記 事 項	江戸時代後期の建物とこれに隣接する畑が一体となって検出された。吾妻川中位段丘面では初めて陥穴状土坑が検出された。
要 約	吾妻川左岸の中位段丘面に展開された平安時代から近世にいたる集落遺跡である。平安時代では、竪穴住居とこれに隣接する陥穴状土坑が確認された。中近世では、後架と思われる遺構を伴う掘立柱建物が検出された。

写真図版

(遺 構)



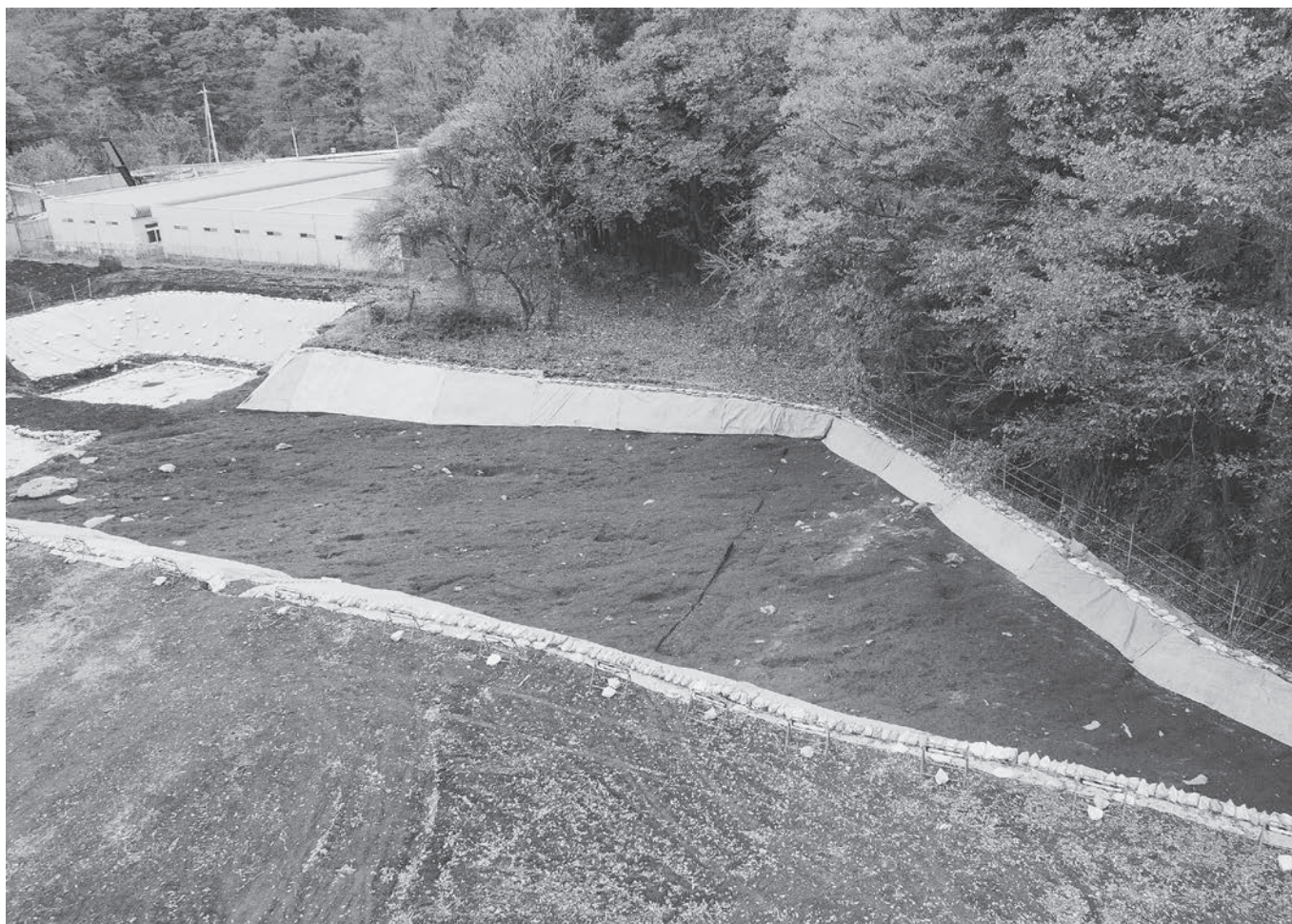
1. 下田遺跡遠景(北西から)



2. 下田遺跡遠景(西から)



1. 下田遺跡周辺(西から)



2. B区全景(北西から)



1. C区全景(東から)



2. C区全景(北西から)



1. 浅間石大(北東から)



2. 浅間石中(西から)



3. 浅間石小(西から)



4. 泥流に運ばれた礫(西から)



5. 泥流に運ばれた礫(東から)



6. 泥流による攪乱の残る畑(東から)



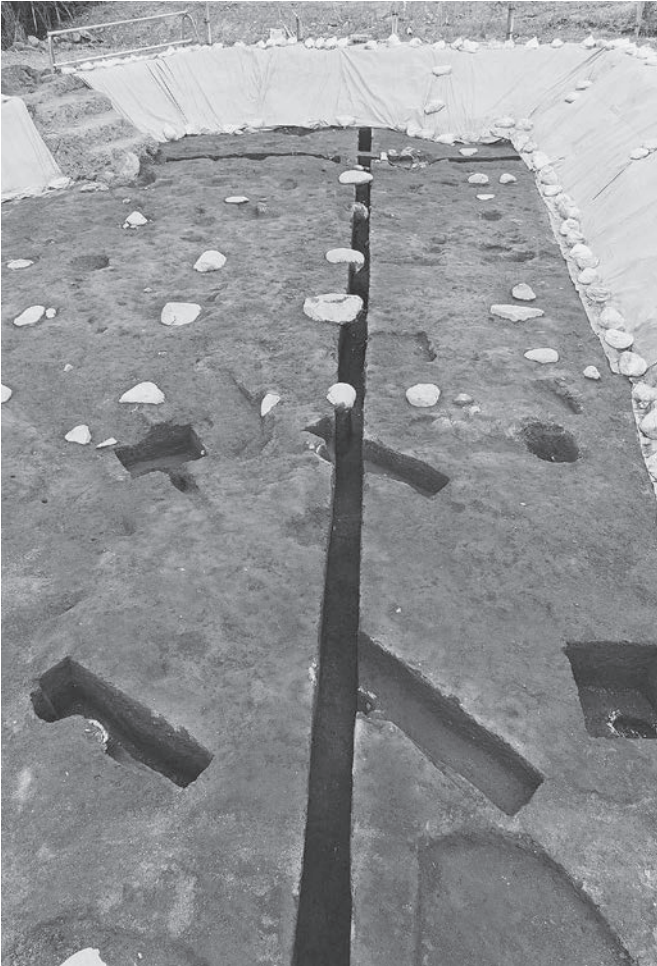
7. 復旧溝全景(北東から)



8. 復旧溝全景(西から)



1. 北西端建物群全景(北東から)



2. 北西端建物群(東から)



3. 5号礎石建物(北から)



4. 5号礎石建物遺構外遺物出土状態(南東から)



1. 5号礎石建物1号カマド(北東から)



2. 5号礎石建物1号カマド(北から)



3. 5号礎石建物1号カマド(東から)



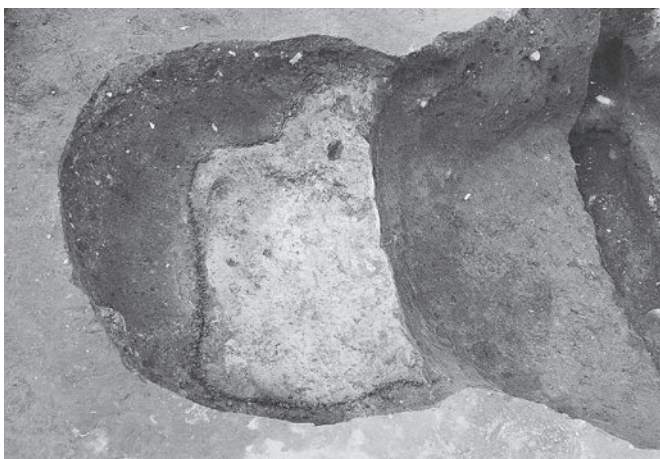
4. 5号礎石建物1号炉、礎石12(北から)



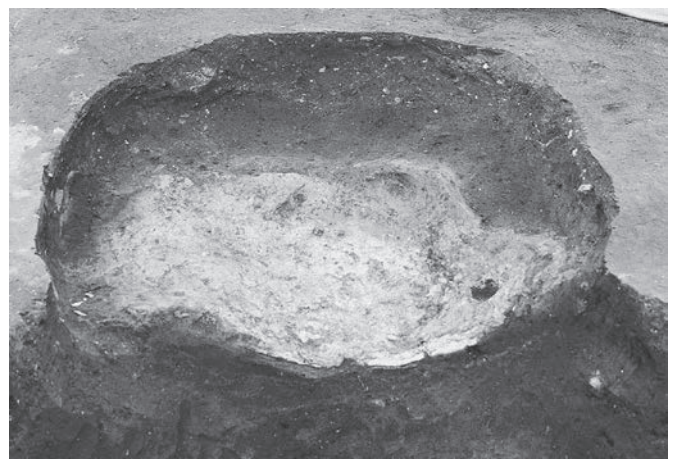
5. 5号礎石建物1号炉(北から)



6. 5号礎石建物2号炉土層断面(東から)



7. 5号礎石建物2号炉、1号カマド(南から)



8. 5号礎石建物2号炉(東から)



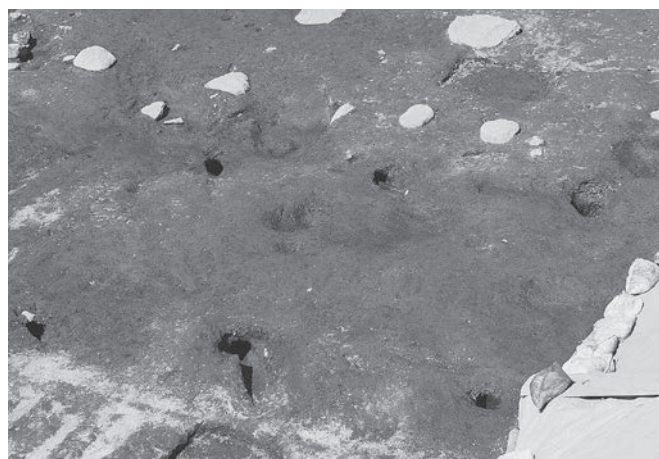
1. 11号焼土遺構(南から)



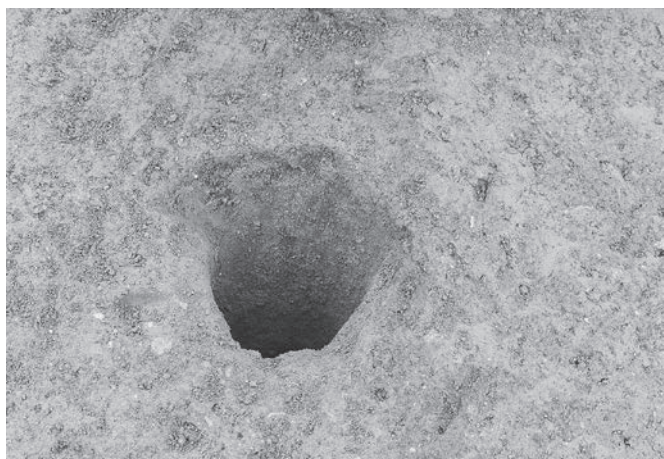
2. 11号焼土遺構掘り方(南から)



3. 11号焼土遺構土層断面(南から)



4. 6号掘立柱建物(北東から)



5. 6号掘立柱建物P 1(南から)



6. 6号掘立柱建物P 1(東から)



7. 6号掘立柱建物P 2～3(南から)



1. 6号掘立柱建物P 2(南から)



2. 6号掘立柱建物P 2(北東から)



3. 6号掘立柱建物P 2土層断面(北西から)



4. 6号掘立柱建物P 3(南から)



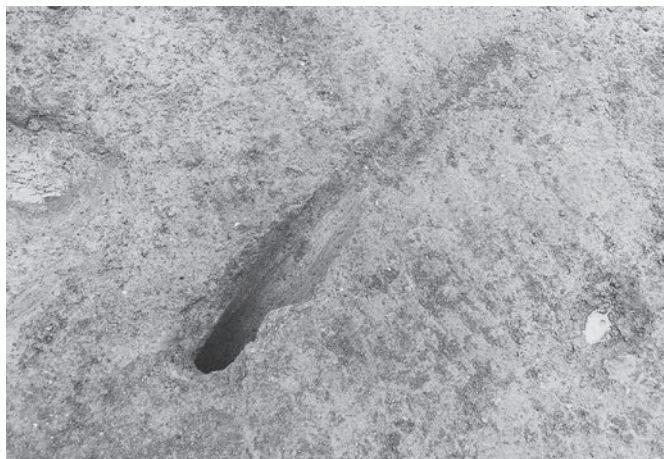
5. 6号掘立柱建物P 3(北東から)



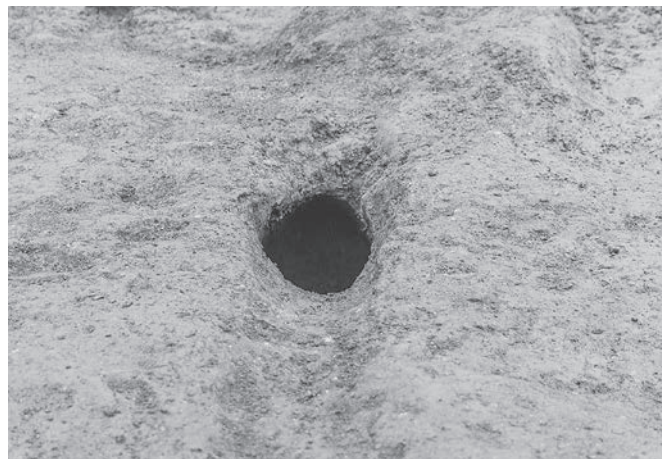
6. 6号掘立柱建物P 3土層断面(北西から)



7. 6号掘立柱建物P 4~6(南から)



1. 6号掘立柱建物P 4(南から)



2. 6号掘立柱建物P 4(北東から)



3. 6号掘立柱建物P 4(南から)



4. 6号掘立柱建物P 4掘り方(北から)



5. 6号掘立柱建物P 5柱材出土状態(南から)



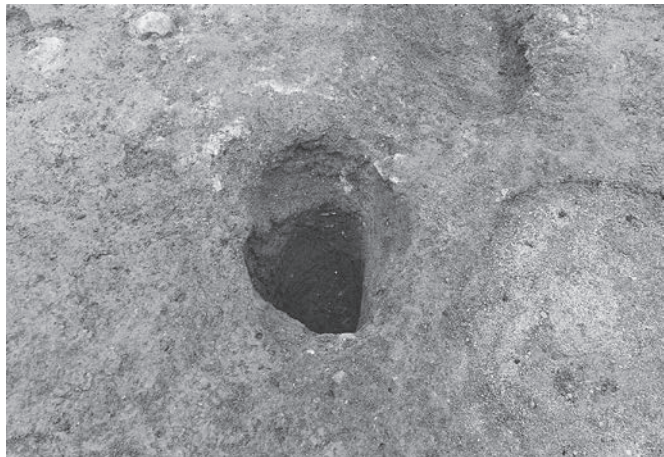
6. 6号掘立柱建物P 5(北東から)



7. 6号掘立柱建物P 5土層断面(北西から)



8. 6号掘立柱建物P 5出土遺物近接(北西から)



1. 6号掘立柱建物P 6(東から)



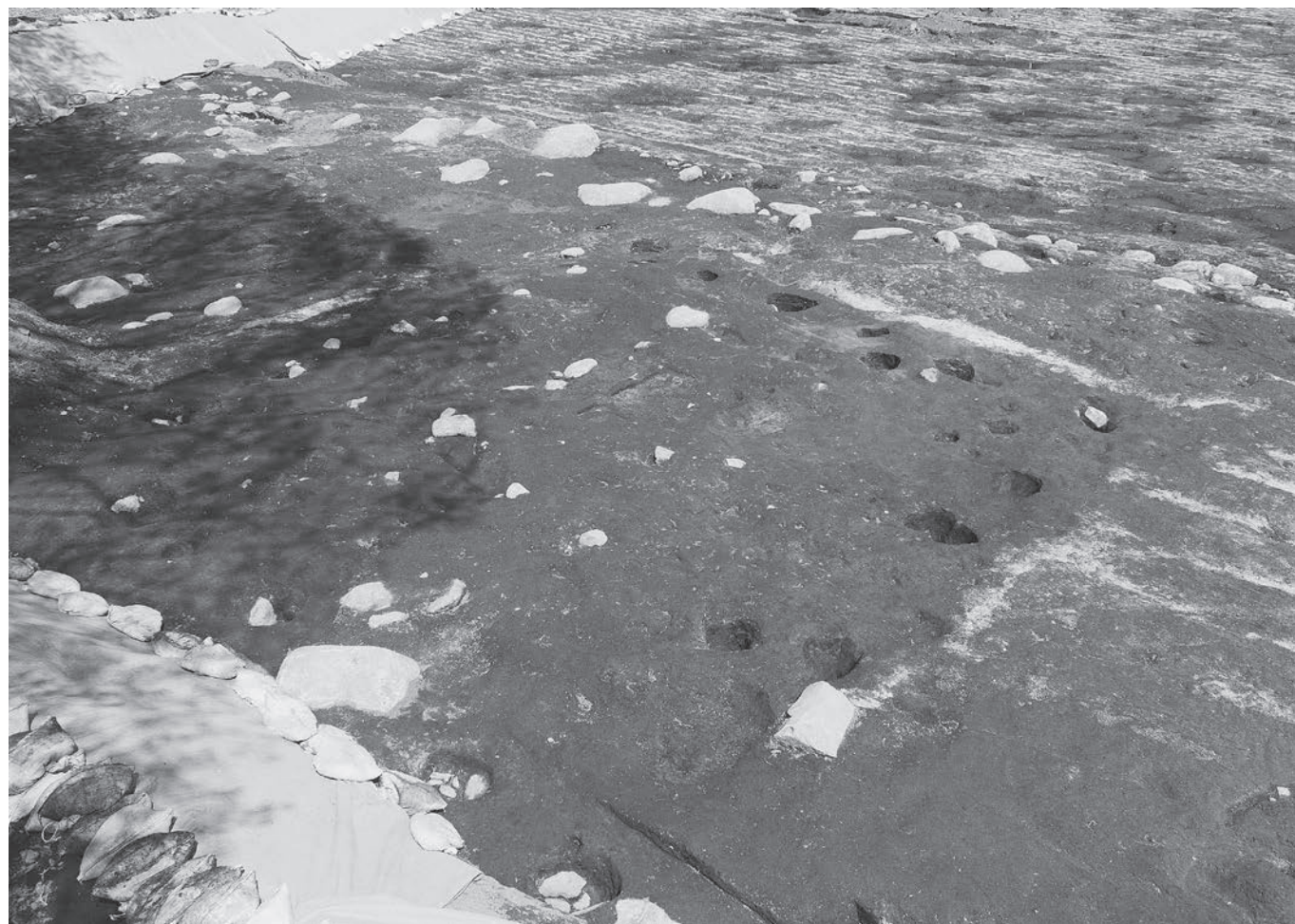
2. 2号ピット群P 1~3土層断面(西から)



3. 2号ピット群P 4土層断面(西から)



4. 2号ピット群P 5土層断面(西から)



5. 西辺建物群1面全景(南東から)



1. 7号掘立柱建物1面(南から)



2. 7号掘立柱建物1面遺物(1)出土状態(北から)



3. 7号掘立柱建物1面遺物出土状態(南から)



4. 7号掘立柱建物1面古銭(3)出土状態(南から)



5. 7号掘立柱建物1面古銭(4)出土状態(南から)



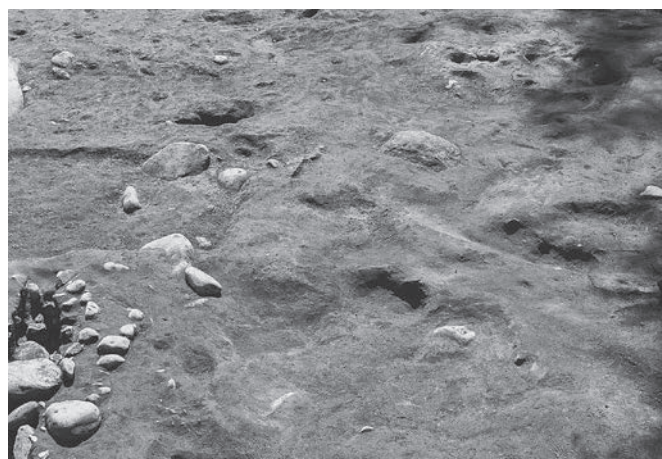
1. 7号掘立柱建物1面カマド(南から)



2. 7号掘立柱建物1面カマド土層断面(南から)



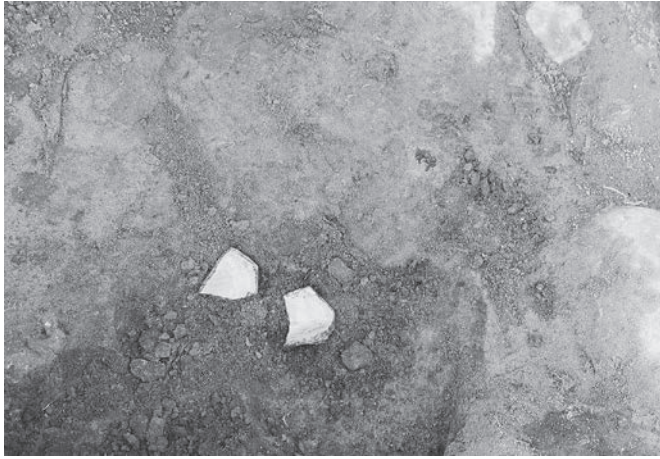
3. 7号掘立柱建物1面カマド掘り方(南から)



4. 7号掘立柱建物1面窪地(西から)



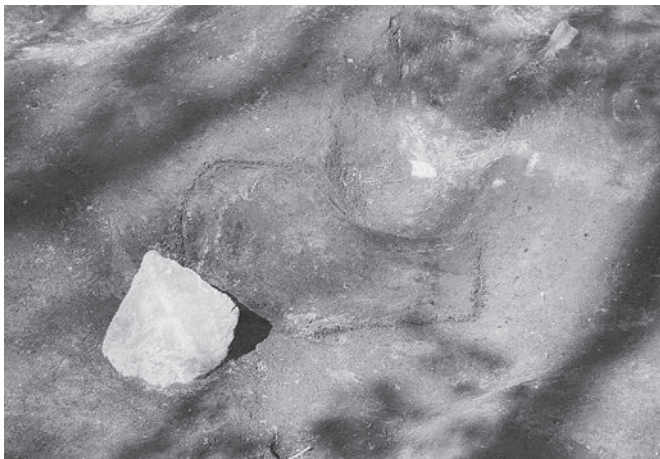
5. 7号掘立柱建物2面(東から)



1. 7号掘立柱建物2面遺物(1)出土状態(北から)



2. 7号掘立柱建物2面遺物(4~6)出土状態(北から)



3. 7号掘立柱建物2面1号炉(南から)



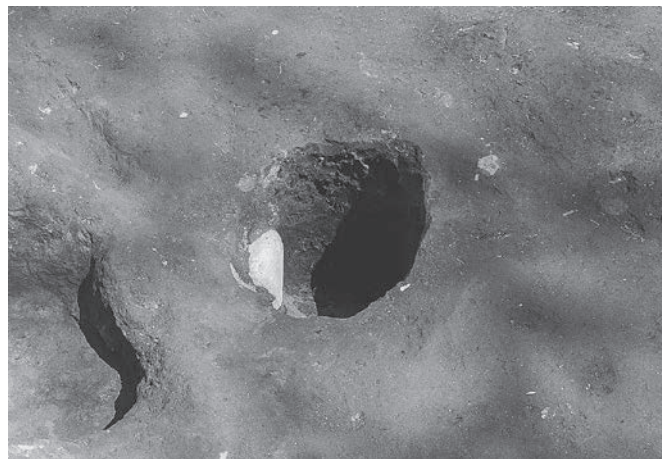
4. 7号掘立柱建物2面1号炉土層断面(南から)



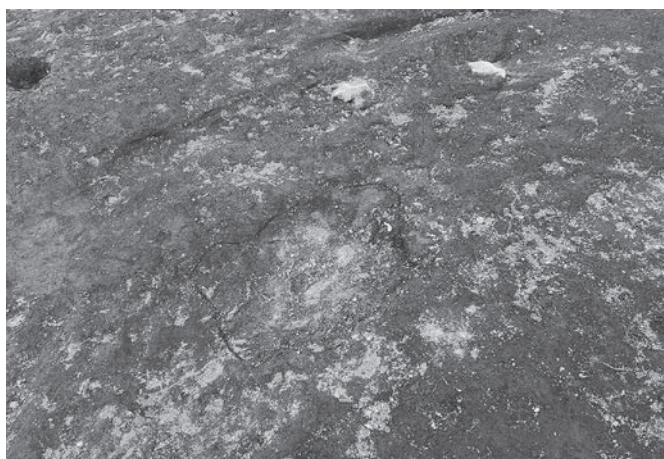
5. 8号掘立柱建物1面(南西から)



1. 8号掘立柱建物1面P 3(西から)



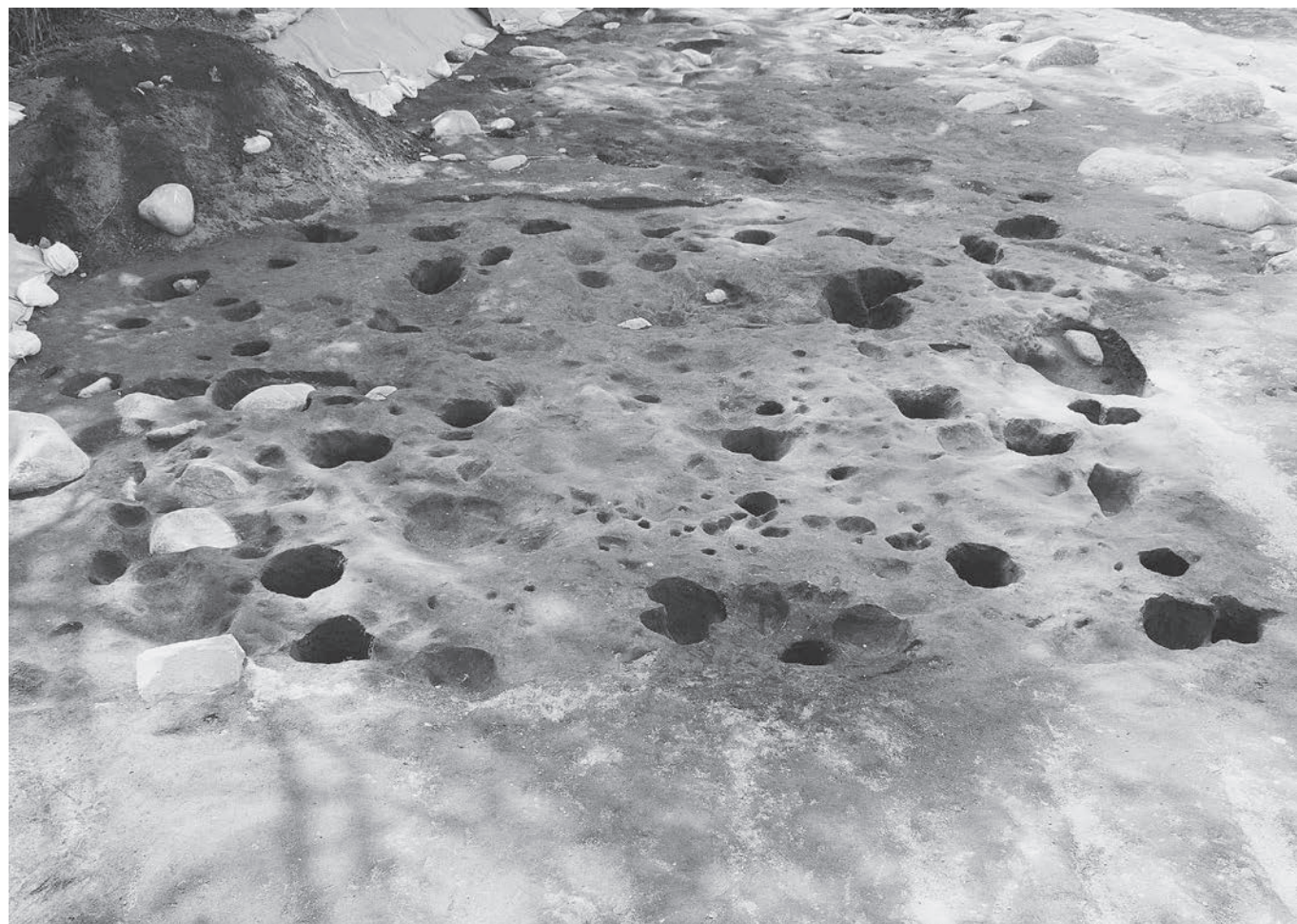
2. 8号掘立柱建物1面P 5(南西から)



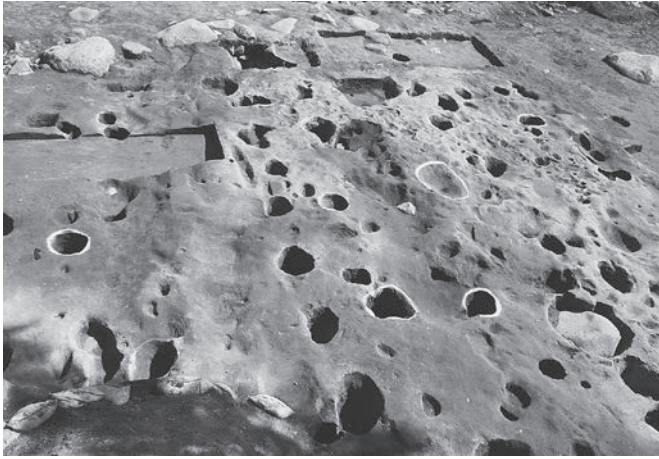
3. 8号掘立柱建物1面1号炉(北西から)



4. 8号掘立柱建物1面1号炉土層断面(東から)



5. 8号掘立柱建物2面(東から)



1. 8号掘立柱建物2面(南から)



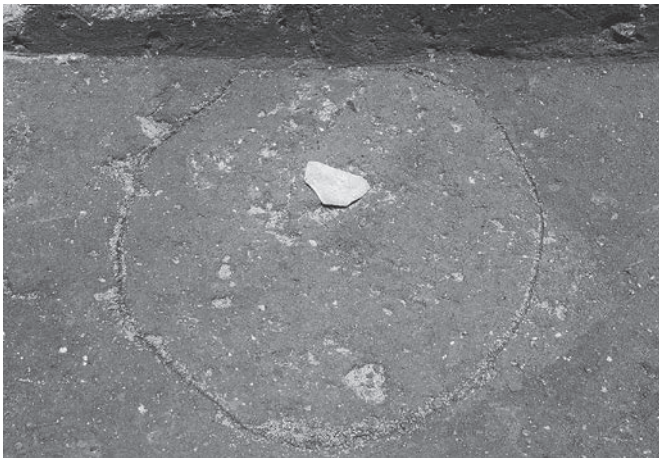
2. 8号掘立柱建物2面土層断面(東から)



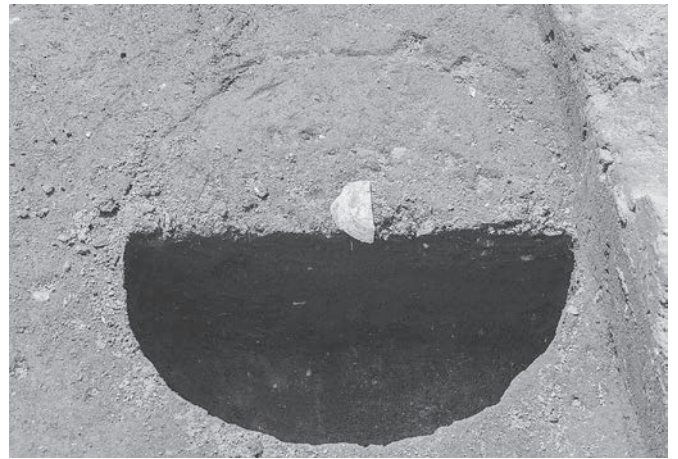
3. 8号掘立柱建物2面P1(西から)



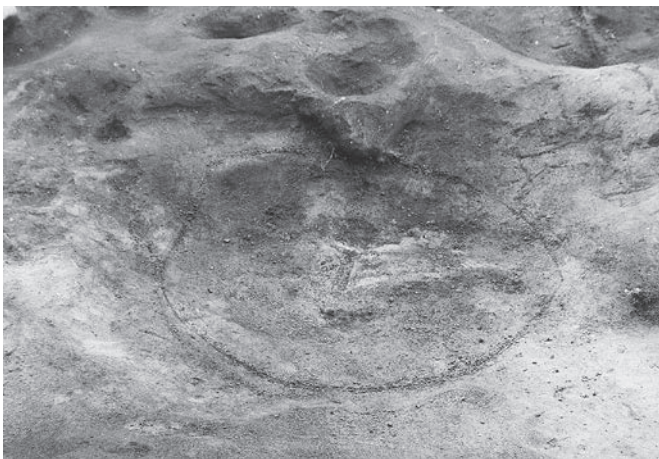
4. 8号掘立柱建物2面P16(西から)



5. 8号掘立柱建物2面P21遺物出土状態(西から)



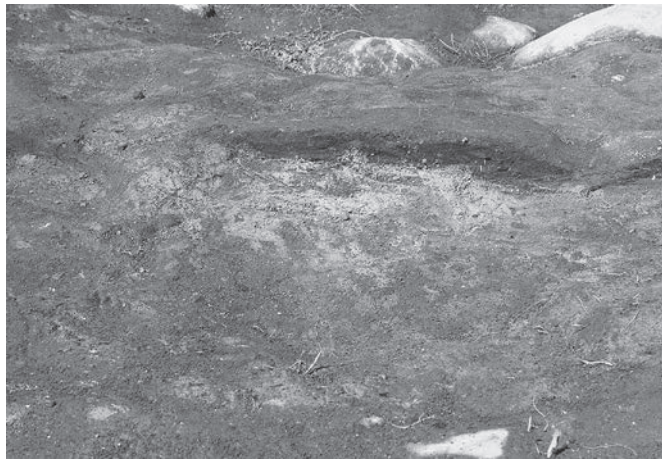
6. 8号掘立柱建物2面P21土層断面(東から)



7. 8号掘立柱建物2面1号炉(東から)



8. 8号掘立柱建物2面1号炉土層断面(東から)



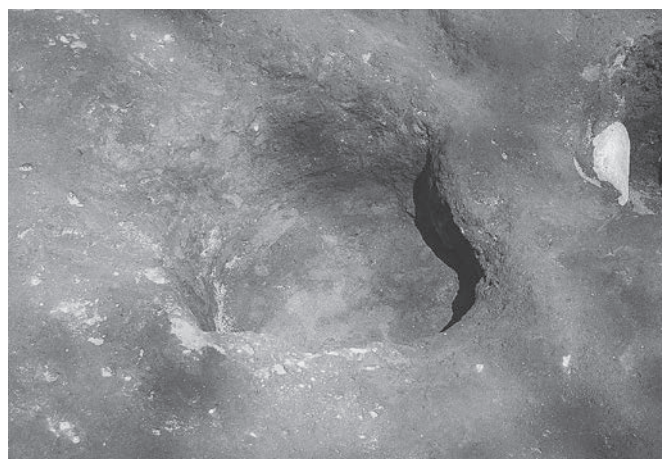
1. 8号掘立柱建物2面2号炉(東から)



2. 8号掘立柱建物2面2号炉土層断面(東から)



3. 8号掘立柱建物2面土坑(北東から)



4. 8号掘立柱建物2面土坑(南西から)



5. 29号土坑土層断面(北から)



6. 29号土坑(東から)



7. 1号道南部(北東から)



8. 1号道土層断面(南から)



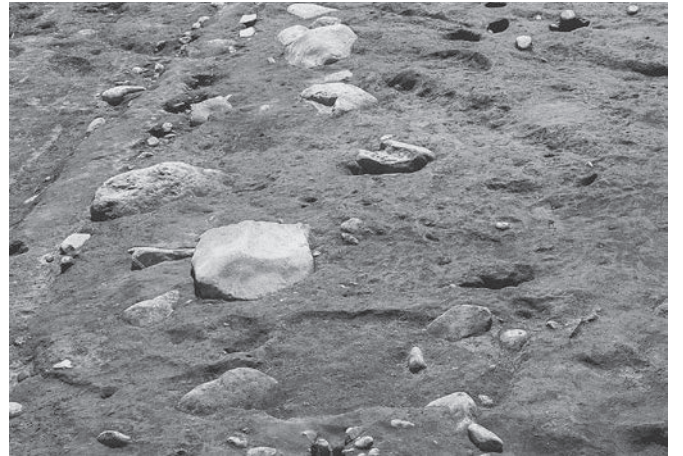
1. 1号道西部(東から)



2. 1号道東部(西から)



3. 1号道中央から西部(東から)



4. 1号道西部(西から)



5. 1号畑(南西から)



6. 1～2号畑西部(南から)



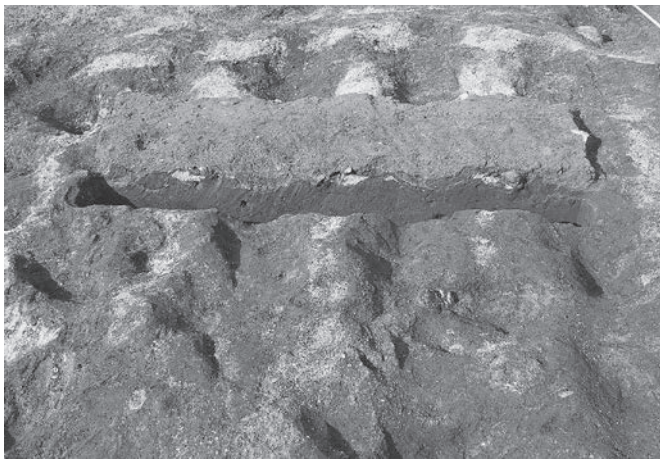
7. 2号畑西部(西から)



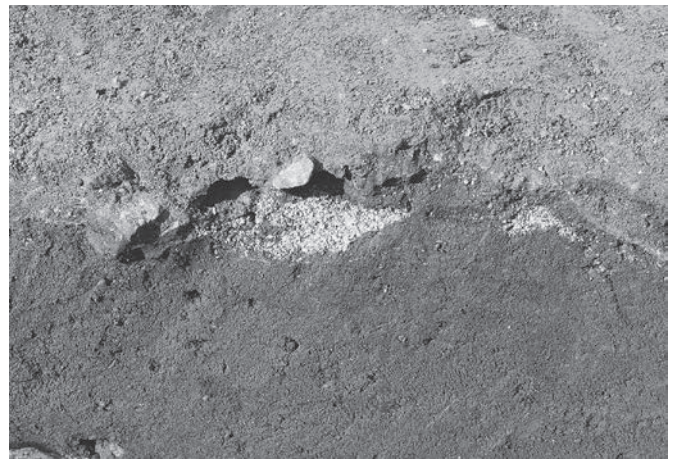
1. 2号畑東部(東から)



2. 2号畑土層断面(南西から)



3. 2号畑土層断面(東から)



4. 2号畑土層断面近接(東から)



5. 3号畑(南西から)



6. 3-1号平坦面(北西から)



7. 4号畑、浅間石大(北東から)



8. 4号畑(北から)



1. 5号畑中央(北から)



2. 5号畑西部(東から)



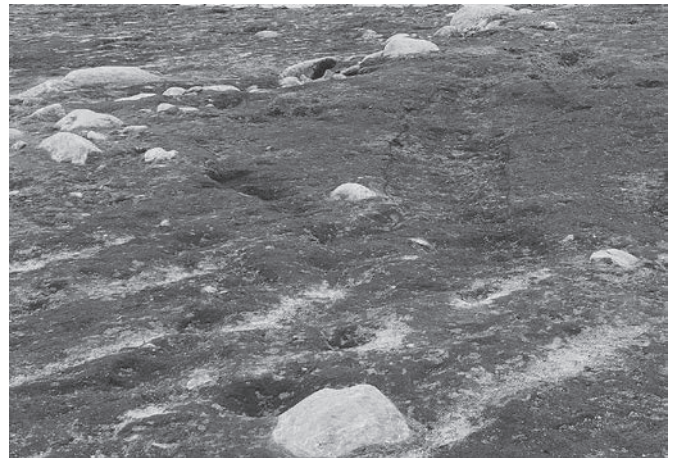
3. 6号畑(北から)



4. 6号畑、浅間石中(北西から)



5. 7号畑南部(北東から)



6. 7号畑、1号道(南西から)



7. 9号畑(南東から)



8. 13号平坦面(南西から)



1. 10号畑北部、1号平坦面(南東から)



2. 10号畑中央部、2号平坦面(北東から)



3. 10号畑(南西から)



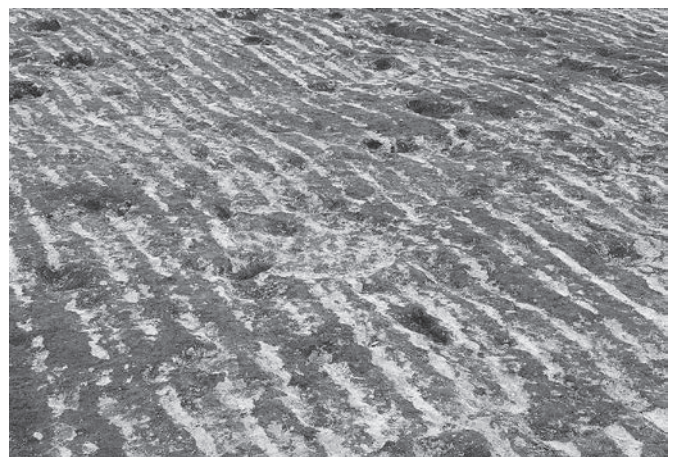
4. 10～11号畑、4号平坦面(北東から)



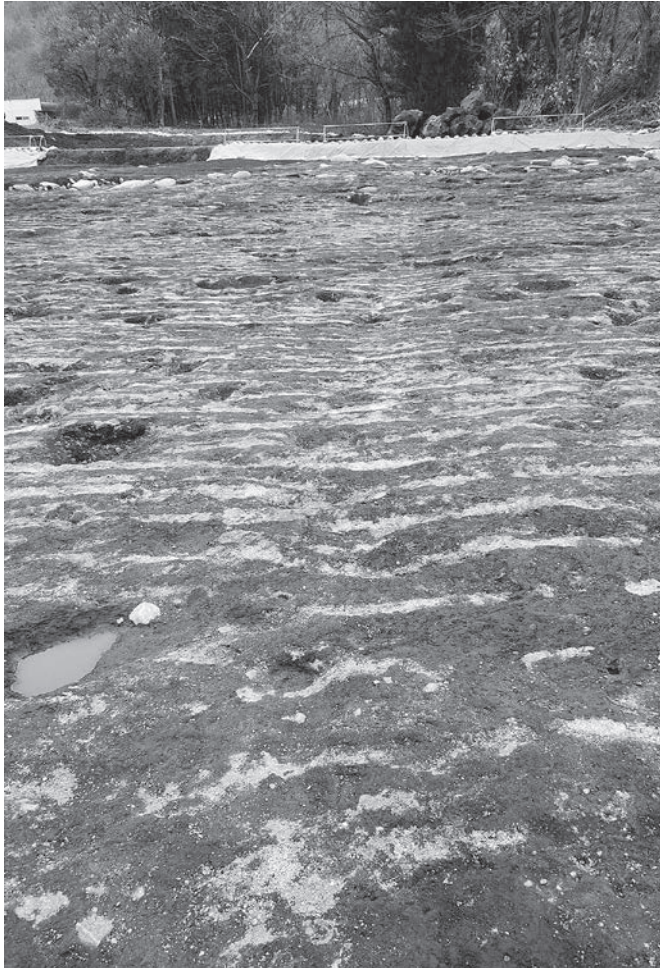
5. 11号畑と12号畑の境い(北西から)



6. 12～16号畑(西から)



7. 12号畑、5号平坦面(北西から)



1. 12号畑と13号畑の境い(北から)



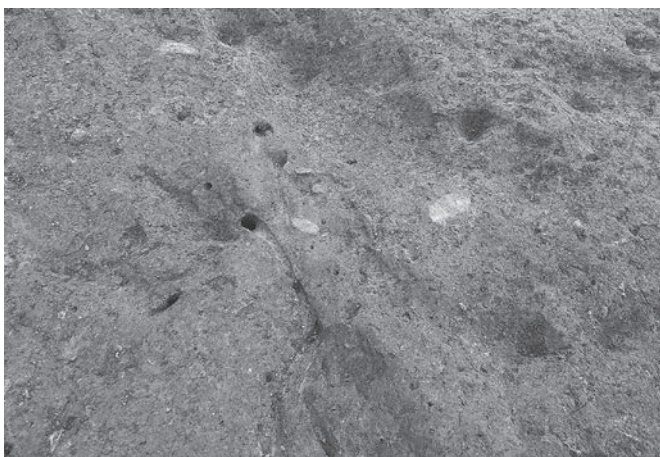
2. 13号畑、8号平坦面(北西から)



3. 13～16号畑北部(西から)



4. 15～16号畑北部(西から)



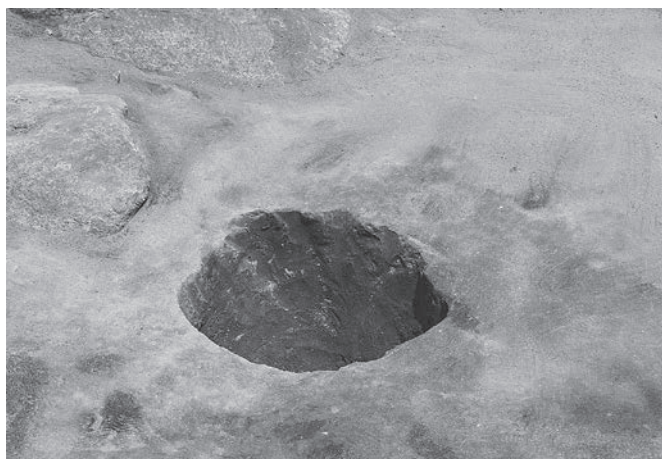
5. 境木近接(東から)



6. 境木全景(東から)



1. 9号掘立柱建物(南西から)



2. 9号掘立柱建物P10(南から)



3. 9号掘立柱建物P10近接(南から)



4. 9号掘立柱建物P1(南から)



1. 12～13号掘立柱建物(北西から)



2. 12号掘立柱建物(北西から)



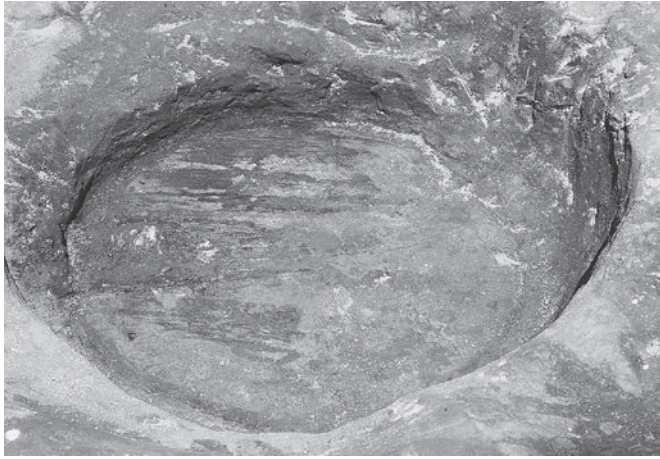
3. 32号土坑土層断面、遺物出土状況(西から)



4. 32号土坑土層断面(北西から)



5. 13号掘立柱建物(西から)



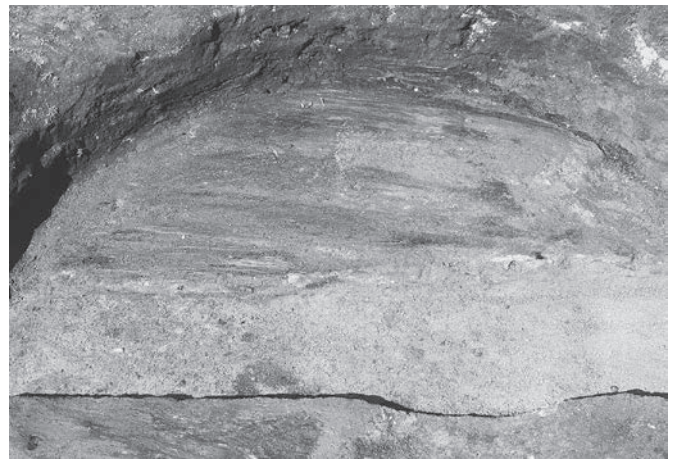
1. 30号土坑桶埋設状況(南西から)



2. 30号土坑土層断面、桶近接(南西から)



3. 30号土坑桶底板出土状態(南西から)



4. 30号土坑桶底板近接(南西から)



5. 30号土坑(西から)



6. 33号土坑土層断面(西から)



7. 34号土坑土層断面(西から)



8. 34号土坑(西から)



1. 1～2号掘立柱建物、1～2号ピット列全景(北西から)



2. 1～2号掘立柱建物(東から)



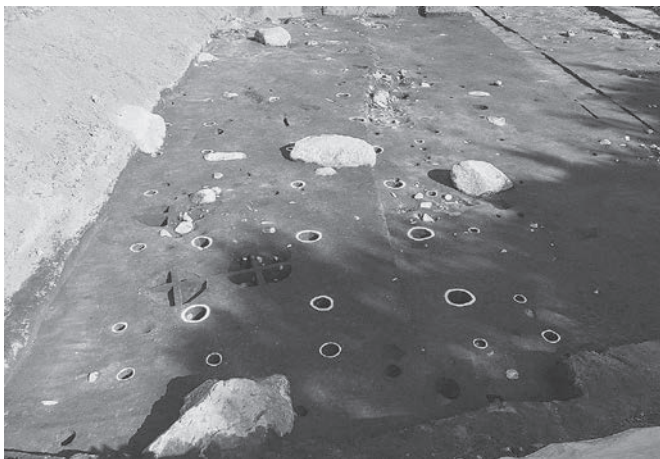
1. 1号掘立柱建物(西から)



2. 1～2号掘立柱建物(南から)



3. 1号掘立柱建物P10～11土層断面(南西から)



4. 2号掘立柱建物(西から)



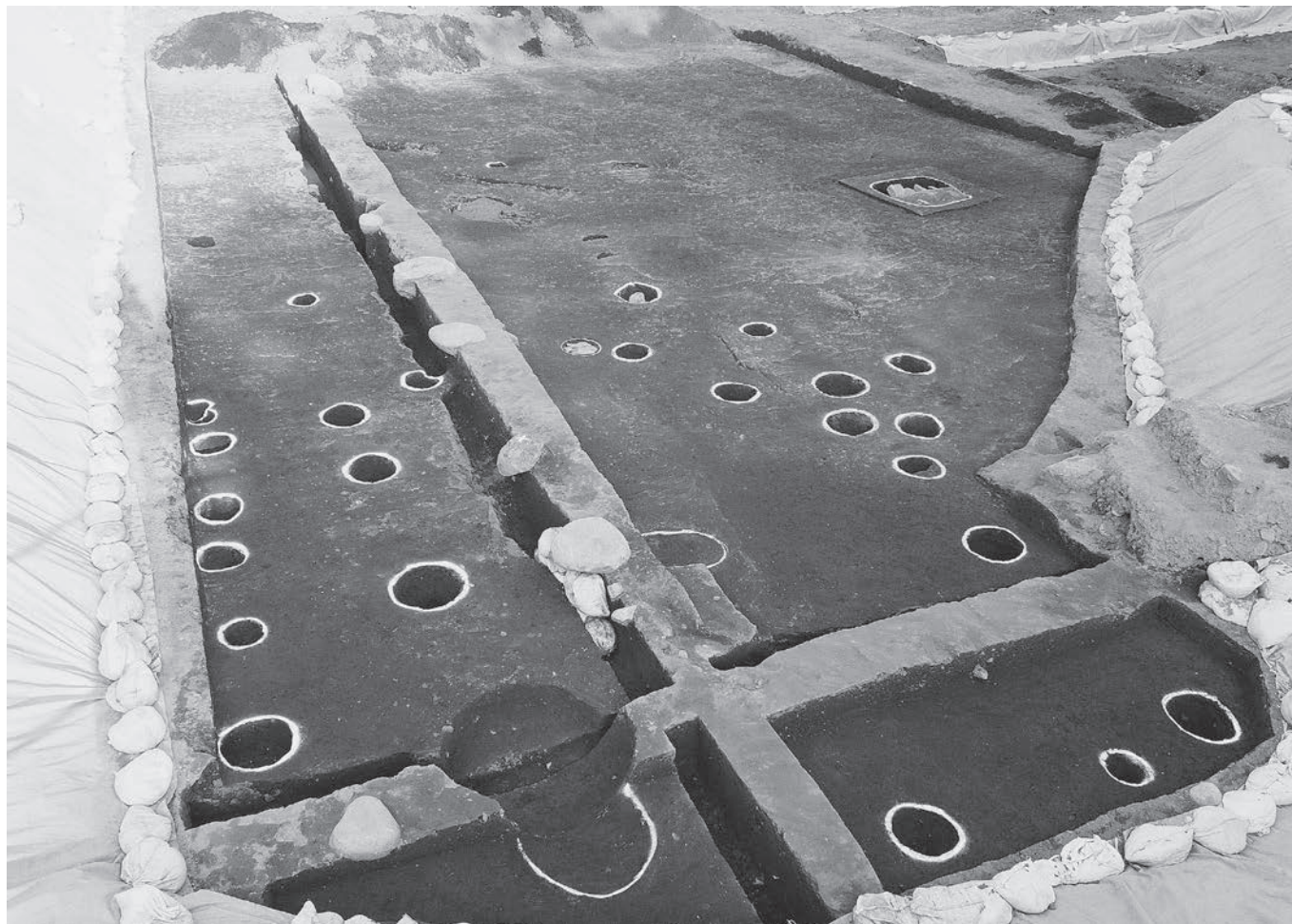
5. 2号掘立柱建物西半(南西から)



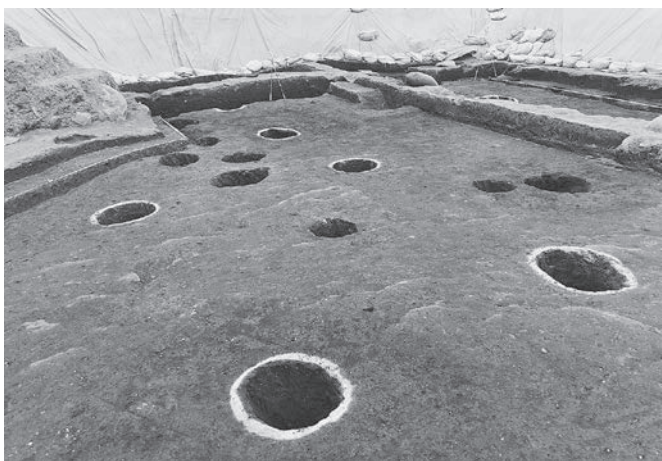
6. 2号掘立柱建物(南西から)



7. 2号掘立柱建物(北東から)



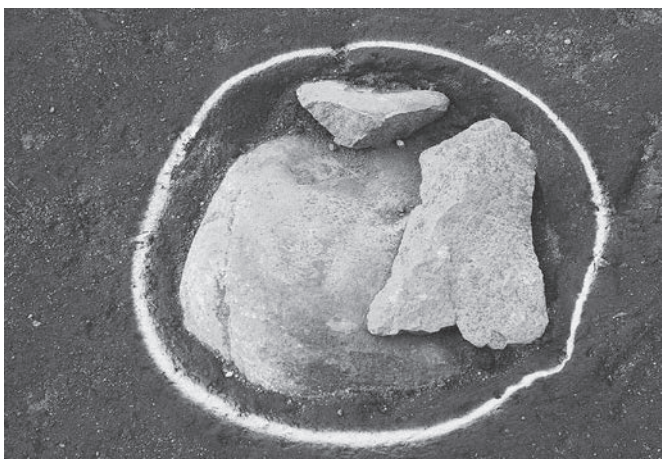
1. 11号掘立柱建物(北西から)



2. 11号掘立柱建物南半(南東から)



3. 11号掘立柱建物P 8～9(南から)



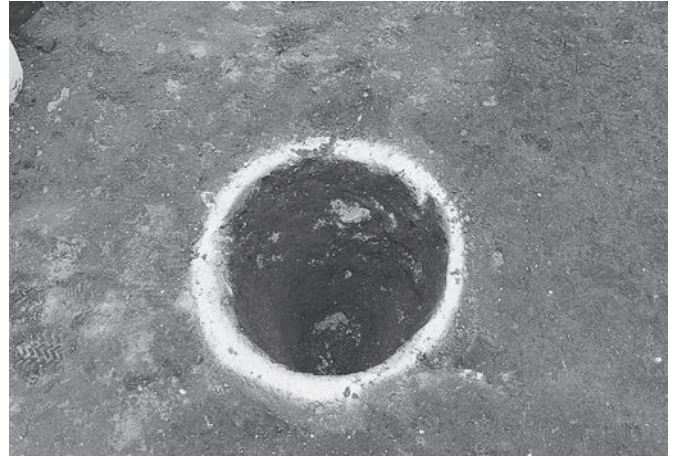
4. 11号掘立柱建物P 8(南から)



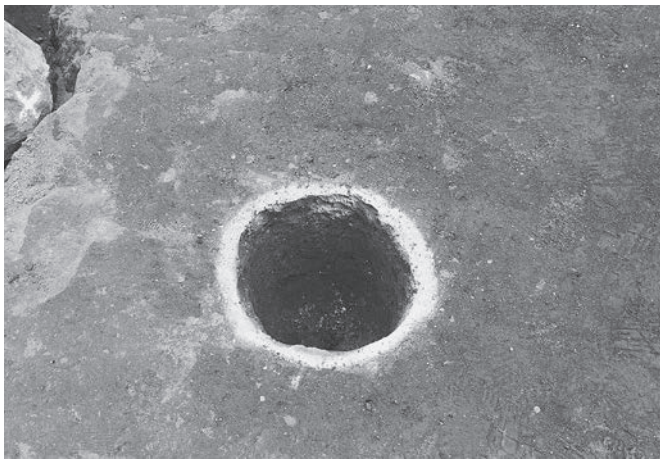
5. 11号掘立柱建物P 8 遺物出土状態(東から)



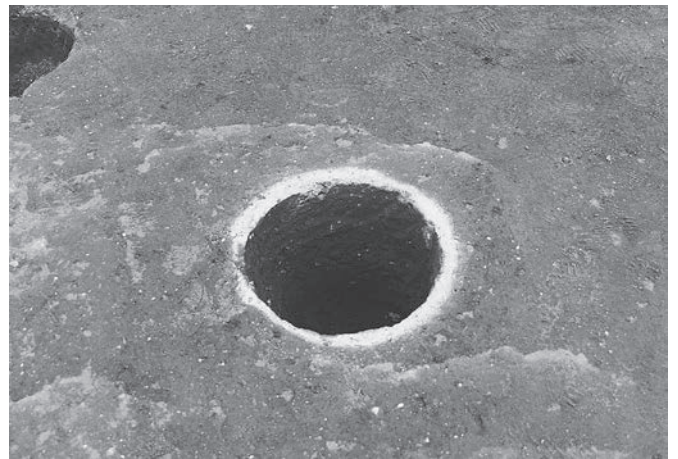
1. 11号掘立柱建物 P16 (南から)



2. 11号掘立柱建物 P17 (東から)



3. 11号掘立柱建物 P18 (東から)



4. 11号掘立柱建物 P19 (東から)



5. 11号掘立柱建物 P20 (東から)



6. 11号掘立柱建物 P21 (南東から)



7. 1号集石土坑(北から)



8. 1号集石土坑土層断面(東から)



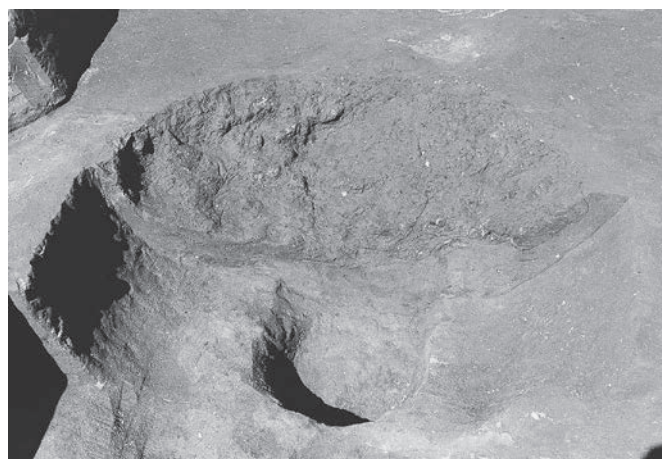
1. 1号集石土坑(東から)



2. 1号集石土坑掘り方(東から)



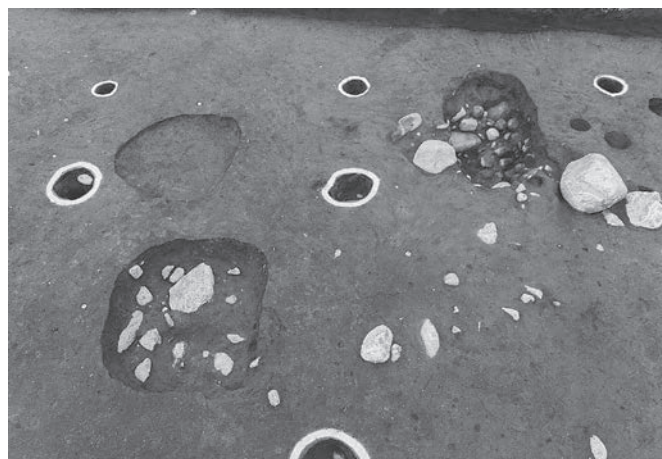
3. 2号土坑土層断面(南西から)



4. 2号土坑炭化物出土状態(南から)



5. 2号土坑(南西から)



6. 4～6号土坑(南から)



7. 4号土坑土層断面(東から)



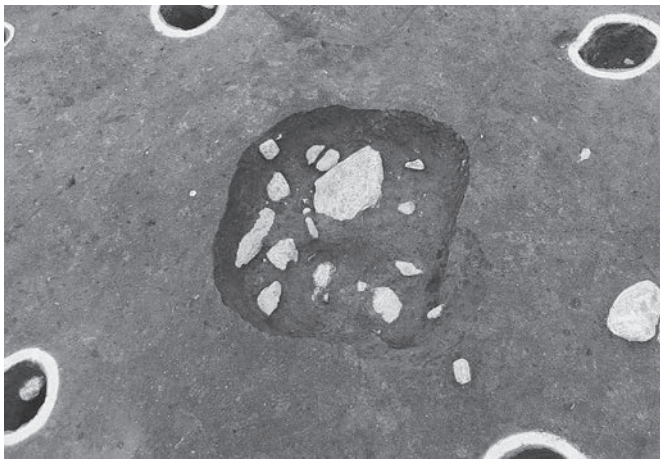
8. 4号土坑(南から)



1. 5号土坑遺物出土状態(北東から)



2. 5号土坑土層断面(南から)



3. 5号土坑(南から)



4. 6号土坑土層断面(南から)



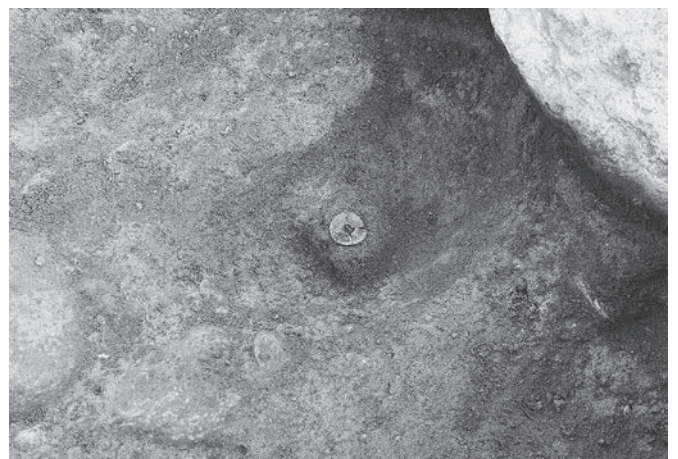
5. 6号土坑(南西から)



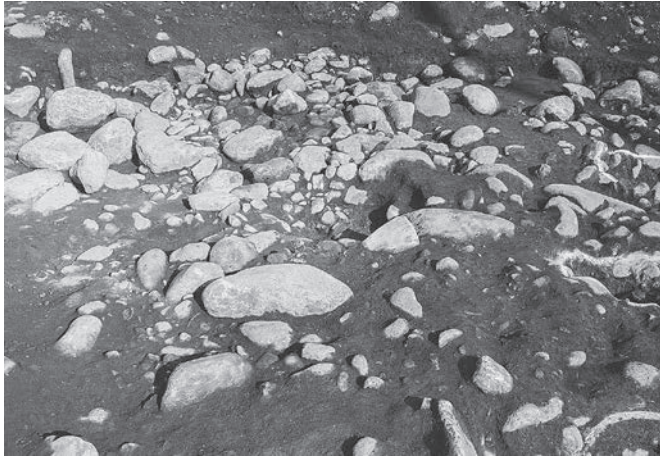
6. 10号土坑人骨出土状態(南西から)



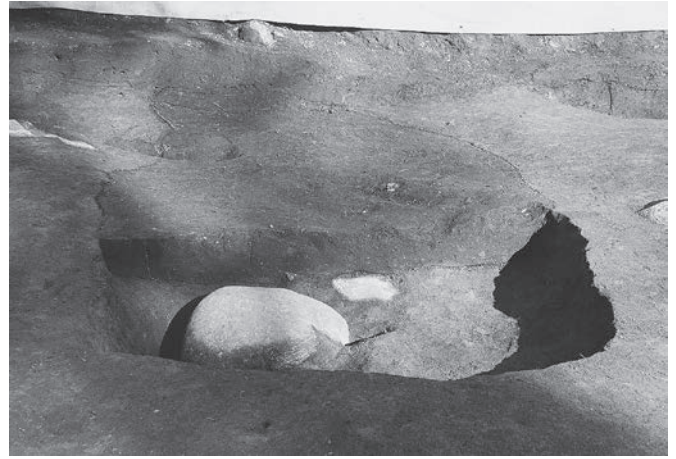
7. 10号土坑古銭(8)出土状態(西から)



8. 10号土坑古銭(8)近接(南西から)



1. 10号土坑遠景(南から)



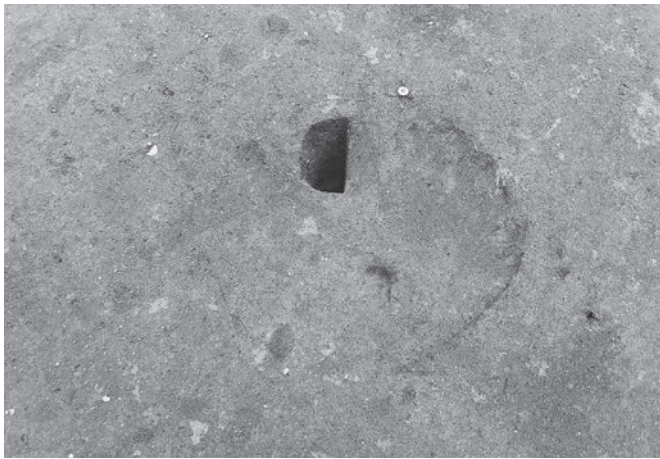
2. 12号土坑土層断面(南から)



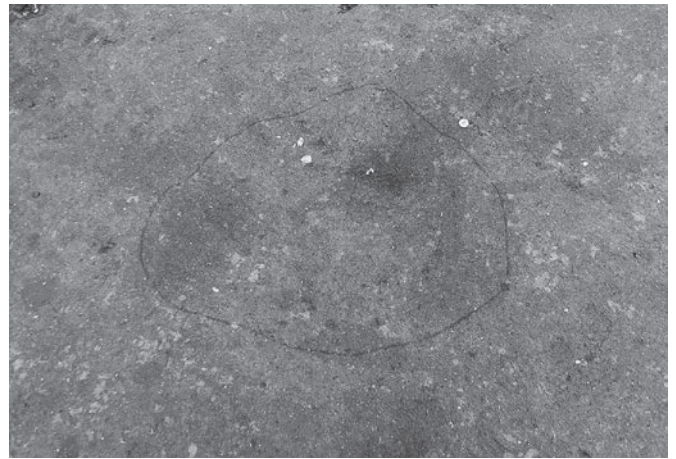
3. 12号土坑(南から)



4. 13号土坑、9号ピット土層断面(西から)



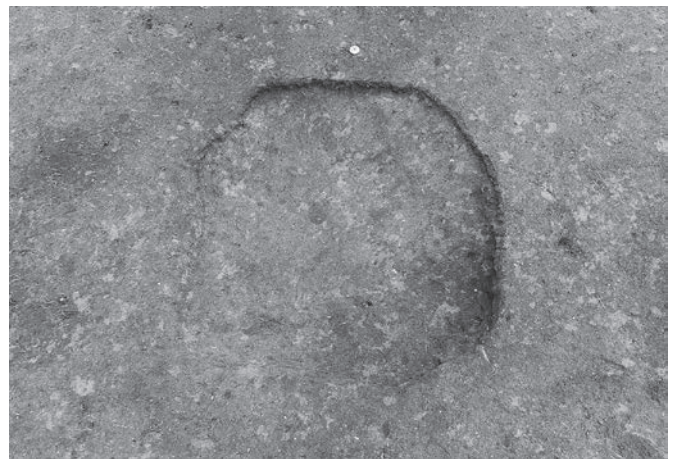
5. 13号土坑、9号ピット(南から)



6. 14号土坑(南から)



7. 15号土坑土層断面(西から)



8. 15号土坑(南から)



1. 16号土坑土層断面(西から)



2. 16号土坑(南から)



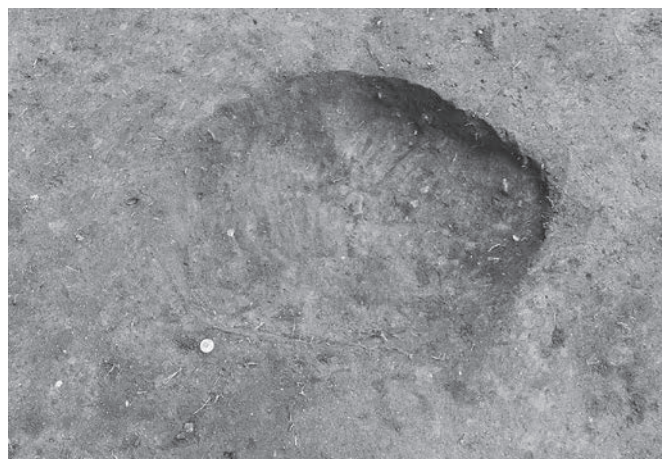
3. 17号土坑土層断面(東から)



4. 17号土坑(南から)



5. 18号土坑土層断面(北西から)



6. 18号土坑(南から)



7. 19号土坑土層断面(北から)



8. 19号土坑(南東から)



1. 20号土坑土層断面(南から)



2. 20号土坑(南から)



3. 21号土坑土層断面(南から)



4. 21号土坑(南から)



5. 22号土坑土層断面(西から)



6. 22号土坑(南から)



7. 23号土坑土層断面(北西から)



8. 23号土坑(南西から)



1. 24号土坑土層断面(南から)



2. 24号土坑(南から)



3. 25号土坑、5号ピット土層断面(南から)



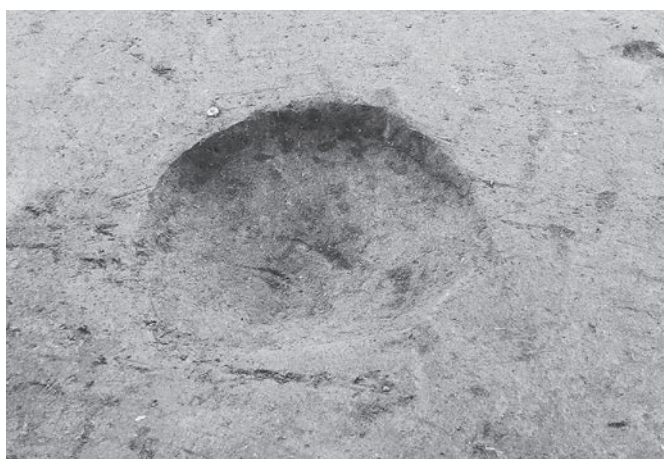
4. 25号土坑土層断面(南から)



5. 25号土坑遺物(3)出土状態(南から)



6. 25号土坑(南から)



7. 26号土坑(西から)



8. 27号土坑土層断面(西から)



1. 27号土坑礫出土状態(西から)



2. 27号土坑(西から)



3. 31号土坑礫出土状態(東から)



4. 31号土坑礫(東から)



5. 31号土坑人骨検出状態(東から)



6. 31号土坑人骨埋葬状況(東から)



7. 31号土坑(東から)



8. 35号土坑馬骨出土状態(西から)



1. 35号土坑馬歯出土状態(北から)



2. 35号土坑馬歯近接(東から)



3. 36号土坑土層断面(南から)



4. 36号土坑(南から)



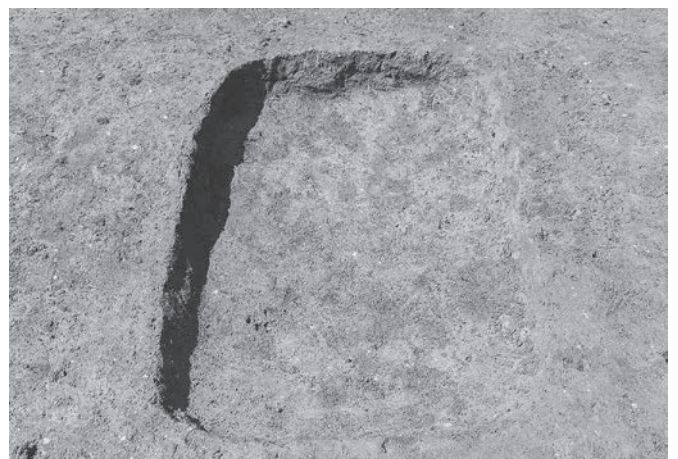
5. 42号土坑土層断面(北から)



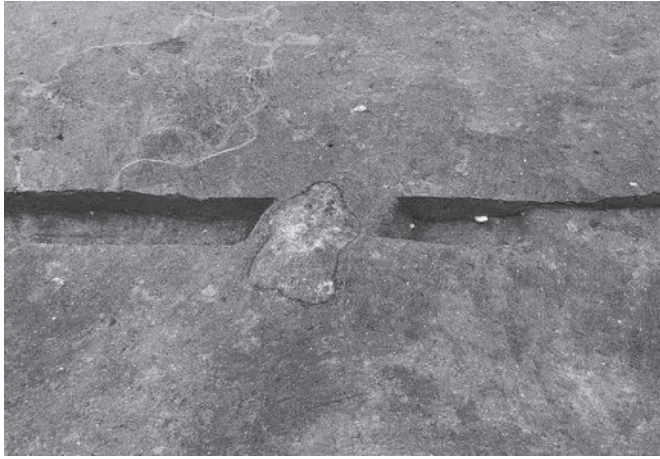
6. 42号土坑人骨検出状態(東から)



7. 42号土坑人骨出土状態(北から)



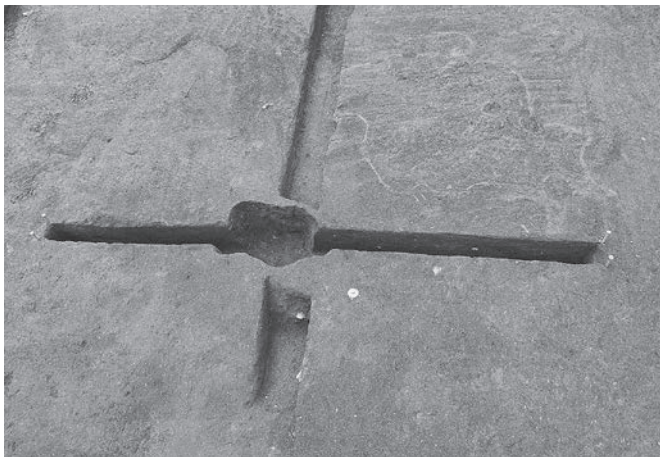
8. 42号土坑(北から)



1. 2号焼土遺構(南から)



2. 2号焼土遺構焼土部(東から)



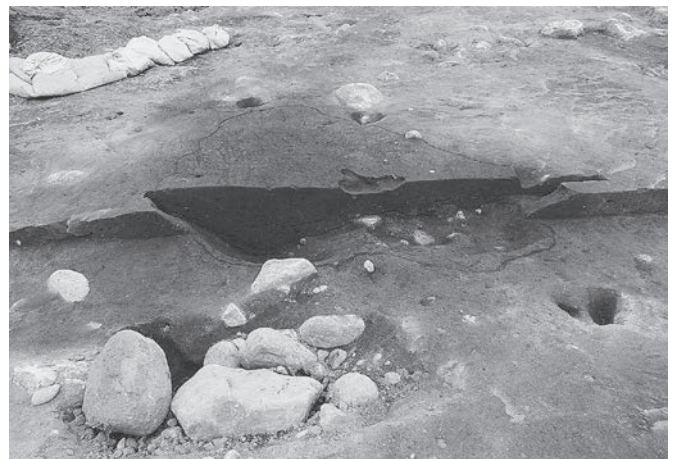
3. 2号焼土遺構焼土部掘り方(東から)



4. 3号焼土遺構(南から)



5. 3号焼土遺構炭化物出土状態(東から)



6. 3号焼土遺構土層断面(北から)



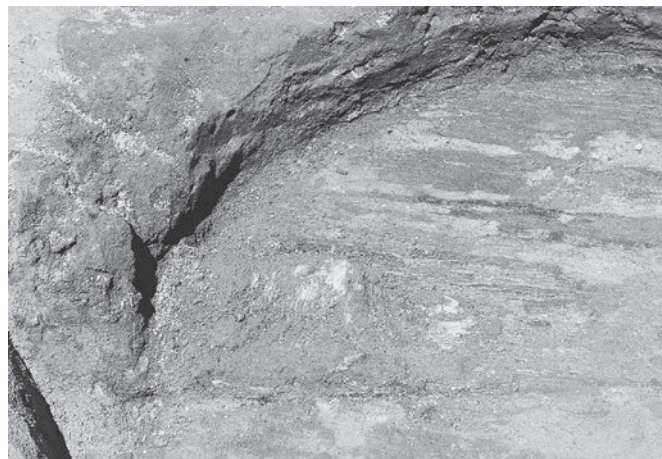
7. 3号焼土遺構掘り方(東から)



8. 4号焼土遺構(南から)



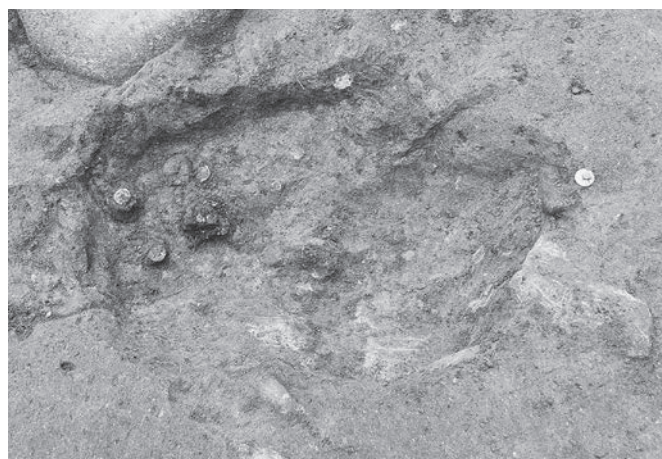
1. 4号焼土遺構土層断面(西から)



2. 4号焼土遺構掘り方(西から)



3. 5号焼土遺構土層断面(西から)



4. 5号焼土遺構遺物出土状態(西から)



5. 5号焼土遺構掘り方(南から)



6. 6号焼土遺構(南から)



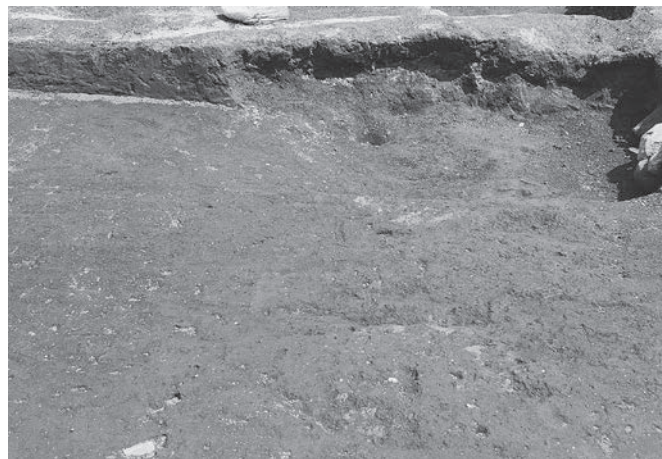
7. 6号焼土遺構近接(南から)



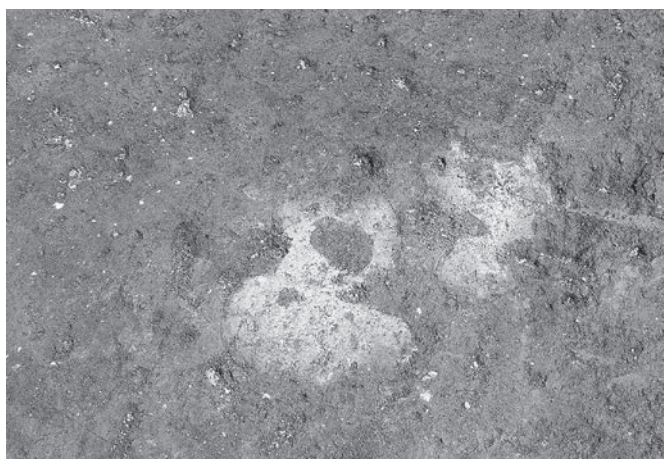
8. 6号焼土遺構土層断面(北から)



1. 6号焼土遺構掘り方(南から)



2. 7号焼土遺構(南から)



3. 7号焼土遺構近接(南から)



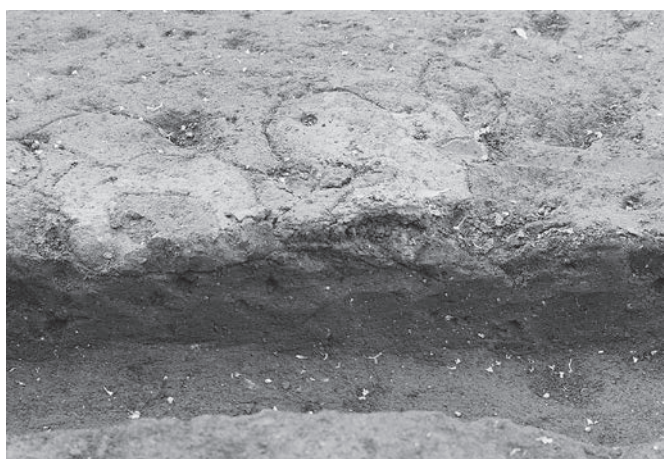
4. 7号焼土遺構土層断面(北から)



5. 7号焼土遺構掘り方(北から)



6. 8号焼土遺構(南から)



7. 8号焼土遺構土層断面(南から)



8. 8号焼土遺構掘り方(南から)



1. 9号焼土遺構・7号トレンチ(南から)



2. 9号焼土遺構近接(南から)



3. 9号焼土遺構(南から)



4. 9号焼土遺構土層断面(東から)



5. 12号焼土遺構(東から)



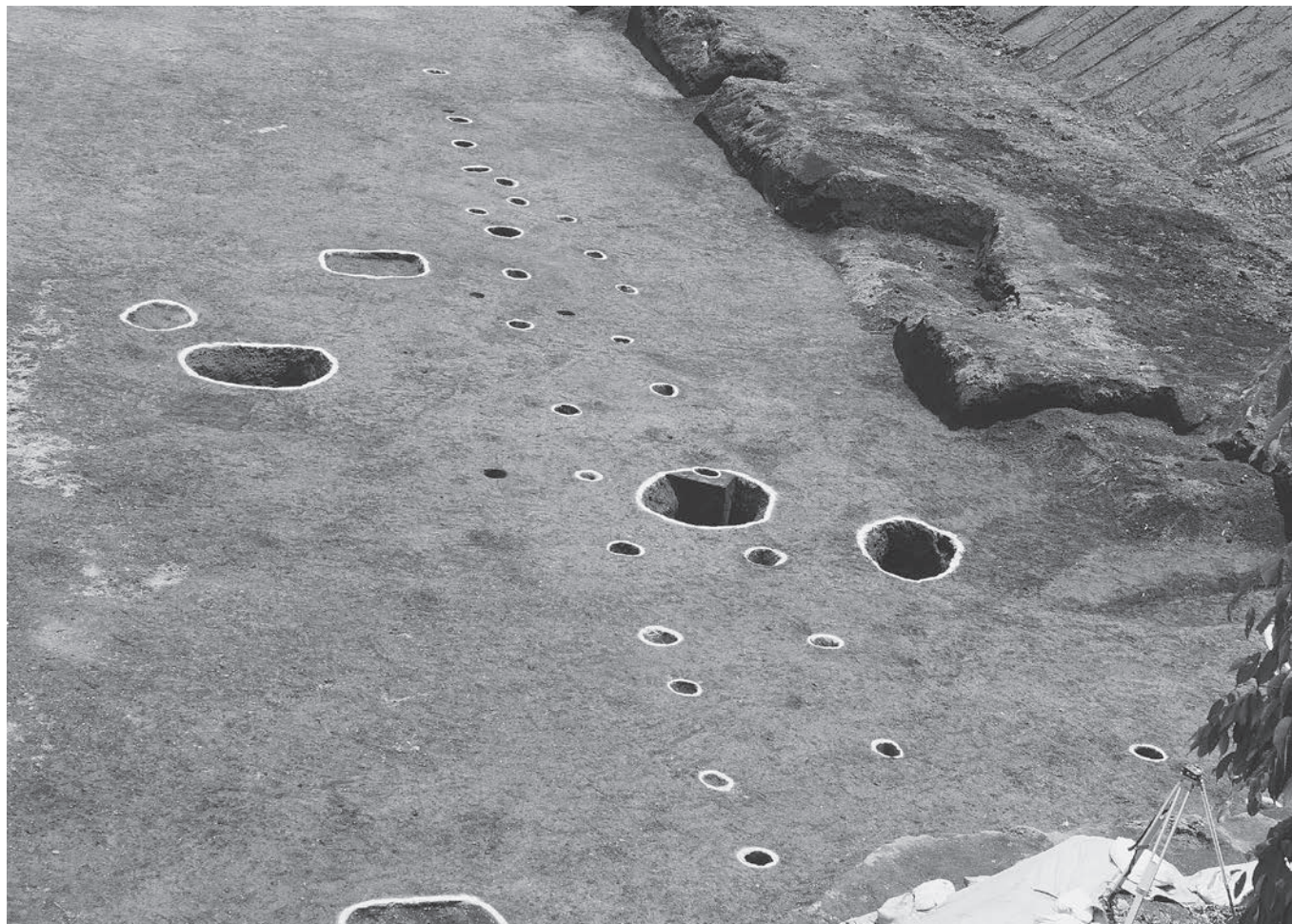
6. 12号焼土遺構土層断面(東から)



7. 12号焼土遺構掘り方(東から)



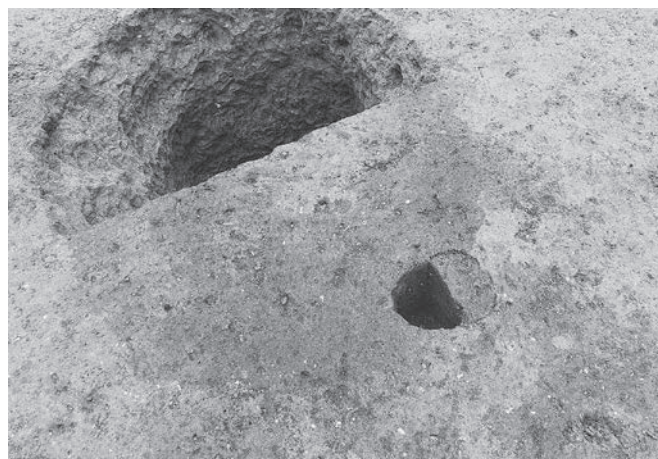
8. 1～2号ピット列(北から)



1. 3～5号ピット列(西から)



2. 3号ピット列(北東から)



3. 3号ピット列P 5、39号土坑土層断面(南東から)



4. 3号ピット列P 5土層断面(南から)



5. 3号ピット列P 5(南から)



1. 3号ピット列P10土層断面(西から)



2. 5号ピット列P58土層断面(東から)



3. 54号ピット土層断面(南から)



4. 54号ピット(南東から)



5. 1号竪穴住居(西から)



1. 1号竪穴住居遺物(1)出土状態(南から)



2. 1号竪穴住居遺物(2)出土状態(北から)



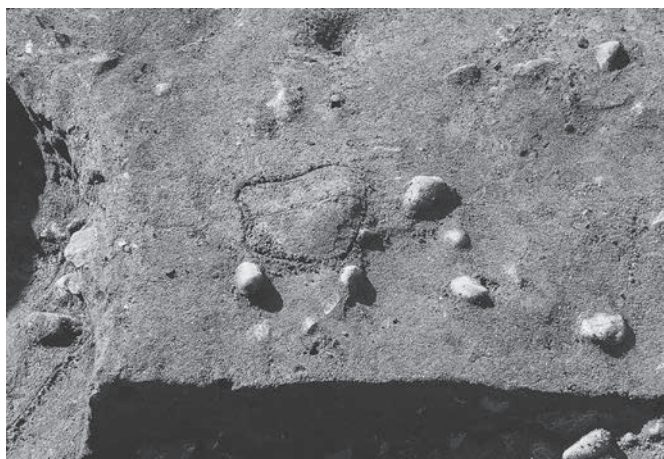
3. 1号竪穴住居カマド(西から)



4. 1号竪穴住居カマド土層断面(北から)



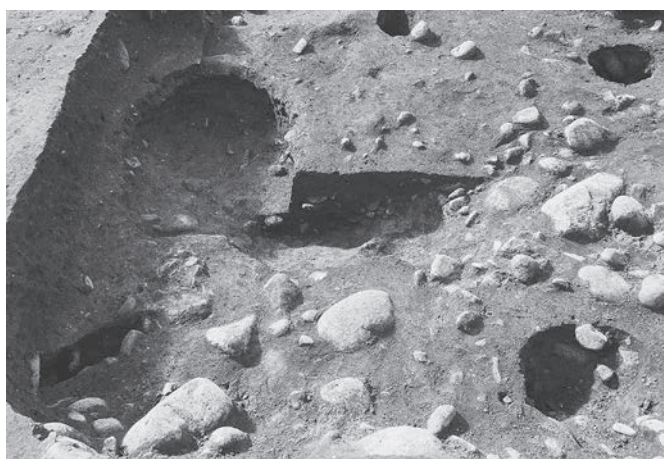
5. 1号竪穴住居カマド遺物出土状態(西から)



6. 1号竪穴住居焼土(北から)



7. 1号竪穴住居掘り込み土層断面(西から)



8. 1号竪穴住居掘り込み土層断面(北から)



1. 1号竪穴住居掘り込み(北から)



2. 1号竪穴住居カマド(西から)



3. 1号竪穴住居カマド掘り方(西から)



4. 1号竪穴住居カマド土層断面(西から)



5. 2号竪穴住居遺物出土状態(南から)



1. 2号竪穴住居(南東から)



2. 2号竪穴住居掘り方(南から)



3. 3号竪穴住居遺物出土状態(東から)



4. 3号竪穴住居(東から)



5. 3号竪穴住居土層断面(北東から)



1. 3号竪穴住居カマド(南から)



2. 3号竪穴住居カマド土層断面(南西から)



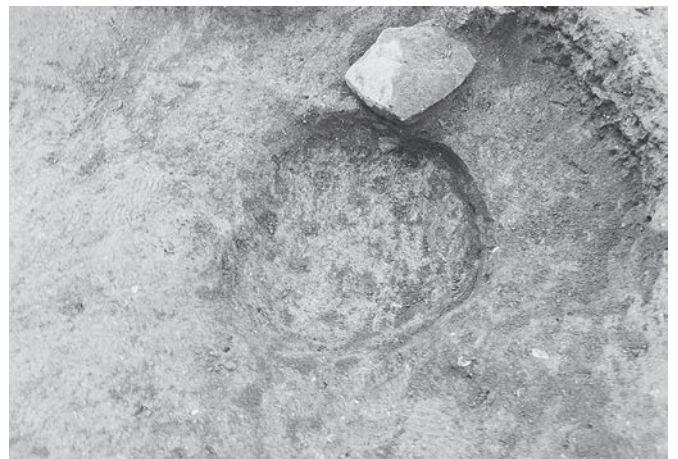
3. 3号竪穴住居土層断面近接(南西から)



4. 3号竪穴住居カマド掘り方(南から)



5. 3号竪穴住居北東部掘り込み土層断面(南から)



6. 3号竪穴住居北東部掘り込み(南から)



7. 4号竪穴住居(東から)



8. 4号竪穴住居(西から)



1. 3・4号竪穴住居掘り方(南から)



2. 3・4号竪穴住居掘り方(東から)



3. 3号掘立柱建物(南から)



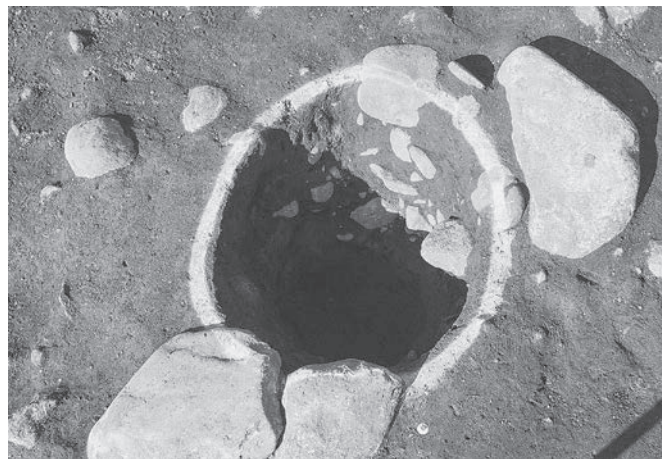
4. 3号掘立柱建物P1土層断面(西から)



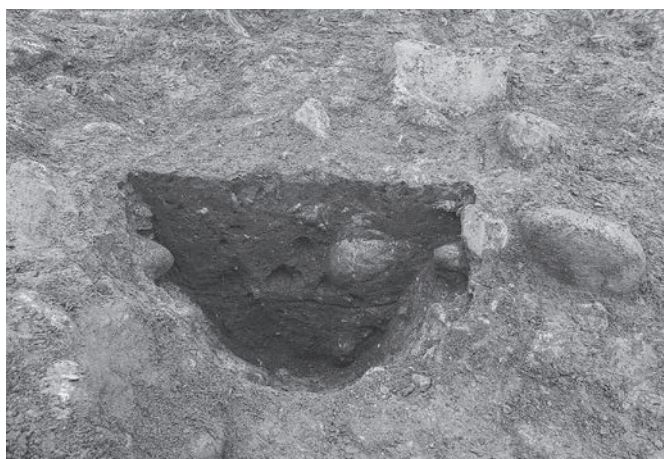
5. 3号掘立柱建物P1(南から)



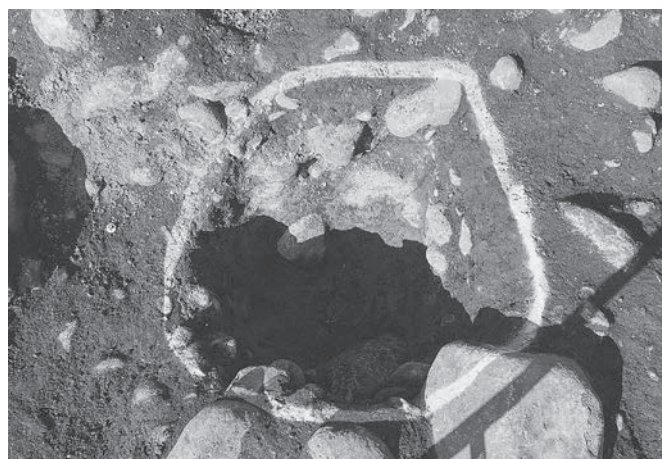
1. 3号掘立柱建物P 2 土層断面(西から)



2. 3号掘立柱建物P 2 (南から)



3. 3号掘立柱建物P 3 土層断面(西から)



4. 3号掘立柱建物P 3 (南から)



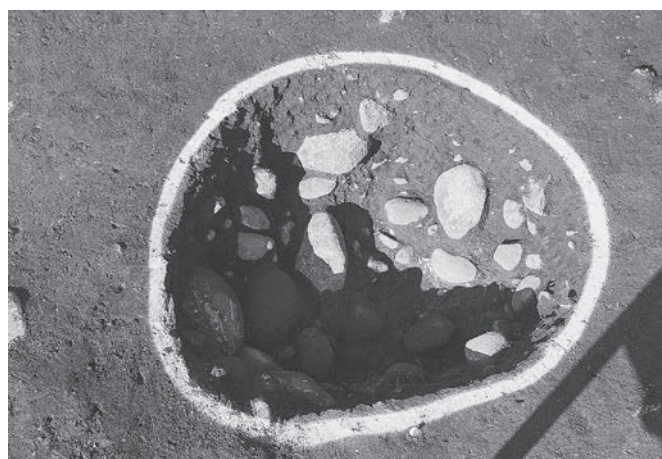
5. 3号掘立柱建物P 4 土層断面(西から)



6. 3号掘立柱建物P 4 (南西から)



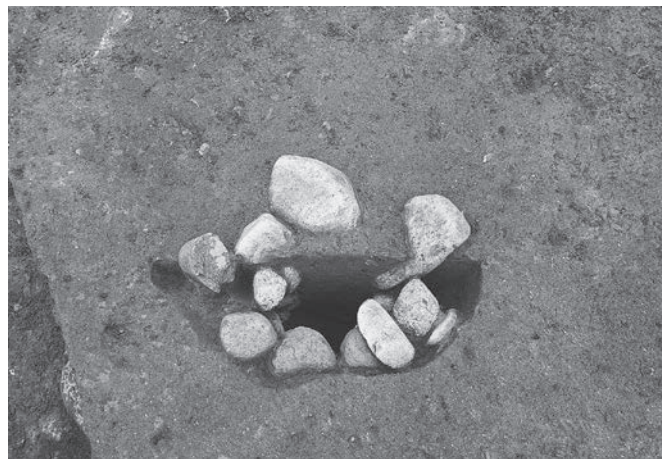
7. 3号掘立柱建物P 5 土層断面(東から)



8. 3号掘立柱建物P 5 (南から)



1. 3号掘立柱建物P 6 土層断面(北から)



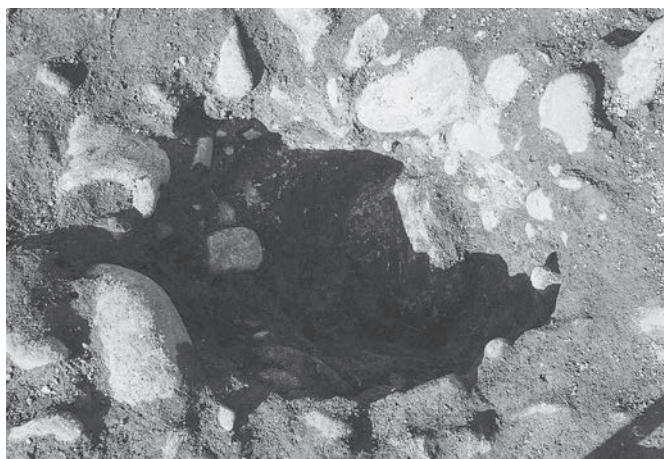
2. 3号掘立柱建物P 6 土層断面(北西から)



3. 3号掘立柱建物P 6 (西から)



4. 3号掘立柱建物P 7 土層断面(東から)



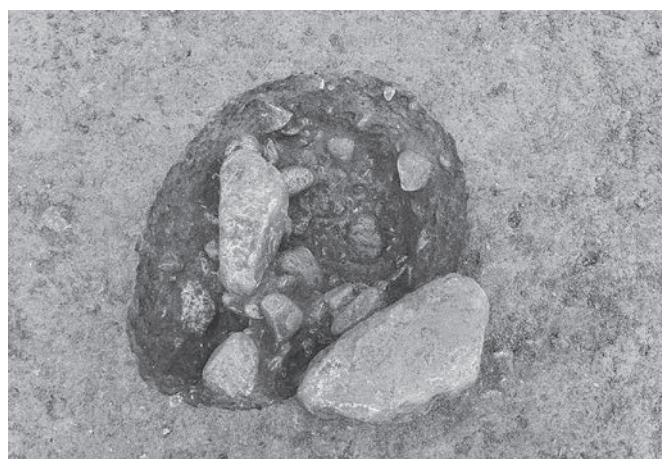
5. 3号掘立柱建物P 7 (南から)



6. 3号掘立柱建物P 8 土層断面(南東から)



7. 3号掘立柱建物P 8 (南東から)



8. 3号掘立柱建物P 9 礫出土状態(西から)



1. 3号掘立柱建物P9土層断面(西から)



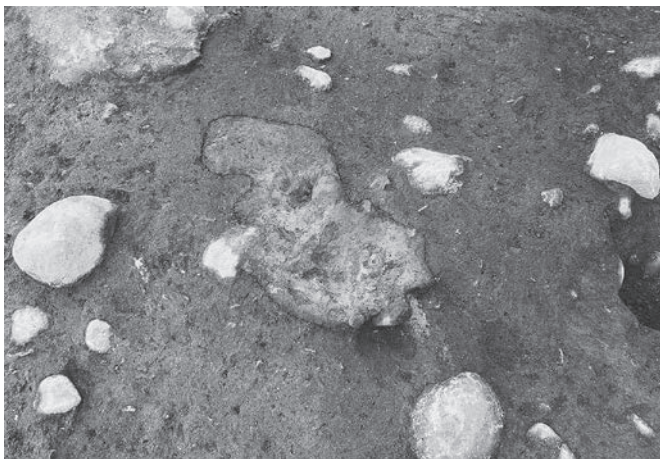
2. 3号掘立柱建物P9(南から)



3. 3号掘立柱建物P10土層断面(西から)



4. 3号掘立柱建物P10(南から)



5. 1号焼土遺構(南から)



6. 1号焼土遺構土層断面(南西から)



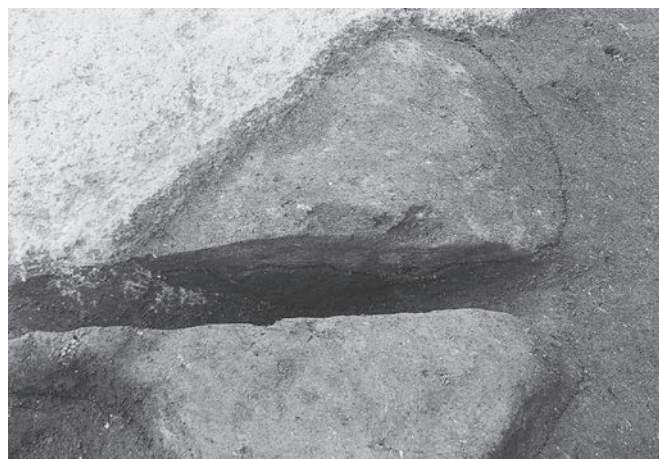
7. 1号焼土遺構掘り方土層断面(南西から)



1. 1号竪穴状遺構(東から)



2. 1号竪穴状遺構焼土遺構(東から)



3. 1号竪穴状遺構焼土遺構近接(東から)



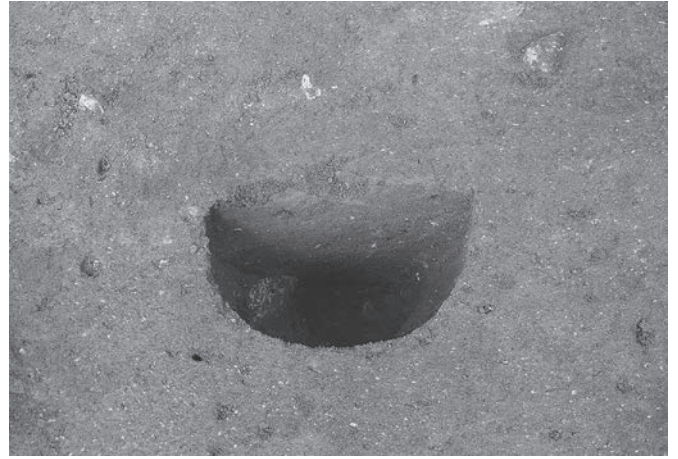
4. 1号竪穴状遺構焼土遺構土層断面(東から)



5. 1号竪穴状遺構焼土遺構掘り方(東から)



1. 1号竪穴状遺構ピット1土層断面(南から)



2. 1号竪穴状遺構ピット2土層断面(南から)



3. 1号竪穴状遺構礫出土状態(南東から)



4. 1号竪穴状遺構掘り方(東から)



5. 1号土坑土層断面(西から)



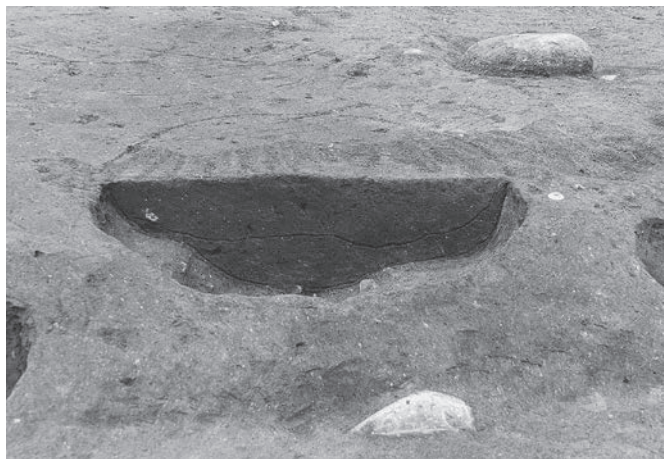
6. 1号土坑(南から)



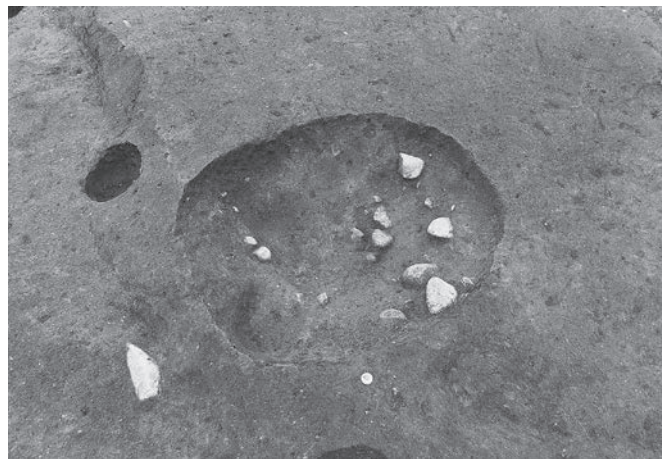
7. 3号土坑土層断面(南から)



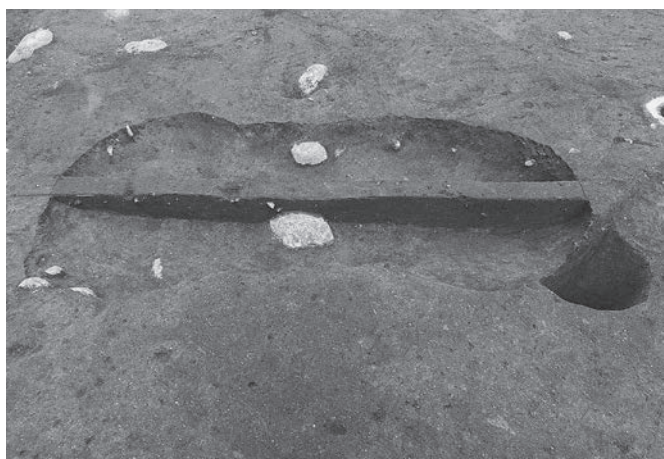
8. 3号土坑(南から)



1. 7号土坑土層断面(南から)



2. 7号土坑(南東から)



3. 8号土坑土層断面(南西から)



4. 8号土坑(北東から)



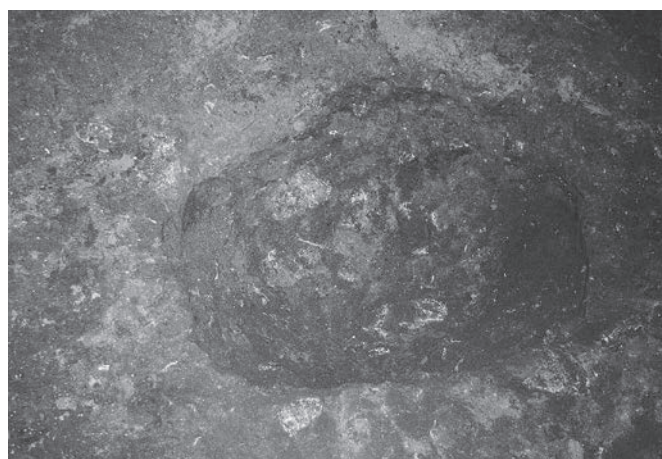
5. 9号土坑土層断面(南から)



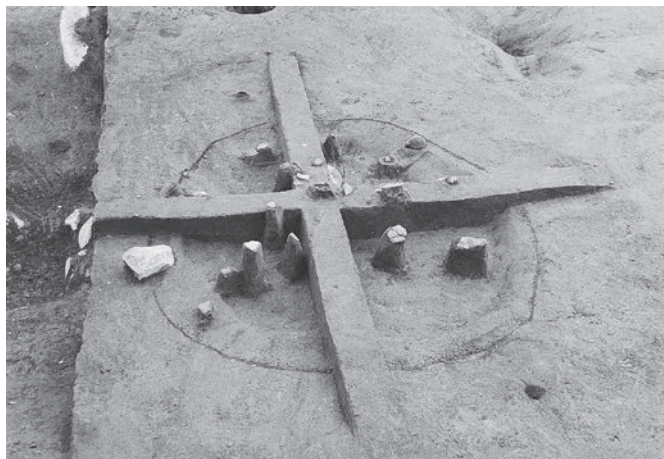
6. 9号土坑(南から)



7. 11号土坑土層断面(南から)



8. 11号土坑(南から)



1. 28号土坑遺物出土状態(南から)



2. 28号土坑土層断面(南から)



3. 28号土坑(南から)



4. 37号土坑土層断面(西から)



5. 37号土坑(西から)



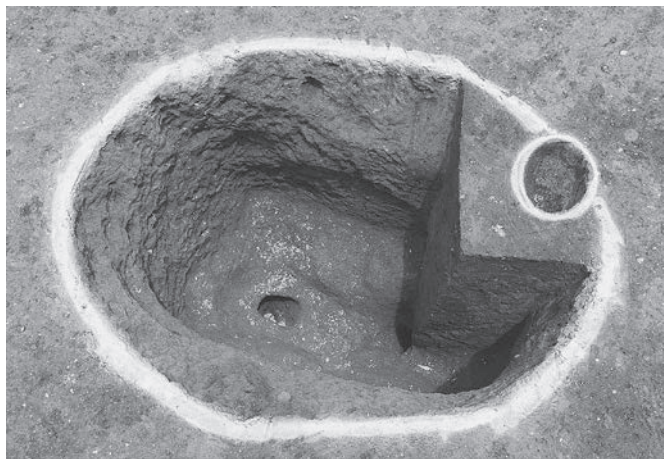
6. 38号土坑土層断面(西から)



7. 38号土坑(西から)



8. 39号土坑土層断面(北西から)



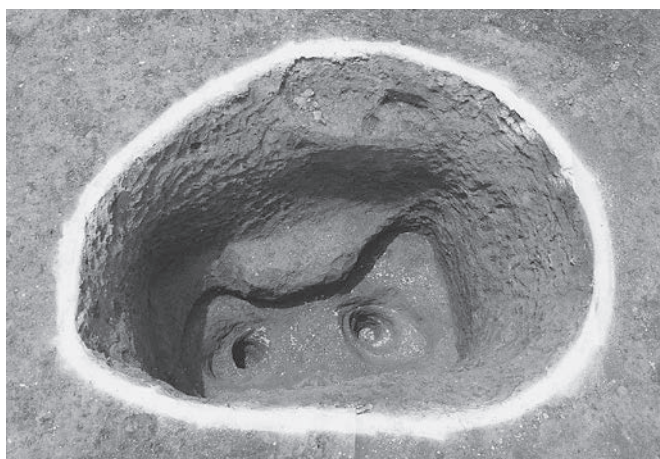
1. 39号土坑、3号ピット列P 5 (南西から)



2. 39号土坑(北東から)



3. 40号土坑土層断面(北から)



4. 40号土坑(東から)



5. 41号土坑土層断面(北西から)



6. 41号土坑(北西から)



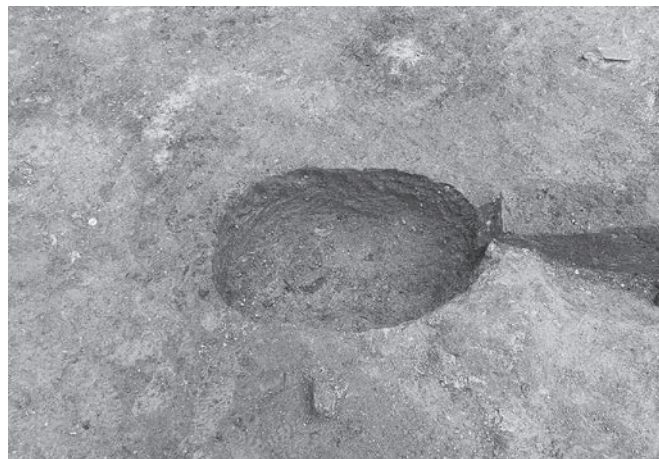
7. 43号土坑土層断面(南から)



8. 43号土坑(南から)



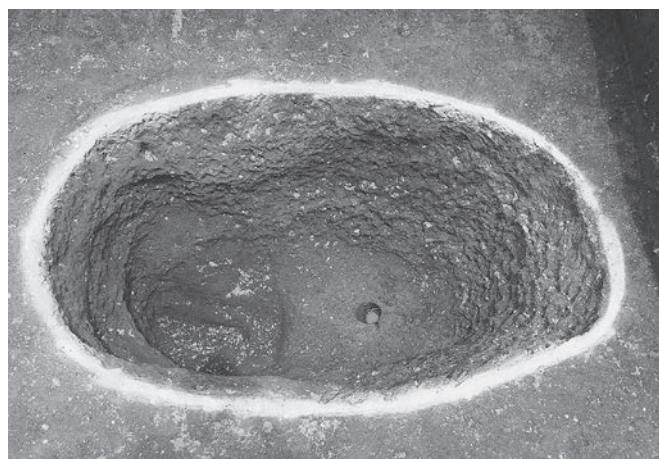
1. 44号土坑土層断面(南から)



2. 44号土坑(南から)



3. 45号土坑土層断面(西から)



4. 45号土坑(南から)



5. 10号焼土遺構土層断面(東から)



6. 10号焼土遺構(東から)

写真図版
(遺物)

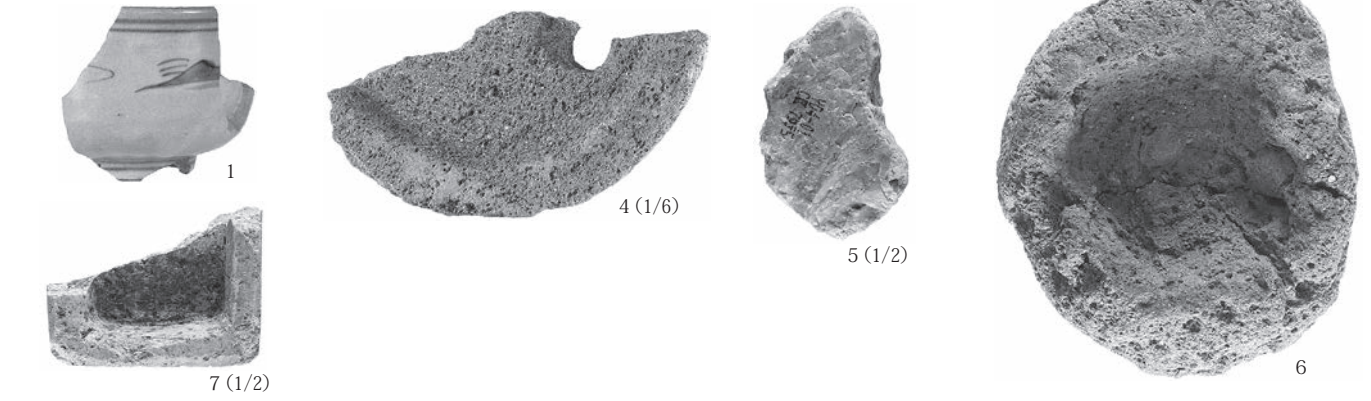
5号礎石建物



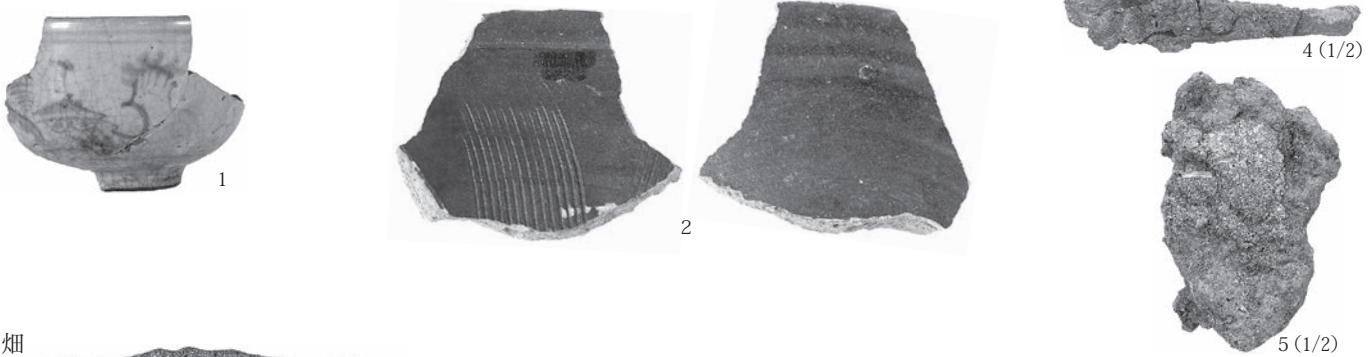
7号掘立柱建物 1面



7号掘立柱建物 2面



8号掘立柱建物 2面

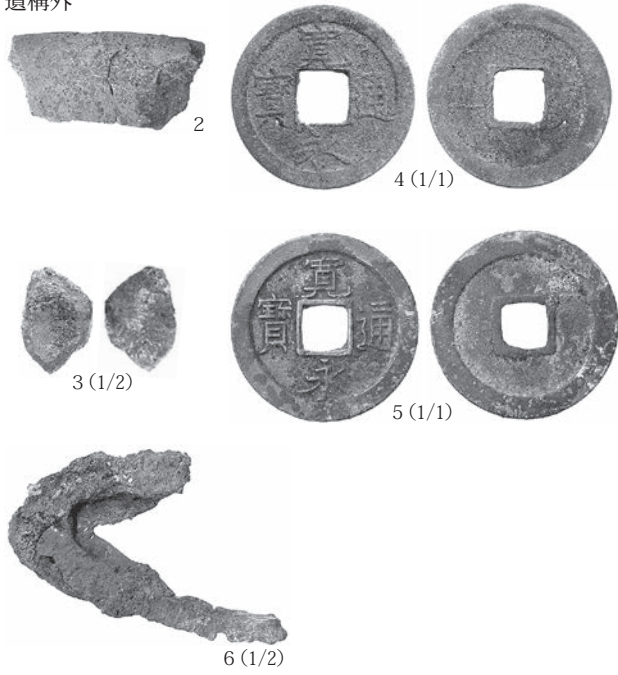


畑

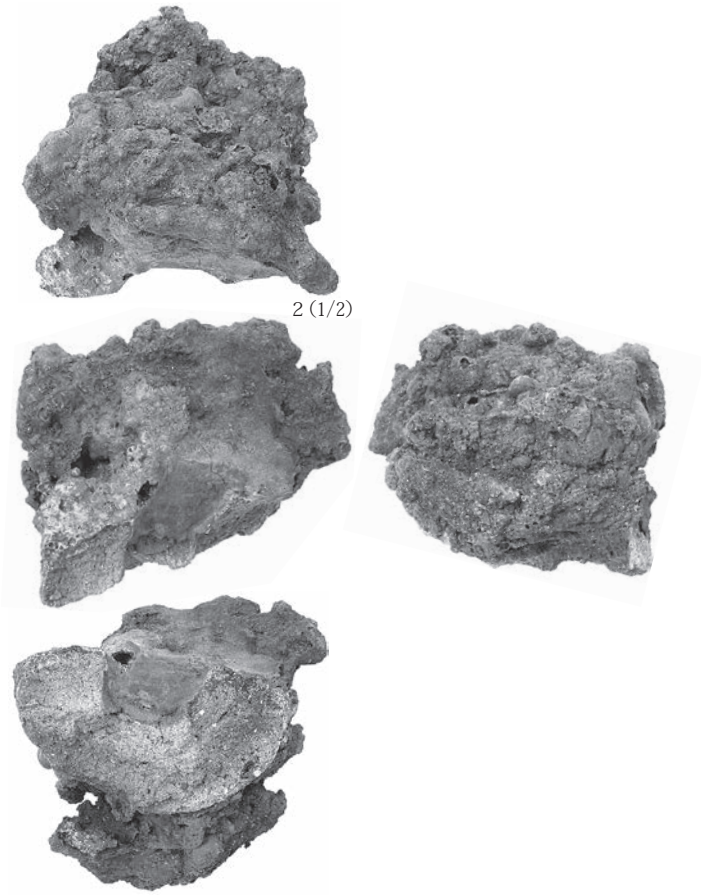


PL.58

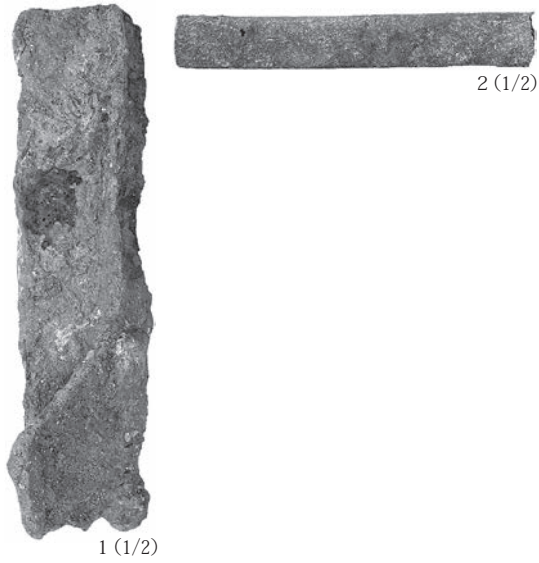
遺構外



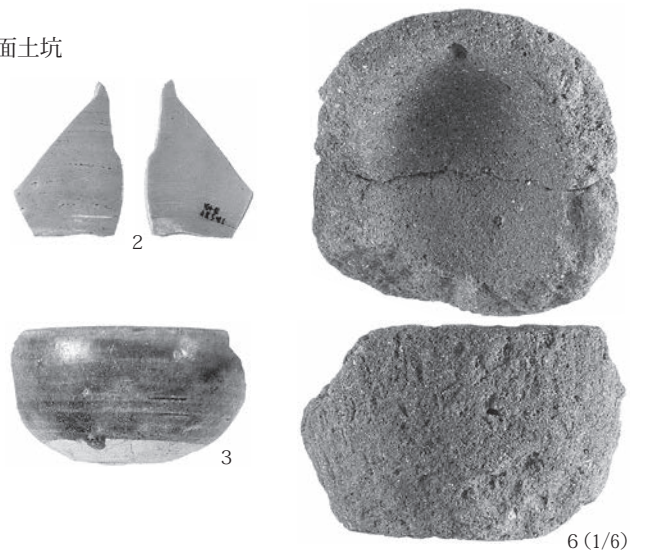
9号掘立柱建物



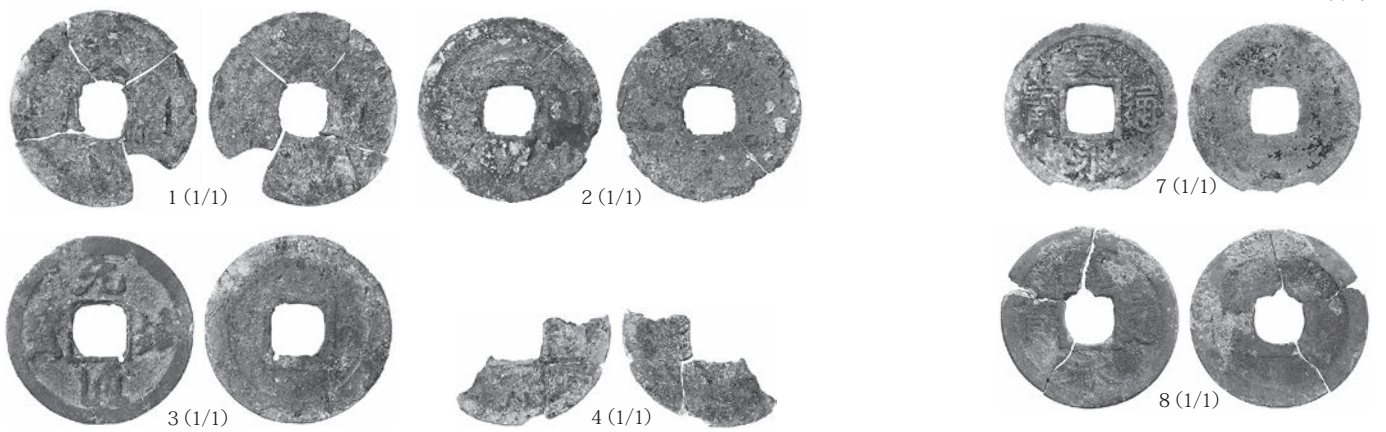
11号掘立柱建物



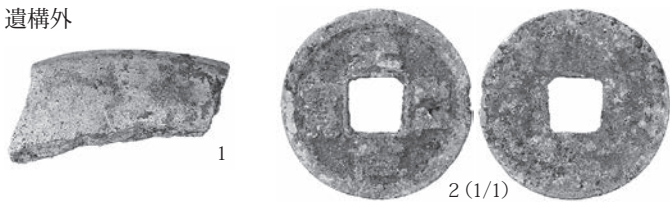
2面土坑



2面焼土



遺構外



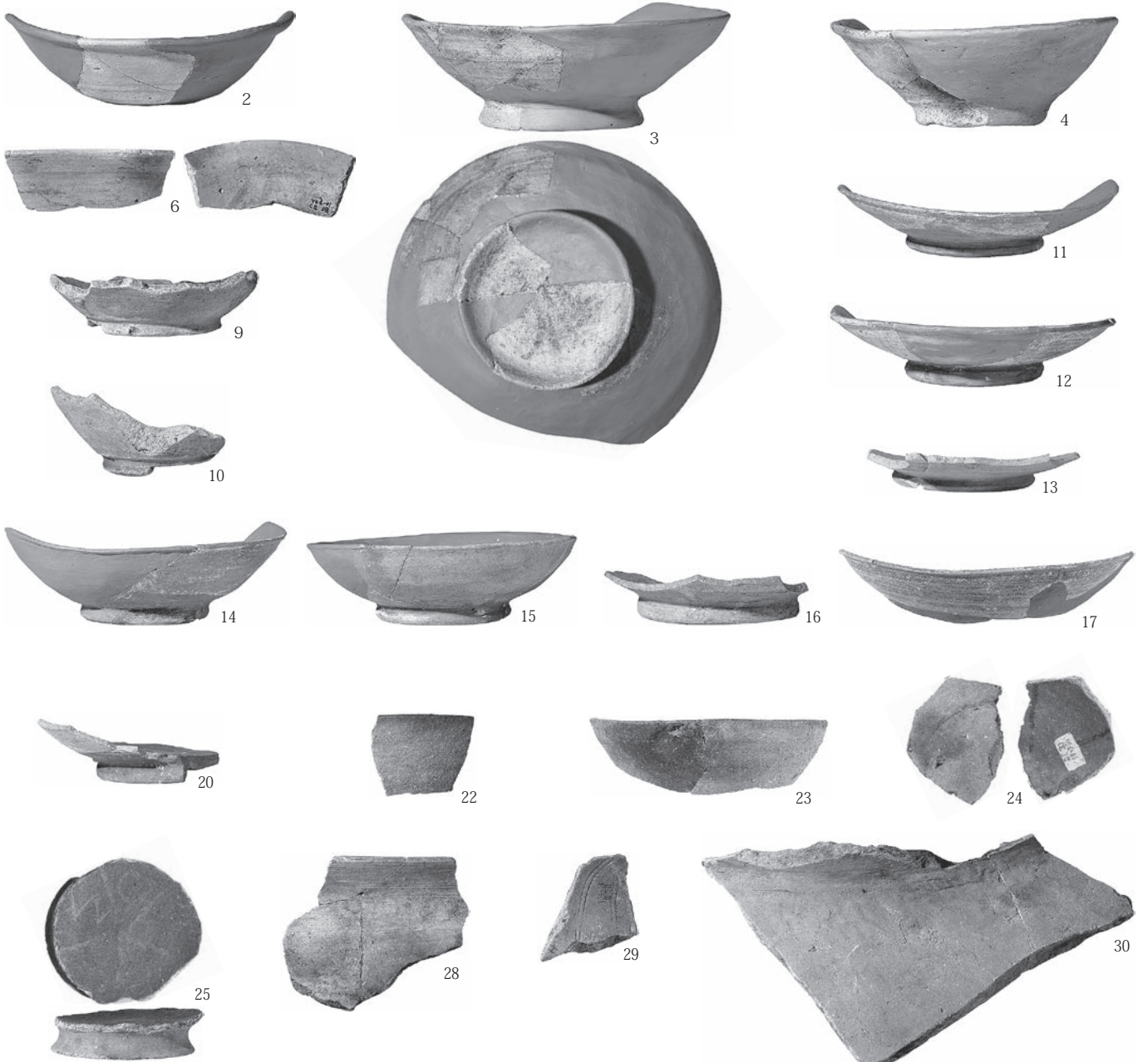
1号豎穴住居



2号豎穴住居



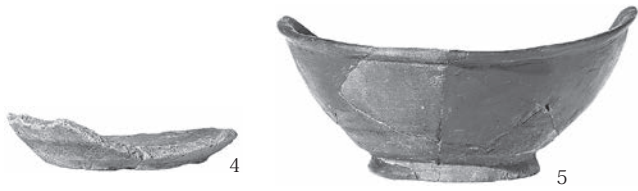
3・4号豎穴住居(3号豎穴住居部分)



2面出土遺物2、3面出土遺物1

PL.60

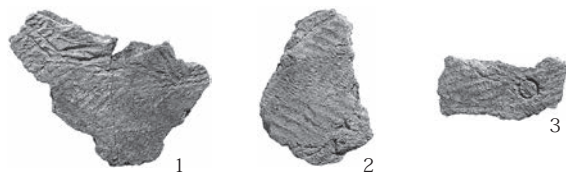
3・4号竪穴住居(4号竪穴住居部分)



3号掘立柱建物



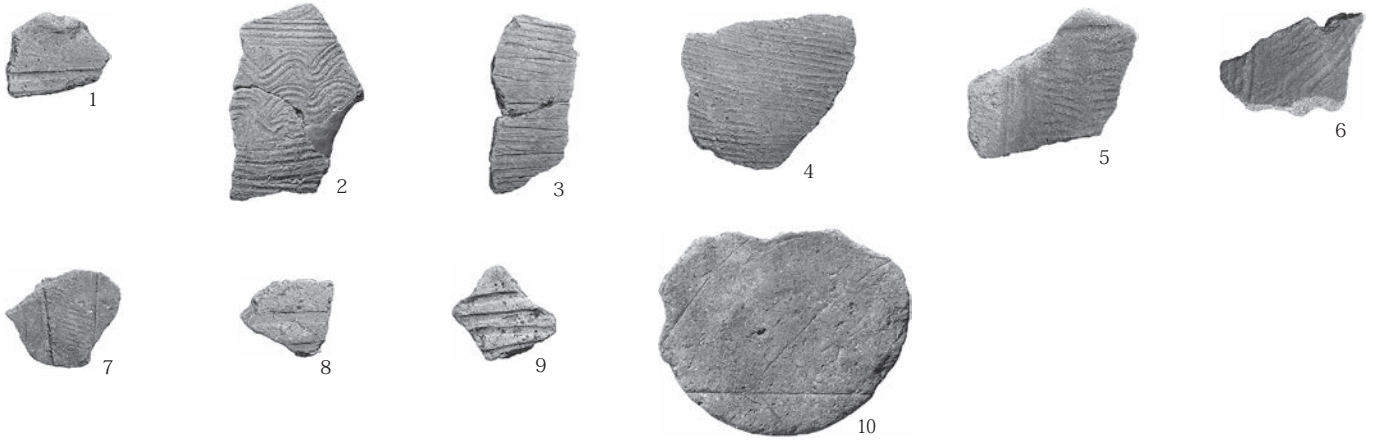
28号土坑



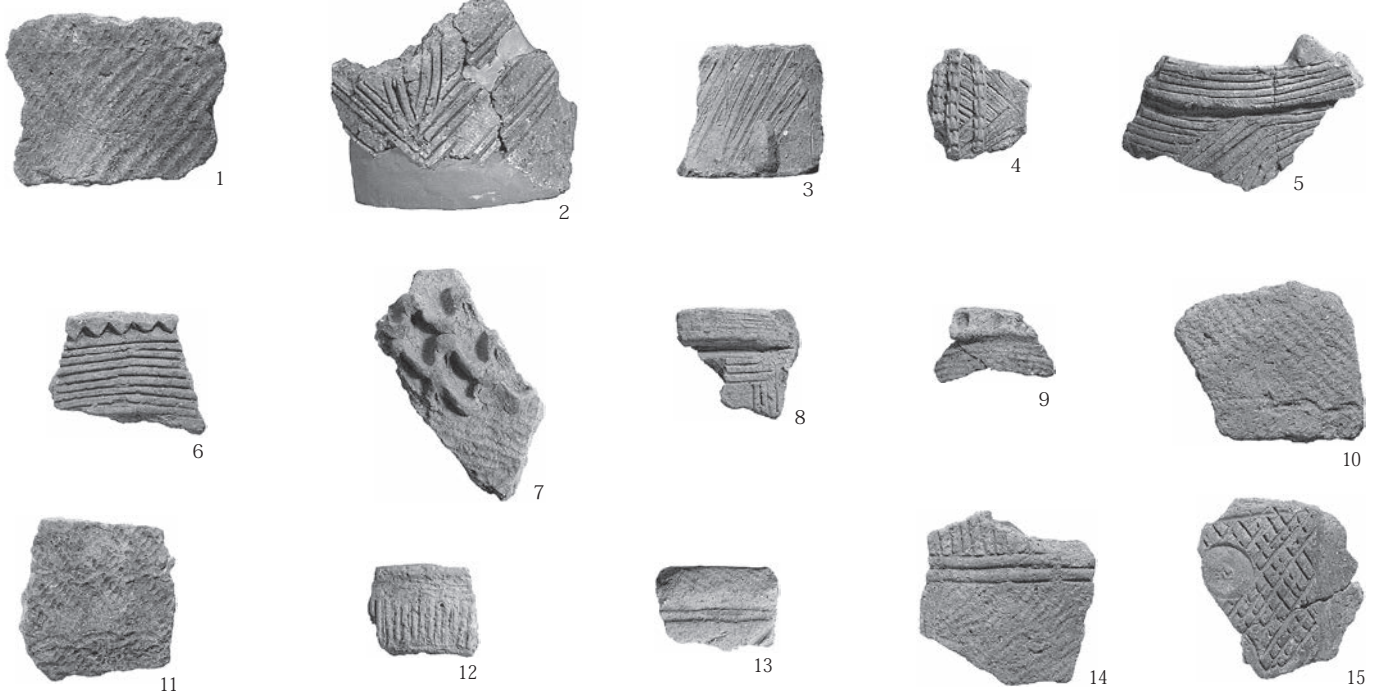
遺構外(平安時代)



遺構外(弥生時代)



遺構外(縄文時代)





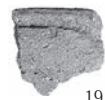
16



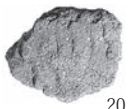
17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27

遺構外(石器)



1 (1/1)



2



3

3面出土遺物3

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第629集

下 田 遺 跡 (2)

ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第52集

平成29(2017)年3月3日 印刷

平成29(2017)年3月10日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／株式会社大塚カラー

